

GIRLS und PANZER with
Unbreakable Diamond

デクシトロポーパー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

杜王港での戦いに敗れた音石明だったが、最後の賭けで、たまたま停泊していた大洗女子学園に忍び込み潜伏した。東方仗助とその仲間達は、この男を逃がすまいと追撃を開始する……

※ジョジョの奇妙な冒険第四部とガールズ&パンツァーのクロスオーバーです。リハビリ的な作品です。気軽に読んでいただきたく。

目次

音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (1)	1
音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (2)	11
音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (3)	21
音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (4)	31
音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (5)	44
音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (6)	59

音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (7)	69
音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (8)	84
音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (9)	97
音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (10)	108
音石明が大洗女子学園に忍び込んだよう です (11)	126
Inter Inter Missio n 『女子高生とお茶しよう!』	140
透明な赤ちゃんです! (1)	160

371

戦車戦にチャレンジしよう！（9）

388

戦車戦にチャレンジしよう！（10）

404

Inter Inter Missi

on 『メダル・ウォー！』—— 426

スタンド使いは引かれます！（1）

441

スタンド使いは引かれます！（2）

455

スタンド使いは引かれます！（3）

470

スタンド使いは引かれます！（4）

484

スタンド使いは引かれます！（5）

500

スタンド使いは引かれます！（6）

518

スタンド使いは引かれます！（7）

535

スタンド使いは引かれます！（8）

553

Inter Inter Missio

n 『戦鬪潮流、伝え聞きます！』

573

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（1）

「芋けんぴ食べるうー？」

「ただくッス」

健康優良な男子高校生、東方仗助（ひがしかた じょうすけ）は、眼前の生徒会長が芋けんぴを開封して皿にあげていくのを、じっくりこない表情で見守っている。心なしか、髪の毛のすわりも悪い。思わずクシを取り出すが、そればかりは止められた。

「ちよい待ち、同じ皿つくんだから、髪触るのはやめてほしいかも」

「あ……そつスね。スイマセンッス」

「心配しないでキマツてるよーリーゼント。ドンと構えといてー」

そうは言っても落ち着くには無理があつた。左に座つてる虹村億泰（にじむら おく やす）はムスツとしながら膝に肘をつけているし、右にいる広瀬康一（ひろせ こういち）もまた、ソワソワしながら周囲を絶えず見回している。

ここは女子高。しかも学園艦。大洗女子学園！

全長10km近い、超巨大な女子高生の城に乗り込む日が来るなど、夢にも思わなかつた！

女物の水着売り場に長時間たずんでいるような居心地の悪さはいかんともしがたいが、さりとて遊びに来てはいるわけでもない。壁際にたたずむ空条承太郎（くうじょうじょう）は、今なお隙を一切見せない。傍らにいる老人、ジョセフ・ジョースターを守るためにだ。

「落ち着かないならさー、ちよつと状況再確認しよつか」

「落ちつくモンかよ。オレあ今すぐにもブツ殺しに行きたいんだぜえー」

生徒会長に億泰が噛み付く。芋けんぴをポリポリ噛み砕きながら。それを見た生徒会長の取り巻きが、カツとなつて詰め寄る。

「貴様、会長なんだ、その態度は！」

「別に生徒じゃねえーんだぜ俺はよおー、『チリ・ペツパーのクソ野郎がここにいる』俺にとつちや、それだけだ」

「もオクさつきからやめてよ億泰君、河嶋さんもツ！」

「黙れ、このチ……」

生徒会長の取り巻き……そう、河嶋桃（かわしま もも）とかいう名前、は、康一に罵声を浴びせかけてやめた。

「……いや、すまん。わかつた、やめる」

「我が物顔で座り込んで、すみません。でも今は協力が必要な時なんですよ河嶋さん」

「そ、そんなことはわかつてるッ。まったくなんで超能力者の争いになんか」

仗助からしてみても、河嶋桃への印象はハッキリ言つて悪い。会つた直後、のっけからリーゼントについて何か言いかけていたのに気づかない仗助ではなかった。生徒会長の方がイキナリ拍手して、『イヨッ！ 世紀末に蘇つたエルビス・プレスリー！』とかほめ殺して来なければ、今頃どうなつていたかわからない。

「広瀬君いいコだね。下の名前で呼んでいい？」

「あ、ありがとうございます。かまわない、ですけど」

「ヨロシクねエ、康一君、干しイモ食べる？」

康一の裏に回つて、馴れ馴れしく背中をパンパン叩く生徒会長に対してか、億泰は足をダンと慣らした。

「カリカリすんなよー、深呼吸深呼吸」

「おちよくつてんのかよ、てめえ」

「私やー真面目だよ？ 虹村君もわかつてるっしょ？ 『釣りは根気が勝負』」

力抜いて待つよ、ヒキが来るまではさあー」

「……チツ！」

無意味なカンシヤクだということとは自分でよくわかつていたのだろう。少ししらんでから舌打ちした億泰は、皿の芋けんぴを一握り、むしり取るようにかじつた。

「とはいえ、電気を操る能力……破壊活動とかされたら私、泣いちゃうかもねえー」
「それはない。外部と隔絶した学園艦でそれをやれば、奴にとつては自殺でしかないからな」

「……」
「ここで初めて承太郎が口を開いた。生徒会長に協力を願ったのは、他ならぬ彼である。」

「杜王町、まだ停電してるんだっけ」

「復旧は最短で明朝5時。それまで奴は、まずここを動けない」

「本体の場所、わかってるからねえ。おじいちゃん、もう一枚とつて」

「人使い荒いのオオ〜、わかつたよ」

老人、ジョセフ・ジョースターはぶつくさ言いながらデジカメのシャッターを切る。その手からは紫色の茨がほとぼしっているのだが、生徒会長にも河嶋桃にも見えていないのだろう。

「つか、濡れネズミだったジジイをよくもまあコキ使えるモンツスね」

「立ってるモノは親でも使うし、もらえるモノは病氣以外もらつちやうよー、この角谷杏（かどたに あんず）さんはねえ〜」

「グレート……超がつく大物だぜ、こいつはア」

イヤミを言ったら平然とふんぞり返られ、仗助は感心するしかなかった。ジョセフか

ら受け取ったカメラを操作していた生徒会長、こと角谷杏は、にやけ顔を少ししかめる。

「表層に出てきた。学園のすぐ近く……すると狙いはヘリか飛行機かなあー」

「使うとしたら、その場で離陸できるヘリだろうがな……ヘリは『武装』しているか？」

「してるワケないない。自衛隊じゃないんだから」

「音石は……ここにジョセフ・ジョースターがいる限り、決して逃げることはしない。

「ジジイがいる限り、奴の居場所は常に筒抜けだからだ」

「つまり、何？ 乗り物を奪うとしても、攻撃のためだつて……」

「そこで、杏の顔から完全ににやけが消えた。

「どうしたんスカ？」

「いや、そのね……スゴく不愉快な可能性に気がついちゃったかなあ〜」

「どういうことですか、会長」

「……音石は、トラフィック号に『女子高から盗んだ無反動砲を使った』」

「きよんとんとしている桃の前に、承太郎が説明を引き継ぐ。

「俺達は、奴のスタンドがここに姿を現し、

室内全員の皆殺しを図る前提で待ち伏せていた。

そしてその瞬間、学園のブレイカーを落とすことで完封するつもりだった」

「そ、そりやそうですよ。学園艦の巨大なパワープラントだったら、

チリ・ペツパーのパワーはとんでもないことになるッ!

そしてそれがヤツの最大の弱点なんですよね?

電力に依存するって弱点をつくんですよね?」

「それが盲点なんだよ康一君。所詮は手段でしかない……

奴の目的は最初から最後まで、ただひとつ」

「ワシの、死じゃな。言ってること、わかってきたよ承太郎……逃げていい?」

ジョセフが涙目になってきたところで、桃と億泰が業を煮やした。

「わかるように! はつきり! 結論を言えー!」

「俺、頭悪いんだからよオオー!」 謎かけしてんじやあねエー!」

そして、仗助もわかった。わかってしまった。ピンと来た。

「か、会長さん。オレさ、大洗女子学園が杜王港に寄港したときに地方版で読んだんだけ

だよオオ〜」

「確かめる必要ないよ東方君、答えがすでにキミの中にあるならさあ、どうしようマジで」

「『大洗女子学園、戦車道復活!』……つまりイイ〜」

お盆が落ちて、湯のみが残らず全て割れた。生徒会長の取り巻きその二。確か、小山柚子(こやま ゆず)だったか……も、ついに気がついたらしい。続いて、康一の顔が、

ムンクの叫びかホーム・アローンのように引きつった。さらに数秒後、桃がおそる杏にすぎるように聞く。

「あの、もしかして、つまり……こう言ってます？ 『生徒会室が戦車で撃たれる』」

「おいおいおい、B級映画じゃねえーんだからよオオー、んな爆発オチみてーな」

次の瞬間、生徒会室の右半分が吹っ飛んだ。書類や何かの破片が大爆発し、続いて響く巨大爆音。何もかもモミクチャになって、床が割れて砕け散っていく！

「ぎやあああああああああすツ!!」

「うぎやー……ツ!! うぎやああー……ツ!! 嘘だ、ウソだああー……ツ!!」

「桃ちゃん落ち着いて、落ち着いてエエエ……ツ!!」

「これはヒドいねえー、ちよつと助けて。落ちる……マジヤバイ」

「ひどすぎるツ!! 今までで一番ヒドいぞおろくろツこの仕打ち!!」

「OH MY GAHHHHHHHH!!」

思いつきの悲鳴を上げて、みんな瓦礫の中に落ちて呑み込まれていく。普通ならば、助かったとしても大怪我は確実！

同じように真つ逆さまに落ちる承太郎が、軽く仗助の肩をどついた。

「やれやれだ……仗助、出番だぜ」

「アイアイサー、っスよ」

電気を操る能力だの何だのは、世迷言でも何でも無い。似たような能力を仗助も持っていて、それをスタンドと呼ぶのだ。仗助に戦車のような破壊力は無い。が、誰にも成しえない奇跡を起こせる。

「クレイジー・ダイヤモンド！ 生徒会室を、なおす！」

仗助から飛び出した、変身ヒーローのようなハート型甲冑の戦士が周囲の瓦礫を猛烈に殴る。すると、再生生のビデオのように崩れた瓦礫が戻り、数秒も経たずに元の生徒会室になっていく。落っこちた億泰に康一、他の皆も同じ位置にきれいに戻った。

「イヤだああー！ 死にたくない！ まだ会長と、みんなとおお……は？」

「何？ どうなってるの、これ……」

「た、助かったあーッ、仗助君サマサマだよー」

「エヘン、種も仕掛けもねえーっスよー」

スタンドを使える面々とは違い、桃と柚子は状況についてこられないようだったが、グズグズもしてられないので、仗助は杏に向き直る。

「しかし、どーするんスカ？ このままここにいたら狙い撃ちだぜー」

「ン？……ああ。当初のプランは破綻したけど、逃げられないのはこっちも一緒だねえー」

「っつーとっつー」

「戦車道の戦車が使われてるってことは、たぶん誰か敵の手に落ちてる。

そうでなかったとしても、西住ちゃん……ウチの隊長が、こんな暴挙を放っておくはずがない。

そうなつたら、一般人対スタンド使いの戦いになっちゃう」

「グレート！ 一刻の猶予もねーって事かよォー」

スタンドは一般人には見えないし聞こえない。能力が発動している最中ならともかく、スタンドの存在を直視することは一般人には不可能。一般人がスタンド使いと戦うというなら、透明な超常のモンスターとの戦いを強いられることになる。ほとんどの場合、勝負にならないと言っている。しかも今回のスタンドは電気を操るレッド・ホット・チリ・ペッパーだ。ヤバい状態を把握した仗助に、杏は居住まいを直し、深々と頭を下げる。少し戸惑ったものの、仗助はその真剣さを受け取った。

「生徒会長としてお願いします。敵スタンドを倒して下さい」

「頼まれたぜ、先輩」

「ありがと。私達は別の場所から応援するよ。」

「一緒に行っても多分、足手まといになるからねえー」

「でも仗助君、どうするの？」

康一が後ろから不安そうに聞いてくる。ジョセフをおぶった承太郎はすでに歩き出

しており、

億泰が間にいる形で立ち止まっていた。

「どうするって?」

「チリ・ペツパーが戦車を使ってるんだよ? 正確に精密に狙い打たれたら、

いくらクレイジー・ダイヤモンドだってキツイよ!」

「もつともだぜ康一! だがそこはひとつ考えがあつてだな……会長さん」

「えー?」

仗助は、ひしゃげた砲弾を差し出した。

「コレを撃った戦車さんはよおー、ドコのドイツかわかるツスカね?」

To Be Continued ⇒

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（2）

音石明（おといし あきら）は振り返る。最後の賭けは、どうやらうまくいきそうだ。

杜王港埠頭。仗助との戦いに敗れた直後。弁慶の立ち往生みたく死んだふりをした音石は密かにスタンドを回収し、最後の機会を待った。それは、杜王大付属女子から盗んだ無反動砲！

学園艦でもない一介の女子高では戦車道の履修など不可能で、同好会が細々と続いているだけだった。しかも、唯一まともに動くのは、戦車ですらない自走無反動砲『オントス』。戦後開発なので高校戦車道のレギュレーションにも合わない。あいつらは一休、何がしたかったんだらうか？

だが、そんなことは音石にはどうでもよかつたし興味もなかつた。必要なのは『M40無反動砲』。そいつを『6基』、根こそぎブン取ってきた。そして、『レッド・ホット・チリ・ペッパーの本体を探せる』ジジイ、ことジョセフ・ジョースターが乗っているというトラフィック号が近づくのを待ち、轟沈させるのだ。『M40無反動砲』の有効射程はおおよそ1km。スポットライフルなんか使わず、もっと遠くから狙い撃ってしまいた

かったが、チリ・ペツパーにそこまでの精密動作性はなかった。基本に従うしかない。

結論から言えば、音石は見事、機会をものにしてみせた。有効射程内にやってきたトラフィック号に、合計3発の砲撃を加え、全弾が命中。船体の真ん中に大穴を開けられたトラフィック号は中央から真つ二つに裂け、ひっくり返って沈んでいった。これで勝つたと思つてはならない。ジョセフ・ジョースターの死亡が確認できない以上、今は逃げの一手を決め込むべき。万が一の逃走経路はステに決めていた。

学園艦！ 大洗女子学園！

ここに入れば逃げ場はなくなる。だが、やつらが追ってくるならば！

レッド・ホット・チリ・ペツパーは学園艦のパワープラントを丸ごと吸い取つて、まずはあの東方仗助をバラバラに引き裂いて殺す。それから空条承太郎を船内に引き込んでジョセフ・ジョースターと引き離し、ジョセフの方を真つ黒コゲにして殺す。そして、追つてこないというならば。今度はここを自分の城にしてしまふまでだ。『弓と矢』は持つている。かつて虹村形兆がしたように、仲間を増やすのだ。案の定、学園艦から救助船が飛び出してきた。ドサクサに紛れて学園艦に潜入した音石は内部構造を把握すると、まず、真つ先に、スタンド使いを増やしにかかった……

わかつてはいたが、女子高なので女ばかりだ。電線に潜んだチリ・ペツパーは、『矢』

が選ぶ人間を探していた。ネズミを射った時に体験として知っている。『矢』は、スタン
ドの素質を持つものを選んでいるのだ。闇雲に射って人を殺しまくった形兆には、余裕
というやつが無さすぎたな。フンと鼻で笑った音石は、そこでようやく『矢』が反応し
たことに気づく。住宅街で、不恰好なスキップをしている女子高生である。そのまま十
字路を曲がったところで電信柱に激突して尻餅をつき、顔を赤くしながら足早に立ち
去った……

(……『あんなの』をか? 使えそうに見えねエーんだが)

ここで射っては目立ちすぎる。チリ・ペツパーは追跡した。たどり着く先は大洗女子
学園。土曜日なので休みだが、部活などをしている生徒は少なくない。

(そしてこの『メスガキ』、どうやら『戦車道』をやってるのか……)

まともに動くのかアーーー?)

仲間らしき奴らと談笑しながら歩いている会話の内容から読み取るに、そうらしい。
一人、異様なテンションの高さで語っているヤツがいて、戦車の話だとはイヤでもわか
る。

(『オタク』は嫌だねエエーッ バカの一つ覚えみてーによオオーーッ

さっさとそのクチ閉じて失せやがれ、邪魔だぜッ)

だが、戦車道というのは好都合だった。脅すなりコマすなりして引き込めば、人間を

たやすくひき潰す兵器がそっくりそのまま手に入る。それがスタンド使いだというなら、なおのことよし！

『メスガキ』の名前は、西住みほ（にしずみ みほ）。この大洗女子学園の戦車道で、隊長をやっているらしい。最近、聖グロリアーナ女学院と練習試合をして負けたとか。（どうでもいいぜーッ まったくどうでもいいッ！）

肝心なのはッ、このオレのために役に立つかってことだけだからなあ〜

『メスガキ』がロッカールームに入ったところで、チリ・ペツパーは襲い掛かった。コンセントから飛び出し、背後から一気に『矢』を突き刺す！

「え、あつ？……がはッ!!」

うなじに刺さった矢はそのまま頭に向かい、脳幹と海馬を串刺しにした。普通ならば即死だ。だが、音石にはわかる。

（やはり、こいつはアタリだ）

『ギユオオオオン!』

鉄扉を金槌でブツ叩いたかのような手ごたえと反響が音石の手に戻ってきた。もしかすると期待以上の大物かもしれない。『矢』を引っこ抜くと、『メスガキ』はその場にくずれ落ちる。意識は失っていないはず。この場で『仕込み』に入ろうとしたが。

「血のにおい……ただごとじゃないッ！ みほさん！ みほさんッ！」

「待つてよ、華（はな）！ どうしたの？ 血だつて？ みぼりんが？」

「とにかく入りましょう！ 西住どのオー——ッ！」

「救急車呼ぶならすぐに言え」

ロツカールームに、さっきの仲間どもがなだれ込んで来た。あわてて引つ込まなければ、『矢』を発見されるところだった。

（今は引き下がるしかない、か……チツ）

どうせ血の跡だつて見つかることもない。『矢』に選ばれて生き残つたのなら、その時の傷はなぜか巻き戻る。これは音石自身も経験して知っていることだ。何があつたのか、当人さえわかるはずもない……

「……あれ？ みんな、どうしたの？」

「血のおいって……なんにもないじゃん。みぼりんがズツコケてただけで」

「おかしい、ですね。確かに、むせ返るみたいな血のおいが」

「大丈夫ですかあー西住どの。指、何本に見えます？」

「人騒がせな。私は寝る」

「寝ないのーッ！ これから練習！」

「あはは、なんかゴメンね。心配かけちゃって」

「みほさん。一体、何があつたんですか？」

「わかんない、けど。首の後ろから『何か』刺されたような……」

今はノンキをこいでいる。そのうち存分に役に立ってもらうからな。捨て台詞だけは吐いた気分になって立ち去ろうとした音石だったが。

「縁起でもないなあーッ ただでさえ近くで船が沈められたりしてるのに」

「それなら知っています。小耳にはさんだ所によると、無反動砲でやられたとか!」

「そんな恐ろしいことが……」

「そこまでして沈める船には、一体何が乗っていたんだろかな? 私はそこが気になる

……」

「あ、それっぽいことなら聞いているよ麻子(まこ)。ジョセフ・ジョースターって知ってる?」

「ジョースター不動産の創始者。ニューヨークの不動産王だな。それが?」

「沈められた船に乗ってたんだって。ウチの救助隊に助けられて、今、この学園艦にいらってる!」

(なん……だとオオオ……) 『ジョセフ・ジョースター!』

聞き捨てならぬ名を聞いた。今、ここにいることが確定したというのなら!

すぐにも殺しに行かなければならない!

チリ・ペッパーは聞き耳を立てる……

「小さな船で宮城県まで来て、待ち構えていたように沈められる。不穏だな」

「不動産王ともなると、敵だつて多いのかもねえー」

「正直さつさと降りてほしい。疫病神としか思えない」

「冷泉（れいぜい）さん、そんな言い方つて……」

「関わりのない人間のことなんか知らん。身の回りだけでいっぱいいいいだ」

「もうすぐ全国大会ですしね。そこは冷泉どのと同意見ですよ」

「関わりないとも限らないよー？ あの生徒会長が、こんな機会、逃さないかもよ？」

「ええつと、どういう意味かな。沙織（さおり）さん」

「口説き落としてスポンサーにするつてこと！ 今頃、生徒会室に拉致監禁して……」

「否定できないあたり何とも言えないですね……」

くだらない与太話だ。だが、『確かめる価値はある』！

もうこれ以上の成果は得られないと判断し、チリ・ペッパーを生徒会室近辺に向かわせる。そして見た。

（いた……いやがった！）

空条承太郎。その隣にいる老人が、ジヨセフ・ジヨースター！

につつき東方仗助も、虹村億泰も、広瀬康一も勢ぞろいしている。一緒にいる片眼鏡の女が生徒会長だろうか？

他にもチビ一人に、胸のデカイ奴が一人。この様子が何を意味しているか。全員、茶を飲みながら、外に出る気配がない。

(ナメやがって！ 待ち構えてやがるッ！)

明らかにジョセフ・ジョースターを餌にした釣りだった。食いついた瞬間に承太郎が時を止め、よからぬ何かをするのだろう。おそらく、それにハマれば万事休すとなる。もしかしたら、生徒会長とやらもスタンド使いかもしれない。このまま攻撃をしかければ100%敗北だ。

(だがよオオー近寄らず攻撃する手段があるッ)

スデにそいつをオレは発見してるんだぜー(ツ)

音石明自身も、すでに学園艦表層へ移動している。ここの生徒会長と空条承太郎がグルである以上、自分のいるブロックを閉鎖されて追い詰められかねなかったためだ。目指すはひとつ。戦車道の戦車格納庫！

もちろん、身ひとつで乗り込んで、いかにチリ・ペツパーがあるとはいってもすぐに他の戦車に鎮圧されてしまうだろう。どう取り繕っても、戦車については『ド素人』。だが、それをどうにかする策も、すでにある。何台かある戦車のうち、音石が選んだのは『4号戦車』。理由としては、ひとつは外見が一般的な戦車にもっとも近く、『曲射』に適していると感じたこと。そして、もうひとつは。

「わわっ！ 何ですかあなたは！ いきなり乗ってきて何をやってるんですかぁーっ」

さっきの『メスガキ』と一緒にいた『戦車オタク』がうまいこと中にいたためだ。至れり尽くせりなことに、中に砲弾を運び込んだ後だ。

「う・る・せエエんだよおっす」

「ふえっ？ あ、アガガガガガガッ!!」

脳天からチリ・ペツパーの電撃をお見舞いされた『戦車オタク』は、電気椅子にかけられたみたいになぐなぐ痙攣しながら崩れ落ちた。元からまとまりの悪いクセツ毛が残らず逆立って、目をひん剥いている。中にあったロープで手早く『戦車オタク』を縛り上げて車内の脇に蹴飛ばすと、チリ・ペツパーで『4号戦車』の非常時用操作系統を発見し、乗っ取った。『戦車道』の戦車は第二次世界大戦当時のもの。当然コンピュータ制御などされているワケがないが、中の人間が全員気絶した場合などに備えて、遠隔操作できるような後付で配線されている。音石は元々、これに目をつけていたのだ！

「んじやま、パンツァー・フォー、としやれ込ませてもらうぜえっ」

『パンツァー・フォー!!』

ギターをかき鳴らし、ギターに『パンツァー・フォー』と喋らせる絶技を

さらりとやってのけた音石は、ハッチを閉じ『4号戦車』を急発進させた。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

⇒

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（3）

秋山優花里（あきやま ゆかり）にとつて、その日もまた良い日であるはずだった。

大洗女子学園の戦車道復活に立ち会つてから一ヶ月。ひとりぼっちで眺めていた世界を、他の誰かが知つてくれる。暴走するそのたび、周囲にウンザリされてきた話を、みんな聞いてくれる。拒絶を恐れて右往左往していた自分が過去になつていく毎日！

輝く日々というものを、秋山優花里は実感していた。砲弾を『4号戦車』の車内に担ぎ込む、この重さすらも愛おしい。

（や、この愛おしさは元からですけど。みんなのためにガンバれるつてのがウレシいんですよう）

誰に言うでもない心中の独り言。これだけは直りそうになかった。さあ、今の砲弾で最後だ。練習開始まであと20分。そろそろ他チームも集まつてくるだろう。確か他のチームは昨日のうちに詰め込みを済ませていた。自分達『あんこうチーム』だけは、武部沙織（たけべ さおり）の提案で、遅くまで居残り練習をしていたから、その分のしわ寄せが今に来たのだ。これで全て問題ない。練習開始を待つばかり。みんなを呼んでこよう。その矢先だった。

『ギターを持ったロックンローラーが車内にいきなり入ってきた』

ありのままに記せばこうなる。わけがわからない。驚きすぎて軽く悲鳴が漏れてしまった。が、そうもしていられない。ただひとつわかつている。こいつは部外者だ。

「何ですかあなたは！ いきなり乗ってきて何をやってるんですかあーッ」

優花里にできる精一杯で、きつい威嚇を投げつける。とはいえ、また一方で、ちよつとした期待の気分もあった。

(戦車好きなのロックンローラーさんで、思わず入ってきちゃったのかも知れませんか)

そうだったら仕方ない。穩便に出て行ってもらって、あとで内装の写真をあげよう。

ここはもう、『あんこうチーム』みんなの部屋も同然なので、男が土足で踏み込むのは困る。幸せの中にいた優花里には、まったくわからなかった。目の前のロックンローラーが、追い詰められた獣の目、そして悪鬼の目をしていることを。

「う・る・せエエんだよおく〜ッ」

何が起きたのか、今度こそ理解できなかつた。野卑な罵倒と同時に、優花里の全身が勝手にふるえ、跳ねだした。声なんか出している覚えもないのに、よじれた唇から壊れた無線じみた奇声が漏れ出す。目の中を青や赤や緑の斑点が乱舞している。これら全てが途方も無い苦痛と同時にやってきた！

何秒か、何分か。どれだけ経ったかわからないが苦痛が消える。このとき優花里は気

絶していたのだが、数瞬後の衝撃ですぐにまた覚醒した。目がチカチカする。手足を動かそうにも感覚がわからない。どうも横になっているようだ。冷たい床に転がされている。

「ンじやま、パンツアー・フォー、としやれ込ませてもらうぜえ〜」

『パンツアー・フォー!!』

聞こえたのは、さっきの男の声だ。もう一人の声は何だろう。ボイスチェンジャーだろうか？それにしても、二人で『4号戦車』を動かすつもりなのか。走るだけがやつとで、戦車らしいことは何もできないだろうのに。

聞きなれたエンジンの咆哮が響く。エンストもさせず一発で動かすとは、どこかで経験してきているに違いない。ということは、何か明確な目的で戦車を鹵獲（ジャック）した？

慣れるほど乗っているのなら、今更興味本位でこんなマネをするわけがない。ということは。ということは……

（主砲で『何か』撃つのが目的）

意識が一気にクリアになった。そうだ。それしか考えられない。戦車でなければ出来ないことなんて、極論すればそれだけなのだ！

野を越え山を越え塹壕を越え！

歩兵を蹴散らして驀進(ばくしん)する戦車の本懐とは、同格の敵を打ち倒すことでは、この男の敵とは？ 何を撃とうとしている？

だがその思考とは別に、優花里のもつれた舌は勝手に動いた。

「や……やめてください」

「ああん？」

「何をやってるのかわかってるんですか？

『4号戦車』は『戦車道』で戦うための戦車なのに。

人を撃つたら人殺しじゃないですか」

「ごあいにくだねエエエ……オレあ人を殺してえんだよ。

ジョセフ・ジョースターのくそジジイをなあー」

優花里は戦慄した。ちよつと前に冷泉麻子(れいぜい まこ)が言っていたことを思い出さざるを得なかった。彼女の言う通り、不動産王ジョセフ・ジョースターは狙われていたのだ。杜王港で仕損じた殺し屋(ヒットマン)は、この大洗女子学園まで執念深くも追ってきたのだ。すると、無反動砲を持ち出したのも、当然こいつ！

真正正銘の人殺しだ。真つ当な社会観念で説得できる相手じゃあない。そして、聞いてもないことをしゃべっているこいつは、私を生かして返すつもりが100%ないということ。用済みになったら、ゴミのように殺されて捨てられる！

では、なぜ私を生かしている？ 用済みになるというなら、用とは何だ？

縛り上げられていることに今更気づきながら、優花里は必死で思考するが。

『優花里さん、何やつてるの？ 一人で発進するなんてッ』

いつも聞いている声が外から聞こえた瞬間、すべてがわかった。

西住どのがッ！ 西住みほが追ってきている！

「チッ、思ったより格段に早エな……」

ひい、ふう、みい……戦車が全部出てきてんじゃねエーか。

邪魔が入る前にさっさと撃つかね」

『4号戦車』が急ブレーキをかけて止まる。砲塔が回る。ひとりでに。ロックンロー

ラー男は車長席に座ったまま動いていない。優花里は異常に気がついた。

『4号戦車』ッ 一つの間にか全自動になっている！」

「今頃気づいたのか？ ちよつとした手品があつてねえ」

位置よし、仰角よし……」

『優花里さん……何する気なの？』

砲を校舎に向けて、何をするつもりなのッ!？」

外から聞こえるみほの声が、張り詰まったものに変わった。

「『校舎』……だつて？』

優花里の悲痛な叫びは当然のように無視され、発射された撤甲弾は宣言通り、大洗女子学園の生徒会室に直撃。優花里からは見ようがなかったが、西住みほが思わず漏らした一言から、どうなったかは手に取るようにわかった。

『……あ、あそこは確か、生徒会室……』

「へ、へへへへ……やったぜ！

ジョセフ・ジョースターも空条承太郎も！

東方仗助も、虹村億泰も、広瀬康一も、皆殺しになった！

オレの面白おかしい人生を邪魔する奴らは、

もうこの世にいねえーっ！」

ひとしきり喜んだロックンローラー男は、クルウリと優花里に向き直った。毒ヘビす

らも裸足で逃げ出すような、下劣な目つきだ。

「これで大洗女子学園戦車道も用なしだなアアーっ

チリ・ペツパーのフルパワーで全員、こんがり焼けてもらうぜ。

オレの正体につながる奴はッ！

一人たりとも生かしちゃおけねえからなあ〜」

「こんがり焼く、戦車を操る、シビレる……まさかつ！」

ここにきて優花里は、突拍子もない発想に至った。そうでもなければ、こんな状況、あ

りえないから。

「あなたは……『電気を操っている』『電気を自在に操れる』！」

「ご名答オオオー……」

どっちみちこの場で即死するけどなアア……ツ!!

お疲れさん……ツ 『レッド・ホット・チリ・ペッパー』……」

『あれはツ、なんか、おかしい!?!』

男が優花里を殺しにかかったところで、みほの素っ頓狂な声が響いた。男の動きも即座に止まる。

『砲弾が直撃して崩れたのが見えたのに……全然……崩れてないツ!』

気のせいって言うには、いくらなんでも……」

男は少し考え込むように目を閉じ、2秒ほどして怒りだした。

「クレイジー・ダイヤモンドだ?! 生徒会室が直っちゃってる!」

ありえねえツ! あのコースなら確かに即死のはず……いい、いや!」

怒りだして、さらに勝手に一人で冷や汗をかきはじめた。

どうやら、何かの手段ではるか遠くを見ているようだ。

「気づきやがったな承太郎オオ……ツ

『時間を止めて』 砲弾をそらしやがった!!

『戦車道の戦車で狙い撃つ』

そつくりそのままバレてやがったのかよオオ〜〜ツ」

ひとまず、いろんなことがわかった。このロックンローラー男みたいな超能力を持っている人間が不動産王ジョセフ・ジョースターの周りには何人かいて、『壊れたものを直す』『時間を止める』能力を少なくとも持っている。中学二年の妄想ノートみたいだが、今は奇妙な現実として受け入れよう。

「いたな、ジョセフ・ジョースター！」

しかし承太郎も一緒にゃあチリ・ペツパーでの攻撃は無理ッ

『4号戦車』で追うしかねえな……」

秋山優花里は『戦車道』に置き換えて考える。このロックンローラー男にとって、敵フラッグ車は老朽の旧式車『ジョセフ・ジョースター』。だが、フラッグ車を直接攻撃しようにも、護衛の『空条承太郎』に阻まれるのが確実だという。それを突破しうる火力がこの『4号戦車』。つまり『4号戦車』が撃破されれば、フラッグ車を仕留める手段がなくなり負けが確定する。『ジョセフ・ジョースター』チームの『戦車』は、さっきの話でわかる限り、あと『3台』。性能まではわからないが、数だけ見れば、まず確実に逆撃を仕掛ける状況！

「そして来やがったか、東方仗助……広瀬康一もいるな？」

虹村億泰はいないようだが、分かれて来るなら逆に好都合だぜ」

『2台』が迎撃に来て、『1台』が伏兵。この場合、伏兵に最大の攻撃力を当てて、一撃で仕留めるのが良策と感じるが……

しかし、ロツクンローラー男の『電気を操る能力』というのがどれほどのものか。体験している限り、電線から拝借できる範囲の電力を使っているようだが、それ以上がわからない。そして何より。私、秋山優花里は今なお囚われの身だ。

「やはり、てめーを倒さねーと先には進めねえようだな、仗助。

ならばそろそろ役に立つてもらうぜ『メスガキ』」

大洗女子学園戦車道チームは今、この男のコマに限りなく近かった。

T o B e C o n t i n u e d ⇒

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（4）

西住みほ（にしずみ みほ）は、突如として奇妙な冒険に足を突っ込んだ。

何か変だとは思っていたのだ。何者かに首の後ろを刺された感覚は、夢か幻と言うにはあまりにも……

そして直後に始まった、秋山優花里の奇行。砲弾を詰め込み終わって待っているはずが、たった一人乗り込んで戦車を発進させていく。これでは運転以外の何もできっこないと、彼女自身が一番よくわかっているだろうのに。しかも、今回の練習場とは逆方向に全速力で突っ走っている。

「唐突になんでこんな。麻子の操縦テクに触発されちゃったワケ？」

「お前は何を言っているんだ。追うぞ」

冗談めかした風に半笑いの武部沙織の声もさすがにどもり気味である。ともあれ、冷泉麻子の言う通り。追うしかない。格納庫を見回す。すぐ横にいた五十鈴華と同じように。

「追うと言っても、戦車はどうするんです？ みほさん」

「カメさんチームの38tを借りよう。」

生徒会長は『ヤボ用で来られない』って連絡があつたから」

「不幸中の幸いかなあ。同じドイツ製だったのは……あれ、チエコだっけ」
「どうでもいい。さっさと乗る」

最初に麻子が38tに飛び乗り、沙織が続く。さらに華が乗り込んだのを確認すると、みほもハッチに上り、そこから皆に指示を出す。アヒルさんチームにカバさんチーム、ウサギさんチーム。みんな揃っている。

『4号戦車』を追います！

隊長として……友達として言うけど、優花里さんはおバカさんじゃない。

何か『わけ』があるはずッ 万が一、何か間違っちゃつたのなら、私達で止めよう！」
了解ッ！

全員が小気味いい返事を返した後、素早くそれぞれの戦車のエンジンをふかす。みほはふと、前回の練習試合を思い出した。聖グロリアーナ女学院戦前半。統制ゼロの一斉攻撃。反撃からのぶざまな総崩れ。『あれ』は、もうない。今の動きだけで確信できた。みほ自身も38t車内に飛び込む。そして命じる。

「パンツァー・フオー！」

いつもと少し違った感覚で前進が始まった。いつも通り、ハッチから身を乗り出す。敵を見ずには戦えない。味方を救うのなら、なおさら。

『4号戦車』には、すぐに追いついた。ほとんど全速力で爆走していたが、動きが『非人間的なほどに直線的』だ。その違和感を最初に口にしたのは、麻子だった。

「変だな」

「確かに変よねえ、戦車マニアって言っても、いつどこでこんなに上手になつてたの？」

「そうじゃない。とてつもなく精密なのに、道に不慣れな動きをしている。

じゃなければ私も追いつけていない……『道知らない』のか？」

「そんなわけがありません。優花里さんは、実家もこの学園艦だったはず」

全員が同時に息を呑んだ。超がつく精密動作でもって戦車を操縦してのける麻子の言うことを、軽く見てナメてかかる者など、いるわけがない。華も、常識的な観点から反論を切り出そうとし、故にたどり着く先は同じだった。

『4号戦車』を操縦しているのは、学園艦の道知らない『誰か』。

そう言ってるんですか、冷泉さん」

「もつと言うなら、あれは人間じゃない。規則正しすぎるッ まるで『全自動』だ」

「ちよつとちよつと、なあーに、麻子。『4号戦車』がロボットにでも盗まれたつて言うの？」

確かに、来年から21世紀だけドッ！ そんなハイテクがなんでこんなところにな？」

「私が知るか」

ぎやあぎやあ言い出した沙織はさて置いて、みほは拡声器を取り出した。『4号戦車』はすぐそばだ。まずは呼びかける。

『優花里さん、何やってるの？ 一人で発進するなんてッ』

今度は、華が感づいた。

『『反応』しましたね。運転に動揺が見えました』

「あれっ、じゃあロボットじゃなくって、単なるスゴ腕？」

「どちらにせよ、優花里さんではありません。」

『作法』も、『楽しむとうとする気持ち』も！ 見えてこないんです。これっぽちも！

「じゃあ、『戦車道関係者じゃない』？ 単に必要なだから戦車を盗んだ……ええっと、何のために？」

車内では仲間達による猛烈な推理が繰り広げられているが、たった今！

みほは、それどころではなくなつた。

「ちよつと待つて、みんな！

見えなかつたの？ 今のが！」

全員が、怪訝な顔で、みほを見た。何を言っているのかわからない。皆の顔にそう書いてある。

「そ……その！ 電気を帯びた『河童』みたいなのが、こっち見てたの！

『4号戦車』の車体から、上半身だけ飛び出してッ」

気まずい沈黙が訪れた。反応に困っているようだ。

誰にも見えていなかったのか。

「ごめん、忘れて。血がのぼっちゃってるみたい。頭に……この状況で」

「おいッ、『4号』が止まるぞッ！ 全員どこかシツカリ掴め！

みほ、号令出せッ、全車止まらせろ！」

麻子が、らしくない鋭い大声を出した。見ると確かに『4号戦車』が急減速し、路上に派手な痕を作っている。みほは拡声器を下ろし、インカムに命令を発する。

「全車、停止して下さいッ、『4号戦車』が止まります！」

それが済んでから、みほは一旦、車内に頭を引っ込めてハッチの取っ手を掴んだ。前方の車がいきなり急ブレーキを踏んだなら、真後ろの車がやることはひとつしかない。一瞬遅れて、車内に衝撃が走った。言うまでもなく急減速である。それでも最大限、丁寧に減速されていた。おそらく38tのキャタピラは、路上を傷つけてもいないだろう。車内に慣性を感じなくなつてから、みほは再びハッチから顔を出した。

「き、きつい……殺す気か……酸素、がッ……ハヒイ

大声、やめとけばよかつた」

「麻子、深呼吸して深呼吸。10分吸ってエー、10分吐いてエー」

「サラリと不可能ごと吐くな」

麻子がグロッキーになっているが、それは沙織に任せて。『4号戦車』を見る。すでに砲塔が回っていた。砲の向かう先は、校舎。大洗女子学園の校舎だ！

『優花里さん……何する気なの？』

砲を校舎に向けて、何をするつもりなのッ!?』

拡声器で呼びかけながら、みほは確信した。あれを運転しているのは、絶対に優花里ではない。『4号戦車』は直接校舎を狙っていない。曲射だ。砲の仰角を上げて、発射された放物線の行き着く先に校舎を収めているのだ。言うのは簡単だが、弾道計算が必須であり、観測員も必要になってくる難事業。これを、急ブレーキをかけている最中に、数秒とかからずにやる。第二次世界大戦時の戦車で、できるわけがないッ！人間じゃあないッ！

「華さん、射撃用意……『4号戦車』の履帯を狙って」

「はっ」

38tの砲が動いていくのを感じながら、拡声器を後ろに向けた。M3中戦車リ、3号突撃砲、89式中戦車。全員いる。

『……全チーム、4号戦車を撃って下さい。』

撃破判定を出して止めます。やむをえませんツ！」

みほの脳内で、すでに目的は秋山優花里の『救出』にシフトしていた。『4号戦車』にいる何者かが優花里に害を加える前に、戦車自体を役立たずにする。その後どうするか。もう決めている。自分自身が『4号戦車』に乗り込んで、中にいる『敵』を倒すツ！

『見えている』のが自分だけというのなら、『勝てる』のも多分、自分だけということ。しかし敵は一体、何人なのか。何ができるのか。最悪の事態であろう『戦車VS生身』を回避したところで、敵の全貌が未だに見えないが……

数秒間の黙考は、ボイスチェンジャーか何かの音で破られた。

『ウツナくヨオオくくヒトジチヲくトツテくイルウ』

『ツ、人質？ 動かしてるのは、優花里さんじゃない？』

自分で言っていてワザトらしすぎる反応だと思った。向こうから人質と言い出したということは、こちらの攻撃は封じられた。他の戦車も、全車同時に動きを止めている。(無理だ……『戦車で何かやる』のを止めることはできない。)

ここで無理矢理攻撃すれば、優花里さんは、少なくとも『ひどい目に遭う』

でも……でもツ 狙われているのは校舎ッ どうすれば！)

結果として、黙って見ているしかなかった。『4号戦車』が校舎に撤甲弾を撃ち込む瞬

間を。毎日通う学校だ。着弾地点もわかってしまう。そこは、戦車道の格納庫に次いで接点のある場所！

『……あ、あそこは確か、生徒会室……』

生徒会長、角谷杏には苦手意識を持っていた。その取り巻きの面子にも。小山柚子はともかく、河嶋桃は自分の意見ばかりを頭ごなしに投げつけて強要するイヤな人だ。でも、死んでほしいなんて、カケラも思ったことはない。ましてやこんな、死体も残らないような粉みじんの死に方だなんて。絶望のあまり拡声器を取り落としかけたみほは、しかし次の瞬間に目を見張った。

『あれはッ、なんか、おかしい!?!』

「何、あれ。超常現象?」

「戻るわけが……バラバラになった生徒会室が、何事もなかったみたいだ」

「わからん、が……想像できない何かに巻き込まれたのは確かだ」

今度は全員に見えていた。確かに弾が直撃した生徒会室が、何事もないままに存在している。あんなものが当たって、無事であるはずがないのに。

『砲弾が直撃して崩れたのが見えたのに……全然! 崩れてないッ!』

気のせいって言うには、いくらなんでも……』

「みほりん、それ拡声器いらない! 一度、中に降りてよ」

少し赤面してから、みほは沙織の言う通り車内に降りてハッチを閉めた。車長席につくなり、沙織があわただしく詰め寄ってきた。

「い、今起こったことをありのまま言うよ。確認のために！」

「う、うん、落ち着いて？」

「『4号』の砲で生徒会室が撃たれたと思つたら、別に何ともなかつた！」

『一瞬壊れて、すぐ元通りになつた』！ 意味不明なんですけどオオオオ〜ツツ」

「同感だな……なんだこれは？ どうすればいいんだ？」

混乱が極まっている。無理もない。みほ自身、何が何だかわからないが、これだけは言える。

「どうすればいいなんて決まつてるよ、麻子さん。」

『優花里さんを助ける』ただそれだけ。全然変わらない」

「その通りです、みほさん。それで……どうしましょう？」

とはいえ、決意表明だけでは何も変わらないのも確か。手詰まりなこの状況、どこかで動かないものか。

「あ、メール。生徒会長から。宛先は戦車道チーム全員だね」

沙織がケータイを取り出したのに、全員が従つた。誰もがすぎる思いだつた。みほはケータイを開く。『メール 1件』！

『戦車を盗んだのは電気を操るギタリスト、音石明。

音石明の目的は、不動産王ジョセフ・ジョースターの殺害。

音石明を倒すため、生徒会から二人の超能力者を送り込んだ。

東方仗助（リーゼント）は壊れたものを元通りに直す。

広瀬康一（ボウヤ）は音を操る。

あとはうまいこと連携してね』

読み終わるなり、沙織は内壁に突つ伏した。

「な、なあにこれエー、どうしろと？　どこのジャンプ漫画アア？」

せめて『なかよし』にしてよおおお〜〜」

「もう事実と思うしかないな。全員が現場を見てしまった。

しかしホンモノの疫病神だったのか『ジョセフ・ジョースター』め」

益体もない愚痴大会をやっているヒマはない。気持ちはわかる。トツテモわかるが。

小さく咳払いをした後、華が言う。

「確かなのは、これから二人、増援がやってくるということですね。

電気を操るといふ超能力者と戦える増援が、二人」

「うん。今からはメールだけで連絡を取ろう」

「え、でも敵は電気を操るって……ケータイも電気で動くけど？」

『ありとあらゆる』場所の電気を無制限に操れるんだったら、

人質をとつてまでこんなことをする意味がないと思うよ。沙織さん」

「操られているのは『4号』だけで、私達は無事。これが答えかもな」

おそらく、麻子の言う通り。電気の介入できるところ、何もかも全て同時に操れるのなら、戦車道の戦車は今頃すべて乗っ取られ、全車がかかりで大洗女子学園を蹂躪したかもしれない。それどころか、学園艦そのものに乗っ取って、住民3万人もろとも道連れ
の重大故を演出したかも……

恐ろしい想像を今はグツと飲み込み、沙織に伝える。

「沙織さん、メールお願い。」

『今から車間の連絡はすべてメールでやる』

『表面上は動きを止めつつ、攻撃命令と同時に履帯を狙えるようにしておく』

『4号戦車には絶対に接近しないこと』って」

「了解ッ！」

今できることは、これでもうないはず。後は、追い風が吹く瞬間を見逃さないだけだ。ハッチを開け、また外に顔を出す。『4号戦車』の向こうに、風と共にやってくる誰かを見た。

「ノーヘルに2ケツのバイクが1台。って何言わせんのよ、アイツらッ」

「一人で勝手にキレてどうする。アレが『リーゼント』だな」

「すると、後ろの『小さい子』が『ボウヤ』……早い。あつという間に来ましたね」

ヘルメットをしていないのもうなずける。なにしろリーゼントだ。みほは正直、この髪型の実物を見る日が来るとは思わなかった。リーゼントの少年の背に抱きついている小さな男の子が、何やら合図を出してから飛び降りた。受身をとった男の子がゴロゴロ転がる脇で、バイクはますます加速。

「ちよ、ちよつ、あのバイク！ あのままじゃ『4号戦車』にぶつかるわよッ」

「どう見てもそのつもりだな」

「そ、そんなバカなことッ！ やめさせないとッ、みほさん、拡声器を」

車内でそんなことを言っている間にバイクは真正面から『4号戦車』に突っ込んだ。一瞬にしてへし折れ、ねじれ曲がって引き千切れた車体は爆発炎上。いくつかの炎の塊に成り果てて飛び散った。見ていた沙織は目を覆い、顔をそむける。

「きやああああー……ッ何てこと！ これじゃ単なる自殺じゃないッ！」

「いえ、沙織さん。『4号戦車』の上を！」

「えッ？」

華は気づいていたし、表に顔を出していたみほには、最初の最初から見えていた。バイクが激突する寸前に跳んだりゼントの少年が、ムササビのように4号戦車のハッチ

付近に取り付いたのを。取り付く瞬間に飛び出した『少年のものとは別の手』も、今度は見間違いでなく見えた。そして、少年の学ランに張り付いている大きな文字。『フワーーーー』と読めたそれは、飛び出してきた別の『何か』に回収されて消える。『4号戦車』の外部スピーカーから、切羽詰った男の声が響いた。

「て、てめえ、仗助ッ！」

「戦車にはよオオーーーー 『トツプアタック』だぜーーーーッ

バイクごときじゃあ戦車にはカスリ傷だけだよおっ

「この仗助さんの『クレイジー・ダイヤモンド』ならよオオーーーー」

「ま、まさかッ、振り落とせ『4号戦車』ッ」

「ボコボコにブチのめしてやるぜッ！」

『アベンジャー』とかいうアメリカ野郎のバルカン砲みてーになあー」

To Be Continued ⇒

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（5）

広瀬康一（ひろせ こういち）は、生まれて初めて戦車砲を体験した。

（こっ……怖ッ……!!）

まだ下っ腹がジンジンしてるよお……ッ

誰なんだ、『戦車道』が女の子用の競技だなんて言った奴はー！

鋼鉄の塊に大砲を乗つけた、ダンプカーよりも超重たい兵器で殴りあう。そんなものは戦争だけで沢山じゃあないのか。『戦車道』は時代に取り残され、廃れていると新聞にも書いてあったけど、こんなものを好んでやりたがる人がいるなんて、恐ろしい話だ。万が一、さっきのが自分に直撃していたら。パワーのない自分のスタンド、エコーズじゃあ防衛なんかできるわけない。粉々の血煙になって、きつと仗助のクレイジー・ダイヤモンドですら復元できないだろう。小便チビりそうな恐怖を胸に、それでも康一は走る。仗助がいるし、億泰もいるからだ。そして何よりも。

（こんな『恐ろしいもの』を学校に向ける！

音石明は、これから何度繰り返すんだ。こんなことを……

ほっとけないぞ、絶対に！）

前を走る仗助が立ち止まる。周囲を見ると、駐車場。その中にある一台のバイクにまたがると、仗助はすぐさまエンジンを回した。

「なっ、何やってるんだアアアアア仗助くんッ」

「ちよつとの間、借りるんだぜ〜〜」

音石の野郎のところには、一秒でも早く着かなきゃならねーッスからなア〜

「そ、それに、どうやってエンジンをかけたんだッ？ その『キー』は一体？」

「『念写』してもらったぜ。……ジョースターさんに。」

『校舎内で、キーを外し忘れた』バイクの場所をよ。

手段選んでる場合じゃないからな」

ホラ、乗れよ。

そう促されるまま、康一は仗助の背に張り付き、腰に手を回してひつついた。前進を始めたバイクは駐車場を離れると、どんどん速度を上げていく。

「ひいッ、チョット早すぎない？」

「言っただろーがよオオアアアアア康一ッ 急ぐんだよ！」

場所だけはわかつてる！ そこから動かれる前に到着すりゃあよおアアアア」

「で、でも仗助くんッ、到着するまではいいいけど、敵はやつぱり『戦車』なんだよ？

ぼくらでどうやって戦うの？」

正直、康一はすでに自分のエコーズで敵に直接ダメージを与えることは諦めている。エコーズは『生物を対象に』攻撃しなければ一切意味をなさない能力だからだ。戦車の中に引きこもられた時点で、攻撃を当てる手段が存在しない。ならば、康一のやるべきことは仗助の勝算を支えるアシストということになるが。

「いいか康一、『戦車』を狩るのは『戦闘ヘリ』なんだぜ。
『戦闘ヘリ』は『戦車』のどこを攻撃する?」

「ええつと……頭?」

「そう、頭だな。戦車の頭、というか天蓋つてのは大抵装甲が薄いんだとよ。

正面からじゃ、いくらクレイジー・ダイヤモンドでも抜ける気はしねーけど。

薄い部分を狙えるならイケるかもだなあー」

「ど、どうやって? っていう疑問はあるけどさあ……」

それだったら、億泰君のザ・ハンドの方が確実なような」

「ああ確実だぜ。中の人質を削り取っちゃってもいいならだがよおおー」

「あ、そっか! ゴメン、忘れて」

それ以前に、康一はすでに仗助から聞いていた。億泰と別れて敵を追っている訳を。億泰の出番は、来るべきその瞬間のためにあるのだ。

「そういうことなら、わかったよ仗助くん。」

そしてぼくは降りるよ」

「ありがとよ康一！ 速度を落としてるから3秒したら飛び降りるんだ」

3、2、1。

二人で数え、康一だけがゼロで飛ぶ。着地の瞬間、衝撃が来た。速度を落としたとはいつても時速30km以上は出ている。足から着地しては骨を折ると踏み、あえて五体倒置気味に身を投げ出したのは正解だった。ごろごろ転がる。何度も、何度も。勢いが止まったあたりで飛び起きた。やはり痛い、ケガの類は仗助に後で直してもらおうとして。すぐに前を見ると、まさにバイクが『4号戦車』に突っ込むその瞬間！爆発炎上の頭上を通り越して、仗助が天蓋に取り付いたのがハッキリ見えた。自分も走って現場に駆け寄り、エコーズを放つ。役目を終えた尻尾文字を回収し、次に備えるためだった。回収すると同時に周囲を見回す。奥にいた戦車4台のうちひとつから、顔を出している女の子がいる。

(無用心だなア〜、攻撃されるかもしれないのに)

エコーズは音のスタンド。一般人にも声を伝えることはできる。警告だけはしておこうと、エコーズをAct. 1にシフトして送り出す。射程距離は50m。速度もけっこう速いので、女の子のところまではあつという間だ。しかし、予想外は思わぬところに潜んでいた。エコーズが戦車の上に飛び出したところで女の子がビックリし、直後に

身構えたのだ。

「これは何？ 『ギタリスト』の仲間だっというなら……」

『違う！ 違います！ ぼくは、音石明の敵です！』

「私は『二人の超能力者』が来るって聞いています。あなたはどう見ても人間じゃあなくて、しかも『三人目』です」

『二人目ですよ！ ぼくは広瀬康一。今、少し離れた路肩からあなたを見ている男がぼくです』

話にかみ合わなさを感じる。見えているというのなら、つまりこの女の子はスタンド使いであるはずなのに。『スタンドがいれば本体もいる』という思考が働いていないように見える。

「あつ。もしかしてあの子？」

『あの子です』

「じゃあ、コレは、あなたの出している『ラジコン』みたいなもの？」

『はい。大体合ってます』

背が低いって自覚くらいはあるよ、チクシヨ。

あの子呼ばわりされるのは、とつくに慣れきっている康一であった。それは置いて、本来の目的を果たしに移る。

「詳しく話を聞きたいけど、多分そんなヒマないよね」

『はい。危ないから車内に引っ込んでてください』

「それは出来ないかな」

『どうして?』

「戦っているから。頭を引っ込めて幸運だけを待つわけにはいかないよ」

康一に、重ねての説得は出来なかった。多分、言っても聞かないだろうということが、なんとなくわかってしまった。

『『4号戦車』が動く。広瀬くんこそ安全なところに移動して』

『できないね。仗助くんが戦っているんだ』

「そっか。ケガとかはしないでね」

女の子も、康一にそれ以上は言ってこなかった。二人して『4号戦車』に視線を向けると、クレイジー・ダイヤモンドのラッシュが始まった。

「ドラララララララアーツ!!」

家一軒くらいはたやすくぶち砕くだろう破壊の連撃が戦車の頭上を叩く、叩く、叩く。仗助を振り落とそうと右往左往している『4号戦車』は、叩かれるたび右に左にきしみを上げる。

『やったッ! 一方的に袋叩きになっているッ、これならッ』

「……あれが全力なら、ちよつと無理かも」

『えっ?』

言われて、康一は改めてよく見てみる。確かにクレイジー・ダイヤモンドは一方的に『4号戦車』を叩きのめしているし、天蓋の装甲には拳の型が無数に刻み込まれている。だが同時に、天蓋にしがみついた仗助の手からは。

『仗助くんの手から、血が……』

「えっ、どういうこと?」

『スタンドがダメージを受けたら、スタンドの受けたダメージは本体に跳ねかえるツ

殴ったクレイジー・ダイヤモンドが逆にダメージを受けているんだ!』

「殴った手の方が痛かった。って、当たり前だよ! 戦車に拳ひとつで勝負なんてツ

「これじゃあ、破壊できたとしても時間がかかる!」

音石明がそれを黙って見ているだろうか?』

スタンドごしに話すのがそろそろもどかしくなってきた。康一が、女の子のいる戦車に駆け寄り始めたとき、それは起こった。

「うぐうツ!」

『4号戦車』が一瞬まばゆく輝いたと思うと、仗助がふつ飛ばされて地に落ちたのだ。装甲の表面に立っているのは、レッド・ホット・チリ・ペッパー!」

『フー焦った。焦ったよ東方仗助。戦車の天井に引っ付いてブン殴ってくるとはなあ〜』

終わった！ 詰んだ！ マジにそう思ったよ』

「ヤ、野郎オ……」

『だが！ この4号戦車をブチ壊すにはッ！

ちいつとばかりパワー不足だったようだなあ〜ッ

空条承太郎のスター・プラチナならいざ知らずよおおお〜ッ！』

「時間がかかるだけならよおおお〜、

大した問題じゃあないんだぜ、音石サンよオ」

仗助が立ち上がり、再度戦闘態勢をとる。クレイジー・ダイヤモンドを前方に出して構えた。

『へっ、言うねえ！ そう言うとは思ってたよ……』

だから、それなりの備えもあるッ

出番だぜえ〜優花里ちゃんよオオ〜ッ』

『……に、西住どの』

『4号戦車』の外部スピーカーから、音石明以外の声がする。やはり人質は取られていたか。来るべき時が来てしまった。康一が思考する横で、女の子が呼吸を止めて目を見開

いた。

「優花里さんッ……」

『撃つてください西住どのッ！ この男は追い込まれて』

『余計なクチ聞いてんじやねエエンだよオオオーッ』

「このクサレオタクアマがアアオーッ!!」

『いぎ、ギイイイ！ ギがが、ががッ、ガガッ、カカカあッ!』

バスン、バスンと電気のシヨートするような音が響き、聞くに堪えない無残な悲鳴が外部スピーカーから轟く。

「音石、てめえ」

『おオオッと仗助！ わかっているはずだぜエエ』

オレの言いたいことが何なのかだよオオ』

「ああ……よおおーくわかるツスよおおー」

てめーみてえなクツセエゴミはキツチリたたんで出しちまわねーとなあ』

『減らねえ口だぜ。なら言つてやる!』

一発に一度、だ！ クレイジー・ダイヤモンドの拳一発につき一度、

電気の拷問でソロライブをやらせるぜ！ この秋山優花里ちゃんになア』

そこで一旦、音石は言葉を区切った。戦車の車内に頭を引っ込めて、中の誰かに何か

言おうとした女の子……西住どの、を見咎めたようだった。

『怪しい動きしてんじやねえぞ。西住どのよオオー』

てめえら大洗女子学園戦車道チームにも言っておく！

てめえらも同じ扱いだ。ちよっかいをかけてきた時点で一発とみなす。

さらに、オレの指示に従わなかった場合も一発とみなす！』

そうやって厳しく脅しておいて、にやけたように口調をやわらかくする音石。

『でー！ 早速なんだが……その自慢の戦車よ、あるだろ？』

そいつで、この東方仗助をひき潰してもらおうか。

そこにいる広瀬康一もよオオ〜』

ついに自分の名前が出てきた。しかも、戦車で引き潰させるのだという。

『誰のことかわからねーかあ？ ならもつと親切してやるぜえ』

今、4号戦車に殴りかかってたドアホのリーゼントが東方仗助で、

そっちの方にいるチビ男が広瀬康一だ。わかつたろ？』

西住と呼ばれた女の子が、戦車からじっと『4号戦車』を見つめている。康一の目からは、泣きそうな顔に見えたが。同時に、瞳の奥深いところで、まだ見ぬ勝算を探っている。そんな風にも見えたのが不思議だった。

『わかつたなら命じろよおおー、西住みほッ！』

パンツァー・フォー、つてよおー」

「人質を、代わります」

『……。あん？』

大声を出したわけではない。だが、西住みほの声は、遠くまでよく通った。そして、自ら戦車を降りて、『4号戦車』に向かって歩き出す。

「優花里さんは、いち装填手でしかない。」

そこに来て、私は隊長です。大洗女子学園戦車道を預かっている……

私の方が、よほど『旨み』があると思います」

仗助を横目に、砲の前に立つ西住みほ。飢えた虎に、自分自身を差し出すかのような光景だった。しばしの沈黙が流れる。誰もが反応しきれなかった。

「優花里さんを放して下さい。」

私が、代わります」

『なあるほどよおー、ナンニモわかってねえーなあー西住どのよおー』

『ぐつ、ぐがッ、がああー」

対する返礼は冷酷だった。耳をつんざく悲鳴が、またも響き渡った。さっきの女の子、秋山優花里とかいう……の声だ。喉を破りそうな奇声が、次第にかすれていく。

『一発とみなしたッ！ てめーに許されるのは屈服だけだぜええー』

康一には見えた。仗助にも見えただろう。表面上はうつむき、歯を食いしばっているだけの、西住みほ。その全身から一瞬、沸騰するようなオーラが立ち上った。スタンドのエネルギーだ。形を取れずに荒れ狂っている！

『おおつと……へッへッ、落ち着きなよお』

優花里ちゃんの余命は、あんたの心がけ次第なんだからよー』

音石明も気づいたようで、トーンを落としてなだめにかかる。今のやり取りで確信できた。

「仗助くん」

「ああ……あの、西住みほ、だったか？

間違いないねえ。なりたてのスタンド使いだ。

そして、状況証拠的によおー、どこで『なった』かつつーと」

「『弓と矢』だね。音石明はここに持ってきている！」

『こそこそナイシヨ話してんじやねエエーよ仗助ッ！』

エコーズでこつそりと話していたのだが、レッド・ホット・チリ・ペツパーにはさすがにバレたらしい。康一も仗助も、とっさに身構えた。

『つっわけで、今度こそ命令するぜえー西住どのオオ』

パンツァー・フォーだぜツ、その二人を田んぼのウシガエルみてーにひき潰させな

「何言ってるの優花里さん。そんな、まるでッ」

康一にも仗助にも。『4号戦車』の中で何か起こっているのか、手にとるようにわかるようだった。仗助がたまらずに駆け出した。

「ま、待てよ、おいッ。早まってんじやねええーッッ！」

『こんな奴の言いなりになる西住どのなんて、戦車道なんてえ。

私（わだじ）、見たぐありませんがらあッ。

フウッ、うううッ……来世でえッ、またお会いしましょうッーッー!!』

『矢を放しやがれてめええええーッッッ!!』

そこで『4号戦車』の外部スピーカーはブツツリ切れた。切れるなり、エンジンが猛回転して、全速力で後ずさっていく。その動作自体が、何があつたのかを誰の目にも明らかほどに証明していた。砲が動く。照準は仗助にピタリと合っている。

「グレート……正面からでもぶっ叩くしかねーぜ、こりやあよー」

血のしたたる拳を握り締めた仗助。間に合うかどうか。直せるかどうか。戦いは、時間との勝負に入った。

To Be Continued ⇒

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（6）

東方仗助（ひがしかた　じょうすけ）は嫌と言うほど認識した。

（どー考えてもよォー、さっきのやり取り……『矢』で『自殺』してるよなあー

康一の時はギリギリ間に合ったが、今度はキズの具合もサツパリわからねー）

歩みは止めない、むしろ早めて『4号戦車』に向かいゆく。ただわかってしていることは、時間がない。それだけだ。

（『シユレインガーの猫』とかいうヨタ話みてーによおー

死体を見ちまうまでは諦めねえぜ）

「え、何……ちよッ」

目前にいた、西住みほとかいう隊長をクレイジー・ダイヤモンドで横に蹴り飛ばす。頭からスライディングしていったのはちよつとばかりカワイソーになったが、機銃で穴だらけにされるよりずっとマシだろう。

「離れてなよ。流れ弾でやられたくなかったらな」

果たして訪れる、主砲同軸機銃の雨あられ。人間一人をたやすくグズグズの肉塊にできる鉄の嵐は、しかしクレイジー・ダイヤモンドなら防げないこともない！

「ドララララララ！」

弾丸の雨を掻き分けながら仗助は見抜く。この動きはやはり、人質が価値を失っている証拠だ。ならば、なおさら急がねばならないのがツライところだが、それだけに付け入るスキもあるはずだ。

「どうしたよ、音石よおー。さっきに比べりゃ、ずいぶんへっぴり腰だぜ」

『い、イイ気になってんじやあねーぞ仗助エツ』

どのみちてめーのクレイジー・ダイヤモンドじゃあ4号戦車は倒せねーだろうがッ』
この小悪党はもはや動揺を隠せないらしい。慢心が、他ならぬ人質の『一撃』で消し飛ばされてしまったのか。今、ヤツを守る盾は何もない。それこそ『4号戦車』しか。

「でも、やつ言う通りッ、状況が何も変わってないぞッ！」

『4号戦車』を倒す方法が、ないッ」

下がっていた康一が手に汗を握っている。だというのに時間がない。人質の秋山優花里は『血時計』だ。

「違うぜ康一。音石がなぜ人質を取ったのか！」

そこんとこ考えりゃあよー、オレの考えそうなことくらいわかるだろーがよー」

機銃に撃たれたままではいられないので位置取りを変える。変える位置取りはお膳立てだ。クレイジー・ダイヤモンドには倒せなくとも、それならそれで充分だ。

「あつ、ふつ飛んだ西住さんッ、そういえば、いない!」
『ゲツ! まさか……!』

気づいた音石が『4号戦車』を急旋回させて別方向へ発進するが、そこへ4発きつかり、砲弾が降り注いだ。振り向くと、戦車のうち1台のハッチから、鼻をすりむいた西住みほがプレーリードッグのように顔を出している。

「かなり手荒だがよおー、『運送』させてもらつたぜ」

「ヒドイ。ケドそんなこといつてるバアイじゃない……次弾、装填急いで」

西住みほにとつても。いや、西住みほだからこそ、この状況では最も急ぐ。ダチが死にそうになつていて、最短距離を行かないヤツじゃあない。

振る舞いから人となりを理解した仗助は、彼女の最大の武器のところへサツサと送り届けたというわけだ。隊長の席に戻った彼女はすぐさま射撃を指示。そして大洗女子学園戦車道の全員は、指示などされるまでもなく、万端の準備でその瞬間を待つていたようである。結果、4発はすべて命中。当たり所は今ひとつだった。

『き、キャタピラがッ、チキシヨオッ!』

そのうち一発、小さな砲弾が『4号戦車』の履帯に突き刺さり、半壊させていた。つまり、遠からずまともな走行が不可能になるということッ!

「グレート。狙つてやってやがるぜ、あの方々はよおおー」

そして、なるほど……キャタピラだったらブツ壊せそうな気がするよなあー」

「スゴイよつ、一気に楽勝ムードになってきた!」

『イイ気になるなと言ったぜ、オレあよツ!』

急加速と急減速で位置を変えた『4号戦車』が、そのまま仗助に砲を向けた。電気を操るスタンドならではの全自動は、まだ健在だ。だが、態度を変える必要、まったくなし。

「今、降参すりやあよー。生命だけはカンベンしてやるぜ……」

さつさと人質の子を出しなよ。『なおす』からよおー」

『立場わかってねエーのかあーツ? この状況!』

あそこの戦車どもより、オレが引き金引く方がよつほど早いんだぜえー」

「そーツスカあー、降参しねーってことツスねエー」

クツクツと、思い切りあざけ笑ってやった仗助は、戦車の砲に堂々と五体を向けた。

「撃つってんなら、やってみろ! 音石……それで全部わかることだぜ」

『何なんだよ、てめーのその余裕は。いけ好かねえーぜ』

「できないのかい?」

おそらくキレたのだろう。犬が吠えたような奇声を放ち、戦車も吠える。ただし、吠えたのはエンジン音だった。仗助を中心に弧を描いて旋回していく。

「以外と冷静じゃねーっすか。戦車道チームとの間にオレをはさむってわけか」
『それだけじゃあねーぜツ 仗助エエーッ！』

引いてやるぜ引き金をよオオオオーッ
ムッ。

来るか、とばかり身構えると、砲塔がわずかに回る。違和感がある。これは何だ。

『ただし仗助、テメーにじゃねえー』

「ッ、てめえ!!」

主砲ではない、同軸機銃ッ！

気がついた瞬間には機銃の曳光弾が尾を引いていた。仗助からわずかにそれて飛んでいったそれらの群れは、どこに向かったか。答えが出るのもまた一瞬だった。

「し、しまっ……ぐっ、ぐあああ……」

「こ、康一いいーッ」

とつさに飛びのいた康一は、しかし間に合わず太ももに大穴を穿たれた。足首にもまともに直撃した。ちぎれ飛ぶ寸前のそれは、もう移動手段の用をなさない。転げた康一は、上半身をばたばたさせながら、地面に赤い線をべったり塗りたくり、ズリズリと物陰に逃れようとする。意識を失ってしまいたい衝撃と激痛を無理矢理こらえているのだろう。

『ここまでやらせやがって、てめーが悪いんだぜ仗助』

「う、動くなッ、康一！ オレのクレイジー・ダイヤモンドがすぐになおすッ」
『無視こいてんじゃねえぞ。主砲はてめえだ。てめえの分にとつてある！』

だが4号戦車の機銃はあの小僧を撃ち続けてやる！ ひたすら撃つてやる！
それに見てみる、アレをよおー』

音石などに言われるまでもなく聞こえた。戦車の装甲板を蹴つた音が、だ。誰かが飛び降り、走ってくる。康一に向かつて。

「なっ、バカ野郎、戻れッ！ おめーが出て何になるつてんだ『西住』ッ」
『おあつらえ向きに射線に入ってくるなあ、あのメスガキ』

西住みほ隊長に触発されたか、周りの戦車も一斉に動いた。『4号戦車』と康一の間に入つて、盾になろうとしていようだが間に合うわけがない。

『ほら、てめーも入つてこいよ仗助。康一を助けたいっつーんならな。』

あのメスガキ程度の意地、てめーも見せてみろつてんだよ』

仗助は身を躍らせた。自分の意思で、主砲の射線に飛び込んだ。防御の姿勢も何もない。クレイジー・ダイヤモンドを盾に飛び込んだだけだった。

「ドラララララッ、うぐー！」

機銃の弾は、今度は仗助の太ももをかすめていった。康一のところには一発も飛ばさ

ない。それだけが精一杯だった。激痛すら感じない。かすめただけだというのに、ヘビー級ボクサーにブン殴られたような衝撃を感じた。肉がえぐれて血が吹いているのに、痛みが現実には追いついてこない。康一は、これ以上の目に遭っているというのか！『同軸機銃が当たったんなら主砲も当たるとことだよなあ、FIRE!』

足をやられてくずれ落ちたところに、本命が来た。防御できない状態に陥らせて、そこに戦車砲を叩き込む。やつ計画通りだった、といった所か。だが、負けてやるつもりなどない。巨大な圧力で迫り来る撤甲弾は、瞬時に目前へとやってきた。スタンドがなければ、クレイジー・ダイヤモンドがなければ、感じ取ることなどできないだろう。そんなヒマなくバラバラになって、後には何も残らないのだろう。クレイジー・ダイヤモンドはそこを殴った。砲弾の頭を斜めから撃ち、軌道を大きくそらした。

「ぐ、グレート……二度とやりたくねえ」

砲弾は斜め上にずれ、空の彼方に飛んでいく。周囲には破壊の後もなく、空砲でも撃ったようにしか見えなかっただろう。一瞬遅れて、仗助の右手と、二の腕と、肩とが一斉に血を吹いた。至近距離からの戦車砲はいくらなんでも荷が勝ちすぎた。後ろにばったりと倒れてしまうが、意地で上半身を起こす。これで気絶などしようものなら、康一にとでも顔向けできない。目の前には『4号戦車』。何も変わらない。

『防ぎ……やがった。なんて奴だ、東方仗助』

「お褒めの言葉、どーもツスよ……ゼエ、ハア」

『マジに感心しているよ。尊敬するぜ。』

だが、これでシマイだよ仗助』

砲塔は未だ、仗助を正面に捉えて離れていない。ちらりと後ろを確認すると、あの西住みほ隊長が康一をおぶってヨタヨタ歩いてきた。その横から、二人の女子が顔を真っ青にしながら、康一の足を止血しようとしている。西住みほ隊長の乗っていた戦車から出てきたのだろうか。ともあれ、もう射線からは外れている。

『我がレッド・ホット・チリ・ペッパーは、すでに次弾の装填を終えている。』

砲弾はチト重いが、生身でやるよりは断然早いつてことだぜ』

「楽しそーツスね音石サン、能書きタレるのがよおー……」

仗助から、クレイジー・ダイヤモンドが消える。どのみち、次に戦車砲を撃たれたら防げない。そこで終わりだ。

『もうスタンドを出すのもしんどいつてワケか？』

仕方ねエなあくく。じゃあこの勝負、シメてやるか』

「勝負をシメる？」「冗談キツイぜ音石サンよ」

『何だアそりや……命乞いのつもりかい？』

興ざめだよオオオオー東方仗助ッ』

唐突にギターをギャンギャンかき鳴らす音石。外部スピーカーを通じて、ご近所中に響き渡る。大迷惑だ。

『葬送曲つきで送ってやるからよおー』

砲弾の直撃でおサラバしようぜエエエー！ツ！！

ハデハデしくアバヨだぜツ FIRE!!』

「ああ、ハデにおサラバだぜ。音石。

クレイジー・ダイヤモンドは、すでに直しちまつてる」

空の彼方から戻ってくる感覚を、仗助は感じていた。おそらくは、他の戦車からも見えているだろう。

「み、みぼりん、みぼりーん！ 『弾』がツ、こっち来るよおツ！」

「『弾』ツ どこから？」

「いいえ、違います。あれは『4号戦車』の撃った……『戻ってきている』ツ？」

「『戻ってきている』？ 戻るって、どこに？」

「『4号戦車』に『弾』が戻るツ、つまり、これはツ」

全員の目前を、戻ってきた『弾』が通過していった。『弾』は元の速度と同様に、瞬きのヒマもなく『元の位置』に戻っていった。戻った『弾』はスツポリ『4号戦車』の砲身に収まり……そこに、音石明は引き金を引いた。どうなるか？ 3歳児でも考えれば

わかることだ。ハデな衝撃と爆音が襲い掛かった。ただし、主に『4号戦車』に対して。砲身が粉々に吹っ飛んだ『4号戦車』は、その衝撃で、壊れかかっていた履帯も同時にはじけ飛んでしまい。そして、しめやかに白旗が上った。

『4号戦車』、撃破判定。機能停止。

戦車から白旗が飛び出したなら、それは敗北の証。戦車道の厳然たるルールだった。

「壊れたものをなおす能力。メールにはそうありましたが……」

「『4号戦車』が主砲を撃つと、薬莖は『車内』に落ちるよね？」

つまり、撃たれた砲弾を『元通り』に直したのなら」

「砲弾は『4号戦車』に直りに戻った。そーいうこと？」

うー、もうやだッ、ついていけないーッ」

やいのやいのと騒ぐ後ろを尻目に、仗助は崩れ落ちた姿勢のまま、乱れたリーゼントを整えなおした。

「会長さんによおー、答え合わせしといてよかったぜ……」

ウロ覚えなんだよホトンド！」

To Be Continued ⇒

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（7）

西住みほ（にしずみ みほ）は、たまらずに38tを飛び出した。

（放っておいたら、死ぬ。絶対）

機銃で足をぶち抜かれた少年の行く先。みほの脳内に描かれたヴィジョンには、どうあがいても『死』の一文字しか見えなかった。だから飛び出した。理屈はない。

「バカ、よセツ、死ぬぞツ」

「なつ、バカ野郎、戻れツ！ おめーが出て何になるってんだ『西住』ツ」

前と後ろで聞こえる声がシンクロする。後ろの麻子に、前は、さつきおシリを思い切り蹴飛ばしてくれた『東方仗助』。そんなことは捨て置く。『広瀬康一』の流血は一分一秒を争う。それに、『広瀬康一』を撃つたのは主砲同軸機銃。『4号戦車』を乗っ取ったギタリスト、『音石明』の狙いは透けて見えている。次に飛んでくるのは間違いない。主砲。人間がそんなものに撃たれれば、もう。だが、みほは無視した。主砲も、機銃も。東方仗助は、広瀬康一を絶対を守る。これは確信だった。彼が作り出す数秒は決してムダにしない。広瀬康一は必ず38tに運び込む。そして、東方仗助がとどめを刺されるより前に、優花里が車内でこと切れてしまう前に、38tで肉薄し、『4号戦車』の砲を狙

い撃ちして倒す!

絶対の絶対にする決定事項! みほはただ、それに従った。ほどなく、広瀬康一のもとにたどり着く。

(ひどい。右足がほとんど、もげかかっている)

手荒に扱いたくないが、時間をかければおしまいだ。

「……な、何を、やって! いるん、だ。逃、げッ」

「しゃべらないでッ、安静にしないと死んじやうから」

かすんだ目でこちらを見ながら、それでも広瀬康一は警告を飛ばしてくるが、こんなところまで来て、手ぶらはもつとありえない。みほは、広瀬康一をサツと拾い上げておぶった。この時、みほは気づいていなかったが、みほ自身の手から飛び出した別な何か。広瀬康一の体重、およそ40kgを力強く持ち上げていた。それがなければ、簡単に持ち上げることが叶わず十数秒もオタオタし続けただろう。広瀬康一の重さに苦労しながら振り返ると、そこには沙織と華が息を切らして立っていた。

「この、おバカッ! 後で、ゼツタイ! お説教するからねッ」

「沙織さんとまったく同感です。でも、今は逃げましょう。止血しながら……」

「早く行こうよっ、あのリーゼントくんがマシンガンを防いでる間に、

って、やられてるーッ!」

全員が振り返った先に、東方仗助が機銃に足をやられ、崩れ落ちた瞬間があった。「何やってんのよオオ、」

なんでもなおす能力だったら、自分をまず治しなさいってばー」
「確かに、つじつまが……いえ、そんなことを言っている場合では」

直後、聞きなれた爆音が耳をつんざく。何があったのか、わからない人間はこの場にはいない。だがおかしい。そうであれば！

今頃は自分達、全員まとめて三途の川だか天国への階段だかを渡っているはず。

「え……撃たれた、よね？ 空砲？」

「いえ、見えました。撃たれた主砲を、あの方が……そらしたんだと思います。

何かの力を使つて」

「何それコワイ。助かったケド」

「ですが、大きな力には大きな『反動』があるはず。すると、あの方は」

華の予感はず確信に変わり、誰の目にも明らかに変わった。東方仗助の右手、右の二の腕、右肩と、一瞬にして裂けたかのように血が噴出した。耐え切れず、仰向けに倒れるが、それでも彼は起き上がる。上半身だけでも。意地だろうか？

「やはり。どんな強力な力でも、戦車に生身で立ち向かうには無理がッ」

「ッ……行こう。華、みぼりん。逃げるしかないよ。」

こんなところでグズグズしてたら、彼の頑張りが完ツ璧ムダになるよ」

沙織の言っていることは、つまり、動けない彼を見捨てて逃げろ、ということ。こんな言葉を吐くこと自体、沙織には断腸の思いだっただろう。みほも、理性ではそれが正しいと思う。それしかないとすら思う。

(でも、それに『うん』と言ったら、私は……)

思考の海に沈みかけた所で、背中から、ささやくような声がした。

「仗助くんが、戦車の砲弾を……防いだのかい？」

「ツ、あはは、コイチくんだけっけー。ダイジョオオッブ、バッチリ防いだからねー。」

あとはジョースケくんに任せて、ケガしたコイチくんは寝てなさいよー」

止血作業を再開しながら、沙織はムリヤリの笑顔を作っている。率直に言って、痛々しい。これでは誰もごまかせそうになかった。

「防いだのなら、ぼくらの勝ちだよ。」

仗助くんが会長さんに聞いてた質問の意味が、今わかった。

『確実に倒す』方法が、これなんだ」

「……どうするって言うんです？」

敗北感と罪悪感に満ちた声で、華が聞く。華は九割九分まで、助けてくれた東方仗助を見捨てて逃げる決断を下している。残った最後の一分が、それを叫ばせるのか。

「一発防いだだけで、どうなるって言うんです？」

あの人はもう限界です。逃げるどころか、立つこともできないッ

『4号戦車』はすぐにでも次の弾を撃つ！　なのに、『確実に倒す』って何なんです？」

「だから、いいんじゃないか」

「ふざけないで下さいッ、お友達が死ぬって時に！」

『すぐにでも次の弾を撃つ』、それがいい！　これ以上ない最高ってやつだよ」

「もうしゃべらないでいいからッ、自分で何を言ってるかもわかってない、この子……」

沙織は、深い哀しみの目で広瀬康一の言葉をさえぎった。半死人のうわごと程度にしか受け取ることが出来なかった。みほも、そう受け取りかけた。しかし、華は違ったよ
うだ。

こいつは何を言っているんだろう？

そう、本気で考え込むように視線を研ぎ澄まし……ふと、空を見た。みほも、沙織も、視線の先を目で追った。全員、気がつく。小さな何かすがすごい勢いで大きくなってくる。見慣れた形だ！

「み、みぽりん、みぽりーん！　『弾』がッ、こつち来るよおッ！」

『『弾』ッ　どこから？』

みほが瞬間的に気にしたのは、どこか別のところからやってきた敵増援に撃たれるこ

と。この状況でアウトレンジされれば一方的に全滅だ。だが、それは解答ではなかった。解答は、華がもたらした。

「いいえ、違います。あれは『4号戦車』の撃った……『戻ってきている』ツ？」

「『戻ってきている』？ 戻るって、どこに？」

「『4号戦車』に『弾』が戻るツ、つまり、これはツ」

みほの中で、全てが一直線につながった。『すぐにも次の弾を撃つ』、確かにこれは最高だ！

戻ってきた『弾』は『4号戦車』の砲身に寸分たがわず戻っていった。そして、あのギターリスト……音石明は、そこに引き金を引いた。引いてしまった。そんなことをすれはどうなるのか。戦車道履修者でなくとも簡単にわかる。結果は、派手な爆発音だった。主砲は形を失った。履帯も耐え切れず弾けた。『戦闘不能』だ。あれはもう、戦車として役に立たない。ほどなくして、『4号戦車』の頭頂部から、白旗がパタリ。あつげにとられて数秒間。誰も反応しきれない。

「壊れたものをなおす能力。メールにはそうありましたが……」

ようやく、思い出したように華が口を開く。みほも、合わせた。

「『4号戦車』が主砲を撃つと、葉莢は『車内』に落ちるよね？」

つまり、撃たれた砲弾を『元通り』に直したのなら」

「砲弾は『4号戦車』に直りに戻った。そーいうこと？」

うー、もうやだッ、ついていけないーッ」

うんざりするように頭を抱える沙織の気持ちは、みほにもよくわかる。ものを元通りになおす能力というのが、ここまで予想外に襲い掛かるとは。

「戦車を、生身で倒してしまった。

超能力があるとはいえ、力任せではなく、工夫で……なんて、お人」

「ね？ スゴイでしょ、仗助くんはさあ……うぐ」

みほの背中で、広瀬康一が崩れ落ちかかったのを感じた。全員慌てるのを、広瀬康一は軽く笑って抑えた。

「デキれば、仗助くんのところまで送ってくれないかなあ……

ホント恐縮なんですけど。クラクラしてきた」

「ああ、治してもらおうのね。そーね、それがイイでしょーね」

どこかやさぐれたように、沙織はハイハイとばかりにテキストに返す。死にかけた人間の悲壮なうわごとだと思つて泣きかけた自分がバカみたい。そういうことだろう。みほの背中から広瀬康一をひきずり下ろした沙織は、華に足を持たせて自分は上半身を担当した。『治せば』一瞬だろうとはいえ、傷は未だにマズい状態。だから華に持たせたい。死体を放り捨てにでも行くような態勢で、沙織は華と走り出す。

「ウゲツ、急いではほしいけどコレはキツイ」

「みぼりんをタクシー扱いしようとしたバツ！

それに忘れちゃいけないでしょーね。

まだ優花里ちゃんが『4号戦車』にいるのよ」

「それだけだよー、あとチョットだけ待ってくんねーかな」

近づいたところで、東方仗助の方から声をかけてきた。ダメージが大きすぎて動けな
いらしく、近づいてくるのを待っていたようだ。その言葉に、沙織は普段、やりもしな
いだろう舌打ちがついに出た。

「チツ、何言ってるの？ もう時間がないのわかってんでしょ」

「わかるよ。わかるんだけどよオオーツ 音石のヤツがまだ健在なんだよ。

ヤツ自身をブチのめすまで、オメーらを近づかせるわけにはいかねー」

「そんなこと言うんならさあーん」

自分のキズ治してきつさと行きなさいよ、トンチキツ！」

「オレのクレイジー・ダイヤモンドは、オレ自身のキズは治せない。

理屈とかルールとかじゃあない、こいつは事実なんだ」

「~~~~~ッ じゃあ、最初から黙ってろつてのよッ！」

みほは初めて見た。沙織がマジにキレている。『4号戦車』が倒され、これで優花里を

救出しに行けると思ったら、まだまだと言われ止められた。沙織自身ものすごくわかって
いるだろう。自分がどれだけ自分勝手な物言いをしているのか。だが、もう口と心とが
勝手に叫んでしまうのだ。友達の余命が幾ばくも無いこの状況で。脳ミソが我慢の限
界をぶつちぎって破裂しかかっている！

みほにとつても、それは同じ。だからこそ耐えなければならぬ。

「ちよつと待って、沙織さん」

「……わかった。待つ」

沙織は、みほの言葉にあっさり従ってくれた。内心、怒りと焦りが渦巻いているだろ
うが。彼女を納得させる答えを引き出さなければ。

「東方くん、質問に答えて。手短かに。」

音石明は、すぐにでも倒されるの？」

「YESだけ」

「優花里さんの生存は確認しているの？」

「NO。確認するスベがねえ」

「これが最後。優花里さんが死んでいたら、

『クレイジー・ダイヤモンド』で生き返せるの？」

「NO、だ！ 終わっちゃまった生命だけは、なおせない！」

最後の答えを聞いた瞬間に、華と沙織が走ろうとした。みほはその手をガシリと捕まえて止める。

「みほッ、アンタ！」

「三十秒だけ待つ！ それ以上の譲歩は不可能です！」

三十秒経つたら、東方くん！ あなたを引きずって『4号戦車』に連れて行く！

これは決定ですッ、あなたの返事は、聞かないッ!!」

「グレート。充分だぜ」

みほはケータイを取り出し、時刻表示に目を落とす。秒単位など当然出ていないので、ストップウォッチの機能を起こした。ここまでに三秒経過したので、『二十七秒』で行動に移すとしよう。視線を戻すと、沙織が広瀬康一を丁寧に下ろして、東方仗助が『クレイジー・ダイヤモンド』を出していた。

「ギリギリセーフって感じだよお〜」

「おめーはな、康一。『秋山優花里』はまだだぜ〜」

「うん」

広瀬康一の痛々しい傷が、たちまち巻き戻って消えていく。同時に、地面にこびりついた血と、みほの制服に染みきった血とが、治る傷に吸い込まれていった。どんな致命傷でも、生きてさえいれば治せるということか。恐ろしい能力だ。そして、これが唯一

の希望だった。

「これは、チョットした奇跡ですね……」

「治してもらうわよ。優花里ちゃんをゼツタイに治してもらうから」

「絶対になおす。これは決定だぜ」

「ゴメンね。私としてはさあぁーっ」

『さっさとやれよ』って言いたくなっちゃうの……

アンタがダメーじ受けてるのもわかるんだけど」

「そのためによおおー、『足』になってもらうんだぜ。ええと、沙織つつたっけ？」

『4号戦車』の3m手前まで来たら、構うこたあねー、

オレを『4号戦車』に放り投げて下がれ。

あとは音石を叩きのめして、『秋山優花里』をキツチリなおすからよ」

十八秒経過。音石がすぐにでも倒されるといふのはウソなのだろうか。すでに彼自身、『音石明』を自分が倒すことを勘定に入れてるように感じるが。視線をやったところで、広瀬康一がガッツポーズを取った。

「仗助くんッ」

「『動いた』か、待ちくたびれたぜ」

この状況で動くものなど限られている。みほが迷わず『4号戦車』に視線をやると、歪

んだハッチを叩き壊して這い出してくる人間が一人。ギターリスト、音石明だろう。ギターと『弓矢』を持つている。だが『矢』を注意深く見ると、『矢じり』の部分がもげ取れてしまっているようだ。そして右手が血まみれ。一体、誰の血なのか。

「東方仗助、テメーだけじゃあなくてよおー」

『大洗女子学園』の『戦車道』つてやつをよお、ナメくさりすぎてたらしいな。オレは」
「反省だけならサルでもできるんだぜーッ 音石！」

「その通りだ。だからよオオ、もう誰一人としてナメちやあかからねえッ

我がレッド・ホット・チリ・ペッパーの全力で始末するッ！

「この場の全員をなアアローッ」

二十七秒経過した。みほは、東方仗助をひっ掴んだ。沙織も、華も、協力して大の男一人をみこしのように担ぎ上げる。広瀬康一も手を貸してきたので、そこまできつくはなかつた。

「歩けない仗助のアシになるつてのか、西住みほッ！

てめーらを放っておけば、承太郎並の脅威になると見たぜッ すぐにでも殺す！」

『4号戦車』の上に立った音石明がギターをハデにかき鳴らす。アレの能力を把握した今となれば、どうすればいいかはわかる。奴を『電源』に到着させてはならない！

「切り抜けてやるぜッ、レッド・ホット・チリ……」

「今！ 作戦は完了したぜ。おめーの負けだ、音石明」

何を言っているのか。みほが一瞬考えたところで、唐突に音石明の姿が『4号戦車』の上から消えた。超スピードでどこかに動いたのか。理解が追いつかない。だが、広瀬康一の視線を追って、何があつたのかはわかつた。物陰にいたイカツイ不良が、音石明に迫っている。音石明は、物陰に『瞬間移動させられた』のだ！

「初のご対面だなあゝゝ、音石明よオオオゝゝ」

「て、てめー、虹村億泰ッ」

「待ってたんだぜえゝ、てめーが戦車から顔を出すのをよオー」

『ザ・ハンド』で引き寄せられるようになる瞬間をよオオオー」

「ッ、ほほおゝゝ、だがテメーの『ザ・ハンド』はスローだと言つたはずだぜッ

レッド・ホット・チリ・ペックぐええええッ！」

音石明に不良の蹴りが炸裂。近くの電信柱に叩きつけられ、鈍い音が響いた。

「てめー頭悪いのかあ？ てめーのスタンドはよお、『戦車』の中だろおがッ！」

「え、ああッ！ しまッ！ チキシヨオオオオオオオオ」

フラフラと起き上がって『4号戦車』に走る音石明は、しかし次の瞬間には不良、虹村億泰の前にまたも瞬間移動させられるのだった。今度はよく見えた。あの虹村億泰の操る人形『ザ・ハンド』の右手が弧を描くと、目標の物体を手前に引き寄せることが

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（8）

冷泉麻子（れいぜい まこ）は、38t車内から戦闘終了を見届けた。

（ヤバイ奴らだな。関わりたくない）

率直な感想は、これである。いくら強力な超能力を持つているからといって、至近距離からの戦車砲を防御しようなどという発想が、そもそも出てくるものだろうか？

つまりは、そういう命がけが彼らの日常。だから出来た。

（私達は小市民なんだ。特撮バトルはヨソでやれ……）

正直に言つて、麻子は今回の事態を『ヤクザの抗争に巻き込まれた』としか考えていない。不動産王ジョセフ・ジョースターの生命を狙ってきた殺し屋が仕事をしくじり、大洗女子学園に救助されてしまったところへ追撃をかけてきた。そんな所だろう、と。あの学ランを羽織つた二人は、ジョセフ・ジョースターを守るために雇われた傭兵なりガードマンなりなのだろう。なんにせよ一学生が関わりたい人間じゃあない。

とはいえ、だとしたら、それはそれでおかしい。

秋山優花里をあそこまでして助けようとしたのは、一体誰の指示なのか。ジョセフ・ジョースターさえ安全であれば目的はその時点で達成される。巻き込まれた不運な通

行人のことなど、ガードマンであれば考える必要はない。むしろ考えてはならないはず。麻子の見たところ、『4号戦車』を倒すのに、あんな危ない橋を渡る必要はなかった。お手製の火炎瓶複数本。原材料はその辺のビンとガソリン。多分、それで倒せる。戦車の天蓋に取り付いた時点でハッチをある程度破壊していたのだ。そこに火炎瓶を浴びせれば、『4号戦車』は耐えても中の人間が耐えられない。『音石明』は蒸し焼きになって死ぬ。もちろん、このとき優花里も道連れになるが、ジョセフ・ジョースターを守ることだけが目的なら、そんなもの気にする必要がない。気にする必要があったのは、自分達、大洗女子学園戦車道チーム一同だけなのだ。

(微妙につじつまが合わないな。奴らは結局『何』だ?)

麻子は、自分自身も38tから這い出すことを決めた。もうここに残る意味がない。音石明その人が戦車の外にさらわれて、新車の学ラン男(アホ面)にぶちのめされている状況だ。また戦車が乗っ取られるなどとは思わなかった。ちなみに、停電にはとつくの昔に気づいていた。少し遠くで、交通信号が消えてしまったのを見ていた。あの学ラン男(アホ面)の言うところによると、停電は生徒会長の仕業であるらしいが。ジョセフ・ジョースターに脅迫でもされたか。それとも、利害が一致して協力関係になったか。ここはひとつ、少しでも判断材料を集めておこう。場合によっては、大洗女子学園戦車道との付き合い方も考えなければならぬ。38tから飛び降り、キツイ身体にムチ

打って小走りし始めたところで、悲鳴が聞こえた。

「いいッ、イヤああああー……」 優花里ちゃんッ、優花里ちゃん!」

聞き間違えるはずがないその声は、幼馴染の武部沙織。麻子は直ちに小走りをやめた。小走りをやめて、全力疾走を始めた。

「待てッ、動かすんじゃあねーぜッ!

動かしただけで死んじまうかも知れねえ。

オレをそこに持つていけッ、すぐになおす!」

「血が、血が溜まつてる。優花里ちゃんの、血」

「康一、西住、それと」

「華(はな)です」

「すまねえ。華さんよおー。今すぐオレを『4号戦車』に投げろ。

後はクレイジー・ダイヤモンドでどうにかすつからよー。

で、その沙織を落ち着かせてやってくれ。ありやマズイぜ」

状況はつかんだ。沙織が先行して『4号戦車』の中を覗き込みに行ったようだ。そして、どうやら……秋山優花里の生存は、絶望的だ。あのリーゼント、東方仗助とのやりとりは、ケータイ通話を介して聞いていた。沙織が38tから出て行ってからこつち、通話しつ放しになっている。終わつちまった生命だけはなおせない。あの男はそう

言った。

(出会って一ヶ月もしない奴なんだがな)

麻子は、自分が奥歯をギリツと食いしばったことに気づいていなかった。『4号戦車』の前に到着する。天蓋から下ろされた沙織が華に抱きすくめられ、みほがその背中をなでてあやしているようだ。

「あつ、麻子さん。優花里さんが……」

「知らない。大体わかっている。それより、広瀬康一」

「……え？ ぼく？」

「お前以外に誰がいるんだ。ジョセフ・ジョースターは今どこで何をやっている？」

「えつ、ジョースターさん？」

さつき、決着はついたって連絡したら、こっちに来るって。

チリ・ペツパーのこともあるから、車じゃ来ないと思うけど」

広瀬康一が最後まで言い切る前に、大きな音が聞こえた。少し離れた地点に何かを着てきたのだ。そちらへ振り向くと、大柄な老人をおぶった巨漢が一人。アスファルトにクレーターを穿っている。

「じよ、承太郎さんッ、ど、どうやって？」

「ジジイに急かされてな……建物飛び越えて最短で来た。」

「やれやれ、10年ぶりの無茶だったぜ」

「建物って、ひとつとびでエエ〜？ ムチャクチャだあ〜」

「7跳びだ。ジジイにケガはさせられないからな」

「承太郎オ、確かにわしじゃよ、急かしたの。」

でもヒドすぎるわいッ、『絶叫マシン』じゃ、こいつはッ」

『G』で潰されるのが好みなら、今度からひとつとびで行くぜ。

それより、ジジイに用がある奴がいるようだが……」

割って入ろうとする前に、巨漢の方がこちらを見た。物静かで理知的な男のようで、さして悪印象は持たなかった。だが、この承太郎こそが、あの音石明がもつとも恐れていた男。おそらくは、名前が知れ渡るほどの百戦錬磨。しかし、今、用があるのはこいつではない。背中につかまっている老人の方だ。

「おじいさん……お前が、ジョセフ・ジョースターか」

「ン？ ああ、そうじゃが。何かな、お嬢さん」

生徒会との関係について、問い詰めるはずだった。今、本人をまさに目の前にしているのに。聞くべき内容が飛んでいった。出てくるのは、ただ『文句』だけだ。

「いや、黙っちまわれると困るんじゃが。思うままに言ってみるといいんじゃよ」

「なぜ、こんなところに来て来た」

「……。なんじゃって?」

「なぜ、日本くんだりまで来て殺し屋に狙われた。」

私の仲間が巻き込まれた。今、そこで死のうとしている」

お前のせいだ。お前のせいだ。お前の。」

そこから先は、壊れたロボットか何かのように、同じ単語を延々と繰り返すだけになった。感じなかった、否、見ないふりをしていた無力感が、言葉をきっかけに押し寄せた。立っていられなくなり、その場にうずくまる。

「ま、麻子ッ!」

華の手を振りほどいた沙織が駆け寄って来た。ちよつとして気がつく。痛いほどきつく抱きしめられている。

「大丈夫だから。優花里ちゃんは、私達を置いていたりしないってば」

背中をなでてくる沙織の背後で、『4号戦車』のハッチが音を立てて閉じた。東方仗助が、無傷の優花里を引つ張り出して、表に出てきていた。下唇を歯で噛んだまま、自由にならない足を引きずってゆっくりと降りてくる。優花里の姿を見たみほが、安心したように微笑んで東方仗助に近づくが。

「東方くん、優花里さんは無事……」

「息をしてねえ」

優花里を上にも、自身は下になる形で『4号戦車』から転げ落ちた東方仗助は、うめくように言った。

「心臓も動かねえし、瞳孔が開いちまってる。

何よりもよおおー、なんか、わかっちゃもうんだよ。

こいつから煙みてーに何か抜け出していくのがよおー

間に合わなかった……こいつは、もう」

「嘘、だよ。優花里さん、どう見ても無傷だよ？

なんでもなおすクレイジー・ダイヤモンドだよ。

なら、すぐにでも目を覚ますよ」

「オメーで、納得するんだよ西住。

それだけだぜ。オレに言えんのはよおー

そして、すまねえ。

オレがチリ・ペツパーの野郎に時間をかけすぎたばっかりにこうなった。

オメーに30秒の妥協をさせた、このオレの責任だ」

みほが、半笑いのままプルプルと震え出す。東方仗助が優花里を安置した所に、駆け

寄っていく。

「ど、どうでもいいよおー、責任、なんて。優花里さんさえ無事なら。

ほら、優花里さん、起きて。これから戦車を修理するんだよ？

疲れてるからダメ、なんて言わないよね優花里さん。

ねえ、ホントに寝こけちゃってるの？

こここの所、居残り練習ばかりだったから」

目を閉じたまま反応しない優花里に、一方的に話しかけ続けるみほ。そしてもう、みほの言葉が『彼女』の耳に届くことは、もう無いのだろう。周囲が騒がしくなってきた。他チームのメンバーも全員、戦車から降りてきたようだ。全員が一樣に理解したのだ。今回の事件がどういう結末を辿ったか。麻子の全身を支配する無力感も、今や『真実』の圧力に変わっている。

「なあ、承太郎」

「どうするというんだ、ジジイ。」

もう、俺に出来ることは何もない。なくなっちゃったぜ」

「お前に出来なくて、わしに出来ること、あるんじゃないよ。まだ。」

ただ、多分死ぬからのオオー、それだけは断っておかんと」

「多分……なんだと？」

老人、ジョセフ・ジョースターが承太郎の背から飛び降り、一人、歩き始めた。行き先は、秋山優花里の亡骸の元であるようだ。今更、何をやるというのか。人を生き返す

超能力を持つている？

だとしたら、全員揃って私達をバカにしている。死に別れた無力に泣く私は何なのだ。奴ら自身も、終わってしまった生命は戻せないと確かに言っていたはずなのに。

「何しに来たんスカ、ジョースターさん。」

「こっちはよおー、取り込み中だぜ……」

「まだ取れる手があるんじゃないよ、仗助。わしにだけ出来ることが」

「ハーミット・パープルは『検索』するスタンドじゃねーつか。」

「救命方法を探すんならよー、あんた遅すぎだぜ。今更つてやつだぜ」

「仗助、わしはお」

「ひっこんでなよジョースターさん。」

「これ以上ヒトのこと引つ掻き回したらよおー、

しまいにはプツツンするぜ」

東方仗助が示した態度は、予想外の拒絶。どうやら、ジョセフ・ジョースターのボディーガードやら何やらの『雇われ』ではなく、複雑な関係があるようだ。どうでもいいことだが。みほは未だに半笑いで震えながら、優花里の亡骸に話しかけている。この場では、東方仗助に賛成する。この老人には、さっさといなくなつてほしい。

『人間の偉大さは恐怖に耐える誇り高き姿にある』

わしの、古い戦友が言っておったんじやがのオ。

この子は、まさにそれじやよ。

こんなところで死ぬ子じやあないわい」

帝政ローマの史家、プルタルコス言葉だな。

他チームの中から、そう解説する声が聞こえた。あれは確か歴史オタク4人組のチームで、しかもアレはカエサルとか名乗っていた奇人。お前達も空気を読め、と麻子は言いたかったが、すぐ忘れることにした。東方仗助が、静かにキレかかっている。

「つまりねー能書きをタレに來たのかい、くそじじい」

「仗助。わしはおそらく死ぬ。」

お前の母さんに、よろしく言っておいてくれんかの」

「は？ おい、何だよイキナリ」

「わしに、お前の父親である資格はなかった。

十五年も放っておいて、今更姿を現して、すまなかつたよ。

忘れる、わしのことなんか。母さんと友達を大切に」

なるほど、ジョセフ・ジョースターは東方仗助の父親であるらしい。そして、十五年間も放っておき続けたらしい。複雑な関係にもなるだろう。しかし、ジョセフ・ジョースターは何を言っているのか。これではまるで遺言だ。何をしようというのだ。

「人から又聞き、聞きつカジリのブツツケ本番じゃが、やってやるわい。

思い出せ。わが友、最期の波紋……あの感触を」

コオオオオオオオオ……

老人の喉から呼吸音が響く。深く、そして速い。戦車のエンジンがうなりを上げているかのように力強くもあり、やがて、老人の全身から微弱な光が見え始めた。

「まさか！ よせ！ ジジイ！ 仗助ッ！ 止めるッ！」

「止めるなよ承太郎！ わしのせいで死ぬはずのない子が死ぬんじや！」

このくらいせんとなアア、帳尻が合わんわいッ！」

老人の全身からほとぼしる光が際限なく強力になっていく。ジョセフ・ジョースター自身が瞬間的に若返っているように見えるのは、果たして幻覚か。

「深仙脈疾走（ディーパス・オーバードライブ）ッ!!」

ジョセフ・ジョースターが優花里の手をとった。溢れる光の全てが優花里に流れ込んでいく。

「じつ、承太郎さん！ こいつア一体何やってんスカーッツ」

『波紋』だ。『仙道』と言った方が通りがいいか……

呼吸法で引き出した自分の『生命エネルギー』を分け与えているのだ」

『生命エネルギー』イイイ？ この光ってるの全部ツスカ？」

「おそらくジジイは『生命エネルギー』のありったけを

秋山優花里に注ぎ込もうとしている。

それでもなければ『呼び戻せない』と踏んだからだろうな」

東方丈助が承太郎に質問を飛ばしている最中も、光は溢れ続ける。全員が、そこから目を離せなかった。どれだけそうしていただろうか。やがて光が収まると、何事もなかったかのような街中の風景が戻る。数秒間。誰一人動けない。時間が止まった世界などがあるというなら、これだろう。沙織も、麻子を抱きしめたまま首だけで優花里の方を向き、固まっている。優花里の一番近くにいたみほは、真正面で起こった謎現象に対応できず、これまた固まっている。華の方もチラリと見てみる。こちらは自分と同じで、場が動くのを静かに待っているらしい。『どうしていいのかわからない』これが本音なのも自分と同じであると見た。もう一度、みほの様子を見ようと視線を戻すと、そこで優花里の身体がピクリと動いた。少し動いたと思つたら、上半身をサツと起こし、いっぱいいっぱい背伸びをしてみせる。

「ん、んううう。なんだか、かなしい夢を見たような……」

あれツ、ここは？　なんか囲まれてるし。

西住どのー、一体どうしましたー？」

優花里が、いつものように元気に動き、しゃべっている。が、やはり誰も動けない。

さつきまでの優花里が『死んでいた』ことさえ受け止めきれない中で、いきなりこんな『奇跡の生還』、しかもオカルト的なやつを見せられても、説得力がイマイチどころかいマサンだ。

「ジジイッ！」

空条承太郎が最初に動いた。動いて、ジョセフ・ジョースターを抱きとめた。ジョセフ・ジョースターは、色を失っていた。比喩ではない。全身の皮膚から、髪の毛から、ことごとく真つ白に漂白されている。人形のように無機質に見える。そして、動かない。場は、騒然となった。

To Be Continued ⇒

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（9）

虹村億泰（にじむら おくやす）は、決して油断などしなかった。

「まっ……マジかよ、ジヨースターさんよおー」

だが、それにしても無理というものがあつたというだけだった。老人がブツ倒れた。そいつはダチのオヤジさんだ。たまたま事件に巻き込まれた見ず知らずの少女を生き返すために、自分の生命を光に変えて捧げてしまった。そのために倒れた。黙って見てなど、いられるわけではない。

（オレが行つても何もできねーけどよおー

離れて見てるダケなんてよおー、ありえねえーぜツ）

だがもちろん、足元でポコポコにノされた音石明のことも忘れていない。一度、出し抜かれて殺されかかれば、バカでも用心はするものだ。そして、その用心は、ココの生徒会からステに受け取っているのだ。

（戦車道に使うとかいうガンジヨーなロープか……

コイツで縛りやあ逃げられねーな）

戦車に近づけてはならない。それは重々わかつている。だから、周りに電線も何もな

いここに、縛って放り出していけばいい。兄、虹村形兆（にじむら けいちよう）の敵に手加減なんぞ必要なかった。力いっぱい、ギチギチに縛り上げる。背骨が沿って、頭と足の裏がくつつきそうな勢いで。

「おががががッ！ ヒッ、ひげえッ」

「てめーはしばらくヨガでもやってなよおー音石ッ」

電気ショックよりも身体にやあいだろうぜえ〜」

今、コイツにかまっているヒマはない。蹴りを一発かましてから、億泰はジョセフの元に走った。近づけば近づくほど、億泰の頬にも冷や汗が浮いた。ジョセフの皮膚に色がない。髪の毛も、白髪どころの騒ぎではない無色。生命があるとはとても思えない有様だと、無理矢理にわからされてしまう。

「ふっ、ふざけんじゃねエーツスよ、ジョースターさん。

あんた何しに来たんツスカ？」

承太郎が抱きかかえているジョセフに、仗助がつかみかかる。スガリつこうにも、スガリつくり方がわからない。億泰の目には、そんな風に見えた。

「オレの親父は立派な男でした。立派な最期でした、ツッーのかよ。

うれしいもんかよ。ふざけんじゃねえよ」

ジョセフの肩をつかむ手が、ぶるぶると震えていた。これは多分、どこにも持ってい

きような怒りなのだろう。

「オレにはよおーッ あんたが親父だつー実感すらもねえーんだよ……」

なのに、こんなもん見せられてよおーッ

どうすりやいいんだよッ、サツパリわかんねえよッ!

「『お父さん』と、呼んでやれ」

仗助の背中から、おずおずと呼びかけた奴がいた。大洗女子学園の、ヘアバンドをした釣り目のチビジャリ女だ。確か、麻子とか呼ばれていたか。

「……なんだよ、ヤブから棒によおーッ」

「『お父さん』と呼んでやれ。でないと、後悔する」

「何様だよ、あんた」

「何様でもいい。呼んでやれ! まだ息があるうちに」

ワケ知り顔でオセツカイを焼きに来た顔ではなかった。自分自身の身に起こったことであるかのように、チビジャリ女は仗助に対してしている。一步も引く気はないようだ。仗助をにらんでいる。そして億泰の見えるところ、仗助は次第に押されつつあった。このまま押し切られてしまった方がいい。億泰もそう思う。頭が悪くては、ジヨセフが一番喜ぶだろう言葉くらいしか思いつかないのだ。

「仗助よおおーッ、」

『親父』って呼んでやりやあいだろうがよおお〜」

「億泰。何やってんだよ」

「オレ、頭悪いからよおー、

おめーの『わだかまり』つつーヤツをどうすりやいいのかは、わからねー。

でもよお〜、『親父』って呼んでやるだけでよおー、

ちげエーんだよ！ ゼンツゼンちげエーツ

たとえ聞こえてなくてもよおおー、ジョースターさんには伝わるかもなあ〜」

億泰に、理屈はサツパリわからない。だからこそ、心に思ったことを言う。

「億泰よお……」

「仗助エエエ〜ツ……」

仗助と、ガンをつけるようなならみ合いになってしまった。もちろん、億泰にも引く

気はさらさららない。先ほどまでの『秋山』同様、時間がないのだ。仗助にも、ジョセフ

にも。沈黙を保っていた承太郎が、そこへ割って入る。

「待て。二人とも」

「止めねえで下さいよ承太郎さん。オレはオカシイことなんか言っつてねえーぜツ」

「その通りだ、億泰。ジジイの生命は、俺が必ず拾うがな……」

だが、それとは別にだ。この音が何か、わかるか」

言われてみて耳をすまます。車の音がいくつか聞こえる。それと、サイレン。今まで固唾を呑んで見守っていた康一が、目を大きく見開いた。ほぼ同時に、戦車道の隊長をやつてる、西住みほとかいうのが慌て出す。

「承太郎さん、け、警察だッ！ パトカーが何台も来ているッ」
「ば、パトカー？ それって」

数秒と立たず、パトカーが今までの戦場に殺到してきた。見えるだけで6台はいる。

「警察ですッ！ 戦車が暴れていると通報がありました！」

「犯人はギターリスト風の男だと、匿名の通報を受けています」

「動かないで下さい、皆さんは参考人です」

降りてきた警官達に取り囲まれ、たちまち身動きがとれなくなった。遅まきながら、西住みほが慌てた理由が、億泰にもわかった。パトカーという『電源』が、大挙してやってきてしまった！

「億泰。仗助。生徒会から借りていた『ケータイ』は持っているか？」
「モチのロンツスよ。これっス」

仗助がポケットから『ケータイ』を取り出す。生徒会のホンワカした方、小山柚子から借り受けたものだ。億泰も、同じようにポケットに手をつ突っ込む。生徒会のムスツとした方、河嶋桃から借り受けた『ケータイ』がそこにあるはずだった。今回、音石明が

出てくるタイミングに合わせて攻撃ができたのも、この『ケータイ』あつてこそ。仗助がポケットの途中でこっそり『ワン切り』したのを億泰が確認して攻撃に移ったのだ。コレだけの便利で高そうなアイテム、億泰は失くすはずがないと思っていた。

「……どうした、億泰」

「ねエ……ねエよ、ドコにもッ！ ドコにやつちまったあッ」

「やれやれだぜ」

承太郎がぼやくと同時に、誰かの悲鳴が聞こえた。目をやると、パトカーが一台、遠くに離れていくではないか。そして、そこにいるべき奴がいない。代わりに警官が二人、ケイレンしながらひっくり返っている！

さすがに、何がどうなったかを億泰も理解した。

「や、ヤロオオ……音石ッ！」

『『ケータイ』をかすめ取ったようだな。億泰、お前から……』

まあいい。どのみち奴は逃げられん」

「どうしてですか？ 電気のある所に行かれちゃいますよッ」

ダチを殺されかかった西住みほは、承太郎に食つてかかるように聞くが、承太郎の態度はやはり変わらない。時として憎たらしくなるほどにクールな男なのだ。

『『チリ・ペッパー』は、本体である音石明自身を電流に変えることは出来ない。』

出来るんだったら、ジジイを恐れて殺しに来る理由が最初からない。

日本中どこへなりともあつという間に逃げちまえるからな……」

「あッ、納得……」

納得したのは康一だったが、すぐに思い出したように声を張り上げる。

「でも、だからって！　ここで逃がす理由にならないぞッ！

すぐに追わないと！」

「追うとも。この俺がな……だから康一くん、仗助、億泰。

その間、ジジイを頼むぜ。病院に連れていってくれ」

「クッ、わかったぜえ承太郎さん。音石のヤロオをぶつちめてくださいよ」

承太郎なら、最強のスタープラチナなら問題ない。音石の余命は風前の灯だ。億泰も

また、そう信じたのでジョセフの左肩を受け取った。右肩はすでに仗助が持っている。

「西住どの、なんとなくわかりましたよ状況。

38tを使わせてください。

皆さん生命の恩人です。力になりたいんですッ」

「意識、ハッキリしてるね……うん、私も同じ気持ちだよ、優花里さん。

東方くん、それと、虹村くんだったよね？

「ジョースターさんと一緒に、あそこの戦車に乗って。広瀬くんも」

「すまねえ」

「やりたいからやるだけだよ。急いで」

「……アツ、勝手に動かないで下さい！ 事情聴取するんですよ」

全員で戦車を目指すところを警察が止めてくる。彼らも仕事だから当然なのだろうが。沙織とかいうフワフワロングの女が、何か取り出し、警察の手に押し付けた。生徒手帳のようだった。

「私達は大洗女子学園戦車道！ 逃げも隠れもしないから！」

それと、この男の人たちのことは生徒会に聞けばわかるから！

後で呼び出しでも何でも応じるから、今は後にして下さい！」

警察があっつけに取られているところに、秋山と、沙織と麻子に、オシトヤカナヤマト ナデシコ（まだ名前を聞いてない）が、次から次に生徒手帳を押し付けていく。西住だけは、生徒手帳を取り出したところを仗助に止められた。

「病院でよく、身分を保証するモンを誰一人持ってねーのはマズイぜ、西住」

「あ、うん」

戦車道は彼女達だけではない。他に十数人いた奴らが続けて警察に殺到する。話を聞くなら自分達からにしろと言っているようだ。その間に、38tとかいう戦車に全員よじ登る。秋山優花里も手を貸して、ジョセフを戦車の上に押し上げていた。自分が彼

に生命を救われたこともわかつていようで、いたわりを持ってジョセフの身体を扱っていることがわかる一方、微妙にそらしている視線が罪悪感を物語っているようだ。いきなり戦車を使えと申し出てきたのも、その所を逃れたい気持ちもあるのだろう。そこに、振り向きもしないまま、仗助が唐突に彼女を呼ぶ。

「秋山さんよおー」

「あつ、えつ、私ですかあ？」

「これからどうなるうが、生命が助かったことをよ、引け目になんか思うんじやあねーぞ。」

「このクソジジイは『好きでやった』んだからな」

「あう……」

「ただし！ 次、生命を粗末にしてみる。そんな時は、オレがてめーを殺すぜ」

「うっ。はい、キモに命じますッ」

秋山の兵隊じみた返事に、やっぱり振り向かないまま頷いた仗助は、戦車のハッチから中に入り込み、ジョセフを注意深く受け取った。そしてそのまま近くの席に座らせる。多分、大砲を発射する席だ。続いて全員、なだれ込むように乗り込んでハッチを閉める。

「うわーっ狭い！ 何この満員電車！ しかもオトコまみれ」

「M3リーを借りた方が良かったですねぇ武部どの。イマサラだけど」

入りきらないので、仗助はジョセフの下に敷かれる形で席に座った。運転手はチビジャリ女こと、麻子であるらしい。コイツの邪魔はできないので、コイツの周りだけはスペースがとつてある。億泰は車内の左半分、後ろ側で壁を背にして、正面から『子泣きジジイ』か何かのように抱きつく康一を抱える。康一のさらに前には西住がいて、康一は億泰と西住でサンドイッチになっている。そこまでして西住がそこにいたがるのは、本来の『車長席』が、『砲手』の席であるからだそうだ。ちようど、仗助とジョセフがそこに座っているので、せめてその真後ろということらしい。向かい側では、西住以外の女ども3人がギッシリ詰まった。

『全員乗る』つて選択をコイツでした時点でよオー、すでに間違いだったんだろうがな。

時間がねえ、行ってくれ。運転手さんよ」

「わかった、まかせろ。荒っぽくなる。『お父さん』を離すなよ」

「離さねーよ。後ろの奴らがコツチに倒れてきたらクレイジー・ダイヤモンドで押さえるからよ。」

オメーは全力で病院に行ってくれよ」

「よくわからん『力』だな。まかせろ。行くぞ」

麻子がエンジンをふかし、このモンスターマシンをスムーズに加速させる。それを見

て億泰は不覚にも『チヨットうらやましいぜ』と思ってしまったが、仗助からわずかに聞こえた言葉が、今はそれを消し去った。

「おふくろを悲しませたらよー、ゆるさねえぜ。親父よ……」

To Be Continued ⇒

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（10）

虹村億泰（にじむら おくやす）は、戦車に乗って問題なく病院に到着した。

（ちよつとばかしシエイクされて、

康一のヤツが女どもにもミックチャにされたけどよおー）

まあ、そんなことは最初から問題ではない。たつた今、ジョセフは担架に乗せられて病室に運ばれていった。当然、仗助はその後についていこうとしたが、そこに連絡が入った。仗助の持っている『柚子ケータイ』に、承太郎から、『ケータイ』で話してもいい待合室まで全員で戻ると、仗助はすぐに承太郎へ折り返す。

「何スって？ 音石が逃げ切った？」

全員の顔色が、サツと変わった。座つて一息ついていた康一も、足音を立てて立った。そして、しばらく相槌をうっていた仗助が『ケータイ』を切る。

「どういふことだ、仗助エゝツ」

「わからねえ。承太郎さんが言うにはよお〜」

『パトカーを乗り捨てた所から、忽然と姿を消した』、

『本体自身が電流になって逃げたとしか思えない』、らしいんだがよ」

「力を隠してやがったのか、ヤロオ〜」

「い、いや！ 違うと思うよ億泰くん……スタンドは成長する！」

ぼくのエコーズ Act. 2 みたいに！

やつは成長したんだよ、この土壇場でッ」

「あ、あのっ……」

男三人が殺気立っている中に、秋山がおそろるおそろる手を上げた。三人の視線が一気に向いた瞬間、腰が目に見えて引けてしまったが。

「すみませんッ、その」

「無理すんな、ゆっくり話しなよ」

「はい……『チリ・ペッパー』は、電気を操っていて、

物体を電気に変えて持ち運べる。

でも、操っている『音石明』自身を電気に変えることはできない。

コレ、合ってます？」

「ああ、合ってるぜ」

「でも、今回で成長したから、『音石明』自身も電気になって、

電気が通ればどこにでも行けるようになった……

コレも、合ってます？」

「合ってるぜく、こいつはヤバイぜ実際よおー。」

承太郎さんの言う通り、日本全国どこにでも一瞬で逃げられちゃう」

「ち、違います！ 日本どころか、『世界』ですッ」

「『世界』ッ？」

秋山優花里の言いたいことは、ここかららしい。次第にどもりが抜けてきた。

「ウチ、お父さんに頼んでインターネット回線を引いてもらってます。

だからわかるんです。

インターネットは『ワールドワイドウェブ』なんですよッ、

世界中どこのホームページにでもつながるッ」

「その、よおく、『インターネット』が、どうした？」

「インターネットは『電気信号』です！

電話回線をそのまま使ってる『テレホ』ってやつもあるんですよお！」

「なっ……」

絶句した仗助の後を、康一が引き継ぐ。

「やばい……想像を絶して、やばいぞッ！

いまだき、『ウインドウズ』とか何とかで、

『パソコン通信』なんかどこでもやっているッ！

『ネット回線』がつかっている所すべてに、音石自身が一瞬で逃げられるんだったら……

逃走経路の追跡だとか、先回りだなんて不可能だッ！

ジョースターさんの『ハーミット・パール』も役に立たないッ！」

億泰は、ひとまず『パソコン』があれば世界中どこにでも『チリ・ペツパー』と音石明が一瞬にして現れるのだと理解した。確かにこいつはヤバすぎる。そして今、ここで何が一番ヤバいかと言えば。

「おい、つまり、それだとよぉ……こうなるよな？」

病院なんか、間違いなく『パソコン』が入ってて情報を通信してるぜ。

『レッド・ホット・チリペツパー』は、

ジョセフ・ジョースターをいつでも殺せる状態にある』

「いいえ。ジョースターさんは安全ですよ。」

考えられる限り、学園艦が一番安全です」

ズツコケかかる仗助。億泰は話についていくことをあきらめて結論待ちである。

「なんでだよ、矛盾してねえか。」

お前んちに『インターネット回線』があつてよ、それがヤバいんだろ」

「学園艦は『艦』ですから。」

電線とかネット回線は、陸と直接つながってません。

だから、インターネットの通信には『人工衛星』が中継に入ります。

で、学園艦と『人工衛星』の間でやりとりされる信号は『電波』なんですよ。

『チリ・ペッパー』が『電波』にならない限り、学園艦は安全つてことです。

ジョースターさんを学園艦から絶対に出さないことですよ。それで守れます」

「なるほど……筋が通ってる、ぜ。キレツキレだなオメーよお」

「あつ、いえ。恐縮です」

少しテレテ、うつむきながら小さく笑う秋山。しかし、億泰は気になった。ムズカ

シー話はよくわからなかったが。

「ちよつと待てよ、仗助に秋山よォー。

音石のヤロオがもうトonzラこいて、

どっか行つちまったみてーに話してるけどよお、

スグ戻ってきてジョースターさん殺すつてのは、ねえーのか？」

「あの、私の考え、言ってもいいかな。虹村くん」

「お、おう。西住つつつたよな……言ってみろよ」

「コホン、と小さく咳払いの真似事をしてから、西住は考えを披露してみる。

「まず、虹村くんの言つたみたいなのをする可能性は低いと思う。」

戦いに負けてボロボロな上に、承太郎さんに追われてて

新しい作戦の仕込みなんかも出来るわけがない。

こんな状態で懲りずに再戦をしかけても、

負けて倒される以外の未来はないよ。私が音石明ならそう思う」

「おう、だから逃げて、力を蓄えるつつーのかあ?」

「うん。私でもそうする。でも」

「でも?」

「戦力をわずかでも削ぐために『暗殺』の機会を伺うくらいなら、

やる価値はあると思うかな。

このとき一番狙いやすいのは、やっぱりジョースターさん……」

西住の話は、それ以上続かなかった。病院の奥から破壊音。さつき、ジョセフが運ばれていった先のあたりから。全員が振り向く。銃声らしきものまで聞こえた。

「皆さん、まさか、これはッ」

「まさか、だろうぜ華さんよおー、

『チリ・ペツパー』の野郎しかいねえー」

ヤマトナデシコの名前は華と言うらしい。華は、少し目を閉じると、鼻先をわずかにヒクつかせた。においを嗅いでいるようだ。

「起こったのは破壊だけのようですね。」

人が焼けた臭いだとか、血の臭いはしません」

「におい、つて、嗅いだけでわかんのかよ？ こっからよーく」

「グレート！ 戦車道にはスゲーー奴しかいねえくぜ」

「ただ、病院には強いにおいが多くって……」

参考程度ですね。急いだからいいと思います」

非戦闘員がついていくつもりはないらしく、華は他の戦車道一同と一緒に

引き返すような動きを見せる。それが賢明だと億泰も思い、仗助を追おうとする。しかし、今度はまさにこの場所で、異常な事態が発生した。

「ブッ！ うぐう！」

秋山の額や腕がいきなり弾けて出血が始まった！

まるで、殴られたり潰されたりしたかのように。

「ゆっ、優花里さーんッ！」

「み、見えなかった。秋山さんが攻撃された瞬間が！」

全然、まったく！ 見えなかったぞッ！

ぼくのエコーズは結構早い方なのに、それでも見えない攻撃なんて」

待合室を飛び出そうとしていた仗助が、ひとつ跳びで戻ってきた。すかさずクレイ

ジー・ダイヤモンドで秋山をなおす。

「何をされやがった、秋山ッ」

「わ、わかりません。いきなり身体に衝撃が走って……ぐぶええッ！」

今度は血を吐いた。見ていてわかる。目に見えない何かに殴られた衝撃を受けている。だが、至近距離にいる仗助に、まったく何も影響がないのだ。すぐになおしながら、仗助は当然の疑問を口にした。

「なんで、秋山だけが攻撃を受けてるんだ？」

「た、玉美（たまみ）さんみたいな、

ハマツたら攻撃が始まるタイプのスタンドに襲われているとかッ」

「音石の仲間か。ありえねえ！」

「だったら最初からそいつと一緒に襲ってくるぜ」

「じよっ、仗助よオ！」

思い当たったらステに声を上げている。億泰は、やはり、思ったことをそのまま口に出すのみだ。

「オレにはよオ、秋山のそのやられ方。

スタンド『が』やられてるように見えるぜえー」

「……ああ、だろうな。」

問題は、どういうスタンド『に』やられてるかっつーことだがよ」
「違エよ仗助ッ！」

やられてんのは秋山『の』スタンドだっつってんだよッ、ボゲッ！」

二秒くらい黙られたのは不本意だった。仗助と康一が、そろって『えっ!?!』とリアクションしてきたのがさらにムカついた。そんなマヌケなやり取りも、ここまでだった。待合室の扉を突き破って、チリ・ペツパーが現れたのだ！

「ヤロオ、チリ・ペツパー！」

「時間切れか。やっぱり反省が足りてねえな、オレはよ……」

可能なら、ジョセフ・ジョースターだけでも

殺そうと思つて病院に先回りして待つたがな。

まさか、もうスタンドが発現するとは……

ことごとく邪魔しやがるなあー、秋山優花里よ」

チリ・ペツパーに視線を向けられた秋山は、ダメージから立ち直りきつてはいないものの、それでも毅然と向き直った。

「わかりません……なんの、話ですか？」

「そうかい、無意識だったのか。まあいい。」

お前達から、オレも学ばせてもらったよ。

面白おかしく生きようにも、乗り越えるべき壁つつー

『試練』は襲ってくるって事をなあー

お前達がその『試練』だというのなら、

ブツ壊して先に進ませてもらうぜ」

「させねえんだよオーツ！」

億泰はザ・ハンドを出し、空間をけずってチリ・ペツパーを引き寄せようとしたが、向こうもそんな動きは読んでいたようで、近くのコンセントに入り込んで見えなくなつた。

「オレはこれから力を蓄える。

力を蓄え終わったなら、招待状を送ってやるぜ。お前達によオー

その時がラスト・ライブだ。お前達か、もしくはオレのな……」

それつきり、声も聞こえなくなる。確信する億泰。今度こそ完全に逃げ切られた！

「く、くそ……ッ、二度もおちよくられちまった。

完全にオレ一人のせいで負けちまったじゃねーかよオオ〜」

立膝をつく。地面を殴る。そうせずにはいられなかった。億泰は一度、杜王町の草原地帯でチリ・ペツパーと立会い、最後の最後に逆転負けをしている。それを今、またここで繰り返してしまった。しかも今度は、全員が協力して追い詰めた後で、だ。全員の

頑張りを無にしたこの結果は、あまりにもミジメ。億泰の精神はしたたかに叩きのめされた。気づかかってか、後ろから華が声をかけてきてくれたが。女の子に声をかけてもらえてウレシイなどと思える状態では、やはりない。

「虹村さん。その雪辱、私にも分けてください。」

次こそは倒しましょう。あの音石明を」

「……き、気持ちだけ、受け取つとくぜえ。」

一般人がよオ、戦うべきじゃあねえーぜ。あんなのとよオ。

それに、よお〜〜」

「それに？」

「音石明は、兄貴のカタキだからよ。」

こいつを誰かにゆずつちまうなんてのはよオ、無理つてもんだぜ」

「そうですか」

それきり華は、何も言つてこなかった。そうやって後ろにずっと立っていられると、悔しがつているのもだんだんミットモナクなってくる。華はスタンド使いではない。さつき目の前で起こったことも、透明な何かが暴れまわっているとか見えなかっただろうのに。何を言つていたのかも、まったく聞こえなかっただろうのに。仕方なく億泰は立った。そこには、康一もいた。

「ぼくに『戦うな』なんて、まさか言わないよね。億泰くん」
「言わねーよ。タフな野郎だぜ、オメーはよ！」

その後、仗助はジョセフの病室に向かい、その晩は泊まることになった。億泰を始めとした残りの面子は、戦車を格納庫に帰すついでに生徒会室へ今回の顛末を報告しに行く。億泰にとっては、ある意味でもっとも気が重い義務だった。生徒会室に入ると、承太郎がすでにいた。誰かが口を開く前に、億泰は足を早めて河嶋桃の前に立ち。そして、頭を下げた。

「すまねえ。『ケータイ』を盗られた。

盗られた上に、音石明を逃がしちゃった。

オレ以外の誰も悪くねえ。オレの責任だ。オレだけの責任だ」

桃は、手を震わせながら、片眼鏡を机に下ろした。ギリギリギリと歯を食いしばり、まぶたもピクピクしている。

「どう、責任を取ってくれるんだ？」

「次こそは倒す。倒して『ケータイ』を取り返してくるぜ」

「アレにはなあー！ーッ！」

両手で思い切り切り机をブツ叩く桃。後ろで何人がたじろいだのを億泰も感じる。

「アレにはなあ、電話番号が入っているんだよ……ウチの電話番号が。」

タウンページを見たら住所が特定できるぞ？

どうしてくれるんだ。私の家族が『チリ・ペツパー』に狙われたら。

電話かける程度の手間で人を殺せる能力なんだろ」

「すまねえ」

「他にも番号は入ってる！ 会長の番号も、柚子の番号もだ。

ふたりとも実家の番号まで入っているぞ。帰省時でも連絡が取れるようにな。

人質候補だぞ、お前のせいで」

「すまねえ」

ひたすらに頭を下げている億泰。こいつの怒りはもつともだ。返す言葉など『すまねえ』しかない。だが、それが桃の怒りにさらに油を注いでいるようだ。桃からすれば、とにかく怒りをぶつけずにはいられないのか。それでも、次の言葉には、億泰も思わずつかみかかりそうになった。

「兄貴のカタキをブツ殺すとか言っておいて、コレとはなッ！

お前の兄貴とやらも、さぞかしマヌ」

だが、最後まで言い切る前に、風船が割れたような音が響いた。いつの間にか近くに来た生徒会長が、桃の頬を張っていた。

「うっ………かつ」

「言わせないよ。河嶋。」

そこから先を口に出したら、サイテーになるよ私達」

「会長、でも、ふ、ウウウツ……」

堰を切ったように泣き出した桃を押しやって、生徒会長が億泰の肩をポンと叩いた。

「謝罪は受け入れたよ。虹村くん。」

その上で、生徒会長として回答します。

気にすんな、コレからもよろしく、以上」

「……あ？ コレからも、って」

「承太郎さんよろしくー」

手を振られた承太郎は小さく嘆息すると、バツ印がいくつかついた学園艦の地図を持って説明を始める。

「音石明は、この大洗女子学園から逃げていった。」

だが、ついでの復讐とばかりに学園艦の動力伝達系を破壊していったようだ。

少なくとも、出航が不可能な程度にはな」

「そ、そんな」

「何てことを……」

「音石明、許せませんッ」

当然、学園艦で生活している女子高生達が大きく反応している。杜王町で生活している億泰にとつては、杜王港の方角に山のような巨艦が鎮座している期間がしばらく長くなるだけの話なのだ。

「ああ、戦車道の試合には影響ないからねー。」

スピードワゴン財団の人たちが、戦車を会場まで送ってくれるってさ」

「スピードワゴン財団。また、おかしなビッグネームが」

チビジャリ……麻子が、不信感もあらわに目を吊り上げた。忘れかけていたが、ジョセフ・ジョースターも不動産王だったと思ひ出す億泰。不信感の払拭は、またも承太郎に丸投げされる。

「スピードワゴン財団は、超常現象を扱う研究部門を持つていてな。」

スタンド使用に関する事件の保障を昔からやっているのだ。

表舞台には出ないがな。俺も、その一員だと考えてくれていい」

「疑っても無益か」

「そういうものだと思って思った方が良さそうだよ、麻子」

麻子の目つきが元に戻り、場も静まったのを見計らい、生徒会長が再び場を仕切る。

「ま、そーいうワケでね。しばらく私達、杜王町の一員になるからさあー。」

コレからもよろしく、つてのはそういうこと。お隣さんになるってことだねー

改めてよろしく、虹村くーん。コレ、お近づきの印の干し芋ね」
「オ、オウよ……」

「雰囲気なんか知ったコトかだよなあーこの人。」

あまり見習いたくないけどスゴいなあー」

康一もすでに干し芋をもらっていた。言われてみて雰囲気を気にしてみると、少し奥で、まだ桃がぐずぐず泣いている。場からフェードアウトしていた小山柚子が、頭をなでて慰めていた。思わず、頭をポリポリと搔いて、億泰はそちらに大股で歩み寄った。

「桃が、ひどいことを言いました。すいません。私からも」

「小山さんよ、そいつはオメーが気にすることじゃあねえーぜ。」

こいつに話すことがあるからよ、ちよつとどいてくれや。

キズつけたりはしねーよ、誓うぜ」

かなり悩みながら、柚子は桃を放し、五歩くらい下がった。入れ替わりに億泰が前に立つ。

「なつ、なんだ。グスツ、お前なんか怖く、なツ、グスツ」

『『お前の兄貴とやらも、さぞかしマヌケだったんだらうよ』、

で合ってるかよ？ オメーが言いかけたセリフのことだぜ、コラ」

「うううツ、グズツ、ふうう……うあああ〜」

泣き方がひどくなった。柚子の目つきが鋭くなり、桃を抱きしめて億泰を視線で威嚇する。反応でわかった。セリフはこれで合っている。そのセリフを左手で握り締め、鳩尾あたりに音を立てて叩き込んだ。

「刻んだぜ、そのセリフ。オレは決して忘れねえー」

「何が、キズつけない、ですか。帰ってください」

「そして、二度とテメーと同じセリフを言わせねえー」

「これが『責任』だ。オレの『責任』の取り方だ」

『帰れ』と言われては仕方ないので踵を返す。不良はツライ。キズつけるつもりがなくとも、相手が勝手にビビッてしまう。なら、やめろよ、と言われればゴモットモだが、生き様はカンタンに変わらないのだ。

「この答えで納得いかねーならよおー」

いつでも難癖つけに来な。受けて立ってやるぜえー」

ポケットに手を突っ込み、億泰は足早に生徒会室を出て行った。女が泣いているのは、やっぱりいたたまれない。しかしコレでは、まるで逃げたみたいでカッコ悪かったか。ふとそう思ったのは、大洗女子学園の校庭から、杜王町の夕焼け空を見上げた時だった。いつも通りのオレンジ色の空だった。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
⇒

音石明が大洗女子学園に忍び込んだようです（11）

秋山優花里（あきやま ゆかり）は、乗り合いのバスを待っていた。

（ドコ、なんででしょうか？ ココ）

車などが異様に古い。建物の形を見る限り、イタリアのように見える。向こうに見えるのが『コロッセオ』なら、ここはローマか。それも、ファシストが幅を利かせていた頃。第二次世界大戦前夜の景色に見える。戦車が大好きで色々集めていると、歴史にも多少詳しくはなる。いろんな白黒写真で見たことのある景色に、目の前が重なるのだ。周りを行きかう人はあまり見えないが、生活感だけは漂ってくる。そんな奇妙な町並みを見回していると、カフェから唐突に声をかけられた。

「二人かい、シニョリーナ」

優花里は、自分に声をかけられていると認識しなかった。他の誰かを呼んだのだと思つて周囲の観察を続けていると、同じ声が、少し弱つたように苦笑した。

「無視をするとは、思つたよりも高嶺の花じゃあないか。

じらすテクニックを心得ているのかい？」

振り向いてから気づく。想像を絶する美男だ。戦車にばかり首ツタケの優花里でさ

えもそう思う。どこかフテくされたような目つきが悪さも、この男にとつてはプラスにしか働いていない。イタリア人だろうか？

明らかに日本人とは分野が違う。体温を持った、やわらかい彫刻とでも言おうか！

優花里は、トンデモなくテンパツた。

「……え、ええッ？ まさか、まさかの私ですかあ？

ナンパなんですかあーっ？」

「何が『まさか』かわからないな。かわいらしい人。

きみは自分の美しさをよく知っておくべきだな。

このぼくが教えてあげるよ。手取り足取り」

「え、あ、そのオ、あ、あ、う」

優花里の頭脳は超信地旋回しまくってオーバーヒートした。イギリスのサウナ戦車、カヴェナンターもかくやの有様だった。

「と、言いたいところなんだがなあゝゝゝ、オレは人を待っている！

人を待たせることを『へ』とも思わねえくそつたれ野郎をな！」

「え、そ、そうですね……じゃあ何の用だったんです？」

いきなり変わった雰囲気で、優花里も正気には戻ったが、今のままではおちよくられた感じしかない。少しジト目になる。

「見たところ、きみはここまでバスに乗り付けてやってきたようだ。

ぼくは、きみと同じバスに乗って来るはずの男を待っていてね……

だが、どうやら『また』スツポカされたようだな」

「『また』って。スツポカしの常習犯ですかあ？」

そんなヒトのトモダチ、よく続けられますねー」

「まったくだね！ イイカゲンが呼吸して歩いているような男だぜッ！

いちいち迎えに来るオレもオレだが、

その都度、『こっちは来んなボケ！』とも思っているよ」

「男の友情ってやつですかあー？ 複雑ですねえ」

形無しだ、とばかりに男はクツクツと笑った。その声に、深い絆を優花里は感じた。悪態をつきながらも、彼はずっと待ち続けるのだろう。いつ来るとも知れない『くそつたれ野郎』を。

「ん、バスが来たな。珍しい。『戻り』のバスじゃないか」

「『戻り』？ どこ行きですか？ アンツイオとか、シシリーですか？」

「ドコに戻ろうと言うんだ、きみは。どれ！

読みにくいな、ありゃあ。なんだって……『大洗女子学園』」

聞いた途端、ガツン、と頭を殴られたような衝撃が走った。今の今までなぜか忘れて

いた、自分の帰る場所の名前。帰らない私は、一体どこに行くつもりだったのか。ここから、どこ行きのバスに乗ろうとしていたのだ？

「どうしたんだい、シニョリーナ」

「すみません。『大洗女子学園』……帰らないと」

「それがいいさ。帰りなよ、きみの家へ。」

待っている人がたくさんいるんだろう？」

「はいッ。お待たせなんて、できませんよッ」

思わず陸軍式の敬礼をした優花里に、男はブツと吹き出してから、バスを指差して行くように促した。どうやら、そう長い間は待つてくれないらしい。

「じゃあ、さよならです。アリーヴェ・デルチ、でしたっけ」

「アリーヴェ・デルチ。」

次に会うとすればきつと、ずっと未来だろうよ！」

……………

「……という、夢だったんです！」

「アハハ、笑えない。シャレになってないよおー優花里さん」

「間一髪で三途の川を免れたようにしか聞こえないんですが」

昨日の事件からすでに丸一日が経過し、今日は日曜日。さすがに戦車道の練習は出来

ず、丸一日のお休みとなっている。今は74（セブンティフォー）アイスに、あんこうチームの全員が集まっていた。話題は、優花里の臨死体験。その間に見ていた夢。「ムムム、なんか色気づいてる。

あの戦車にしかキョーミない優花里ちゃんが。

イケメンイタリア人にお持ち帰りされかけの夢を見るなんて」

「沙織と一緒にしてやるな」

「でも麻子おー、『次に会うとすればきつと、ずっと未来』だなんて！」

これはきつと王子さまだつて思っちやうワケよ、優花里ちゃんのー」

きやいきやい騒ぐ沙織を見て、やっぱりこの人、ブレないなと思う優花里。確かにナンパされてドギマギしたし、それでいて嫌悪感も感じなかったが。それでも、王子さまだけはありえない。

「多分ですけど、あの人。ずっと過去の人だと思います。

それと、あの人待っていたのは……ジョースターさんですよ。根拠ないですけど」

全員のテンションが目に見えて下がった。ジョセフ・ジョースターの名前は、今はあまり思い出したくないのもわかる。あの老人は今、昏睡状態でこの学園艦に留まっているのだ。麻子などは、当初はほとんど敵扱いしていたものの、優花里のために文字通り生命を差し出してしまった彼と、彼の息子であるという東方仗助が、病院に向かう戦車

の中で『おふくろを悲しませるな』と呼びかけ続けているのを見て、もう、厄介者扱いするような気持ちには失せ果ててしまったらしい。今もジョセフの名を聞いて、疫病神呼ばわりした罪悪感が復活したのか、麻子の視線がスツと下に降りた。

「そそ、そーいえぼッ！」

優花里ちゃんも『スタンド』ってやつが使えるんだよね？ どういうヤツだったの？

イキナリ漫画の主人公みたくなっちゃってえー、もー」

そんな空気を粉みじんに破壊するのは、いつだって沙織である。優花里は、おどけた彼女に心の中で、チョツピリ謝った。

「あ、はい。」

昨日皆さんが帰った後で、西住どのと広瀬どこの、それと承太郎さんに

立ち会ってもらって、色々確かめましたよ」

昨日はたまげた。スタンドのダメメジが本体に帰ってくることを知らなかったら、何がどうなっているのかサツパリわかりようがなかった。そんな状態を放置し続けたら自分は遠からずまた死ぬだろう。なので素直に教えを乞うた。杜王町の面々から隊長であるかのように扱われていた、空条承太郎に。

「カンタンに説明しますね。」

私のスタンドは、ミニチュアの騎兵隊です。全部で7人いますよ。

「というか、今もソコにいます。パフェ、ムサボリ食ってますよコイツら」
 「あつ……」

「優花里ちゃん、パフェふたつもどうするのかと思つたら」

優花里が、メニューなどでどうにか作つた物陰を指差す。みほ以外には、ふたつのパフェが削れて、ひとりでに消滅していくようにしか見えないだろう。

『バクツ、ガツツガツツ、ンマツ、ンマーッ！ ゴクツ』

『司令ツ、甘味モ大事ダガ！ モット油コイ糧食ヲ要求スルゾ！』

バクツ、バクツ、ジャリッ！』

『我ラハ戦士ダ、腹ガ減ツテハ戦エン！ 愚策ダゾツ！ ンガググツ』

『ヒヒーン！ ヒヒーン！ ガリッ、ガリッ、ガリッ』

フルプレートをガチガチに着込んだミニチュアのデフォルメ兵どもがパフェに群がり、どこから持ち出してきたのか、それぞれがスプーンを持って突き崩し、崩した山に顔をつっ込んでいる。特撮ヒーローのようなレンズ状の目をしているからか、痛がる素振りも見せやしない。そして、騎兵なので馬もいる。馬がパフェに顔面から突っ込んで、パフェの中を掘り進んでいる。あまりにも大惨事すぎる光景だ。

「う、うるさーいッ 私が司令官だつていうなら、

無断で冷蔵庫の肉、全滅させないで下さいよーッ

おかげでナマ肉を丸カジリする女子高生にされてしまったッ！

お母さんに本気で心配されたッ！」

「はあ、その、なんというか」

「モノスゴク苦労してゐることはイタイほどわかつた」

華はかける言葉に困り、麻子には本気で同情された。スタンドは見えていないだろうが、やりとりが見えてしまったらしい。

「あはは、でもこの子達なんだよね。」

ジョースターさんを守り抜いたのって」

「ハアー、オホン。はい、西住どの。」

彼らの姿はランス突撃していた頃の騎馬兵ですけど、

実際に使うのは騎兵銃（カービン）ですよ。

承太郎さんも言つてましたけど、ミニチュアでも威力は本物だから、

充分脅威になりますね」

「昨日、私が病院で聞いた銃声は、それだよね」

「はい」

そして、そうでなければ優花里は、昨日あの場所で死んでいただろう。運が良かったのは、まず、戦闘した場所が屋内の閉所であつたこと。次に、スタンドがミニチュアサ

イズで、かつ複数体であったこと。最後に、攻撃手段が飛び道具で、しかも全員バラバラに攻撃を仕掛けたこと。だから『チリ・ペッパー』は場当たりのな迎撃に終始した。敵の全貌が見えないからだ。そうしているうちに時間切れになったのだろう。これが空条承太郎の推測だった。もちろん、もつとも運が良かったのは、なんでもなおせる東方仗助が傍にいたことだった。

「彼らが言うには『私の命令に忠実に従った』ってことらしいんですけど」

「優花里さん、思い当たるようなこと、ないの？」

「うーん、無いでもないんですよ。」

『音石が逃げ切った』って、電話が来たときですけど。

ジョースターさんが病室に運ばれていったばっかりでしたから。

『私が守る方法はないのか』って、グルグル考え続けてました」

「それが『無意識』にスタンドを動かしたんだよ。」

ジョースターさんは優花里さんが守った。すごいよ」

「うん、そう言ってもらえると……えへへ、ウレシイです」

ウレシイ感覚で決まりが悪く、まとまりの悪いクセツ毛を押さえながら身じろぎしてしまう。このムズカユさをスツと素直に受け入れられれば、もつとカツコいい自分になれる気がする。華と沙織がそんな自分を見て微笑んでいるが、そこに麻子が軽く手を上

げた。

「他に、条件や制約はないか？」

場合によつては一緒に戦うんだ。わからないとツライ」

「あ、そうですね。それは」

「その前に名前を教えてください。」

『スタンド』の名前です。とても大切なことですよ」

割り込みをかけたことを麻子に会釈で謝りながら、華が言う。これはもう決まっているので、困ることは何も無い。

『ムーンライダーズ』です。彼ら自身がそう名乗ってます」

『ムーンライダーズ』……

『月騎士団』ですか。風雅な、良い名前だと思います」

華の言葉に、今度は素直にならずいた。こうなつたからには、名前負けするような情けないスタンド使いになるつもりはない。もちろん最優先は戦車道だが、音石明とは、これで戦つてみせる。正直、『チリ・ペッパー』と正面切つて戦うのは自殺行為な能力なのだが、そこは戦術と腕。空条承太郎に今後も指導を仰いでみるし、あの東方仗助にもまだまだ話を聞いてみたい。というか、東方仗助には、スタンド云々を抜きにしても『ゼツタイに言わなければならないことがある』！

「優花里さん、ちよつと……これは？」

頭の中で決意表明をしていたら、みほに肩をボンボン叩かれる。いつになく乱暴で、非常事態が起きたと判断して振り返ると。

『ウグ、ウググ……』

『毒デ、一網打尽トハ！ 騎士道ツテモンガネエノカア〜ツ』

『敵ダ、恐ルベキ敵ガイタ』

『我ラハステニ、敵ノ術中ダツタア〜』

自分のスタンド、ムーンライダーズ一同が腹を押さえてひっくり返っている。穏やかではない台詞を連発しながら。

「毒？ 毒って何ですか？ 何を言ってるんですかあー？」

『毒ヲ盛ラレタノダ、司令ツ！ 我ラノ糧食ニ、毒ガアツタ！』

「毒って、昨日のナマ肉以来、何も食べてないじゃないですかあ。」

「このパフェに毒があるなんて、ありえませんか」

「あ、あの一、優花里さん。ちよつと聞いてみるんだけど」

さすがは西住どの、何か可能性に思い当たったのか。表情を少し明るくしながら、何を言うのかと注目するが、彼女の顔色は悪く、その目には不安が渦巻いている。一体、どんな恐るべきことが。

「優花里さん、もしかして軍の備品とか集めてない？」

「え？ はい、集めてますけど。払い下げのジャケットとか、背囊とかですね。」

第二次大戦中とか、カナリ年季入ったコレクションもあるんですよ」

思わず自慢げに話してしまうのは、実際、誰かに自慢したい気持ちがあつたから。しかし、今のみほには、それは脇に置いておくべき話であつたようである。

「その中にレーションは、あつたりする？」

「当然ですねえ。手に入れるのに苦労したのが……あ？」

「買ったのは、コレクション用だよな？」

食べ物としては、とつくにダメになつてるよね？」

みほが何を言っているのか、優花里は理解した。理解したくなかつた。

おそろおそろ、うなされながら転がっているスタンドの方に聞き耳を立てる。

『頑丈な包装ガサレテルカラ、

毒ナンカ入ルワケガナイツテ言ツテタダロ、オマエツ』

『ソウ言エバ、スツパカツタリ！ 苦カツタリ！

変ナ味バカリダツタヨナア』

そして優花里は思い出す。スタンドの鉄則を。

「スタンドのダメージは……」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
⇒

Inter Inter Mission 『女子高生とお茶しよう!』

東方仗助（ひがしかた じょうすけ）は、鼻息の荒い友人をチョット冷めた目で見ていた。

「わが世の春が来たってヤツだぜえ〜」

女の口にお茶サソツてもらえるなんてよお〜」

昨日の敗北で落ち込んでいたように見えたが、翌朝に合流してみたらコレである。虹村億泰は鼻を繰り返してフンスツとさせながら、ガツツポーズからのボディープローを延々と繰り返していた。ズバズバ歩きながら、右に、左に拳を繰り返してウカレているコイツのそばを歩くのは、正直ハズかしい。

「億泰くんたらあ〜、

そんなガツツイタ気分丸出しじゃあ、みんな逃げちやうよ!」

「おおう、そうかあ? そうだな、気イ引き締めて行くぜえー。

オレ不良だもんね」

康一に何度目とも知れない忠告をもらっても、ウヒョルン、ウヒョルンと全身から擬

音が立ち上っている。仗助も、待合室で目を覚ましてから、まだ借りてる『柚子ケータイ』經由で康一から話を聞いたばかりなのだが。

……ちなみに、ジョセフの容態は安定した。昏睡状態だが、すぐ死ぬことはない、らしい。

さておき。昨日、一緒に戦った大洗女子学園戦車道チームの一員が。あの、スゴイ嗅覚を持った純和風美人の『華さん』が、億泰を追って声をかけたらしい。そして、お茶しませんかと誘ってきたのだという。話を聞く限り、億泰個人が誘われたワケではない。それは億泰自身もわかっていて、仗助、康一も、だからこそついてきている。対する向こう側の面子は、西住、秋山、沙織、麻子、それと華。昨日あったことを考えれば、用件などは最初から明らかだろうに。

「浮かれまくってるトコ悪いけどよおー億泰、もう一度言っておくぜ」

「おいおい耳にタコだぜえー、わかってるつつーんだよ」

「あいつらが興味持ってるのは、

主にオレ達の『スタンド』だっことを忘れんな。

イタイタしいコトになるぜえーっ

勘違いヤローのままだとよおーっ

だが、億泰を諷めていた康一が、仗助へ控えめに手を挙げた。

「予防線、ヒキすぎるのもどうかと思うんだよなあ〜」

とりあえず、お話してみるって感じでいかない？」

「オレはそのつもりだぜ、康一。」

ただ表情筋がユルみすぎてヤバイヤツがいるだけだろーがよ。

約一名！」

仗助の返事にウソはない。というより個人的には、この康一にこそ縁に恵まれて欲しいと思う。想い始めたら一直線すぎるサイコ女、山岸由花子が恋愛経験の最初で最後ではカナシい。あんな経験をさせられては、女性というやつに『トラウマ』を持たされても不思議ではない。ここらでフツーに平和な女の子に出会えれば、などと思ったが。

(考えてみりゃーよおー、

『そうなった』ら『そうなった』で、その女の生命が超ヤベエーツスよ)

山岸由花子が黙っているわけがなかった。康一は『特大の地雷』だ。『即死トラップ』だ。

「そーいう仗助くんも、さつきから百面相してるように見えるけど？」

「悩み多き年頃なんだよ、仗助くんはアアーロー」

待ち合わせ場所についてしまった。74(セブンティフォー)アイス。ここだ、間違いない。杜王町ではなじみのないチエーンだった。入り口に踏み込んでいくと、近く

にいた女子高生達が逃げる、逃げる。改造制服の、どう見ても不良なイケツイ男が二人。アイツらにしてみれば、

『ゴジラとキングギドラがタッグを組んで町を荒らしに来た!』

コレものだろう。

(グレート。わかつちやいたがへこむぜエー)

ウチの高校なら女どもも声かけちゃーくれるけどよオオー

地元人で顔が知れてるからだよなあー、ヤツパリ)

億泰はそんなことにおかまいなしだった。自動ドアを開いて左右を見回し、ユルんだ顔がパアアツと笑顔になる。

「いよおおー、華さん」

いつものダミ声に向かった先と、笑顔の向いた先を追うと、いた。西住に、沙織、華と、麻子。秋山がいないようだ。それはともかく、歯をキラリとさせた億泰のスマイルに、西住と沙織は、どつちかというドン引きしている。麻子は無表情で、一瞬だけ視線をやると、アイスをツツくのに戻った。そして、名指しされた華本人はというと。

「こんにちは、虹村さん」

クスツと笑ってから、やわらかに手を振ってきた。腹の中に何か秘めている風もない。

女どもの手前、手早く説教を済ませようとしていた仗助だったが、そこで奥の扉が開いた。真上には『お手洗い』マーク。ゲツソリやつれたボーイツシユな女が這い出てくる。何か見覚えがある。思わず二度見して気がついた。秋山だ。康一も、思わずビビツて指差した。

「あ、秋山さんッ」

「ホレ見ろ、便所だったじゃねーか！ サエてるぜオレ」

「そりやもういい。だがよ、顔色がヒデエーぜ。ただごとじゃねえ。」

……おいつ、しつかりしろ。何かあつたのか、秋山よおーッ」

昨日からこつち、死にかけてばかりいる秋山だ。それが今日もまた死ぬような顔をしている。康一、億泰ともども駆け寄り、倒れそうな身体を支えて起こす。やはり、全身に力がない。こちらを見て、なんとか口を開く。

「東方、どの……それに、虹村どのに、広瀬どの」

「アイサツなんか気にしてんじやあねえーぜ、こんな時によおーッ

何があつたか、それを言え！」

「スタ、ンドに……やられ、て」

「スタンド？ 音石の仲間でも来たっていうの？ 昨日の今日で？」

「西住ッ 全員でこつちに来い！」

スタンド攻撃だぜツ 攻撃を受けているぜツ」

店内の注目を集めてしまっているが、気にしている場合ではない。敵はおそらく、病気か何かにさせるスタンド。敵スタンドらしきものが見えない以上、おそろしく遠くから攻撃されているか、何かの条件を満たした瞬間に攻撃される、このどちらかだ!

だが、呼びかけられた西住の反応は、にぶい。

「東方くん、あの、その、ね?」

「グズグズしてんじやあねエーッスよ!

秋山は『スタンドにやられた』と言った。

「こいつは敵スタンドを見ているぜツ!」

「た、確かに見てるよね。見てるよ、私も」

「……は? 何、言ってるんすか?」

西住は、心底気マズそうにテーブルの上を指差した。メニューや広告などを重ねて巧妙に何か、隠している。気づいた西住がそれも取っ払うと、見えた。

『ド、毒ガ……ヨーヤク抜ケテキタアア〜』

『騎士道ガ毒ゴトキニ負ケルカツテンダヨ!』

『シカシ危機一髪ダツタ。シバラク戦士ノ休息ダアア〜』

グダグダに、ひっくり返った小子ども。それと馬。康一が、そいつらを見て、知って

「ちよつとちよつと!」

それ以上、優花里ちゃんを笑いものにするんだったら考えがあるんだけど!」

マジメな顔で食つてかかった沙織は、渡りに船だった。これでお気楽な空気を一時中断できる。

「すまねえー、もう笑わねえーぜ。

イカシた男のやることじゃあねえーよ……な、億泰?」

「お、おう。カツコ悪イイー事しちまつたぜえ〜。

悪かったな、秋山よお」

「ゴメンナサイ、秋山さん」

「あ、いえ、気にしないで下さい。

ううう、でもハズカシイ。公開処刑ですよコレ」

猛烈な腹痛でトイレに駆け込み、出てくるなり不良二人に囲まれて大騒ぎされ、おまけに友達に詳細を語られて大爆笑される。改めて追つてみると、ひどい。あまりにひどすぎる。

「とはいえ、よおー、そのスタンドどもの自分勝手。

早いところどうにかしねーとよ、マズイぜ」

「なるんでしようか、どうにか」

「してたぜ！ オレの兄貴はよオオー。

歩兵60人、戦車7台、ヘリコが4機のバッド・カンパニー！

完ツ壁に率いてたぜえ〜」

秋山の弱気に、億泰としては発破をかけたつもりだろう。これに比べれば騎兵の7人、軽いだろうと言いたかつたのだろう。しかし秋山は、ゼンツゼン違うところに食いついた。

「戦車!? 戦車を使うスタンドなんですかッ」

「お、おう。大砲の威力はヤバかつたぜえ〜」

「『どこ』の戦車ですかあ？」

戦闘ヘリが一緒にいるってことは、多分、第二世代MBT以降ですよね」

「第二、M……ハア？」

億泰の頭からクエスチョンマークが飛び出したまま止まらない。さらに秋山がたたみかけようとしているのを、仗助は見かねて、割って入る。

「オレが見たところよおー、

M1エイブラムスとかいうアメリカ野郎の戦車だつたぜ」

「つと言ふことは！ 一緒にいたヘリってのはアパッチですかあ？」

「グレート。ドンピシャリだぜ」

「極悪中隊（バッド・カンパニー）……」

秋山の目は、キラッキラと輝いていた。戦闘ヘリの援護を受けた、戦車と歩兵の中隊が、敵陣を蹂躪し突き進んでいく。そんな映像が秋山の瞳の中に移りこんでいる。覗き込めば、多分、見えるだろう。そんな気がした。そんな様子を億泰は気まずそうに見ている。そして言った。

「し、失望させる前に言っとくけどよお、死んでるぜ、俺の兄貴！」

「えっ？」

「チリ・ペツパーの野郎に殺されちまったよ。」

「会わせてやったりはよオオ、できねえぜ」

チヨコミントアイスをヤケクソ気味にかき込む億泰。もつとも、生きていたとしても、あの虹村形兆がこの兵器大好きっ子の秋山に好意的に接する姿が思いつかないのが。というか、戦車道とか大嫌いだらう、あの兄貴。音石明の持論ではないが、実際に兵器のスタンドで人殺しを働いた形兆だからこそ、競技に使われる戦車なんてモノは、欺瞞に満ちたシロモノとしか感じないんじゃないか。ふと、そんな物思いにふけった。仗助だったが、秋山の方はそれほどヘコまなかった。

「理由が増えましたね。音石明をブチのめす理由が」

「いや、おめーにはあんまり関係ねーけどよオ」

「大有りですよー虹村どの。そんなスバラしいスタンドが戦う姿！

永遠に見ることが出来なくされたんですからねッ、私にとつて！」

「あ、アリガトウよ……ついてけねー」

億泰がドン引きする姿を見ることになろうとは思わなかった仗助である。ここまで相槌しか打たなかった麻子が、ぼそりと指摘した。

「戦うのは付き合おうが、そんな理由に巻き込むのはやめろ」

「わかってますよう冷泉どの」

「いいんじゃないでしょうか。」

優花里さんには、優花里さんらしくいて欲しいです」

「五十鈴どのッ……ありがとうございます」

華……フルネームは五十鈴華（いすず はな）らしい……がそう言つて、ニコニコ笑つ

ているのを見た億泰は、秋山の肩をポスツと叩いた。

「秋山よオ、あんまし仲間にメーワクかけんじゃあねーぜ」

「い、いきなり何ですかあーブシツケにッ」

少しイラつとした顔で秋山が億泰に抗議しようとする。ここで、こらえきれなくなつたように、西住が笑いだした。

「クスッ、あはッ、あははははは」

「みぼりん?」

「私ね、もつと殺伐とするかって思ってたよ。」

昨日の今日で、あんな戦いの後だったんだもん。

もつと恐ろしくなる敵に備えなきやって、私自身が思ってた」

一旦話を切って、西住は華に向き直り、頭を下げた。

「華さん、ありがとう。『お茶しよう』って言い出ししてくれて。」

東方くんと、虹村くんと、広瀬くんを誘ってくれて。」

私、あとちよつとで間違うところだった。」

東方くん達を『戦力』に数えて、『仲間』に数えないところだった」

なるほど、少しだが背景が見えた。華は、今回集まる名目をあえて『お茶』にするこ
とで、仗助を始めとしたスタンド使いの面々を『同盟』ではなく、『仲間』として引き入
れようとしたわけだ。そのためには、敵に対策をとるため、などという考えは邪魔でし
かないから。

「違いますよ、みほさん。私にも思惑があったんです。」

今回出会った皆さんは、揃いも揃って殿方ばかり。

信頼できるかを知るためには、あえて近づくべきだと思っただんです。」

上から目線で人様を試した私の方が、よほど道を外しています。それに」

「それに？」

「私、戦車道だけではなく、もつと他にもアクティブでいたくて。

古式ゆかしい不良のお二方とは、是非、お知り合いになりたかったんです。

不良と言つても、根性の曲がった方じゃあないのは、

昨日でよくわかつていましたしね」

「へ、古式ゆかしい……」

仗助、へこむ。髪型が古すぎると言われたも同然だったが、華の言葉にバカにする響きは一切なかったため、プツンは来ない。ゆえにわかった。こいつは本気で言っている。億泰に声をかけたのも、ただそれだけが理由だった。

「東方くん。虹村くんに、広瀬くんもだけど」

西住が、今度はこちらを向いた。緊張と萎縮が蘇りつつある。勇気のいることを、言おうとしているらしい。

「包み隠さずに言います。私、あなた達が、まだ怖いです。

私と優花里さんが、同じように得体の知れない何かに

変わってしまったことも、怖くてたまらないです」

「そうかよ、それで？」

「でも、わかりました。あなた達と私達は、同じ日常を過ごせます。

なら、私と優花里さんも同じです。

変わってしまったその先も、きつと同じ人間だって思えたから。

『チリ・ペツパー』みたいな、どうしようもないのもいるけど。

ですから、その……」

仗助の正面に立った西住が、おずおずと手を差し出してきた。

「友達に、なつてくれませんか？」

そして、この手を拒む理由は、どこをどう探しても見当たらなかった。仗助は西住の手をガシツと掴むと、いささか乱暴にシエイクした。こうも正面からかしまつて言われると、テレくさい。

「よ、よろしく頼むツス……それとよおー」

明らかにテレをごまかすだけの行為ではあったが、持ったままの西住の手を上を持ち上げて、瞬間的に手を離し。互いの手の平を、音を立てて打ち鳴らした。ハイタツチというやつだ。

「アツ、痛ツ、イタタツ」

「ダチつつーならよおー、こうするもんだぜーッ！」

昨日、『4号戦車』のキャタピラを狙い撃ちしたオメーの命令、

グレートだったぜ、西住ツ」

「ううっ……ひ、東方くんこそ、

まさかあんな方法で戦車を倒すなんて思わなかったよ！

参考にするのは多分無理だけど、あの発想、スゴかったツ」

「次、『チリ・ペツパー』の野郎と戦ったらよオオー、

グウの音も出ねーくらいボコボコにブチのめしてやろうぜ」

「ボコボコはイヤ。バツキバキにブチのめそうー！」

「どう違うのかわからねえーが！」

おめーの方がえげつねえーぜ西住よおー」

手を離して、周囲を見てみる。妙に感激しているのが三人。康一はわかる。あいつは感動場面に弱いから。というよりも、感動場面に居合わせることに憧れを持っていると思われる。秋山もわかる。多分、康一と似たり寄ったり。しかし、あの沙織の異様な浮かれぶりは何だ。両頬に手を当てて、一体何をもだえているのだ。麻子に尻を引っぱたかれて正気に戻ったが。西住にちらりと視線をやると、苦笑だけを返された。

「つつーわけでよ、もうちつとお茶しようぜ。」

アイスとかパフェのお代わり、注文しろよな。

オゴりは期待すんじゃあねーぜ、あくまで各自だ」

二万五千円もする『バリー』のクツを買ったばかりで金がない。こんなところでツマ

ラナイ見栄を張る仗助ではないのだ。予算としては、あと700円くらいか。財布の中身をのぞいていたら、いきなり秋山が立ち上がってこつちに来た。

「ああッ、思い出しましたよ東方どのッ！」

ゼツタイに言わなきやならないこと、あるんでしたッ」

「なんだよ、オイッ、何だっつーんだよッ」

ズカズカと突っ込んできた秋山は、仗助の胸元にピシッと人差し指を突きつけた。

「東方どの。『4号戦車』の天蓋に取り付いたとき、

アナタはご自身を『アベンジャー』に例えましたね？」

ソレはいいんですッ、私もシビレると思いますッ」

「そッ、それが、何だよ？」

「でも、東方どの……『アベンジャー』は……『アベンジャー』はッ！」

『アベンジャー』は、バルカン砲ではありませんッ！」

「なッ、何スってエエー……」

思わずノリで乗っかってしまったが、コレがそこまでして言うことなのか、イマイチわからない。秋山の顔は大真面目だった。

「そもそもバルカンっていうのはGE社が開発した

ガトリング砲のひとつでしかありません！」

ハナツから別物なんですよお！

『アベンジャー』を……『アベンジャー』の威力を知っていないながら！
こんな間違い、残念すぎるッ！

不肖、秋山優花里。そんなアナタにA-110の資料を……」

(メンドクセエエー……何コイツツ チキシヨオオオオオ……)

To Be Continued ⇒

西住みほ —— この後、優花里をなだめてチョット静かにさせた。

東方仗助 —— 逃げようかとも思ったが、みほが優花里を
なだめてくれたので、ゲームの話に軌道修正。

『METAL GEAR SOLID』の話で

盛り上がった。帰宅後、無断外泊のトガで

母の朋子にシメられた。

秋山優花里 —— 暴走してしまったのを恥じつつ、

『METALGEAR SOLID』に

出てくるM1エイブラムスが、クレイモア地雷で速度が落ちることに不満をもらした。

虹村億泰

—— 自炊生活について話し込み、アバウトな料理をしていることに改めて気づく。しかし改めるつもりはなかった。ウマければそれでいいのだ。

武部沙織

—— 自炊生活の話から料理の話題に食いつき、『肉じゃがは男が好む料理なのか?』について聞き込む。また、仗助と優花里がゲームの話題で盛り上がっていたため、翌日学校で

『MADGEAR SOLID』と検索。

広瀬康一

—— 主に、億泰へのツッコミばかりをやっていた。沙織に料理の好みを聞き込まれる。

五十鈴華

—— 自炊生活の話聞き、男の料理に興味を示す。しかし億泰のアバウトな料理はマネできないと思った。この後、帰宅するまでにアイスを一1個平らげた。

冷泉麻子

——

一人モクモクとアイスを食べ続け、

たまに沙織にツツコミを入れた。

翌日学校で、沙織に他人のフリをした。

透明な赤ちゃんです！（1）

西住みほ（にしずみ みほ）は、あんこうチームの皆と杜王駅を目指していた。

「たまには息も抜かないとねえ〜」

隣でゴキゲンにしているのは今回の仕掛け人、武部沙織である。音石明の事件から、今日で三日が経ち、戦車道の練習も再開している。ムチャクチャに破壊された4号戦車は東方仗助のクレイジーダイヤモンドで直してもらったため、部分的にはむしろ以前より調子がいいくらいだ。全国大会が迫る今、あまり遊んでいるヒマもないのだが、あんな大事件に遭遇してしまったのもあり、士気の低下がやや否めない状態なのも事実。そこで、沙織は町に出ることを提案。杜王町には大して馴染みもないが、事件で知り合った彼らに是非、案内してもらおう、というわけだった。

「電話したとき、チョット焦ってたけど。」

もしかして意識されちゃったかなあ〜」

「聞き飽きた。広瀬康一だろう？」

「そもそもお前は意識してるのか」

「ソコはまだワカンない。」

でも、将来性ならコレ以上ないサイッコーと思うんだよねー彼ッ

今回の沙織にはチョットピリ迷惑かけられた。彼女いわく『包囲作戦』だとかで、彼女は広瀬康一に電話をし、華には虹村億泰に電話をさせ、そして、みほには東方仗助に電話をさせたのだった。無理そうであれば優花里にお願いする、とのことではあったが、先方の親御さん相手に戦車トークを暴走させる姿を想像してしまったみほは、内心でため息をつきつつも二つ返事で引き受けてしまった。ちなみに、東方仗助の母は、話し方が明るくもやや攻撃的で、ちよつと怖かった。思い出すだけで、電話の声が脳内に再生される。

『チョット聞くけど！』

ウチの仗助が無断外泊したのって、もしかしてアナタのトコ？』

いいえ、と三回も連呼してしまった。事情を知っているだけに、うかつに口に出せない。東方仗助が代わってからは心底ホツと安心したものだ。

『案内？ 構わねえーけど。億泰に康一もか……』

とは言つてもよおー、サ店とゲーセン、

あとはウマイレストランくらいしか案内できねえーツスよ』

マジメに対応してくれたので、みほもみほで希望は伝えた。具体的にはぬいぐるみを扱ってるトコロ。あんまし期待すんなよな、とは言っていたが、それなりに楽しみだつ

たりする。

「ニーッ ナンダカンダ言いながら！

みほりんも楽しそうじゃないのー」

ニンマリしていたのを見られた。鎖骨のあたりを指でツンツンされる。

「なんだつたらあー、途中で別行動でも構わないんだよ。みほりんツ」

冷やかすように言ってはくるが、正直、そんなこと言われてもなー、である。この『恋愛脳』さえどうにかなれば、沙織もパーフェクトなのだろうが。苦笑いでごまかしつつも、みほは別のことを思い出し、気にしていた。電話で、ついとばかりに聞いたのだ。自分のスタンドについて。

『そーだな。スタンドの発現はキツカケだからよ。

わかんねーものは仕方ねえーぜ。

だが、オレと康一は見てたぜ。おめーからスタンドの気配つつーか、

エネルギーが立ち上ったのをよおー。

そいつが音石への怒りでもハッキリと形にならねえーつつーんなら……

なんか、引き金があるはずだぜ。おめーだけの引き金だ。

そいつを探すんだ』

自分の手を見る。重なって見えるような『何か』は無いし、感覚も変わらない。優花

里のように遠くに行つてしまふケースも考えられるが、なんにせよ確信は得られなかつた。そこで、ふと優花里に目をやって、意識を今に戻す。何やら慌てていたからだ。

「い、いない……点呼！ もう一度点呼しますよお！」

『イチ！』

『ニー！』

『サン！』

『ゴー！』

『ロク！』

『シチ！』

「いない！ やつぱり4がいない！」

「どこでハグレたんですかぁー……」

優花里は、みほとはまったく逆のことに悩まされていた。スタンドが発現したのはいいが、本体が知らない間にスタンドがどこかに行つてしまふ。ために、こうしてマメに点呼をとらざるを得なくなつてしまつた。あの空条承太郎が言うには、スタンドに慣れておらず、制御しきれれていないから、とのことだが。嘘か真か、承太郎のスタンド、スタープラチナは発現したての頃、暴力事件やら窃盗やらを繰り返しまくつたそうで、それに比べればかなりマシだとも言われてしまつた。

『そいつらは君だ。君自身であることを認識しろ。

そして手足を動かすように、疑問を持たずに動かすのだ。信じる、と言い換えてもいいかもしれん。

そうすれば、ムーンライダーズは君のものとなるはずだ』

真摯なアドバイスではあったが、それをすぐものにできるかと言うと話は別。優花里も、何かキツカケを必要としているのかも知れなかった。

「すみません、皆さん。私のスタンドがまたハグレました。

先に行つて下さい。探してきます」

「待つて優花里ちゃん。まだ時間に余裕あるし、付き合おうよ。

スタンド見えないけど」

「ですが困りますね、これは……優花里さんの負担が大きすぎます」

「これではそのうち授業もサボるな」

みほのみならず、全員、優花里を心配している。スタンドが行方不明になるたび、優花里自身が回収に向くしかない。ムーンライダーズ達に探させると、探しに行つた彼ら自身が行方不明になるからだ。これではもう、常にかくれんぼのオニを強要されているに等しい。放つておくことは絶対にできない。知らないところで敵スタンドに遭遇して勝手に戦いを始めれば、優花里が突然ケガをするのだ。

『授業中、いきなり血を吹き出してガツクリと机に伏せ、救急車で運ばれる』
こんなことがホントに起こりかねない。

「皆さん、ありがとうございます。」

ちよつと心当たりを聞いてみますね……

みんな、4の行き先に心当たりはありますか？」

『空腹ヲ訴エテイタナ。』

杜王港ノアタリデ屋台ヲモノ欲シソーニ見テイタゾ！」

「空腹？ ご飯は、他人丼をみんなで……おかげで一食分食費が多い」

『2ト5ノセイダツ！ 4ヲ押シノケテ近ツケナカツタジャネーカツ』

『ソレハダナ、新兵ニハ飯ノ量ヲアエテ少ナク！』

足りナイ分ハ現地調達トイウ教エガアツテダナ』

優花里が眉をピクピクさせていた。この三日間、こんな表情ばかりをしている。

「よくわかりました。全員、晩御飯ヌキ。2と5は明日の朝御飯もヌキ」

『エエ〜〜〜ッ』

「黙つて見ていたなら同罪です。騎馬隊の仲間なんでしょう？」

大事にできないとは言わせませんからねッ。

もう一度聞きますけどー、杜王港前の屋台ですね？

4の行き先はそこで間違いないですか?」

『杜王港ダト断言ハ出来ナイ。』

ダガ焼き鳥カ、フランクフルトヲ当タレバ見ツカルダロウ。

4ハ肉ヲ欲シガツテイタ」

「無銭飲食ですか、はあ〜〜」

スタンドは一般人には見えないし聞こえない。ゆえにスタンドが勝手に飲み食いをするならば、必然、そうなる。

「みほりん、なんだって?」

「一人だけ、オナカ空かせて何か食べに行っちゃったみたい。」

屋台の、焼き鳥かフランクフルトが怪しいって。

肉を欲しがってたから、だって」

「把握した。すると杜王港前しかないな」

「私達のような『学園艦組』を相手にしてる、あの屋台ですね」

学園艦が寄港すれば、下船してくる学生や関係者を相手にした屋台がやってくる。これは別に杜王町に限った話ではなく、どこでもそうなので皆すぐにわかった。

「戻るなら、私もひとつ買いますね。食べたかったです、牛タン味噌漬けのクシ焼き」
「華、さつき笹カマボコ食べてたんじゃ……いや、何も言うまい」

全員で来た道を引き返す。幸いと言うべきか、華にとつては不幸と言うべきか。杜王港手前の川あたりに来たところで、目的の相手をみほが見つけた。橋の隅っこでへたばっている。

「ど、どうしたの?」

『ハ、腹減ツタ……動ケネエ』

優花里も、すぐに駆け寄ってきた。

「どうしたんですか4、しっかりしてください」

『シ、司令、メシ、飯クレー』

「……? 『何も』食べてないんですかあ?」

今まで、どこに行つてたんです?」

『飯、現地調達シヨート思ツタケド、

宣戦布告モシテネー相手カラ略奪ナンカ出来ナカツタ。

ソナナ事シタラ戦士ジャナクテ盗賊ニナツチマウウウウウ』

馬ともども横倒しになっている4に、優花里の表情が柔らかくなつた。彼らとて、他人を困らせるのに血道を上げてゐるわけではない。優花里の友達であるみほが、それはよくわかっている。なにしろ、彼らは優花里自身なのだから。

「わかりました。事情は聞いてます。昼御飯は改めて出しますよ。」

行軍する必要はないから、私の中に引っ込んで休んで下さいね」

『シ、司令イイ〜』

「ただし、無断で部隊から離れたのも事実ですから。

他のライダーズと同じく晩御飯ヌキですよ! 覚えといて下さい」

『……クスン』

どうやら一件落着だ。しかし、やり取りを見て、みほにも思うところはある。

「優花里さん」

「西住どの、何ですか?」

「その、番号じゃあなくて。名前、つけてあげない?」

このままじゃ、なんだか無理がある気がして」

口に出しては言わないが、まるで刑務所で囚人を扱っているように見えるのだ。懲罰的な台詞ばかり口にする羽目になっているから、なおさら。優花里は別に何も悪くないのだが。提案をされた優花里は、珍しく逡巡する素振りを見せた。

「……はい、実はイイ名前、考え中なんですよう〜」

「そっか。名前がついたら、教えてね」

「名前ですけど、西住どのにチョットお願いがあるかもしれません。

そのときは、相談に乗ってけると助かります」

「相談？ いいよ、いつでも来てほしいな」

話が終わり、よそに視線を向けたフリをして、優花里の様子を伺う。やはり、悩んでいる。スタンドとの付き合い方について。ライダーズ4を回収しながら、物憂げな目をしていた。

「戻る必要は無くなったようだな」

「だって。牛タンはまた今度ね、華」

「迷子が見つかったのなら何よりです。無銭飲食もなかったようですし」

ともあれ、これで元の予定に復帰できる。皆で駅に向かい、イロイロ案内してもらおう。元々、出てきた理由は気晴らしなのだから。自分達あんこうチームだけが出てきたわけではない。例えば、カバさんチームは『仙台城』に行くとか言っていた気がする。歴史大好きなあの人たちなら納得だ。私達も楽しもう。だが、気分を入れ替えた甲斐は、あまりなかった。

「……………ンツ？」

華が、どこかのおいを嗅ぎ始めた。そちらに向かって歩いていくようだ。

「どうしたの、華。そっちは駅じゃあないけど」

「その。『人糞』のにおいです。近くに突然、現れました」

「ジンプン？……………ええと、その。『大きい方』のこと言ってるの？」

「はい。そして、ありません。」

こんなに近くで『したら』、私達に見えていないはずがないんです」

聞き耳だけは立てていた優花里が、華の前に飛び出してきて、かばう姿勢をとる。同時に、ムーンライダーズが全員展開され、方陣を形成した。

「用心しましょう、五十鈴どの。スタンドの攻撃かもしれません」

「そうでしょうね。私もそれを警戒しています。」

目には見えず、においだけがある……正体は、何？」

神経を研ぎ澄ます華の眼は、みほを含めた全員が知っている。見えなくては手の出しようもない。華を守りつつ、ゆらりと歩く華の後に続く。

「これは。においはふたつあるッ！」

片方は移動している……遅い。這いずり回っているように」

「フツーに考えて、『した』方よね、そいつ」

『ウンコをして、這い回る』。もしかしてそいつは小さくないか？」

ド直球で言うことを言った麻子に、沙織は思い切り顔をしかめた。が、何を言おうとしているのかがわかって、表情が驚きに切り替わる。みほにも、わかった。

『赤ちゃん』がいるって、言ってるの？……麻子」

「それも見えないヤツがな。わからない、触って確かめないことには」

その次の瞬間に決定打がきた。

「エウー、ダア……ダア」

言葉になつていない、意味をなしていない声。動物じみてはいるが、絶対に動物のものではない声。確信と同時に、みほは声に向かった。

「き、キケンですよ西住どのツ！ まだ謎だらけなのにツ」

止める優花里の声を、みほは無視する。そのキケンな謎の中から、今の声はしているのだ。放っておけるわけがなかった。四つんばいになり、手を振り回して探す。そして、中指の先つちよに、何か触れた。手の平をあててつかむ。はつきりと形がわかる。抱き上げた。生命の重さが、そこにはある。

「み、みぼりん。もしかして……『いた』の？」

「うん、いたよ。暖かいし、生きてる。」

『透明な赤ちゃん』だよツ」

とんでもないものを発見してしまった。

To Be Continued ⇒

透明な赤ちゃんです！（2）

冷泉麻子（れいぜい まこ）は、またも襲い来た面倒ごとに頭を抱えた。

「状況を整理するぞ」

なんで自分が仕切りに入っているのか。『透明な赤ちゃん』などという、想像なんかするわけがない事態に皆パニックになりかけたからだ。沙織は、ケーサツ呼ぼう、などと言い出すし、華も華で、お母さんを探しましょう、と言い出した。みほと優花里は、ひとまず東方くん（どの）と合流しましょう、と顔を見合わせて言った。

「まず、ここに居るのは『透明な赤ちゃん』だ。」

どんな事情かはさておいて、みほの腕の中に、事実、いる」

みほは腕をゆすりながら、他の面子もウンウンと頷いた。

「沙織、警察を呼んだら、どうなる？」

「あつ……：相手にしてくれるワケ、ない。」

で、でも！ 最後の手段としては、そうするしかないと思うよ」

その通りではあるので、麻子も頷いて返す。話を続ける。今度は華に。

「どうやってお母さんを探す？」

「ええ。手段がありませんね。この透明をどうにかしない限り」

目標は、それでいいと思う。しかしそこに向かう手段がない。華もそれは、わかつてはいたようだ。

「そして、このまま東方達と合流するの？」

「は、はい！ この状況、確実にスタンドの作業じゃあないですかッ」

「うん。それに、地元の人との協力が無いとツライと思う。」

場合によつては、赤ちゃんを預かってもらうことも考えないと……」

赤ちゃんのことを第一に考えているのは、やはりコイツだと思える美点だ。それはいい。だが、致命的な見落としがあることに、西住みほは気づいているのか。麻子は、みほの正面に回つて、目をじつとにらんだ。

「例えば、だ。想像しろ。」

東方の家に『赤ちゃん』を持っていくんだ。お前がだ」

みほは考え込んでいる。ピンと来ていない。先に、沙織が青ざめた。
「死ぬわ、それ。社会的に死ぬ。」

ゼツタイにウワサされるわ、『デキちゃった』って。

しかもあいつら不良ッ ヘンなトコロで信憑性バツグンッ！」

「……えっ、ええ……ッ!？」

ようやく理解したみほが、素っ頓狂な悲鳴を上げる。さすがに、たまったものではないだろう。赤ちゃんを抱えたまま、ワタワタと取り乱しまくっている。

「ちよつと待つて、ナンデそんな……いや、そもそも！」

ムリだよ！ 物理的に不可能だよッ！

出会つて何日だと思つてるのッ？」

「無責任なウワサをする方はそんなこと知らん。

とにかく、その手是最悪だ。それはわかつたな」

みほは、シヨボンと頷いた。だが、優花里の方がまだ納得していない。

「冷泉どの、それはわかりました。

ですけどッ、合流して対策を話し合うのなら、

そこまで危険はないと思うんですがッ」

「集まったところで、出来ることはたかが知れている」

優花里がムツと、不快感を表情に出した。東方達をバカにされたように感じたのだろう。違うのだ。能力の問題ではない。社会的地位の問題だ。

「私の考えを言う。この赤ちゃんは、空条承太郎に丸投げする」

「丸投げつて……」

何か、みほが反対意見を言おうとしたところで、優花里が反応する。こいつは戦車バ

力ではあっても、バカ者ではないのだ。

「何を言っているのかわかりましたよ、冷泉どの。」

スピードワゴン財団を頼るってことですね」

「あつ、問題ほとんど解決する、それ！」

スタンドを知ってるから、ちゃんと相手にもしてくれる」

「お母さんを探すにしても、私達よりもはるかに確実ですね」

自分達が音石明の事件に巻き込まれてから、空条承太郎は学園艦に滞在しており、彼のケータイ番号は戦車道履修者の全員が預かっている。こんな時に頼らずして、どうするのか。優花里も先ほど言っていたが、これは明らかにスタンドの事件だ。向こうとしても、断る理由はないはず。三人が賛同する中、腕の中でダアダア言っている赤ちゃんを見下ろすみほは、罪悪感のような表情を浮かべている。

「赤ちゃんだぞ。私達の手に余る。わかるだろ」

「……うん」

.....

「使えないヤツめ」

麻子は思わず吐き捨てた。承太郎のケータイにかけたところ、結果は留守電。透明な赤ちゃんを拾ったので至急折り返して下さい、とだけ残し、かけ直してくるのを待つし

かなくなってしまうった。

「もしかして、留守電ですかあ?」

「ああ、いつかけ直してくるか、わからん」

「困りましたね」

最短で引渡しに行く目は、これで途絶えた。折り返しが来るまで、どうにか面倒を見なければならぬ。みほが、おずおずと『何も無い』腕の中を差し出してくる。

「この子……ハダカんぼだよ。何か、着せてあげないと」

「それもそうだし、その。ウンチぬぐってあげないとね」

「メンドー見るなら、買い物しなきゃ始まりませんねえ」

財布を取り出しながら、優花里の目つきが少し鋭くなった。

「並行して、私がスタンドの本体を探します。」

見つけ次第トツちめて、『透明化』を解除させれば解決ですからね」

「それこそ東方達と合流してからだな。」

音石以上のヤバイスタンドだったらどうする」

「うッ、確かに」

麻子から見て、こここの所、優花里は少し危うい。スタンドなどという異能をいきなり持たされてしまったがために、負わなくてもいい責任を勝手に感じているフシがある。

来るなら迎え撃つ、くらいでいいだろうに。承太郎の『おじい』……ジョセフ・ジョー
スターのことは、やはり少し恨んでしまう。

「あの、それですけど」

華がおそるおそるといった感じで進み出た。

「承太郎さんは言っていました。スタンドには射程距離があるって。

そうであるなら、『敵』から離れば解除されます。

一度、思い切って遠くに行ってみるのも手かもしれません」

検討に値する話ではある。このまま承太郎と会う見込みが立たない場合であるなら。

「『敵』を刺激するな、それは。」

やるなら戦う準備が整ってからだろうな」

「そう、ですね。今、戦えるのは優花里さんだけです」

「麻子さん、華さん、優花里さん、私、思うんだけど」

さらに、みほが話に割り込んでくる。赤ちゃんは機嫌がいいようで、エヘエへと笑い
声が出していた。

「私ね、この子自身がスタンド使いじゃないかって思うの。

お母さんと離れちゃってさ、この子、不安だよね？

だから、怖い人を近づけないために、

「こうやって透明になってるんじゃないかって」

「なるほどな。ありえる」

みほの説なら、自分達が今、敵スタンドに攻撃されていない理由について説明がつく。『敵』からすれば、『敵』なるものがあるとすれば、今まさに攻撃を邪魔されているのに、その邪魔者に対し攻撃をしないという妙な状態なのだ。敵など最初からいない。ありえる。

「麻子さん。一足先に杜王駅に向かって、

東方くん達に事情の説明、お願いします」

「どうして私が」

「スタンドと戦えるのは優花里さんだけ。

赤ちゃんのはぐれた時に探せるのは華さんだけ。

それと、買い物で事情をごまかしきれるのは沙織さんだけです。

だから、行くのは私か、麻子さんです」

「仕方ない。行こう」

「み、みほりん、サラリとヘビーな役目を……やるけどさあ」

ここで断れば、赤ちゃんの世話が自分の役目になる。面倒くさがる気はないが、どう見てもみほの方が向いている。しかし、東方達もケータイを持ってさえいれば。そう考

えてしまうが、陸では学園艦ほどケータイが普及しきっていないのだ。学園艦では下船時の連絡手段などで事実上の必須アイテムなので、少なくとも学生はみんな持っている。だが陸では、ケータイを忌避する学校が未だ一定数存在するし、持っていない学生も別に珍しくない。東方達は、別に持つ理由のない学生達のうち一人であるということだろう。こういう時は、それが恨めしくなってしまうが。放課後というのもあって、比較的体調がいいのは救いだ。みほ達から離れてツカツカと杜王駅まで足を進めている最中、電話が鳴った。承太郎からの折り返し電話だった。

『透明な赤ん坊、ということだったか』

「はい、透明です。おそらくスタンドです。」

私達の手に負えないと判断しました」

『賢明だな。遅くなつてスマナかったが、俺はどこに行けばいい？』

その赤ん坊を引き取ればいいんだな』

「杜王駅でお願いします。東方くん達と待ち合わせています。」

私以外のあんこうチームも、赤ちゃんの服やオシメを買い次第、

合流します」

『わかった。今すぐ向かおう。三十分後には到着する』

学園艦には当然、下船に伴う手続きもある。それを踏まえると、最短の線を承太郎は

引いてくれたことになる。使えないヤツ呼ばわりは後で取り消すことにして、麻子も足を速める。そして、駅前の噴水広場で、彼らを見つけた。

「お? オメー、麻子じゃねえーか。オメーだけかよ?」

このアホ面は一目見れば忘れるまい。虹村億泰だ。東方仗助に、広瀬康一も、後ろについてきている。くだらないやりとりをしているヒマはないので、本題を提示する。

「スタンド使いに遭った。私だけ先に来た……連絡のためにな」

「スタンドだと? まさか、チリ」

「違う。おそらく無関係だ。」

透明にするスタンドだ。赤ちゃんが透明になっている」

「赤ちゃんンンンンンンン? なんだってそんなコトをよおおーツ」

私を知るか、と吐き捨ててやりたかった。コイツでは話が進まない。後ろの二人の方に視線をチラチラ投げる。東方仗助が、前に出てくれた。

「ソコはわかったけどよおー、他のヤツらは、今何やってんだ?」

「赤ちゃんの服やオシメを買いに行っている。丸裸だったからな。」

これから電話して、赤ちゃんを連れて来させる。

「承太郎さんもここに来る」

「ちよ、チョット待つて、冷泉さん。」

赤ちゃんが攻撃されているの？

それとも、赤ちゃんがスタンド使いなの？」

広瀬康一も、東方仗助に続くように聞いてくる。将来性どうこう、はともかく、頭の回転は速いようだ。

「どっちなのかわからない。

ひとつだけ言えるのは、赤ちゃんは私達の手には負えない。

だから、承太郎さんと呼んだ」

「なるほどな。そりゃ、そうなるツスよねエエ〜。

グレート！ オレでも途方に暮れるぜ」

「ン？ どういうこと？ 仗助くん」

「バカ、康一よおく考えてもみろ！

ジョシコーサーが赤んぼ抱えて悩んでる！

そいつを見てよおく、どういうウワサ想像するよ？

オメーならよおー」

「……た、確かにマズイね。

承太郎さんに助けてもらうべきだなあーっ」

麻子は密かに眉をひそめた。前回の戦いでも見てはいたが。なるほど、こいつらはな

かなかスゴイ。答えを最初に提示したとはいえ、そこにたどり着くまでの過程をほとんど埋めてしまった。

「そういうことだ。今から電話する」

「おう。アソビに行くのは赤んぼ渡してからツスねー」

ケータイを取り出す、電話をかける先は、沙織。時間的に、そろそろ買い物は終わった頃合だと思われる。店の場所はケータイで調べてすぐにわかったし、そんなに遠くもなかった。みほ達から離れる直前に、そこだけは聞いて押さえてある。しかし、なかなか出ない。コール音が10を超えた。留守番電話サービスに應對されてしまう……切る。

「どーしたよ?」

「電話に出てこないだけだ。もう一度かける」

虹村億泰に怪訝な目を投げられてイラツとしつつ、再度、沙織に電話をかける。コール音、8つ目。通じた。これで、全員合流して終わりだ。一件落着の気分で用件を伝えようとしたが、それより先に電話口でまくし立てられた凶報が、一瞬でそれを打ち砕いた。

「何だど? 風紀委員……そど子か? そど子がどうしたッ」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
⇒

透明な赤ちゃんです! (3)

秋山優花里（あきやま ゆかり）は、駅に着くまでが勝負だと思っていた。

（冷泉どのの言う通り、『赤ちゃん』はどうしようもないにしても、ですな）

スタンドの話を抜きにしても、迷子の赤ちゃんである。大人に預ける以外に何ができるといいのか。せめて透明化を解除して、普通の赤ちゃんにしてあげたい気持ちは未だくすぶっているが、自分ひとりで敵の正体を暴き、倒せるなどと考えるのは自惚れだった。空条承太郎にすでに指摘されている。自分のスタンド、ムーンライダーズは防衛力が皆無だ。ミニチュアの兵隊である彼らは、パワーの乗った攻撃を食らえば一撃でバラバラに砕け散ってしまう。それを七回繰り返されればあの世行き。いや、おそらく四回目あたりで肉体の損傷から戦闘不能になる。そして敵の正体を暴こうにも、彼らは勝手なことばかりする。超長い射程距離をフル活用して、勝手にヘンなどころに行く。まずは、これをどうにかしなければ戦いにならないだろう。だから今は、空条承太郎に無事、透明な赤ちゃんを渡すこと。それがゴール。だが、それまでに。敵の襲撃があれば守り抜かなければ。そうなれば、戦えるのはスタンド使いだけ。つまり、戦えるのは自分だけ……

「優花里さん、怖い顔してる」

「……ハッ！ な、ナンですかぁー西住どのッ」

「怖い顔してる、って言ったの。赤ちゃんが不安になっちゃうよ」

不覚だった。考え事に熱中しすぎた。というよりも、スタンドに悩みすぎて思考が引きずられている。大好きで尊敬している西住みほの言葉さえ届かないほどに。

「スミマセン、西住どの。『敵スタンド』がいるとして！

そのときマトモに戦えるかと思うと、不安になりまして」

「私も一緒に戦うよ。忘れてない？」

「私にもスタンドは見えてるっていうこと」

「戦うって、西住どののは、まだ」

「黙っているつもりはないよ。この子をキズつけに来るっていうのなら」

優花里の言葉をさえぎって、みほは言い切った。スタンドの有り無しは無関係に、赤ちゃんを守るためなら戦うと。優花里は自分自身に問うた。西住みほを止めることは出来るのか。出来ないだろう。それはきつと、彼女の『道』を曲げることに。

「それにね、『敵』を倒すのに、

『探すこと』『防ぐこと』『攻撃すること』

全部を一人でやる必要なんかないんだよ？

優花里さんにならわかると思うけど」

「はい。私達がやるべきは『防ぐこと』です。理解していますよ」

「うん。もうひとつ聞くよ。スタンドを倒すにはどうすればいいかな」

「スタンドを倒すか、本体を倒せばいいですけど」

みほが何を言おうとしているか、わかってきた。戦えずとも、スタンドか本体を探すことは出来る。例えるなら、戦車を倒すのに戦車を持つてくる必要はないということ。『歩兵』は『戦車』に対してまったくの無力だろうか？

そんなことはない。地雷や無反動砲など『戦車』に効く武器を持っていれば別だし、あるいは後方に控えている自走砲に砲撃を要請し、何もさせずに『戦車』を倒してしまうかもしれない。

「西住どの、もしかして『スタンドか本体を探す』、

って言ってますかあ？」

「そうだよ。」

本体はもちろんだけど、スタンドだって探せない訳じゃあない。

沙織さんや華さん、麻子さんにだって、

スタンドが使われた『痕跡』くらいはわかるかも」

「で、ですが！ お言葉ですが西住どのッ、

今回のスタンドは『透明にする』能力なんですよおッ！

スタンドや本体だって透明になっているかも知れない。

そうだったら、どうやって」

「見えてるんだよ。優花里さん」

「えっ？」

透明が見えるとはこれ如何に。優花里は素のまま聞き返してしまった。みほは、両腕をすつと差し出した。中にいる透明の赤ちゃんをあやすことも忘れず。キヤツキヤと笑う声だけが聞こえた。丸裸はどうかということ、応急処置的にハンカチだけが巻いてある。だが、それだけだ。ハンカチが巻かれた透明な何かであることは変わらない。

「どういうことですか西住どの、透明ですよ？ 見えないですよね」

「見えないよね。スタンド使いにも、一般人にも見えないんだよね。」

ほら、『見えないことが見えている』。

これは『見える』スタンドなんだよ」

「そ、それ、ヘリクツじやあないですかあー？」

「理屈だよ、優花里さん。だからもう沙織さんに頼んである。

折り紙とか、そういう色つきの紙をたくさん買ってきて、つて。

『駅前まで紙吹雪をバラまいて歩くから』つて」

今度こそ、優花里は理解した。みほの目論見を。

「……見える! 確かに見えます!」

巻いてあるハンカチが見えているなら、それで見えないわけがないッ!

少なくとも、透明な物体が近づいてきたら、それでわかるッ」

「何事もなく駅前に着して、承太郎さんに赤ちゃんを渡す。

そのための手段としては、これで充分だと思う」

紙吹雪をバラまけば、透明な物体に引つかかる。紙吹雪自体はスタンドでも何でもないから、誰が見てもわかる。仮に透明な物体がスタンドの本体だとして、紙吹雪を透明にされたとしても、一部分で不自然に透明になる空間がハッキリと現れる。駅前までの安全確保という目的は、達成できる!

「問題は、紙を撒くのがご近所に超メーワクだつてことです!」

「そこは東方くんを頼るよ。」

クレイジー・ダイヤモンドで紙を直せば、お掃除はすぐに終わるよね」

「さすがは西住どのッ!」

今頃クシャミしているんだろーなー東方どの。そんなことを思いつつ、不安がキレイに拭い去られたことに気がつく優花里。この作戦なら、スタンド能力に依存する部分がまったくない。本体が現れたなら『防ぐ』のは、当初の想定通りだから問題なかった。倒

す必要はない。本体が現れたなら、ムーンライダーズで威嚇射撃して逃げるのだ。追つて来られたとしても、逃げた先の駅前には、戦い慣れたスタンド使いが四人もいる。透明にするだけの能力だったなら、よつてたかつて叩きのめされ、それでオシマイだろう。偵察用ジープが主力戦車4台に囲まれるよりヒドイ戦力差に違いない。

「安心してね。コワイ人は、私達が近づけないから」

みほは、腕の中を軽くゆすり、右手で赤ちゃんの顔らしき場所をなでた。

アウー、とか、そんな声が聞こえる。不快だとか、泣きそうな声ではない。

「承太郎さんに届け終わっても、それでサヨナラなんかしないよ。」

お母さんが見つかるまでは、私もあなたを守るから」

手に負えないと、冷泉どのも言っていたのに、この人は。でも、これが西住みほの『戦車道』であるのなら。私も同じ道を歩きたい。たどりつく先を見てみたい。優花里の心は、ゾーンと熱くなっていた。そろそろ買物も終わるだろう。明日からは、この赤ちゃんの様子も毎日見に行くようになるのだから、それを補える密度で戦車戦の練習をしなければならぬ。皆と相談しなければ。

「西住さん……何やってるんです？」

いきなり呼びかけてきた誰かがいた。振り返る。オカッパ頭で同じ制服。優花里も何度か見た事のある顔だ。風紀委員。これは間違いない。確か名前は。

「そ、そど子どの?..」

「そど子じゃないッ! 園みどり子(その みどりこ)ッ!

アナタも冷泉さんに吹き込まれたクチ?

確か、秋山さん……いや、それは置いといて」

みほの前まで歩み寄ってくる、そど子。優花里は頭の中で謝った。

(「ゴメンナサイ、『そど子』で固定されてます。

せめて口には出しません)

だが、かなり面倒くさいことになったかもしれない。杜王町への停泊が長期になるとわかるなり、風紀委員では下船先での非行に目を光らせるようになった。そのため、こうして杜王町内をパトロールしているのだが、こんなドンピシャリのタイミングで捕まるとは思わなかった。

「西住さん、アナタは何をやっているんですか?

さつきから見ているらば、わけがわからない……

腕の中の『それ』は何?」

「えっ、それって、それは、その」

ちよつと前から見ていたらしい。ワケがわからないのも道理だった。そど子から見えるのは、何やらハンカチが巻かれた、透明で怪奇な物体だろう。

「ちよつと貸しなさい。これが何なのか、わかれば返すツ」

「ま、待つて、ちよつと用意をさせて！」

「用意つて何の話？」

風紀委員としてハイと言うわけにはいきません。ホラアツ！」

「やめて下さい、園どのツ！ そんなことをしたらツ！」

優花里が止めても間に合わないし、みほが抵抗しても聞く耳を持たなかった。こともあろうにそど子は、みほの手から赤ちゃんを無理矢理取り上げた。手荒くふんだくつたのだ。これが生き物だなどと、認識していない。さつきまでニコニコしていたであろう赤ちゃんのあたりから、大泣きが聞こえ出した。

「何これ？ 生暖かくて、やわらかい？」

「この泣き声は何？ 一体どこから、どういう仕掛け？」

「赤ちゃんです！ 透明な赤ちゃんです！」

「今スグ返してくださいッ！」

「あ、赤ちゃんンン〜ッ？ 透明？」

みほが怒鳴った。今まで見たことがない、モノスゴイ剣幕だ。手中にあるものを『もの』だと思つていたら、知らず知らずのうちに殺してしまいかねない。赤ちゃんの未来が失われる瀬戸際かもしれない。

「あ、赤ちゃんだとして、だとしたらますます、これは何？」

「アナタは一体ドコでナニをやってきたの？」

「しかも透明って意味不明すぎるッ」

「まず返してくださいッ、話はそれからです!」

後ろの自動ドアがやつと開く。待ちに待ったというやつだった。こうなつては、頼れるものはあの人だけだろう。

「あのオヤジ、スキあらばモノ売りつけようとして。もオ〜」

「親切が行き過ぎた感がありましたね」

ベビーグッズの雑貨店から、ようやく出てきた華と沙織。ここで頼るのは、もちろん沙織だ。

「武部どのッ、助けてください」

「えっ? 優花里ちゃんが私を見るなり飛びついてくるとは……」

「もしかして私の時代、来てる?」

「それはチョット後にして下さい。マズインですッ」

しかし、結論から言えば、遅かった。こうなる可能性は、想定してしかるべきだったのかもしれない。だが、敵スタンドから攻撃されるのを最も恐れたがために、結果的にほとんど無警戒となった。

そど子さんをお願いしますッ」

0・5秒ほどで正気に戻ったみほが、すぐに指示を飛ばす。自分自身は軽トラックに向かつて走り出しながら。沙織も沙織で、買物袋の中にあつた色紙を、バリバリとちぎり始めた。

『透明人間の交通事故』!

そんなものに対策しているのは、世界広しと言えども自分達だけだろう。

「わかつた、引き受けたよ! みほりんは?」

「赤ちゃんを連れ戻しますッ」

「気をつけてね。」

チョットスミマセエーン! ごめんなさアアーイー!

通行止め、通行止めでエエエーッす!

軽トラックの荷台に飛び乗ろうとするみほを尻目に、沙織は作つたばかりの紙吹雪をバラまきながら路上にいろんなものを運び出し、車の往來を妨害しまくつた。

「ナンだよコラッ! ザケてんじやあねーぞ」

「仕事なんだよ、邪魔すんなよアバズレがッ」

当然ながら、次から次に飛ぶ罵声。だが車は止まつた。誰がどう見ても普段通りではない程度に。これだけあれば充分だ。救急車の類も、いない。

「ムーンライダーズッ！」

今ここに止まってる車のタイヤ、

全部狙い撃ちしてパンクさせてくださいッ」

『ヒャホホイッ』

『腕ガ鳴ルゼエエー』

『単ナル的当てデハナイカ。ダガ、ゴ命令トラバ！』

「目的は、この道路で車両の通行を不可能にすることですッ、

それ以上の破壊は許しませんよ！ GO、GO、GO！」

ムーンライダーズがようやく活躍した。馬を走らせながら次から次に撃ってはリロードし、目的を達するまで一分もかからなかった。沙織に止められていた車のタイヤ全てがいきなりパンクし、動きようもなくなる。

「そして、ヒーになると！」

一番恐れるべきは、武部どのに怒りをぶつけられるコト。

そんなコトを考えるヒマなんか与えないのが一番ですね。

ライダーズ！ 今撃つた車の運転手を銃撃で脅して下さい！

気絶するか、車から降りて逃げていくまで！

キズをつけることは、一切禁止しますッ」

『アイサーツ』

『イエエエエス、マムツ』

二人一組、リーダー一人で作戦は遂行された。リーダーには、ライダーズの1を任命。周囲で連続して発生する謎の破壊に追い立てられ、ほうほうの体で車から這い出して逃げていく運転手達。

「なんだナンだよ何ナンだよおおー」

「襲われてる。よくわかんねエーけど襲われてるよオオー

助けてエエーーツ」

運転手だけでなく、付近にいた人々も異変を察知して逃げていく。副次的な効果だったが、幸いだ。これで、そど子を探す邪魔になるものは無い。ムーンライダーズを引つ込めた優花里は、誰もいないとわかりつつ、口に出して謝った。

「ゴメンナサイ、ホントにゴメンナサイ。

ヒトの生命がかかっているんですよー」

そして、それから30秒程度で、華がそど子を発見する。おいだけではなく、紙吹雪が引つかかって、違和感からすぐに発見できたようだった。

「出血はそれほどでもない……脈も打っている。

でも、それ以上のがわかりませんね」

「あつ、麻子から電話来てた。これで東方くん達呼ぶね」

こちらはどうかやら回収できそうだ。フウツと一安心して、十字路を見やる。自分が銃撃を命じる前に、あの軽トラックはすでにいなくなっていたはずだが、みほは無事に赤ちゃんを回収しているのだろうか。

(……まさか。

荷台に乗ったまま出発されちゃったんじやあないでしょうねえ)

To Be Continued ⇒

透明な赤ちゃんです！（４）

西住みほ（にしずみ みほ）は焦った。

（は、走り出しちゃった〜〜マズイッ）

軽トラックに飛び乗ったままでは良かったが、なんと直後に走り出してしまった。どこに行くかは不明。赤ちゃんをなだめて、早いところ飛び降りなければ。幸い、周りまで透明にしているおかげで、どこにいるかは丸わかり。軽トラックが透明にされている中に、あの子はいる。しかも現在進行形で泣き声までしているのだ。

「痛かったよね、怖かったよね」

手を伸ばすと、伸ばした先から透明になっていく。何よりだ。赤ちゃんは間違いなくそこにいる！

触った手ごたえを見つけると、手の平全体で確かめる。そして、腕に抱え込んで抱きしめた。

「もう大丈夫だよ。ごめんね」

見える光景に、自分の姿がない。手足が見えない。全身、透明にされてしまったのだろう。奇妙な感覚だったが怖くはなかった。怖いというのなら、いきなりさらわれか

かつて、車に跳ね飛ばされたこの子の方が、よっぽど怖かっただろう。腕の骨が外れたりしているかもしれない。見えないままでは見てあげることもしできない。まずは、安心させてあげること。自分自身の急いた気持ちを静めつつ、赤ちゃんをあやす。小さい頃、自分もこんな風に寝かしつけてもらったのだろうか。私は、追い出されたも同然で家を飛び出してきたけれど、遠い昔にお母さんが『こうやってくれた』事實は、変わらないままだろうか。そんな風なことに思いを馳せながら、背を撫で、頭を撫でる。

仮にこの子が『追い出されたのだ』としても、私がこの子を受け入れよう。大洗女子学園のみんなが、私を一人ぼっちにしておかなかったように。腕の中の温もりを感じながら、裸同然のこの子が冷え切ってしまわないように暖める。気がつけば、自分の手足が見えていた。腕の中の赤ちゃんも。みほは思わず、ニハツ、と笑っていた。

「その、はじめまして。えーっと、あのね……」

顔を見るのが初めてだから。だから、はじめまして」

例えるなら、キャハア、だろうか。赤ちゃん特有の、文字に表しがたい奇妙な声が、喜びを歌っていた。

「私は西住みほ。あなたのお母さんにはなつてあげられないけど、あなたの味方だよ」

見えるようになって、改めて観察する。美人な子だった。将来が楽しみになる。そして、懸念したような、車に撥ね飛ばされたダメージはないようだ。少なくともこの子に

関しては、東方仗助にこれ以上の面倒はかけずにすみそうだった。今わかったが、女の子だ。その意味でも、あまり男の子には見せたくないかった。

「それじゃ、すぐにここを飛び降りるよ。」

大変な目に遭つちやつてる人がいるから、助けに行くんだ。

ちよつと怖いけど、大丈夫だよ」

不安で周囲を透明にしている。それは確信できた。なら大丈夫だ。また透明になつたとしても、私には安心させてあげられる。この子は私を信じてくれた。なら私もこの子を信じるまで。見る限り、軽トラックの透明化も解けている。ということは、そど子の透明化も今頃は解除され、他人の目に見えているはず。自分からわかる範囲では、最悪の事態は脱しただろう。

「それにしても、どこだろう、ココ……家がまばらだけど」

赤ちゃんをあやしている間に、かなり遠くに来てしまったらしい。後ろに、杜王町の中心部らしいところが見えてはいるが。周囲を観察するに、人の気配がほとんどないのが怖かった。どれもこれも立派な家なのに、人が住んでいる気配がない。

「あ、思い出した。戦車道の試合会場だった。」

最近、使えるようになったんだっけ……」

杜王町は江戸時代以前から続く避暑地である。仙台市のベッドタウンになった今も

それは変わらず、サマーシーズンだけ人がやってくる別荘地帯が郊外に広がっている。別荘地帯には、その他のシーズンには、ほぼ人がいないのだ。こんな好条件を、戦車道運営委員会その他が逃すはずもなく、杜王町に積極的なアプローチをかけ、実を結んだのが二年前。かくして、この別荘地帯は戦車道の試合会場となり、練習試合や、サマーシーズン手前に開催される戦車道全国大会では砲弾が降り注ぐようになったのだ。もちろん、破壊された建物は弁償されるし、破壊される側も夏にしか来ない別荘であれば、すぐに弁償されるならダメージはほぼない。むしろ無償で建て直してもらえるようなものだった。らしい。

(東方くん達はどう思ってるのかな。聞いてみよつと)

そんなどうでもいいことを、今考えてしまったのが運の尽きだったのだろうか。軽トラックが急ブレーキをかけて止まり、みほは荷台から放り出された。とつさに赤ちやんをかばい、抱きしめたままゴロゴロ転がり、塀にぶつかって止まる。左肩に激痛が走ったが、かまっている場合ではない。慌てて身を起すと、止まった軽トラックから男が降りてきた。三人。一人は明らかに日本人ではない。ついでに言えば、全員『カタギ』ではなさそうだ。

「ネズミガマガレ込ンデルジャネエーカ、コノチンピラ共ガ……」

「た、単なるメスガキじゃねえーツスカ。こんなのが探りに来るはず」

「ソレヲ決メルノハ俺デアツテ、テメージャネエー！？」

「テメーカラ海ニ捨テテヤローカ？」

「わ、わかった。やるよ……アンタに逆らう気はねえつて！」

ノンキに向こうの話を聞いている場合ではない。みほは全速力で逃げた。逃げようとした。相手がただのチンピラであれば、これで逃げ切つただろう。だが、どうやら相手はチンピラどころではなかったようだ。足に焼け付くような痛みが走り、バランスを崩して転げる。男達を見た。日本人ではない男の手に、銃があつた。本物か？それは、みほの足に空いた銃創が証明していた。

「う、うぐうううッ！ こ、こんなッ！」

「才膳立テハシテヤツタゾ。殺（バラ）セ！ ソレデ忘レテヤル」

「へへ！ 方法はッ！ 何でもいいんでしようねえッ？」

「サツサト済マセロ、ソレダケダ」

残りの男二人が迫ってくる。それぞれナイフを持っていた。ナメクジが這い回っているような、最悪に卑しい笑みを浮かべながら、来る。その数秒で、みほはすでに手を打った。後ろ手のケータイで、『助けて 戦車道 会場』と戦車道関係者全員宛に一斉送信をかけている。日常的にケータイでメールを送っている女子高生ならではの業である。沙織には及ばないのだが。

「お前、その手に何持つてんだア？」

「ええっ？ その、これはッ」

みほはケータイのことを言われたと思い、そのために反応が遅れた。男の狙いは、みほが赤ちゃんを抱えた左腕。またも、みほは取り上げられた。

「ああッ！ 返してくださいッ！」

「なんだこりゃあ？ 生あつたけえ『何か』がいるぜ」

「オイ、フザケテンジャアネーゾ」

「マジですって！ 来て下さいよ、触ればわかりますぜッ」

こんな状況になったからか、赤ちゃんは再び透明になっていた。そしてこの状況、自分だけ透明になったところで、彼女の気が治まるだろうか。そんなわけがない。怖い人の見本だらけだった。

「ひいイツ、ひギヤアアアアアあああー！

なんじゃこりゃあー！

赤ちゃんを掴んだ男が、頭と両足首を残して透明になった。

誰にでも見えるスタンド！

当然、他の男二人も、その大異変を目の当たりにしている。

「What？」

「お、おい、なんだよそれッ」

「わかんねエーよッ、教えてくれよッ」

みほはこの一瞬で十数回は考えた。最適解は何か？

男に体当たりをしかけて、赤ちゃんを取り戻すか。駄目だ。赤ちゃんともども射殺される未来しか見えない。では、ボス格の男の銃に石を投げて取り落とさせるか。無理だ。そんなコントロールを自分に期待できない。

ああ、この距離から男の銃を直接殴ることができたなら！

そして、懊悩が成果を結ぶことはなかった。

「あつ、足首も消えるウウーッ」

「放り投げろッ、そいつを放り投げろッ」

「ひ、ヒイヒイヒイッ！」

男が、赤ちゃんを全力で遠くに放り投げたのだ。投げた方角は、崖。崖の先は海。数秒して、ボチャーン、という音がかすかに聞こえた。赤ちゃんが、海に落ちた。透明な赤ちゃんが、透明な水の中に。こんなもの、華の助けを借りても探せるかどうか。絶望が、みほの精神を席卷した。立ち上がろうとして、立ち上がれず、這って進む。あの子を助けなければ。

「おい、こんガキヤ……投げ捨てても戻らねえーじゃあねーかつ、

「どうしてくれんだよ、アア〜ッ？」

全身のほとんどが透明になった男が、みほの進路をふさぐ。

「どいてください」

「どう落とし前つけんだって聞いてんだぞッラアツ」

「あなたなんか結構ってるヒマ無いッ！」

みほは立ち上がり、持ちうる全力でブン殴ろうとした。実際には立ち上がることもできず、拳を振り上げてもまるで届かなかったのだが。みほは、殴ったイメージを全力で叩きつけていた。それが現実であるかのように。そして、これが、これこそが。

「ごぶげえッ!？」

「引っ込んでッ！」

スタンドの使い方だった。ある日、自転車の補助輪がいらなくなるかのように。ある日、逆上がりのやり方を感じて理解するかのように。西住みほは、自身のスタンドを唐突に掴んだ。自分の身体から飛び出した人型は、クレイジー・ダイヤモンドと同じ距離離パワー型。全身ムートン素材で、目はボタン、耳はファー。アチコチ絆創膏だらけで今ひとつ強そうに見えないが、戦車砲すら防ぐ系譜のスタンド。拳銃なんか、脅威にならない！

「何ダ、何シヤガッター！」

ボス格の男がすぐさま銃を撃とうとしてくるが、感覚で理解している。撃たれるよりはるかに前に、銃を持つ手を殴りつけ、蹴り飛ばせる。果たしてその通りになった。5m先にいても、こちらの方がよほど速い。安物だったのだろう銃はバラバラに壊れ、男もまた脚に首を狩られて起き上がらなくなった。

「う、うわ、うわアアア〜」

最後に残った男が踵を返して逃げようとするが、逃がさない。ここで助けを呼ばれりしたら、今度こそ自分は詰む。突進する感覚を男にぶつけて、スタンドで殴り飛ばした。敵までの距離、およそ7m。ここがギリギリのラインのようだ。それ以上遠くには行けないことだけを確認し、みほはスタンドを引っ込める。

「射程、7m……これを言えば、助けられるかも。助けてみせる」

這いずって進む。崖に向かって。どこに向かって投げられて、どこに向かって落ちていったかは見ているのだ。赤ちゃんと同じルートを行けば、おのずと見つかる。余計な回り道をしている時間はない。

「近くの住所を確認。そして」

スタンドを使って回収してきた、男のナイフを手にとり、自分の後ろ髪をザックリ切った。それをスタンドに渡し、先に確認した住所の家のポストに突っ込む。

「で、みんなに住所を送る。ポストを見て、って。」

これで、出来ることは全部やった。あとは」

スタンドを呼び戻しながら、みほは自身の手首にナイフを当て。そのまま脈の付近をかき切った！

「色を、つけなきや……私は、華さんじゃあないから。

こうでもしなきや、探せない」

崖の淵に到達したみほは、手首から血をしたたらせながら、ためらうことなく身を空中に躍らせた。

「絶対に助ける。だから、死なないで」

To Be Continued ⇒

透明な赤ちゃんです！（5）

東方仗助（ひがしかた　じょうすけ）は、事の顛末を聞き取っていた。

「なるほどな……そりゃ無理もねエーってヤツだぜ。

「そうもなるってモンだよな」

「早く直してあげてくださいい東方どのツ、

大ケガしてるのは確かなんですよ」

まくし立てるように説明した秋山が急かしてくる。透明では容態がほとんどわからない。もしかしたら数分後には死ぬかもしれないところを、長時間放置などしたくないだろう。ましてやこんな状態では医者にかかるなど不可能。仗助以外に頼れるものなしと言ったところか。

「わかってるぜ秋山。だがよおー、このままじゃなおせねえ」

「なぜですかツ、まさか透明だから？」

「なおった姿が想像できねーのはヤバイ。

「どんな形になおっちまうかわかんねーぞ」

クレイジー・ダイヤモンドも無条件で万能にものをなおせるワケではない。髪型をバ

かにされたりして極度にキレてる真つ最中など『相手が見えていない』ケースでは、変な形に直したり、異物を巻き込んで融合させてしまったりする可能性が付きまとう。透明なまま治したとして、治った姿が元通りのそれである保証がない。

「まだるっこしいコトしてんじゃあねエーぞ仗助エーツ！」

後ろに控えていた億泰が、透明なケガ人の前に乗り込んできた。そしてザ・ハンドで近くの街路樹の根元から土を巻き上げる。

「見えねえーつつーんならよおおー、

見えるようにしちまえツてんだよ！

紙吹雪が見えてんだぜエエエーエーエー」

巻き上げた土を、透明なケガ人にぶっかける。盛られた土と砂煙で、形がクツキリと浮かび上がった。それだけで終わらず、ザ・ハンドは握り締めた土をボスボスと叩きつけるように塗りたくっていく。

「こーやって！ 全身くまなく土を塗り広げてやりやあよオオー！」

「も、もういいぜ億泰ッ、だいたいわかった！」

大洗女子学園の制服を着た、おかつぱ少女の輪郭がはつきりわかれば充分だ。腕があらぬ方向に捻じ曲がっている。明らかに骨折だ。クレイジー・ダイヤモンドは、少女の影を元のあるべき姿に修復していく。

「セツカチなヤローだなあーオメーよおー。」

だがグレート。どうにか治せたぜ。

チヨットばかり土を巻き込んだかも知れねえーが！

そんなくらいなら、しばらくすりや『代謝』で出て行く」

「頭使うだけええー、この億泰さんだつてよおー」

「でかした。すまん」

同じく一緒に来ていた麻子が、億泰に4文字。それとこちらに3文字の言葉だけを投げると、元通りの形になった少女の影に歩み寄り、頬のあたりをパンパンと2回張った。

「起きろ、起きろ、そど子。昼を通り越して夕方が近いぞ」

「ハッ？ れ、冷泉麻子ツ？」

そ、それと後ろにいるのは……『ゴジラ』と『キングギドラ』ツ

『モスラ』もいるなんてツ」

「……は？ 『ゴジラ』？ 『キングギドラ』？」

「その不良二人のことよッ！

74アイスでアナタ達がツルんでたのは知ってるわよ。

警戒レベルMAXなのよッ、不良オブ不良ツ」

起きるなり、いきなりまくし立てるおかつぱに、仗助は億泰と顔を見合わせた。

「ズイブンなこと言うツスねえー、まあ、わかるけど」

「『ゴジラ』と『キングギドラ』ってよおおー、オレはドツチだよ！」

「とうか、『モスラ』？ ぼく、もしかして『モスラ』？」

イト吐くの？」

ちよつぴりショックを受けたような顔をしている康一を見て、不覚にも一番シツクリ来るなど思ってしまった仗助であった。もちろん『モスラ』が。

……………

「お礼は言っておきます。ケガが治ってるのはホントみたいだしッ」

「気にしねーでいいツスよ。えっと、そど子つつたっけ」

「そど子じやなーいッ！ 園みどり子！」

次言ったら、アナタの名前『ゴジラ』で決定するからね」

「オレが『ゴジラ』だったのね……あ、東方仗助ツス」

結局、説明にそれなりの時間を割く羽目になった。一般人相手にスタンドのことを説明するのもしんどいが、今回の透明にするスタンドに、ものをなおすクレイジー・ダイヤモンドと、何が起こっているのか比較的わかりやすい能力だったおかげで、説明が済んでみれば、割と素直にうなずいてくれた。

「承太郎さんも来てくださいましたし、そろそろ言い出しますけど……」

西住どのが、赤ちゃんと一緒に軽トラックの荷台に乗って、行ってしまったようなんですがッ!

必死で口を挟む機会を伺っていたらしい秋山が、今さっき合流してきた承太郎をチラリと見ながら場に割り込みをかけてくる。そう、この場の危機は去ったというだけで、まだスタンドの脅威は継続中だ。そど子を見やる。土を塗られた部分以外は未だに透明だからわかりにくい、が決まりの悪い顔をしているようだった。

「まいったよねえー、

『右折待ち』だから多分、海に向かったつてくらいしかわからないよ」

「土地勘がないと、どうしようもないですね」

沙織も華も、秋山同様、どこに行ったかなど、わかりようもないらしい。ケータイも鳴らしてみたが、反応がないという。土地勘がある仗助にしたところで、車一台の行き先を完璧に特定など、やりようがないが。サマーシーズン以外に海に向かう軽トラックに、仗助は心当たりがあった。

「秋山よおー。

『軽トラック』が『右折』していった、つつたよなあー」

「はい、東方どの。その通りですけど。何か心当たりが?」

「あるぜ、心当たりがよ……警官だったツスからなあー、

オレのじいちゃんがよお〜」

心当たりを、なるべく急いで、かいつまんで話す仗助。サマーシーズンには人でごった返す杜王町とその郊外だが、それ以外の時期では、人がほとんどいない場所も数多い。

「そんなトコロを狙ってよお〜、誰が何しに来ると思うよ?」

「恋人同士がヒミツの密会に……ゴメンナサイフザケました忘れて」

場違いなコトを抜かすな、という視線が集中したのに耐えられなかったのか、沙織は言いかけた言葉を引つ込め、両手を挙げて頭を下げる。

「ソツチの可能性もなくはねえーし、

ソレはソレで気マズイ事件になるだろーがよ。

答えを言うぜ……」

「『死体』だな。ヤクザが『死体』を捨てに来る」

承太郎が、かぶせるように答えを言った。正解である。

「『焼く』なり『刻む』なりして、

原型がわからないまでに処理した『死体』の、最終的な廃棄先だな。

弱小の犯罪組織が、専門業者を用意できずにやる……

いずれ足がつくパターンがほとんどだがな」

「み、みほりんが……ソレに、乗り込んだって言うんですか?」

承太郎さあん」

「そいつを聞くならオレだろうがよ沙織ッ

オレに『そうだ』と断言できるワケじゃあねーが、

『そうだ』としたらよおおー、こいつは生死に関わってくるぜ」

気楽さが吹っ飛んでしまった沙織がこちらを見た。じゃあどうするのよ、と顔に書いてある。傍らの華が、それを直接言葉にした。

「どうしますか、私達はッ」

「他の可能性はまず捨てるぜ。追いきれねえし、きりがねえッ

オレ達は今言った『最悪』を追う！

違うっつーんなら、それはそれでいい！」

「チョット待ってよ仗助くん！」

他の可能性を捨てちゃったら、違ってた時！

完ッペキ手がかりゼロになるよッ」

康一の突っ込みはもつともだ。むしろそれを待っていたとも言える。ここにいる土まみれの透明風紀委員に向き合った。

「園さんよおー、風紀委員を動かせるかい？」

西住の行方について聞き込みができるんなら、ぜひ頼みてえんだがよ」

「引き受けます。結果的に私のせいだし、こうなったの。」

『荷台がおかしなコトになつてゐる軽トラック』について聞き込めばいいわね」

「グレート！ 頼んだぜ。オレ達が空振つた時の命綱だからよ〜」

「待つてなさい……アツ、ケータイが透明！ どうすりやいいの？」

意気込みながら引き受けてくれたそど子だったが、透明なケータイなんか使い物になるわけがなかった。それ以前に、車にハネられた衝撃で壊れているかもしれない。承太郎と華が、ほぼ同時に懐に手をやりケータイを取り出す。

「俺のを使った方がいいだろうな。」

君は戦車道関係者だ。連絡がそつちに來るかもしれん」

「確かに。ではお願いします」

承太郎は頷いて、そど子にケータイを差し出した。頭を下げたそど子はうやうやしくケータイを受け取り、おそるおそる番号を押し始める。

「というわけでよ。他の可能性は園さんに任せる」

「スピードワゴン財団にも話してみよう。」

透明にされて事故に遭う人間が、また出る可能性があるからな」

「千人カッスよ、承太郎さん」

思わずウインクしてサムズアップの仗助である。望外の協力と言えた。大人の専門

家が関わってくれるなら、そちらもそちらで遠からず痕跡を発見できる。

「『作戦』を言うぜツ！」

オレ達は今すぐ杜王町郊外の別荘地帯に向かう。

オメーらには戦車道の試合会場って言った方がわかりやすいかな」

全員がうなずいたのを確認して、話を続ける。置いてけぼりが出たらヤバイ。

「そこから先は二手に分かれるぜ。

『タクシー組』と『バイク組』に分けるぜツ。

まず『タクシー組』からだ……

『タクシー組』は海側の道路を進みながら周りを探ってくれ」

「見つけたら……『最悪の場合』だったら、どうするの。

考えたくないけどさあーツ、

みぼりんがヒドイ目に遭わされようとしてるトコに出くわしたら！」

沙織が聞いてくる。『タクシー組』に回ることを今の時点ですでに確信している反応だ。

「そんな時はよー、億泰、頼むぜ」

「あれ、オレ？　じゃあオレのバイクはよおー、どうなるんだ？」

「バイクにはオレと、もう一人が乗る！」

ヤクザなんかを相手にして力任せにブツ叩けるのは
オレとオメーだけだからよ。

オメーには『タクシー組』に残ってもらいてえ」

「お、おう。そういう事ならよおー、わかつたぜ」

億泰が納得したのに頷いて、仗助はさらに続ける。『タクシー組』の目的は、より広域を探す『バイク組』を補うことだ。『死体』を捨てに来る可能性が高い海沿いを念入りに調査することで、見逃し、取りこぼしを回避する。

「すると、『バイク組』はスタンド使いですね？」

それも、射程が長い……広瀬さんのエコーズか、

優花里さんのムーンライダーズ」

「大正解だぜ、華さんよ。」

そして普通に考えてよおー、ムーンライダーズを頼らねー手はねえッ
射程距離がエコーズの20倍で、しかも集団で探せるぜ。

コイツがマネできるスタンド使いは、オレが知る限りいねえーぜッ」

一息で言い切つて、秋山の方を見る。わずかにたじろぎ、不安を瞳に浮かべる秋山。
承太郎が、とくに視線を向かわせることもなく言つた。

「単純にスタンドの射程距離で言うなら、4 km。」

これが、俺が知る限り最も長い。

だが、ほとんど暗殺特化のスタンドでな。

ものを探し回るには向かないだろう」

「な、何が、言いたいんですかあ?……承太郎さん」

「俺のスタープラチナにも、仗助のクレイジーダイヤモンドにも。

そして今言ったスタンド使いにも出来ないことが、君には出来る。

単純な事実だな。それだけだ」

それだけ言つて本当に黙つてしまう承太郎。精神論でも何でも無い単純な事実であるだけに、秋山も受け入れざるを得ないだろう。理解したなら、あとは納得だ。

「頼む、秋山!

オレのダチを探すのを手伝つてくれ!

ヤベエー目に遭つてるかも知れねえからよツ」

友達になつてくれませんか、と言われて、その手をとつたのだ。だから、白々しいかも知れないが、ここでは言わせてもらう。明らかに不安を顔に浮かべていた秋山は、見る見るうちにムカついた顔に変わる。

「……なんで、あなたに頭を下げられなくっちゃあいけないんですか?」

「いらねーつつーんならよおー、そう言えよな。わかんねーからよおー」

「西住どのがあなたにとって友達だつて言うのなら、

私にとっては、もつと友達です！」

あなたに頭下げられるまでもないんですッ」

ムーンライダーズが秋山の足元に展開し、一斉に銃を掲げた。おそらくは、本人の意思だ。秋山の意思と、スタンドの意思の両方が一致している。

「西住どのは、私が探します。私の意志で探すんですッ」

「グレートだぜ、秋山。そいつが聞きたかった」

闘志を燃やすように上目遣いでにらんでいた秋山が、二秒ほど停止してからハツとなり、表情が、また性質の違う怒りに変わった。

「あつ、の……ノセましたね東方どのッ！」

「こんだけ見事にノツてくれるとよおおー、快感だぜ」

「ズルイですよお！」

「こんなの、ノセられるしかないじゃあないですかあッ」

「腹は決まつたら？ 行くぜ、時間を空けたくねえーからよ」

ムスツとして、まだ何か言いたそうにしていた秋山だったが、それを聞いてやるのは後だ。視線が集まっていたので、もう全員わかりきっていることだろうが、言うだけは言うしておく。

「『バイク組』は、オレと秋山だ。」

オレがバイクを転がして、秋山のムーンライダーズが広範囲を探すツ! じいちゃんから聞いてたポイントはいくつかある。

そこを念入りに潰して回るぜ。

それでも見つからなかったら、来た道に戻って『タクシー組』に合流する」

もちろん、警察の情報を直接握っているわけではない。じいちゃんにも守秘義務というヤツがあつたはず。

『あのあたりには近づくなよ、マジにヤバイのが来るからなッ』

そう言っていたのを思い出して、そこを中心に探っていくというだけの話。

「全員、やることはわかったよな？」

「すぐにも出発するぜ」

「はいっ、東方どの。西住どのがいれば、作戦名もつくんですけど……」

「後でつけてもらえばいいだろうがよ、そのための作戦だろ?」

力強く頷いた秋山がついてくる。億泰が投げってきたキーを受け取り、足早に虹村家に向かうことにする。後ろから、承太郎が言ってくれた。

「こういう時のために、車を一台確保している。俺達はそれを使おう。」

タクシーの運転手にヤタラメツタラ注文つけなくてもいいようにな……

お前たちは二人乗りだ。警察には用心しておけ」
「マジに助かるツスよ、承太郎さん！」

『タクシー組』に承太郎がいてくれる。それだけで何の心配もいらぬ。振り向いて頭を下げ、小走りになる。一瞬遅れて、秋山も同じ動作をなぞった。それからおよそ十分後。バイクの後ろに秋山を乗せ、海岸線に向かって速度を上げ始めている。虹村家までは走れば五分もかからない距離であり、バイクをさっさと引つ張り出して、さっさと乗ったのだ。

「せ、戦車よりも、やっぱり安定性が……」

無限軌道のバイクはないんでしょーかッ！

そ、そう、ケツテンクライトみたいなッ

「ヒマなこと言ってるんじやあねえーぞ秋山ッ！」

ムーンライダーズはよおー、ついてきてるか？」

背中にひつついてテンパっている秋山を、カワイソーだが急かすしかない。探索については、完全にコイツ頼りなのだから。

「は……はいッ、『時速60km前後』なら、問題なくついてこられます。

バテたりしている様子も、とくにないですねえ」

「グレート。つまり問題ねえーって事だな。

あとはスタンド同士の連絡さえ上手くいきやあよオオー」

「それですけど、銃声を使います。」

どうせスタンド使いにしか聞こえないんですからッ。

異常なしは二分おきに一発。異常ありなら即座に三発！

非常事態発生中なら四発！

だから別命あるまで攻撃行動は一切禁止ですよッ」

「何人かの銃声が混じつちまってワカンなくなる可能性ねーか？」

「そのために6方向に分けるんです。方角で聞き分けます。」

さらに言うなら、ライダーズを、そのための備えにします！

最悪、ライダーズに確認に行かせるってコトですよッ」

「そーいうことなら、それで行くこうぜ。ハグれることもなさそうだしな」

「それなら作戦開始ですよッ、GO！ GO！ GO！」

ムーンライダーズが隊伍を崩し、前に後ろにと散っていく。自分と秋山の乗ったバイクを中心に、およそ200m離れて各自が探索を行う形だ。そして六分……つまり、異常なしの合図三発ごとに、ライダーズから合図の一発を撃ち、集合。情報を共有、検討してから再出発を繰り返す計画である。当然、秋山本人と仗助も探索に参加する。バイクを転がしながら、海岸線のみならず無人の家も注意深く見る。異常なしの合図が三

度出たあたりで、秋山のケータイに電話がかかった。そど子からだ。「透明化が解除された、ですつてえ？」

現時点では、凶報と取るしかない。スタンドが解除されるには、本体が自分の意志で解除するか、何らかの理由でスタンドを維持できなくなるかの二つに一つだ。そして後者が起こる主な理由は……本体の死。そうなったとは考えたくない。そうなったとすれば、一緒にいる西住も、ほぼ確実に巻き込まれている。だが、死んだのではなく気絶してスタンドが解除されたとしても、危機的な状況にいるのは変わらない。これはかなり急がなければならなくなった。

「バイク止めて下さい、東方どの。」

ちようど集合時刻ですから、ここで話します」

通話を終えた秋山に従ってバイクを止めると、ムーンライダーズも集まってくる。秋山が、ポケットの中に持っていた地図を広げた。

『荷台がポツカリえぐれた軽トラック』が、

勾当台二丁目の大通りで、かなりの人数に目撃されています。

聞き込みなんかするまでもなく、風紀委員自身が目撃してたそうです」

「勾当台二丁目えっ!? 全然ちげえー方角じゃあねーかッ!」

勾当台二丁目は、杜王町のおよそ中心、やや北にあたる地域。当初、軽トラックが向

かっていると想定した方角からすると、東西反対である。

「ですがそつちでも、別荘地帯の方に行つたつて証言があつたそうですよ。

勾当台二丁目から別荘地帯に向かう大通りは、ほら、ひとつです」

地図を指す秋山の指先を追う。大通りは杜王町の北にある山に近づいていき、山の直前でT字に分かれる。そこを右に曲がれば、まっすぐ別荘地帯に入つていける。地元人である仗助には、どういう道路を通つているかも想像できた。

『ポヨヨン岬』かよ」

「ハイ? なんですつてえー?」

「ちよいとオレ達……主に康一に因縁のある場所があつてだな。

まず念入りに探すとしたらよー、ココだろうぜ」

じいちゃんから聞いていたポイントのひとつが、その少し先にある。状況証拠的にも、可能性が高くなつてきた。

「乗りなよ。そこまで飛ばすぜ。すぐソコだからよおー」

「ンツ、待つてください。メール……西住どのツ!」

横からケータイを覗き込む。文字が見えた。

『助けて 戦車道 会場』

送り主は当然、『西住殿』。見間違ひようもなかつた。

「グレート……」

こんな前後のつながりも考えてねー文章を送ってくるってことはよー。かなりセツパツマツた状況に追い詰められちまつてるぜ」

「助けてくださいッ、東方どのッ！」

「ならオレも言うぜ秋山よおー、助けてくれッ！」

オレのクレイジー・ダイヤモンドの射程じゃあどうにもならねえッ

西住を探し当ててくれッ、秋山！ おめーが頼りなんだよ」

恐怖でいっぱいになりかけた秋山の表情が、半泣き程度にまで持ち直したのを確認してから、仗助は、一個ずつ一個ずつ、材料を投げて提示する。

「さっきの電話で軽トラックの針路はつかんだ。

そして、西住に危険が迫ってることもわかった。

さらに！ 少なくともケータイが打てる。透明にはなってるねえ！

つまりよ、こういう危険が見えてるってことだぜ。

交通事故か、追われてるのか、そいつはわかんねーけどよおー、『目立つ』ぜ。

こんな誰もいねートコで、危険なコトが起こりやあよー」

「見えている『危険』、見えている『人間』……確かに探せますッ！

空き家の中を気をつける必要はあるけど、

片っ端から窓をライダーズで蹴破ってやります。

西住どのを追ってるような不審者がいれば、それで絶対に反応する!

発見したら、さっきまでのルールと同じ。撃つて知らせます!」

秋山は受け取った材料を組み立てて、戦い方を作った。ある意味で、あの空条承太郎に通じるような冷静な判断力を、コイツも持っているのだ。

恐怖に押しつぶされなければ、戦える。また逆に、戦えるなら恐怖せずに済む。

「乗れよ、秋山ッ!

ここからはよおく、シラミつぶしだぜ!」

「必ず、必ず見つけますよ西住どのオーツ

それまで持ちこたえてくださいッ!」

二人してバイクにまたがり再出発。それからわずかに二分後に、西住の『いた』場所を発見するなど、この時点では考えているわけもなかった。

To Be Continued ⇒

透明な赤ちゃんです！（6）

西住みほ（にしずみ みほ）は、みるみるうちに失われていく自身の体温を自覚した。手首を切って海に飛び込んだ。現在進行形で血液が流れ出ている。全身が水につかった状態だ。陸上にいる時よりも、水圧のせいで流出がさらに加速する。

（私は死なない。あの子も助ける。）

私が死なないための手は打ち尽くした……

今は、あの子のことだけを考える）

塩水の中だが、目を開けている。痛くてたまらないが、おかげで意識が遠のかずにすむ。赤黒い色がついていく右手首の周りを、スタンドでかき集めて放つ。海の中なのだ。無尽蔵の水、水、水だ。四方八方に拡散させてしまつてはほとんど透明になつてしまふ。一点集中で血を集め、ショットガンのように撃ち出して探すしかない。

（ハズレ。あそこにはいない。じゃあ、右！）

二度、三度、四度。繰り返す。発見できない。海底まではせいぜい4〜5mほどだ。透明な場所ができれば違和感がはつきりとわかるはず。さらに言えば、投げられてから落着いた場所までほぼ検討がついている。見ていたのだから。だが発見できない。赤

ちゃんがあがいていて、移動しているというのか。可能性はある。

(苦しいよね。死にそうだよ。私が見つける！)

(ここから陸に引き上げる！)

意志は決して揺らがない。五度目の血を絞り出して撃ち出そうとした。が、そこで意識の暗転が始まるのを自覚した。見れば、自分のスタンドも姿がかすんできている。スタンドのルールだ。知っている。スタンドがダメージを受ければ本体に跳ね返るように、本体のダメージはそのままスタンドへのダメージ。本体自身が死に近づいていけば、スタンドも死んでいく。当然の理屈だった。

(何もできないってどういうの?)

あの子を、こんな冷たいところで、

息ができないまま死なせるってどういうの?)

五度目の血を放つ。放った先に目をこらす。見えるのは赤黒い空間だけだ。不自然な脱色は起こらない。動いているものが見えるが、あれはただのカニだ。小さなカニ。

『見えている』ならその時点で無関係。

(待つて。本当にそうかな?)

自身に問いたです。

『見えている』から無関係であるのなら、『見えない』のなら?。

赤ちゃんは、近くにあるものを無差別に透明にした。なら、赤ちゃんの方から来た生物は、みんな透明になっているという事に……

(ダメだッ、そんなものを探している時間の方がムダだよ！)

五度目も無駄弾で終わったことを確信したみほは、六度目を搾り出す。意識が一気に消えていくのを、頬の内側を噛みちぎって耐える。もう、見ている景色が夢なのか現実なのかもあやふやになってきた。海の中であるはずなのに、川の中にいるような気がする。昼下がりの快晴であるはずなのに、土砂降りの中にいるようだ。この風景をみほは知っている。去年の、あの日だ。私が居場所を失ったあの日。信じてきた戦車道がわからなくなつたあの日。水底を見下ろすと、ほの暗い中に浮かび上がる、戦車のハッチ。助けようと思つたことが過ちだったのか。飛び込んだことが過ちだったのか。みほは、自分の顔をスタンドで殴つた。こんな状況で自身を哀れむ自分が許せなかつた。前歯が折れて水の中にこぼれ落ちていったが、今はどうでもいい。ハッチに手をかけ、あの時のように助けた、などという幻だけは見るわけにはいかない。

(私が欲しいのは、あの子を『助けた』現実ッ、それだけのはず)

手元にかき集めた六度目を見下ろす。これが最後の一発だろう。これを外せば、そこから先は死の覚悟が必要になる。自分が死ねば、戦車道隊長を引き継げる人間はいない。大洗女子学園の戦車道全国大会は、始まる前に終わってしまう。だが、今ここで失

われようとしていられる生命とそれを天秤にかけるなど、やはり、できない。

(なんでもいい。あの子に『色』さえついてくれれば)

冷たくて、苦しくて、今もあの子は透明になっっている。でも、透明では助けの手を伸ばそうにも助けられない。だから伝えたかった。怖がらなくてもいいのだと。怖いのなら怖いと伝えてくれれば、私が助けに行くのだから。みほは、思考と視界が澄んでいくのを感じた。自分の気持ちの在り処がわかった。

(……私、あの子に自分を重ねちゃってたんだ)

思えば自分もそうだった。大洗女子学園に転入して、戦車道を避け、忘れようとした。今までの自分を『消し去って』、『見えないように』仕向けた。だから絶望した。戦車道の履修を強要されたことに。実家にケンカを売るようなことをしたくなかった。それもあるが、何よりも。逃げ出したぶざまな自分が、戦車道から逃げ出した自分が、戦車道の選手として皆の目に晒されるのが嫌だった。今も、あの話は誰にもしていない。生徒会長と優花里は多分知っているのだろうが。知ってしまえば手の平を返されるかも。そんな不安も抱えたままだ。でも、沙織と華は、ただ私のために、戦車道を強要する生徒会長に立ち向かおうとしてくれた。そして、戦車道で戦う決意を固めるなり、その場でついてきてくれた。みほの晒した傷跡を見て、全力で守ってくれたのだ。あの二人に、そんなつもりはなかっただろうが。今も信じてくれている。ついてきてくれる。自

分自身をついに隠しきれなかった私を。私に。だから今、あの子の味方になりたい。透明になんかならなくていいと、身をもって伝えたい！

それでも透明でい続けて、そのせいで助けられないというのなら。

（私が取り戻すッ、あなたの本当の『色』を！）

そして途端に理解した。手首なんか切る必要はなかった。あの子を助けるための力は、もともとこのスタンドが持っていたのだ。両拳にセットされた、『R G B K』のカプセルは、そのためのもの。スタンドが、はつきりと形をとったのはついさっきのこと。だとすれば、スタンド能力にはきつと、『願い』が乗っている。そしてその『願い』の名が、たった今わかった。

「トウルル・カラーズッ！」

『R』のカプセルがはじけた。水中の何もかもが赤く染まっていく。ただし、見えなくなるような色ではない。半透明だ。視界は塞がれずにすむ。『色を塗る能力』。この能力で使える色については変幻自在であるようだ。透明度も、濃度も思いのまま。破壊力も何も無い能力だが、今この場では最高の能力だ。目をこらす。今度は見えるはずだ。ここいら一体の海全てが半透明の赤で染め上げられているのだから。こうなってしまうば、発見できない方が難しかった。少し離れた位置に、透明になつていく一点が浮かび上がる。トウルル・カラーズの7mの射程距離で無事に回収。回収と同時に浮上する。

スタンドで赤ちゃんを持ち上げてやると、ゲツと水を吐き、その後、オギャアオギャアと泣き始めた。これも奇跡と言うべきかもしれない。水を飲み込んで気を失い、そのまま死ぬ可能性だつてあつたのだ。

「ごめんね、苦しかったよね。」

大丈夫。もう怖い人もいないし、苦しくも冷たくもならないよ」

赤ちゃんをあやししながら、今度は陸地に戻らなければいけないことを思い出す。崖から飛び降りたので、元いた場所には戻れないが、陸に上がれそうな場所までは、50mも泳げばたどり着く。それだけの体力は正直言つて残っていないが、無理をしても戻らなければ死ぬだけだ。ふと、自分の飛び降りてきた崖に目をやる。誰かいる気配がした。向こうも同じように感じたらしく、顔を出して崖下を覗き込んできた。見間違えるはずのない顔だった。秋山優花里である。

「に、西住どのおおーっ！ 大丈夫ですかあーっ！」

直後、これまた見間違えるはずのない頭がヌツと現れた。東方仗助だ。

「西住よおー、まず確認するぜ。赤んぼは一緒かよ？」

「うん、一緒だよ」

「シツカリ抱えて放すんじゃないぞ……」

クレイジー・ダイヤモンド！」

確認を最初にするなり、まったく期待通りのことを東方仗助はやってくれた。飛び降りる前に残しておいた、後ろ髪のをクレイジー・ダイヤモンドでなおせば、あの音石明が乗り込んだ『4号戦車』の砲弾と同じように『直りに戻る』と考えて、みほは髪を残していった。東方仗助にもその意図はしっかり伝わっていて、みほの身体は崖上に引き寄せられて浮かび上がった。引き寄せが止まったところで、東方仗助と優花里の二人がかりで抱き止められる。

「ヨッ、と！ あれの『海』が赤くなつたのは……つて、冷てえ！

なんだこりやあ！ 体温がねえし、顔色も真つ青じやあねえーかッ！」

「キズー！ 手首に傷ッ！ 崖に落ちてた血はコレだつたんですかあッ？」

それに足！ 足のこの『穴』。これつてまさか銃創？」

抱き止められるなり、二人にペタペタ触られまくつた。東方仗助にはほつぺたとか額とか首の後ろを。優花里にはそれこそ全身を。

「コイツがどういふことかは直接聞け、西住よお！」

まずは全身治つちまえ！」

クレイジー・ダイヤモンドのなおす波動に包まれると、海から血がたくさん飛んでき、手首の傷と一緒に体内へ吸い込まれて消える。改めて量として見せられるとゾツとした。確実に1リットル以上はあつた。ついでのように、折れた前歯もくつつく。口を

開くたびに悩むことはなさそうだ。

「あ、ありがと……」

「大体、今ので何があつたのかわかつちまつたけどよ。

おめー、血で『色』をつけようとしたな？」

水に落ちた透明な赤んぼ助けるためによおー」

今更隠すようなことでもないので頷くと、東方仗助はグレート、とうめいて天を仰いだ。

「ムチャクチャだぜ……あのよおー、『海』だぜ？」

人間一人の血でまかないきれぬワケがねえーだろー」

「で、でも。他に見つける方法がなくなつて。時間もなかつたし」

「たはーっ」

康一を助けに機銃の前に飛び出してくれた時も思つたけどよおー

とんでもねえ向こう見ズだぜ、このお方はよおーっ」

この物言いいには、みほも少しムツとする。というより、悲しくなつた。さつきようやく取り戻した、腕の中のこの子を助けに行つたこと。それそのものがバカげたことだと言われたように感じたから。それを感じ取られてか、優花里が表情を少し変えて、東方仗助に抗議しようとした。

「お言葉ですが、東方どのッ」

「チョット静かにしといてくれよ秋山。悪いけどよおー

……ボチボチ立てるかい？ 西住」

全身が治り、感覚も復活してきている。優花里と東方仗助の腕から離れて自分で立つ。まだ少しフラフラするが。

「オレからは、もう特に何も言わねーことにする。

きつと『他にどうしようもなかった』だろうからよ。

ならそれでいいぜ。納得する……

だけだよ、こいつだけは聞かせろ」

口調は穏やかだったが、東方仗助の表情には有無を言わせないものがあつた。

「見ず知らずの誰かのガキ一人のために！

厄介な能力があつて、ドコに持つていきやあいかもわからない

ガキのためによ。どうしてそこまでしてやるんだ。おめーはよ」

その答えは、すでに得ている。たとえわからなくともそうしただろうが、今ははつきりと言葉にできる。

「伝えたかつたの。この子に。

『怖くないよ』『一人じゃないよ』って。

……多分、私自身が救われたかったんだと思う。そうすることで」

蓋を開ければ、自分のため、なのだろう。他人を利用して、自分の傷をナメているだけなのかもしれない。だとしても『助けに行くことが間違いだ』なんて、絶対に思わない。自分はきつと、この道を曲げられない。その行く先が『戦車道』であろうと、なかろうと。

「そうかよ……」

表情を変えずに聞いていた東方仗助は、しばらく黙った。優花里が不安そうな顔になって、こちらと東方仗助の顔を交互にキョロキョロ見始める。そんなを考え込むような大したことじゃあない、と、みほが言い出そうとする直前、東方仗助は、羽織っている学ランをバサツと脱いだ。それを、みほの背に被せてきた。

「えっ、何?」

「塩水でズブ濡れだろーがよ、んなカツコで連れ回したらよオオー」

オレが悪者になっちまう……着とけ、ってことツスよ」

「よ、ヨゴレちゃうよ? 自慢の学ランなんだよね?」

塩まみれになって、洗うの大変だよ?」

「だから何だってんだよ。着替えるまではよおー、貸しとくぜ……」

それだけ言っただけで東方仗助は背を向けた。少し向こうに止めてあるバイクに向かって

いく。みほは、学ランの袖に腕を通してみる。わかつてはいたが、ブカブカだ。着ている最中、オシヤレでついているアクセサリーがカチャリ、カチャリと音をたてる。丸の中に飛行機が書いてあるみたいなヤツとか、ハートマークとか。改めて見ると、恐ろしいまでの改造制服だった。

(東方くん以外には絶対に似合わないよね、コレ)

よくわからない。男の子って。ただ、彼なりに苦勞をねぎらつてくれたことは伝わった。バカにされたわけでもない。むしろ褒めてくれてるようだ。ならば、感じる思いはさっきの逆。少し嬉しくなった。

「あ、車ですね。武部どのが手を振ってますー！」

「来たか『タクシー組』……これで一件落着だよな。」

多分、西住がブチのめしたチンピラどももよおし、

承太郎さんに任せようぜ」

優花里の視線の先に目をやると、確かに車が一台、走ってきている。中から沙織が手を振っていて、他にも華、麻子。広瀬康一と虹村億泰。そして空条承太郎がいた。あんこうチームと杜王町スタンド使いチーム、勢ぞろいだった。

.....

二日後、透明な赤ちゃんの引き取り手が学園艦にやってきた。正確に言うなら、赤

ちゃんの親が見つかるまでの間、面倒を見てくれる人が来てくれた。あの子のことなら他人事ではありえないので、みほも当然、その人に会いに行く。とくに誰に言つたわけでもないのに、あんこうチームが全員ついてきた。聞くところによると、その人は空条承太郎の母親で、『レッド・ホット・チリ・ペッパー』に狙われる可能性があるため、どのみち学園艦には一時的に引越してくる予定だったという。ともあれ、空条承太郎の母親なのだ。それなりに高齢であるはず。任せきりというのは避けて、手伝いには行つた方がいいか。そう思っていたら、とんでもないものを目にした。

「アラク、あなたがみほちゃんね。ナイストゥーミーチューー!」

「は、はい……よろしくお願ひします。空条ホリイ、さん」

「ホリイでいいわよん、ホリイで。」

今日から私があの子のお母さん代わりなんだモノ。

あなたがあの子のお姉ちゃんみたくカワイがってたのなら、

家族みたいなものでしょ?」

「は、はあ」

とても陽気な、美人のお母さんである。態度も物腰も柔らかいのだが、その実、モノスゴク強引だ。引つ張りまわされ、引きずり込まれる。空条承太郎とは丸つきり正反対と言つてもいい、このネアカぶり。承太郎は、どこでどういう影響を受けてああいう性

格になったのか？

(……ああ、だから反発したのかも)

他人事のように、丸っきりの他人事を考えていると、沙織がハイ、ハイと手を挙げて、かなり失礼な質問を繰り返した。

「ホリイさん！ スツゴクお若く見えますけど！

お歳はおいくつなんですかッ？

承太郎さんのお母さんなんですよねグフツ」

麻子に鳩尾を思い切りどつかれた沙織は、言葉の最後で崩れ落ちた。ワナワナと膝を震わせて立ち上がる。

「な、何するのよお〜」

「いくらなんでもそれはない。ドン引きだぞ」

「仕方ないじゃないのッ！

若き恋のアバンチュールのニオイがするのよお〜」

「日本語で話せ。ここは日本だ」

失礼な質問を受けたホリイであるが、そんなやり取りを見てクスツと笑い。とくに気分を害した風もなく答えた。

「恋バナがお好き？ なら後でお茶しながらお話ししましょうっか！

それで、歳だったわね。55歳でエエ〜つす!」

「……えっ」

「若い? 若いでしょお〜ッ」

「ご近所でも評判なのオーツ、『聖子さん若い』って!

アツ、『聖子』っていうのはね、

ホリイを和訳して、みんなそう呼んでくれるのよ……

って、どうしたの? ハトが豆デッポーくらったよーな顔して」

全員、絶句した。ありえない。みほの目から見ても、三十台後半にさしかかったあたりにしか見えない。それが、55歳。あまりにも無理がある。冗談ならそうだと言ってほしい。

「おふくろの言っていることは事実だ。

強いて理由をつけるなら、ジジイのやっていた

『仙道』の影響かもな……」

今まで、黙ってただそこにいた承太郎が、事実であると保障した。保障してしまった。この男がくだらないウソを言うはずがない。みんな知っている。ワナワナと膝を震わせていた沙織が、今度は全身をガタガタ言わせ始め、そして叫んだ。

「ロボだあああ……」

Inter Inter Mission 『ボコられ
グマをもらったツス!』

「あ、そうそう。ミヤゲがあつたぜ……」

東方仗助（ひがしかた じょうすけ）は、クマちゃんのヌイグルミを差し出した。差し出した先にいるのは、西住みほ。

「え？ これは？」

「おめーよ、前回の赤ちゃん騒動でよ、

フンだりケツたりだったじゃあねえーかよ。

ヤクザに絡まれたり、銃に撃たれたりよ……

ちよつとくらいイイ目を見てもバチ当たらねーと思つてよ。

買ってきたぜ」

普通の人間だったら人生が終わっているような不運だった。ギリギリのところでもタンドに目覚めなかつたら、西住も実際にそうなっていたわけで、自分の身に置き換えて考えてみると『本気で戦慄する』（マジにブルツちまう）と言わざるを得なかつたところだ。電話で、ヌイグルミの店に行くのをとても楽しみにしていたのはわかっているの

で、お見舞いにフルーツの盛り合わせを買っていくくらいのつもりで持ってきたのがこのクマちゃんの新イグルミである。店主に聞くとところによると、百年以上も前から通信販売されていたという、その割には何の変哲もないカワイイクマちゃんなのだ。

「ごていねいに男の子と女の子があつてよおー、

とりあえず女の子の方を買つたぜ。

両方合わせてワンセットかも知れねーけど、

オレもあんましフトコロに余裕あるワケじゃあねえからな」

バリーのクツは安くない。いまだに仗助の財布は軽いままで、このクマちゃん一匹のためにパチンコ一回くらいはあきらめた。

「い、いいの？」

「いいんすよ。

つーか、しばらく降りてくることもままならねーつつーんじゃあな。

おめー自身で選んでなんか買ったかつたんだらうけどよ、無理だろ？」

戦車道全国大会を控えて、放課後をフルに使って遊べる最後の機会があの日だったらしい。それがまともてぶち壊しになった。あんな騒動の後では遊ぶどころの話ではなく、なし崩し的にその場で解散になってしまった。楽しみにしていた新イグルミ屋に行くチャンスも今後まづない。ある意味でスタンド使いの宿命とはいえ、帰宅部の自分と

は違って、部長みたいなものである西住にはたまったものじゃあない。埋め合わせくらいはあってもいいと思った。だから、スタンドでの戦いを教えるついでに、持ってきた。「取つとけよ。」

リーゼントの不良がよおー、コレ下さいって買ってきたんだぜ？

イヤだつて言われたら立場ねえーツスよマジで」

「あ、あはは……でも嬉しいな。ありがとう」

買う姿を想像したのか、複雑な苦笑いを浮かべた西住だったが、クマちゃんを受け取ってニッコリと微笑んだ。受け取ってくれて安心はする。『いくらなんでも悪い、受け取れない』と言われる可能性が半々くらいだと踏んでいたのも、そうであっても想定範囲内ではあるのだが、不良の部屋に鎮座するクマちゃんのヌイグルミという事態はできれば避けたかったのだ。しばらく、手の中のクマちゃんをいじったり、持ち上げたりしていた西住は、出し抜けにこんなことを聞いてくる。

「でも、クマ……クマってことは。」

東方くん。すぐ近くにボコいなかった？ 『ボコられグマのボコ』」

「なんスカソレ。」

なんかのマンガとかだったらよおー、オレはちよつとわからねえ……

『パーマン』知らねーって最近バカにされたしよおー」

「『パーマン』？」

あつ、知ってる……小さい頃、テレビでやってたかな。

多分、東方くんも見れば『ああ、これか』って思うよ」

「ま、べつに知らなくてもいいんだけどよぉ」

「『ボコられグマのボコ』も、見ればわかると思うんだよね。

見たことないかな、包帯でグルグル巻きのクマのぬいぐるみ」

西住の説明を聞いて、ピンと来たものがひとつ。確かアレは、結構昔からある……

「わかったぜ。多分知ってるぜ。

オモチャ屋とかにある、ズタボロなクマのヌイグルミだよな」

「あつ、知ってた……」

「オレよ、アレ、キライなんスよ」

「えっ」

言ってしまったところで、西住の顔が凍りついた。

しまった。地雷を踏み抜いたらしい！

もう少し、コイツの表情を見ながら言葉を選ぶべきだったか。だがもう遅い。うかつに足を離れた瞬間、爆発は不可避だ。

「理由、聞いていいかな。

「治そうとしたんだよ、オレは。ガキの頃によお〜」

あまり話したいことではない。子供の頃の恥の話だから。それでも、話さないことは西住も収まってくれないだろう。マジメに話していることが伝わったのか、西住の二ゴツた瞳が元に戻った。

「その頃のオレはスタンド能力を身につけたてだよ。

能力を全然疑ってなかったぜ。

なおせないモノはねーって本気で思ってたよな」

「もしかして……」

「オモチャ屋に飾られた包帯まみれのクマどもを見てよお〜

ボコボコでよう、ボロボロでよう、カワイソーだと思っちゃまってよ。

『オレなら治してやれるな』って思ったワケだ……

で、どうなったと思うよ？」

「……治らないよね。『元からあの形』だもん。『ボコのぬいぐるみ』は」

「やっぱりこいつは理解が早い。今の時点でオチも把握されてるんじゃないだろうな、と思いつつ、話を続ける仗助。」

「そう。元からあの形だからよ。なおしたってなおりようがない……

だがガキのオレは物分かりが悪くてよお〜、

必死こいて、それでもムリヤリ治そうとしちまった!

その結果よ……『原材料まで戻った』

どういふ光景になったかを想像したのだろう。西住は顔をしかめながら視線をそむけた。おそらくそれは間違っていない。ムートンのシートその他とワタに変換されたヌイグルミは、元の形がわかっていただけに猟奇殺人じみた雰囲気を発したのだ。

「治すどころか逆にバラバラにしちまった。その上、店の品物だぜ?」

「どうしようもなくなって逃げた。で! あつという間にじいちゃんにバレた」

「えっ、知られてたの? 能力が?」

「隠すなんて無理だぜ。ガキの時分じゃあよおー」

ブン殴られたぜ! 自分から言わなかった。

「ためーのやったことに責任取ろうとしなかったってなあー」

ヌイグルミを原材料に復元するなんざ不可能犯罪すぎるからよ、

話はそれで終わりになったがな……」

これが理由だ。理由としては充分だと思う。食べ物だって、一番最初にマズイやつを食ったばかりに、死ぬまで『キライ』になってしまうこともある。『ボコられグマのボコ』は、仗助にとってはそれだった。それだけの話。

「ま、そーいうことで! あのクマは別に悪かねーけど、

オレが個人的にキラいなのは多分変わらねえーな。

なんとか理由をつけてみるんならよー、敗北感っつーか無力感だろーよ。

クレイジー・ダイヤモンドでもどうにもならなかった

最初の相手ツスからなあー」

神妙な顔になっていた西住は、そっか、とだけ言って頷いた。そこで、『スタンド戦闘訓練』の準備をしてきた秋山と、飲み物を買に行っていた億泰と康一が戻ってきた。見学に来たらしい沙織と華、麻子もヒョッコリ顔を出したので、話は途切れ、それっきりになった。

「つーかよ、おめーはさっきから物カゲにいたよな。沙織よお〜」

「ビクツ！ な、なんの話カナ〜？」

「ワザトらしー口笛吹いてるんじやあねえーぜ！ まあいいけどよ」

だが、時間は飛んで、翌日。西住が出会い頭早々にヌイグルミを差し出してきた。昨日、キライだと言っただけの『ボコ』だった。

「おい、西住……」

「なおしてみて！ クレイジー・ダイヤモンドで！」

言われるがままに、クレイジー・ダイヤモンドを使ってみる。『手ごたえ』があった。『ボコ』の包帯や絆創膏の下で、何か直っていた。手をかぎすのをやめると、西住が『ボ

コ』の包帯をスルスルほどく。絆創膏まで取ってしまうと、タダのクマのヌイグルミになった『ボコ』がいた。クルクルと回してそれを確認した西住は、改めて『ボコ』を両手で差し出す。

「あげる！ 大事にしてくれると嬉しいかな」

「お、おう」

断れないまま、もらってしまった。不良の部屋にクマのヌイグルミが鎮座する事態は、結局避けられなかったらしい。引つ込み思案かと思いきや、たまに思わず従ってしまふような強気を西住は見せてくる。複雑な顔をしていると、億泰が詰め寄ってきた。

「仗助エエ〜〜ツ 何プレゼントもらつてんだよお〜ツ

ヒトのことサンザン叱つといてよおおー、

テメーだけモテる気かよチキシヨオツ」

「いや、コイツはちつとワケありで……」

オイ、泣くな！ 泣くほどのコトかっつての」

「イイ気になってんじやあねえーぞ仗助エエエーツ

最近のコツソリ呼び出しとか、ラブレターとか、

メツキリ見なくなつたと思つたらよオオー

こんなトコで見せつけやがって！

ウウウツ、オレだつて、オレだつてよおおお〜

「おいバカ、話を飛躍させてんじやあねーツ」

「オレだつてよ、モテてエんだよオオ〜、オロロオオ〜ン！」

マジ泣きしている億泰は気づいていない。あんこうチームがすでに勢ぞろいしていで、生暖かい目でこつちを見ていることに。秋山までアキレた顔をしている。それを教えてやったら、近距離パワー型スタンド同士のラツシユ合戦になった。迫力のバトルなのに、視線がもつと生暖かくなって、いたたまれない気分だった。

それから色々あったが、その話は後に回すとして、その夜。

仗助は、自室のクローゼット内に『ポコ』をポンと置いた。表に出しておいたら、母に見られたときに何を言われるやら、である。西住がどういうつもりでコイツをよこしてきたのかというと、多分、『ポコ』がキラいな理由を取り除くためだろう。秋山の『戦車』と同じくらい入れ込んでいるようだったから、口に出してハツキリ『キライ』と言われたのがショックだったのかもしれない。

（かと言つてよオオー、『キライ』じゃなくなつたところで、

コイツを『好き』になるかは、また別問題だよなあー）

だが、小さい頃の治せないキズを、コイツを通してちよつとでも治せたのは確かだった。それについては感謝だな、と素直に思う。このために、わざわざ既製品の『ポコ』で

はなく、『なおる』ように作られた『ボコ』を……

(アレツ? つーコトはよ、これってまさか)

この『ボコ』には元の形があつて、それに西住が『手を加えて』から包帯を巻いた。だから、自分のクレイジー・ダイヤモンドで直せた。つまり。

「手作(てづく)……」

無傷のクマにハサミやらカッターやらで切れ目を入れていくニゴツた瞳の西住が、仗助の脳内にデカデカと映し出された。

(『女の子の手作り』ッ!

この甘美な文句からよおおー、

これほどオゾマシイ想像をしちまうとは……)

仗助は着替えもせず、電気もつけたままで布団にくるまった。

「か、考えんのやくめたつと。オヤスミー」

『ボコ』は黙して語らなかつた。

To Be Continued ⇒

東方仗助 ———— この後、『チャイルドプレイ』みたいな悪夢にうなされた。

西住みほ ———— ボコを嫌う人を一人減らせた達成感を胸に、

グニヤグニヤしたスキップで自室に駆け込み、ホクホク顔で寝た。

虹村億泰 ———— 学園艦で買った『モテる男の料理道・一巻』を

顔にかぶせたまま寝た。

武部沙織 ———— ヒドイ反面教師を見た気がしたので、寝る前にチヨッピリ

自分を見つめ直そうと思ひ、結局そのまま寝た。

Inter Inter Mission 『星屑のカケラ、集めます!』

秋山優花里（あきやま ゆかり）は、病院で老婦人に出会った。空条ホリイに連れられて、いるその人の名は、スージー・Q・ジョースターと言った。

「あのツ！ ジョースター、婦人……どのツ」

「シャチホコばらなくていいわよ。優花里さん。

気軽にスージーQって呼んで」

ホリイには今まで言う機会を逸していた。だが、ジョセフの娘のみならず、妻まで現れた今、謝らないわけにはいかない。東方仗助には気に病むなど言われていたが、謝りたくて仕方なかったのだ。

「スージー、Q！ さんツ！ ホリイさんツ……」

「ごめんなさいツ、ジョースターさんが昏睡したのは、私のせいでツ」

だが、言い切ることができなかった。言葉の最中に、スージーQがいきなり優花里の手をとったのだ。

「話は聞いています。我が孫、空条承太郎から。」

あの人から生命をもらったそうね。

練り上げた波紋のありつたけを、あなたに捧げたそうね」

「わっ、私が……自殺なんかしなければッ。」

『私だけの生命で済む』って思ったんです。

私だけで済むんなら、それでいいって……

それが、こんなことになるんならッ！」

優花里は気づくと泣いていた。今日に至るまで、優花里を責める人間はついに誰もいなかった。それだけに、優花里の罪の意識が納得する機会もなかった。罰を与えられてでも楽になりたかったのだ。ジョセフ・ジョースターを死の淵に追いやった事実から。涙が床に二、三滴落ちる。スージーQが、優花里のクセツ毛を撫でた。

「あなたは良くわかってるようね。」

その思い上がりに気づけたのなら、私から言うことは何もありません。

そして……」

撫でた手がそのまま背中に回った。キュツと抱きしめられたことに、少しして気づいた。

「あの人がそこまでするわけだわ。」

怖さに勝って、友達のために生命を賭けられる子だもの。

あなたはやさしい、勇気のある子。正しいことを信じて行える子。

ウチの子に欲しいくらいよ」

「……こつ、困りますよう。お父さんも、お母さんも、いるんですよう」

「それなら、あなたは親御さんの誇りね。

もう気に病むのはおやめなさい。

私も、あの人が生命を賭けたあなたを誇りに思うのだから」

「ふあ……ふえツ……」

そこまで言われては、優花里ももう何も言うことがなかった。いや、違う! 『言葉に
ならない』これが正しい!

言うこと全てが涙に変わり、老婦人の懐に染み込んでしまったのだから。

「コラコラツ、鼻水はヨシなさい鼻水は!」

ローゼス! ポケットティッシュあったわよね、ポケットティッシュ。

さつきもらつてきたヤツ!」

「はい、奥様。こちらに」

「ズツ、ズビばぜエン」

「ホラホラ、鼻カミなさい、チーン!」

「グスツ、チーン!」

少し時間が経って振り返ってみると、まるで孫娘のような有様だった。使用人のローゼスが持ってきた鼻紙を、直接スージーQの手で顔に当てられていた始末。相当ハズかしい。優花里は赤面しながら、さつきとは別の意味で謝る。

「すみません、ご迷惑をおかけしましたッ」

「いいのよ、フフフ。思う存分泣いた後に、笑顔を忘れなければね。

ローゼス！ ソーダのボトルを持ってきなさい、人数分！

さつき3ダース買ったガラスのヤツね……何って言ったっけ」

「はっ、奥様。ラムネのことでございますね。かしこまりました」

人数分というのは、七人分。スージーQとホリイ、それと、優花里を含めたあんこうチーム五人のことだ。戦車というのは一人でも欠けると戦闘にかなりの苦勞を強いられるので、放課後の練習開始を二時間遅って、みんなでここにやってきていた。他のチームには迷惑な話だが、ジョセフ・ジョースターのことであれば、と皆が納得した。むろん、生徒会も含めてだ。

「車にシャンパングラスがあつたわね。アレで飲みましょう」

「念のタメ言つとくケドね、お母さん。

ビンのコーラみたいなのよ、アレ！」

「あら、そうなの？」

「でも、シャンパングラスで飲むのもオイシソーツ!」

「そうよね、ホリイ! 私もそう思ってたのよオーツ」

きやいきやいと母子で盛り上がっているのを尻目に、優花里はあんこうチーム側に合流する。今まで、少し離れて立っていたのだ。みほが、まず迎えてくれた。

「よかったね、優花里さん」

「はいっ、許してもらえましたッ」

「元々、誰もお前を責めてない。気は済んだか?」

「済みました、冷泉どのッ」

「なら、私からも言っとく。あんなマネはもう二度とするな。」

私もキモが冷えた……忘れるなよ」

「忘れません、冷泉どの」

どうでもいい人間には無関心かつ辛らつな麻子が、ここまで言ってくれる。それが、たまらなく暖かい。この人を裏切りたくない。そう思う。

「あーッ 麻子がデレたーッ ゆかりんにデレたーッ」

「やかましい、病院だぞ」

これもちよつとした変化だった。透明な赤ちゃんの一件で沙織に泣きついてからだろう。いつの間にか沙織からの呼び方が、優花里ちゃん、から、ゆかりん、に変わっ

ていた。思えば、出会った当初には拒否感があったのだ。この人には。今まではそれを
感じ取られていたのだろう。

「瞳の曇りが晴れましたね、優花里さん」

「ありがとうございます。五十鈴どの。」

今日から装填がもつと早くなりますよおツ」

「うふふつ、楽しみです。私ももつと技に磨きをかけないと」

華も、一歩引いたところから常に見守ってくれている。実家から勘当されて、自分自
身の悩み事も多いだろうのに、そんなことをおくびにも出さないこの人は強い。そし
て、それを言ったら、みほもまた事情は同じで……

こんなにも私を気にかけてくれる人たちを前に、たとえ『最適解』だとしても、あれ
は『愚か』な選択だったのだろう。また臉が熱くなってきた。これはいけない。笑顔で
なくては。もう充分に泣いたのだから。

「私も行く。いい機会だ」

「えっ、何の話？」どしたの麻子」

今度は麻子が、優花里と入れ替わりになるように歩いていった。病院の中ではマズイ
と思つたのだろう、さわぐのをやめていたジョースター母子は、かしこまった様子の麻
子に居住まいを正した。

「さつき、優花里が謝ったが。

ジョースターさんが昏睡するように仕向けたのはむしろ私だ……です。

『お前のせいで仲間が死ぬんだ』と、ジョースターさんをなじつたのは私です。

あの人は何も悪くなかった。生命を狙ってきた悪党だけが悪かったのに、

私は理不尽な文句をぶつけた……ごめんなさい」

深々と頭を下げて、麻子は顔を上げない。ホリイか、スージーQのどちらかが何か言うまで、ずっとそうしているつもりなのだろう。呆気に取られたようにしていたスージーQが、やがて感心したように手を叩いた。

「あら……あら、まあ！」

クールですましたように見えて、スゴク熱い子なのねえッ！

ねえホリイ、承太郎の学生時代みたいじゃあない？」

「ウン、お母さんの言いたいことはわかるわよ。

でも承太郎は反抗期のマツタダ中だったじゃないのー、

コンナに落ち着いてないわよー」

麻子はじつと、顔を上げずにそのまんま。回答らしい回答が、まったく返ってきていない。多分、かなりイラツとした顔をしているだろう。少しして、イケナイイケナイ、とばかりに麻子の前に立ったスージーQが、顔を上げるように促す。

「謝罪は受け取りました。でも、それこそ気にする必要のないことだわ。

あなたがそう言わなくとも、あの人は優花里さんを助けに行つたでしょうもの。

ですから、理不尽を言つた謝罪のみを受け取ります。あとは無用です」

「そう……ですか。すみませんでした」

「麻子ちゃん、カタイ、カタイ！ 素でイイのよ？」

「ブツキラボウなのはウチの子で慣れてるモノ。私もお母さんもツ」

「ホラホラ、ローゼスがラムネ持つてきたわよ。」

「飲みましょ一緒に！ 皆さんもいらつしやい！ コツチコツチ！」

「お、おおう……」

ホリイとスージーQに引きずられてテーブルのある席に持つていかれる麻子の姿が、まるで『ロズウェル事件の宇宙人』のようだと優花里は思った。

……

「やかましいッ！ うっおとしいぞこのアマッ！」

「アハハハハ、ソツクリ、ソツクリよホリイ！ グーよ、グー」

シャンパングラスに注がれたラムネを傾けながら、今は承太郎の学生時代の話題に花が咲いている。麻子が承太郎の学生時代みたいだ、という発言をキツチリ耳に留めていた沙織が、『興味がありますッ！』と、かなり強硬に聞き出そうとして、ジョースター母

子はイヤがるどころかむしろノリノリでそれに応じたのだ。聞くところ、確かに似ていなくもない。酒もタバコもやりたい放題の大変な不良で、普通なら放校まっしぐらであるのに学業面ではトップを入学から卒業まで突っ走り続けており、誰も文句が言えなかったらしい。むしろツマラナイことで文句をつけた教師の方が二度と学校に来なかつたという。不良の方向性こそ全然違うが、教師を歯牙にもかけない点では同じと言えようか。

「わ、私はそんなこと言わない。おばあを困らせたりはしないぞ……」

冷や汗をかきながら、なんだか少し切ない目をしていた麻子は、直後、沙織に遅刻日数を暴露され、その額を無言で引っぱたいた。それを見てホリイとスージーQはもつとアハハと笑う。

「安心してネ。あの子の心の底にはいつだって優しさがあるもの。」

……スタンドのことがわかるなら、話しちやってもいいか」

そう前置きしてから話されたのは、空条承太郎がスタンドに目覚めた当時のこと。自分の背後にいて、暴力事件や窃盗を繰り返すそれを見た承太郎は、『悪霊に取り憑かれたのだ!』と考え、自ら留置場に引きこもつたのだという。

『俺の後ろに誰かいる。だから俺を檻から出すな』

人をキズつけたくなかつたのね」

「悪霊。それが、承太郎さんのスター・プラチナ……ですかあ」

「承太郎さんには、スタンドを覚えてくれる人もいなかったんだね」

「正直、あの承太郎さんが悪霊くらいでまいってしまうとは思えませんが」

「逆に除霊しそう……って、しようとしたのか。もしかしくなくても」

「当時はみんなと同じ年頃よ。忘れないであげてね。」

で！ コレよコレ。校舎半壊事件！

その後、ジョセフ・ジョースターが連れてきた先生によつてスタンドを教えられた承太郎は、留置場を出て学校に行くが、そこに突如として、転校生がスタンド使いとして現れた。悪い人にだまされて承太郎の生命を狙いに来た彼は、保健室で承太郎に襲い掛かり、激しい戦いの結果、校舎の一角が使い物にならないレベルで半壊してしまったらしい。

「アレはホントに退学の危機だったわねえー」

「ひつ、ヒトゴトみたいにおツシャツてますけどッ！

何そのジャンプマンガー！

「ちなみにコレが件（くだん）のカレね♪」

ツツコミの仕草をしながら騒ぎ立てる沙織だったが、手荷物の中から写真立てを取り出して指差すホリイにアツサリ態度を変えた。ものすごい勢いでそれをブン取る。

「びっ、美形！ イケメン！ スッゴイ耽美ッ！」

女のコみたいに細い腰ッ！ こんな美男、いていいの？」

「落ち着け」

「はぐッ！」

沙織をまた引つぱたいて写真立てを取り上げた麻子は、それを丁寧に机に置いた。砂漠に写る五人の男に一匹の犬。一人はジョセフ・ジョースター。一人は承太郎。十年前だけあつて、承太郎にはまだ少年の面影が感じられる。ホリイが指差していたのは、承太郎の隣に立っている……確かに耽美な美男だった。触れたら砕けてしまうような繊細さを、優花里も感じた気がした。

「確かに綺麗な殿方ですね。」

華美ではなく、内に秘めた気品が見える気がします」

「そうだけど、この髪型スゴイね。」

華さんの、いつも飛び出しているクセツ毛を数十倍にして、

真ん中からヘシ折つたみたいなの……」

「モノスゴイ表現をしますねえ西住どの。」

ま、それ以外に言いようがないですケド」

承太郎とジョセフ以外は、モノスゴイ髪型の見本市だった。犬は除く。これに比べれ

ば、リーゼントなんかありふれているだろう。

「で！ このヒト、今どちらで何をなさってるんですか？」

多分、承太郎さんの友達になってるんでしょうけど！」

復活してきた沙織は、身を乗り出してホリイに聞く。どうも好みのド真ん中に直撃したようだ。それを見たホリイは、やさしく微笑みながらもわずかに俯いた。

「ええ、友達よ。承太郎の大の親友。」

今も毎年、お墓参りを欠かさないくらいのね」

「お墓……」

『整理券16番でお待ちの方、受付までお越しく下さい。整理券16番でお待ちの方

……』

「奥様、お嬢様」

「あら、残念。私から話せるのはココまでね。」

あとは承太郎か、お父さんに聞いてね」

「皆さん、残りは飲んでいってちょうだい。」

後片付けはローゼスに言えばいいからね」

席を立って奥に向かおうとするホリイとスージーQ。優花里としては、置いていかれるわけにはいかない。

「ちよ、チョット待つてくださいいッ」

私達も、ジョースターさんが昏睡から醒めたって聞いて来たんですよおッ

お願いです、一緒にお見舞いしたいんですッ!

だから、練習開始を二時間も遅ってここに来たのだ。優花里自身、当の本人にも謝るつもりでここに来た。ここで帰れでは納得できない。が、ソレに対するスージーQの返事は、優花里の想像を超えた。いや、考えてみれば材料はすでに揃っていたのだが。

「オホン……何を勘違いしているのでしょうかね。」

私があの人のお見舞いに来たと、そう思っていたの?」

「えっ、違うんですかあ? じゃあ、何……」

「私は、浮気をしたフラチ者をトツチメに来たのです。」

いえ、元はタダのお見舞いのつもりで来たのですけれど……

浮気相手の顔をタマタマ見かけてしまったら、

ムカツ腹が収まらなくなりました。血の復讐(ヴェンデッタ)です」

言われて優花里も思い出した。あんこうチーム全員が思い出したことだろう。東方仗助はジョセフ・ジョースターの息子。そして、ここにいる空条ホリイもジョセフ・ジョースターの娘。空条ホリイの母親は、目の前のスージーQ。東方仗助の母親は、この杜王町にいるまったくの別人。そして、東方仗助は、生まれてこの方ジョセフに放つ

ておかれ続けた。なぜか？

その答えが、今の返事にすべて詰まっていた。

「……や、ヤリスギは私が止めるからネー。バーイ♪」

スージーQの後を追って、逃げるように去っていったホリイの後には、

あんこうチームと使用人ローゼスだけが残された。

「つまり。ただの不貞だったのですね。深い事情があるのかと思っていました」

「モノスゴく見損なっただぞ、帰ろう」

「さすがの私も擁護不能ですねえーコレは」

「浮気だけは無いわ。ウン……」

東方くんにはチョット優しくしてあげよつと」

「やめた方がいいと思うな沙織さん。多分、スゴく嫌がるよ。東方くん」

ローゼスがすごく何か言いたそうにしている。長いこと仕えているのだから、無理もないだろうが。だが優花里も含めて、あまり気をつかう義理を感じない一行だった。

「飲みかけのやつ、片付けて帰ろつか」

みほが、ラムネのビンをまとめ始める。片付けは自分が請け負うのだと制止してきたローゼスにはシャンパングラスの片付けだけを素早くお願いし、他はあんこうチームに

割り振っていた。優花里は未開封のピンを任されたので、少しぬるくなり始めたピンを手づかみし、結露の冷気を感じて一息つく。なんだか色々ありすぎたが、まだ戦車戦の練習と、加えてスタンド戦闘の練習まで控えているのだ。目を閉じてもう一呼吸。これで気合を入れよう。

——ラムネが吹き上がった。

何を言っているのか、これでは何もわからないだろうが、優花里にも何が起きたのかわからなかった。ただひとつ理解できたのは、ジェットのように噴射されたラムネが霧になってそこら中に飛び散っている。それだけだ。ワインのコルクを抜いたみたいに、ポンと巨大な音が立っていた。

「ゆ、ゆかりん。何それ?」

「……うううつ、ナンでしようかあ?」

誰かフリまくったんでしようかねえ?

開けてもいけないのに飛び散るなんて、ヒドいです」

「それもそうだけど、天井! 天井見てよ!」

言われるがままに上を見ると、天井に銃創のような穴とヒビがあった。同時に、穴から落っこちてくる何か。目で追うと、ビー玉だ。ラムネのフタの。

「あぁーッ これはッ! これはまさかッ!」

「し、知ってるんですか？ ローゼスさんッ」

この異常事態を前に、知っているような反応を示したローゼスに、みほが聞く。

「旦那さまの、ジョセフさまの一発芸です。」

ホームパーティーで、コーラのフタを飛ばしたのを見たことがあるッ！

今のは、それと同じものかと……」

「つまりは何なんですか？」

『波紋』です。『仙道』の奥義……」

旦那さまは生まれつき、『波紋』を生み出す呼吸ができたといいますが」

周りが騒がしくなってきた。これを一体、どうしよう。ありのままに言うしかないだろう。飲もうとしたラムネが吹き出した、と。目撃者が多すぎる。隠しおおせることは不可能だ。

「聞くことができたな、ジョセフ・ジョースター」

嘆息しながら、麻子がつぶやいた。どのみち今日はダメだろうが、また日を選んで、聞きに来なければならぬだろう……

（というか、どうなってしまおうでしょうか私？）

スタンドだけでもイッパイイッパイなんですが、

イイカゲン戦車さわらせてくださーいッ）

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

⇒

戦車戦にチャレンジしよう！（1）

「うわあああああああああ！」

「ヒギヤああああー……ー……ーッ！」

「グッ、グレート！ こいつはやべえぜッ……」

西住みほ（にしずみ みほ）は、まさか悲鳴を上げられるとは思わなかった。

「さッ……サバトだ！ 『魔女のサバト』だッ！」

こんなおどろおどろしいものがこの世にあつていいのか？」

「とてつもねーぜえッコイツはよお〜」

『死霊の盆踊り』 つつーかよおー、『宇宙人の壁画』 つつーかよおー

何をどうやったらマネできるんだか全ッ然わかんねえー

オレの親父だつてココまでスゴくねえーぞ」

トウルー・カラーズは、スピードも精密性もなかなかのもの。しかし『色をつける』能力には破壊力が皆無である。ならば、と相談を持ちかけてみたのが、今やおなじみ、杜王町の三人。本来なら自分の方が杜王町に下りていくべきなのだが、彼らにやってきてもらっている。戦車道の全国大会が目前に迫る今、練習時間を短くなどするわけにはい

かない。たとえそれが、音石明との戦いに備えるためであつてもだ。

「おいバカッ康一！ 億泰ッ！」

本人目の前にして言うんじゃあねーッ

「で、でもよおー仗助ッ、コイツは『モノホン』すぎるぜえー

ウマイとかヘタとか圧倒的に超越しちゃってんだよコレ」

で、彼らが今、指差して騒いでいるのは何かというと。何を隠そう。自分の書いた絵である。仗助は言ってくれたのだ。

『スピードもあつて、精密に動ける。

それで能力が、色をつける……だつたらよおー

おめー、すでに答え持ってきてるんじゃあねーのか？ 西住よおー』

自分に色を塗りつけて保護色にする。そこまでは発想として持ってきていたが、風景や人物を描いて敵をあざむくのに使うとまでは考えていなかった。言われてみれば確かに出来るのだ。このスピードがあれば数秒とかならない。仗助の提案とは、スタンドに絵を描かせることだったのだ。だから描いた。戦車格納庫の脇の壁一面に、仗助と億泰、康一を。感覚の目を研ぎ澄まして、ありのままを一気呵成に描き出す。花を活けるように、と華がよく言うが、その境地の端っこくらいには達していたと思う。そのくらい集中、没頭しつつも4秒程度で描き上げた傑作だ。スタンドの全力と『私』の全力が

乗った作品、だと思っただが。

「そ、そう、モノホンなんだよ！ モノホン！」

俯いて眉間にシワを寄せていた仗助が、億泰の言葉を捕まえて顔を上げる。何秒間が本気で考え込んでいるのを、みほも見ていた。

「モノホンつつーのはよおー、そうスグには理解されねーもんだぜ。」

はるか未来を見てるんだぜオレ達……たぶん。二千年くらい」

「は、はいっ！ 石器時代の人類に戦車を見せても理解できません！」

それと同じですよおッ」

「それどころじゃねえーんだぜ秋山よおーッ、

オレ達は『ネアンデルタール人』だぜッ

コイツを前にしたらよおー……ッ」

アハハハハハハハ……

仗助と優花里が仲良く両手の平を打ち合わせて大笑いしている。二人とも冷や汗ビツシヨリだった。さすがに、コレを見てみほもバカにはなれない。要するに『現在の人類には理解不能』だと言われた。康一も、億泰も、仗助も、優花里までもが異論なしであるらしい。脇を見る。沙織は、アチャー、とばかりに額に手を当てているし、華は何やら眼に哀しみを宿している。ふと目が合った麻子は、サツと目をそむけた。否応無

しに気づかされる。今まで自分は無形の優しさに包まれていたのだと。

「いいんだよ、ヘタツピって言っても」

「に、西住どのツ……」

「みんなゴメンね。ムリさせてたよね」

自覚している。どんよりとした空気が自分の身から噴出しているのを。気づけばその場に体操座りでうずくまってしまっていた。スタンドを解除して、『壁画』も消える。しばらく誰も動き出さない。気まずい沈黙だけが流れた。少しして、沙織が何やら動くうとして止まる。背後から声をかけられた。

『絵』の評論は置いといてよおー、コイツは戦いには使えねえ……

もちっと別の方向性をよ、追ってみようぜ」

「うん……」

仗助に促されて、ふらふらと立つ。個人的な感傷で無駄にする時間などないのだ。

「つーわけでよ、おめーのトゥルー・カラーズ、

素でどれだけ強えーのか見てみるぜ」

「素の強さ？ 能力をヌキにした基本性能のことかな」

「そう、承太郎さんのスター・プラチナとかよ、

おめーの言う基本性能だったらブッチギリだぜ。

多分、戦車もバラバラにできるぜ……おめーのスタンドはどうかな」

クレイジー・ダイヤモンドを出して構える仗助。突然すぎる。みほの心の準備は出来ていない。

「えっ、殴りあうの？ 今から？」

「イキナリはやらねえぜ。防いでやるから全力で来なよ」

トウルルー・カラーズを出して、みほも構えはするものの。殴っていいと言われても、これまたなんともやりにくい。相手がロクデナシでも何でもなく、友達だったらなおさらのこと。

「西住、おめーよ。『絵』にコツソリと自信あつたらろ？」

「うっ……」

「コケにした野郎が目の前にいるぜ。」

ぶつけて来いよ、ムカつきをよおおーッ

それとも何だよ、ダメッって言われっぱなしかよ。

かかってこいよ！ 悔しけりやあよおおーッ

だがさすがに、ここまで煽られればムツとする。こちらに立てた人差し指でチョイチョイと招くように挑発する仗助に、みほはトウルルー・カラーズを全力で向かわせた。狙うのはボディーブロー。

「うぐうつ、わかつてたが速えッ！」

狙いを外すことなく、トゥルー・カラーズの拳は直撃する。防御に出てきたクレイジー・ダイヤモンドも防ぎきることはできず、鳩尾に入った。思い切り入ってしまったか。みほは少し慌てたが。

「だがよおー、効いてねえぜ。ヘッピリ腰すぎんだよ西住ッ！」

トゥルー・カラーズの腕がガシリと掴まれた。クレイジー・ダイヤモンドはそのまま、トゥルー・カラーズの左肩に拳を打ちつけてくる。同時に襲ってくる、みほの左肩への衝撃。鈍い痛みが遅れてやってきて、咳き込む。

「み、みぼりん！ 殴んないって言ったじゃない、ウソツキーッ」

「こいつは気合だけ。あんまりフヌケた攻撃してくつからよおー」

立ちなよ……オメーその程度かよ。ナメてんじやあねえぞ」

引き戻したトゥルー・カラーズをもう一度放つ。今度は肩口を狙った蹴りだ。速さと威力が充分に乗れば、防げまい。だがそれもあっさり止められた。掴まれた足を振り回されて、トゥルー・カラーズが地面に叩きつけられれば、みほも同時に宙に浮き、背中をしたたかに打ちつけた。

「ッゲホ！ ゲホッ、ゲホッ」

「攻撃されてるぜ西住！ このままじゃやられるぜ。反撃しろよ」

一発イテのを叩き込めってコトツスよ」

みほは、何度も何度も殴りかかったし、蹴りかかった。それを十数分も繰り返した結果、腕が脱臼した。制服もボロボロになった。結局、仗助は全てに対してキツチリ反撃を浴びせてきたのだ。

「免罪符、のつもりだったんだがよおー、

あんましコイツがためらってるモンだから、

『危機』を感じりや本気出すと思つてよ」

「なら最初っからそう言いなさいよ！

結局みほりんイジメてたダケじゃないツ」

「悪かったツス……」

沙織は怒り心頭である。最後まで黙って見ていたが、みほの腕が外れるなり仗助に直接殴りかかっていった。我慢の限界だったようである。クレイジー・ダイヤモンドをはずにそれをいなしした仗助は平謝りの一手だった。

「だがよ仗助、こりや無理じゃあねえーか？

ブン殴つても最後までコブシを振りぬけねえーんじやあよオオー

ケンカしたくてもデキねえーぜえ〜」

「西住さんとしては本気だったのかもしれないけど、

攻撃が当たった瞬間にひるんじやってたからなあー……

でも、ぼくだって思いっきり振りぬけないよ。

「仗助くん相手にはさあ〜」

戦いが終わったのを見て、億泰と康一もやってくる。やはりスタンド使いとしては先輩というだけあって、よく見られていたらしい。当たったと確信した瞬間に、動揺を努めて抑えていたのだが。

「おめーはいいんだよ康一。オレ達とは根本的に戦い方が違うんだからよ。

やっぱし近距離パワー型の基本は殴り合いだと思っからよお〜、

ソコ練習してーんだよなあ〜」

「だからつつつて出来ねーことやらせるかよ仗助エ〜ツ

殴れねーつつーんならよ、それこそ康一のエコーズみてーによ、

能力で戦った方がいいんじゃないのか？」

「ウーン……そいつもひとつの考えかもな」

仗助がツカツカと歩み寄ってくる。クレイジー・ダイヤモンドを出して、その手がみほの額にピタリと当てられた。ウンと頷くと、治す波動がやってくる。脱臼した腕も、あちこちの擦り傷も、少し破れた制服もたちまち元通りになっっていく。

「そこはおめー次第だぜ、西住。」

殴り合いが出来ねーなら、オレ達がそこをカバーする！

おめー自身がチリ・ペツパーの野郎と殴り合える力を望むかどうかだぜ」

「……望むよ。望むから来てもらったんだよ？」

でも、人を殴るって、想像以上にツライね」

精神と危機感との両方をあれだけ煽られまくってもなお、みほの拳は相手を打ち抜くのに抵抗を覚えてしまっていた。無理に意識から外さなければならなかった程度には。相手の嫌がる攻撃を瞬時に判断し、実行に移せる。だからこそ、相手の痛みを感じてしまい、最後の瞬間、威力が鈍る。生身同士の戦いであるために、みほは想像しなかった苦難を強いられた。赤ちゃんを奪ったヤクザたち相手には、まるで考えてもいなかったことだ。あのときはスゴく必死だったのもあるかもしれないが。

「フツーだったらよ、おめーのその感覚！

恥じるトコはドコにもねえーんだがよ……

ま、その辺を認識できただけでもイイ練習だったかもな。

今日はよ、ここまでにしようぜ。やるんだろ？ 戦車道をよ」

「おっ、始めんのかよ？」

実はよおー、一度くらいは間近で見てみたかったんだよなあー」

「バカ野郎、帰んだよオレ達はッ！

部外者が女子高に入り込んでんだぜ〜ッ

そど子が見ないフリしてくれてっからイイけどよおー、
限度があるだろうがよ」

「そ、そつか！ 考えてみりゃオレたち、相当オイシイ……

殴るこたねーだろ、チキシヨオ〜ッ！」

園みどり子が前回の一件でスタンドのことを知り、音石明事件をも知った今ではほぼ完全に味方についてくれ、渋々ながら仗助達の校内侵入を手引きしている。彼女達のためにも、スタンド戦闘訓練の三十分は無駄にできなかったのだが。

「強くなれるのかなあ〜、こんなことで」

億泰の耳を引っ張りながら帰る仗助と、それを追いながら手を振る康一とを見送りながら、弱気が口から漏れてしまった。

「今回は褒められませんよ。みほさん。」

技を教えようとしてくれている師匠を、侮ったようなものです」

華が、ややきつめに諫めてくる。

「華さん、ホントにスタンド見えてないの？」

「ええ、見えませんよ。でも、腰が引けていたのはよく見えました。」

迷った攻撃は効きません。みほさんもよくご存知のはず」

発端は、みほが仗助に『ボコられグマのボコ』をプレゼントしたこと。昨日もらったクマちゃんのお返しと、古い傷跡をほじくり返してしまったお詫びを込めてだったのだが、どうやら、億泰にはそれ以上の意味に受け取られてしまったらしい……『オレもモテたい』だとか何とか。みほとしては、こんな場に居合わせても頭をポリポリ掻くことくらいしかできない。

「あらあら」

「虹村どのツ……ウウウツ 見てて涙がチヨチヨギれますウツ」

「よく見とけ、反面教師だ」

「うぐつ、スゴク反論したいのに。うぐつ……」

イタズラツ子を見守るように微笑んでいる華を除けば、皆がそろって微妙な顔をしている。優花里に至っては、とても残念な顔で泣いていた。さすがに誰かケガをしそうなのでそろそろ止めたいたのだが、とても割って入れない。動くに動けずいるのに飽きたのか、沙織がクルツと後ろを向く。

「広瀬くーん」

「うええッ！ ボクう？」

「止めて。アレ」

「ムリムリムリムリ！ どうしろってのさッ！

ハサまれてペシヤンコになるダケだよおーっ

というかさ、ほっときやいいよ！

いつものことだよ、ワリとね……」

「いつものこと、ねえ。男の子って、やつぱりバカなの？」

「どうかな。女の子だって、時にはとんでもないバカになるじゃあないか」

「……えっ、何その含蓄のあるセリフ。恋愛経験アリ？」

「え、いや。アレは特殊すぎるダケ、かも……」

「オネーサンに聞かせて聞かせて」

そして、止めさせようとしたはずが、ものの見事に脱線。恋バナのにおいを嗅ぎつけた沙織はイソイソと康一に詰め寄っていく。麻子も、くだらない殴り合いよりはマシかとばかりに沙織に続き、やがて華もそちらを向いた。佳境に入ったラツシユ合戦を、今は優花里だけが手に汗を握って見ている。これはもう仕方がない。あまりやりたくはなかったが、トゥルー・カラーズで止めよう。決心してスタンドの拳を前方に突き出す。だが、その一撃が放たれることはなかった。

「何をしているの、あなたたち。というより……何よ、アレ？」

いつの間にか現れたその人は、戦車道の教官。蝶野亜美（ちようの あみ）だった。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

⇒

戦車戦にチャレンジしよう！（2）

蝶野亜美（ちようの あみ）は、大洗女子学園の戦車道教官。だがそれ以前に自衛官である。ひとたび有事あらば、その身を剣とし盾とする覚悟は出来ている。そんな彼女にとって、先週末からのここ一週間は面白いものではなかった。

（『何か』隠されてる。蚊帳の外に置かれてる）

土曜日にあった戦車ジャック事件は、財産目当てに大富豪ジョセフ・ジョースターを狙ったチンピラの仕業であり、容疑者である音石明の顔写真がすでにあちこち貼り出され、ニュースでも報道された。だが、戦車で悪事を働こうとする輩が出ることなど、とうの昔から危機感を持って備えられており、そうしたセキュリティのことごとくを破つて侵入してきた者が、ただのチンピラとは思えない。なにしろ、件の男は監視カメラにすら映ることなく、戦車道の格納庫に突如として現れているのだ。

今回の事件にあたり、亜美は戦車の管理不行届きを疑った。戦車道履修者一同に、自分達が何を扱っているのかを思い知らせる方向で、かなりキツく指導するつもりだった。そのために、柄でもないことは承知で、どこにエラーがあったのかを確認するべく事件の全容をひっくり返していたのだが。確認してみると、戦車が奪われたのは戦車道

訓練の準備中。戦車に弾薬を運び込んでいる最中、格納庫内が無人になった一瞬を狙われていた。つまり、施錠忘れの類ではなく、戦車道履修者の皆に非はないことになる。むしろそんな隙を伺えるまでに部外者を侵入させ、接近させてしまった学園のセキュリティが問題だろう。そう考え、生徒会にかけあつて、当日の監視カメラの映像をすべて見た。穴が空くほど見た。不審者は誰もいない。せいぜい、大富豪ジョセフ・ジョースターその人が、孫その他の付き添いと一緒に生徒会室に入つていっただけだ。風紀委員を中心に聞き込みもした。音石明を見た者は誰もいなかった。

いよいよおかしなことになつてきた。これでは、容疑者たりえるのはジョセフ・ジョースター周辺の人間のみ、ということになる！

そして生徒会室の監視カメラのみ、途中から動作不良で映像がブツツと途切れ、最後に映っているのは彼らがお茶を飲んでいる姿。不自然すぎる。これだけ見ると、他ならぬ彼らが容疑者だとしか思えない。だが、時系列を確認すると、戦車が奪取されたのは、彼らの映像が途切れる数分前のこと。彼らのうち誰一人として生徒会室を立ち去つていない以上、彼らの犯行は物理的に不可能だ。それがかえつて亜美の不信感を増幅した。この事件、最初から最後までただならぬことしか起こっていないのではないか。映像が途切れた生徒会室で何があつたのか、また聞き込みを行うと、おそるべき証言が複数出てきた。

『生徒会室に砲弾が直撃して破壊されていた。』

だが次の一瞬で、何事もなかったように元通りになった」

一人だったら世迷言で済ませることもできただろう。だが証言者は三人いた。そんなバカな話かと、切つて捨てることはできなくなった。確定だ。戦車道履修者の皆と生徒会は、自分に何かを隠してる。それも、常軌を逸した何かを。亜美は、再び生徒会会室に立った。不敵な目をした小娘相手に、調査の成果を叩き付けた。

「ココまで一人で調べたんだ……スゴいねー蝶野さん」

「スツトボけないでッ！」

私は教官よ。あなたを含め、皆にケガをさせない義務があるッ

なのに、ワケのわからない隠し事をされちゃあ……

取れないじゃあないのッ、責任が！」

これでもなお、生徒会長の角谷杏が鞆晦を繰り返すようなら、本気で外部から専門家を呼んでくるつもりだった。イイカゲン頭痛がイタイ毎日がイヤになっていった。値踏みをするように見ていた角谷杏は、1秒未満だけ真面目な顔になってから、言う。

「今日の戦車道の練習、開始三十分前に格納庫へ行ってみてください」

「……何の話？」

「私が直接口で話すより、現物を目で見てもらった方が

よっぽど説得力があるって話。

ジョセフ・ジョースターの仲間達と一緒にいますんで、あしからずー」

「ジョセフ・ジョースターの仲間達？

あの不良だか何なんだかワカラナイ奴らが？

部外者を学園に入れてるっていうの？

あのリーゼントを見ていて、風紀委員は何やってんの？」

襲撃されて沈没した『トライフック号』からジョセフ・ジョースターが救助された当日ならばいざ知らず、今日に至るまであの独創的な不良どもが学園内を出入りしているというのなら、風紀委員の仕事ぶりは怠慢以前の問題だ。杏はそれを聞いてプツと吹き出し、吹き出した笑顔のまま先を続けた。

「部外者じゃあなくて、仲間です。

彼らを引き込めて安心してるんです、生徒会長としてはね……

彼らなしで音石明と戦うなんて、

生身で戦車にケンカを売るようなモノだもんねえーホント」

「何を言ってるのかサツ……。パリわかんないけど、

格納庫にあるというのね。その答えが」

「ありのままに受け入れてくださいいねー蝶野さん。

彼らの話にウソやトリックは一切ない。

ここまで調べたあなたならわかるはず」

こいつがここまで言うのだ。何も言わずに信じよう。自分はこいつを知っている。『背後の事情』を知っている。こんなクダラナイことで、信頼を失うバカげたマネをするわけがない。

そして待った。放課後を！

大股でズカズカ廊下を進み、格納庫近くまでやってきてみれば、謎の地響き、衝撃音！

明らかに戦車のものではない。重機の類でもない。だのにこのパワーは何だ。音が響いてくるのは格納庫の裏。辿っていけば、あんこうチームの姿が見えた。この異常事態にもかかわらず、なにやら談笑している。その中に、よく見ると男が一人。チビッコの少年……思い出した。ジョセフの仲間のうち一人だ。聞き耳を立ててみると、武部沙織にこの騒ぎを止めろと言われ、無理だと返答している様子。内容の割に危機感がまったく見られないが、すぐそばに騒ぎの元凶があるのは間違いない。もっと近づいてみると、ますます意味不明になった。奥にはさらに男が二人。あれは『独創的な不良』二人。リーゼントと、顔面の堀が野球ボールみたいな奴。どちらもジョセフの仲間だったはずだが、今は向かい合って何か怒鳴りあっている。そこまではいい。理解できないのは、

そいつらの間で発生している何かなのだ。猛烈な打撃音が無数に響き渡っており、壁や地面にきしみを上げさせる何かが、そこで起こっている。見てもさっぱりわからない。何も見えないのだ。なのに空中で何かが殴り合っているような音だけが聞こえる。その少し手前にいるのは、秋山優花里と、西住みほ。彼女らは一体、何を目で追っているのだ？

常識と非常識を脇に打つちやつて考えていると、みほが何やら腹を決めたように男達の方へ歩を進める。よくわからないが、それは自殺行為だ。もう黙って見ているのは無理。

「何をしているの、あなたたち」

場に入り込んでいくと、言葉が発する前にみほが気づき、それから全員の視線が一気にこちらへ集まった。二名を除いて。

「というより……何よ、アレ？」

ロゲンカに並行して進む『何か』に夢中になっている不良二人を指差し、皆に問う。それ以外にどうしようもなかったのだが、なんとも間の抜けた空気になってしまう。全員の視線が、右に左にと泳ぎまくっている。五十鈴華だけは、首元に指を当てて考え込む仕草をとったが。

「ンツ？ オイ億泰ツ！ ここまでだぜツ」

「ナニがココまでナンだよオオオーツ

ンなムシのイイ話、聞くかつつー」

「ヤベェんだよツ！ 無関係のヤツに見られてるぜ！

多分もうごまかすのは無理だぜ！」

「おおツ？ アツ！ 誰だ、あのネーチャン！」

戦車が動くつてのにこんなトコによおくく、アブねーぜえ」

不良二人がケンカをやめたのはいいが、野球ボール顔が人様のことを指さしてきた。

しかも一から百までコツチのセリフなことをのたまった。

「誰だと言われりや答えるわ。」

陸上自衛隊、富士教導団戦車教導隊所属。蝶野亜美一尉！

そういうあなたは一体ドコの誰ツ 答えなさいツ！」

「じつ、自衛隊イイツ？ マジもんの軍人さんかよくく」

「質問に質問を返そうモンなら殴るわよ。」

名乗りなさいツ、不審者としてボコられたくなかつたらね」

「怖ええくくツ！ このネーチャン超怖ええくくぜえくくツ！」

「イイカゲンにしとけ、このボケツ！ このままじゃ、まじに殴られるぜ」

正直、『ブン殴ツちやつてもいいや』とか思いかけたが、リーゼントの方が居住まいを

正して向かい合ってきたので我慢する。少し遅れて、野球ボール顔も起立の姿勢になった。

「ぶどうが丘高校1年、東方仗助ツス！」

「ぶ、ぶどうが丘高校1年、虹村億泰でエエーツス！」

そこに、おそろおそろもう一人が加わってきた。あんこうチーム側に混じっていたチビッコ少年だ。

「あの。仗助くん達と同じ、ぶどうが丘高校1年の、広瀬康一、です」

「フウ、よろしい。」

言われる前に自分から出てきたのはグッドよ。広瀬康一くん」

「あ、ありがとうございます……ウレシイです」

ササクレた心が癒されたので、思わず彼の頭をナデそうになったが自重した。自分自身に置き換えて考えれば、やられてもまずウレシくあるまい。

「さて、ソコの悪ガキ二人に聞くけど。」

『音石明』の戦車ジャック事件。わかってること全部話さないよ」

「は、はいっス……でも、ひとつだけ確認させてくださいよ」

リーゼント、東方仗助が指を一本立てつつ聞いてくる。虹村億泰と広瀬康一とが何か言いかけていたが、二人ともそれでやめた。言うまでもないことだが、悪ガキ二人とは

東方仗助と虹村億泰のことである……

『音石明』について、会長さん……生徒会長の角谷杏さんに聞きましたか？」

「聞いたわ。そこで、戦車道練習開始三十分前に格納庫に行けと言われた」

「わかつたツスよ、蝶野さん。なら話します」

どうやら、当事者以外にはできうる限り知らせたくないのは彼らも同じであるようだ。情報を知っている相手かどうか確認を取ってきたのは、大変よろしい。強いて言えば、生徒会長その人の同席を求めてくれれば満点だったが、そこまでは言うまい。そして、一部始終を聞く。

『矢』に選ばれた人間に発現する超能力、一般人には見えず聞こえない『スタンド』。虹村億泰の兄を殺害して『矢』を奪い取り、勝手気ままな暴力に手を染めたギタリスト、『音石明』。『音石明』のスタンドは、電気を操る『レッド・ホット・チリ・ペッパー』。『レッド・ホット・チリ・ペッパー』の本体を探せるスタンドを持つジョセフ・ジョースターは、そのために来日した。自分の正体にたどり着けるスタンド使いの存在を知った音石明は杜王港でジョセフの殺害を図り、仗助達に阻止される。だが音石明は諦め悪く、ジョセフを救助した大洗女子学園に乗り込み、今度は戦車砲での爆殺をたくらんだ。その過程で西住みほと秋山優花里の二名が『矢』に選ばれてスタンド使いとなる。秋山優花里は、音石明に人質にされた。仲間達が言いなりにされることに耐えられなかった秋

山優花里は『矢』で自殺を図ったが、ジョセフの『仙道』により生命力を与えられ、辛うじて生き延びた。最終的に、東方仗助達と大洗女子学園戦車道を前に音石明は敗北するが、スタンド能力を強力に成長させて逃げ延びてしまった……

亜美は、これらを事実であると信じた。信じるための材料はすでに揃いすぎている。信じた彼女に、次に襲ってきた感情は、抑え切れない怒りだった。音石明に対する怒りはもちろんだが、それ以上に。脇の石壁を殴った。手加減などない。拳が破れて血がこびりつく。

「事情は、まあ、わかった。ところで、他に『矢』はあるの？」

「ちよ、蝶野さんッ、あつたとして！ それで一体何をッ？」

「選手交代、私が戦う！ これ以上ない屈辱よ……」

かわいいう教え子達が、マセて生意気な年頃の子供達が

殺されそうだっていうのに。

それどころかマジに死にかかったっていうのに！

私だけが！ 他ならぬ私だけが知らされもしなかったッ！

拳がひしゃげた痛みすらも感じない。亜美は自身が極度の興奮状態にあることを自覚した。言葉を飾らずに言うならば、腹ワタが煮えくり返って止まらない。

「蝶野さん……無理ですよ、そいつは。」

『矢』は億泰のところにあつた一本きりしか知らねえーツスからなあー」
「そう。じゃあスタンドとやらは頼れないのね。なら銃しかない……」

あなた達は帰りなさい。あとは私がどうにかするわ」
「どうにかつて、どうするつていうんですか教官ッ！」

銃ごときでどうにかなる相手じゃあないんですよおッ

『レッド・ホット・チリ・ペッパー』はッ！」

「子供が出しやばるんじゃあないッ！」

命がけの戦いなんか、あなた達には必要ないのよ！」

かなり素直で従順な部類に入る優花里にまで反論され、さらにヒートアップ。こんな子が悪漢に痛めつけられ、一度は自殺を決意した。それを思うと、理性すらもこの怒りを肯定してくる。肯定してくれた理性の言葉を、そのまま吐き出す。

「私は……教官よ。みんなを守る。」

そして、自衛官よ。守るために戦う！」

そのお仕事で御飯を食べてる。税金で養われてる。

だから、あなた達は日常に戻りなさい。

それは、あなた達が受けて当然のサーブスだわ」

そのまま踵を返し、立ち去る。すぐさま生徒会長に掛け合つて、監視を付けなければ

ならない。無茶な行動をさせないように、もしくは殺人者を近づけないように。学園艦内が安全だというなら、出さないようにするしかあるまい。殺人者との間に因縁を持ってしまっている男子三人も、どうにかして一時的に学園艦に編入しなくては。そんな考えは中断された。進める足が広瀬康一にぶつかったのだ。

「ごめんね。どいてくれない？」

「……シツレーですけど。全部お断りします。

蝶野さんの言ってるコト、全部です」

「だからねえ」

「億泰くんのお兄さんは、音石明に電線で焼き殺された！

仗助くんのお母さんは、殺人予告されてる！」

そこまで大きい声ではなかった。スゴイ剣幕というわけでもない。だが、亜美は彼を押しつけて進めなかった。見た目通りの小さな身体に、まるで『重さ』が凝縮しているようだ。

「じゃあ、ぼくは誰なんだツ？ お父さんか？ お母さんか？」

お姉ちゃんかも知れないツ

ぼくの大切な人たちがおそろしい目に遭うかも知れないのに、それをホッポツて日常に戻れだつて？ ふざけるなよツ！

ぼくは戦いをやめないぞ。絶対にやめませんからねッ」

どうやら彼らを軽く見ていたらしい。というよりも、自分自身の怒りにかまけて、彼らを省みなかったというわけか。持論を曲げるつもりはないが、すぐに反論できなかつた。彼の言葉とフアイトに、思わず感銘を受けてしまったからだ。

「私も、広瀬くんと同じ気持ちです」

みほが、広瀬康一の隣に立つ。麻子がそれに続いた。優花里が、沙織が、それに続いていく。

「広瀬に同意する」

「私だつて守りたいんですよッ、お父さんもお母さんも」

「マジメな話、今更、傍観者には戻れないよね」

東方仗助と虹村億泰もやってきて、同じように進路をふさいだ。

「カアアーツ、康一まで女の前でニクイコトやるとはよおおーツ

だが、ありがとよ。オレだつて兄貴の仇は誰にもゆずれねえからよ」

「グレート。やつぱり康一はよ、康一だよな。へへッ」

最後まで考え込む仕草を保っていた華は、ひとつ頷いてから、やはり前に立ちはだかつた。

「感情的な部分は皆さんに譲りますが、

それを置いて、私達にはもう戦う以外の道はありませんね。

「引けばただ、無抵抗のまま殺されるだけですもの」

結局、全員が教官の意向に従わないわけだ。不良は改造制服の二人だけだと思っていたが、いやはや、これは。亜美は内心で苦笑しつつも、悩みの方向性が別方面にシフトしたのを感じ取った。一緒に戦おう。代わりに戦うのではなく、あくまで皆の傍に立とう。そのためにも、このくらいのがままは許してもらおう。

「……それなら、私を納得させてちょうだい。戦車道でね」

T o B e C o n t i n u e d ⇒

戦車戦にチャレンジしよう！ (3)

広瀬康一（ひろせ こういち）はイヤな予感をピンピン感じ取っていた。

「あ、あのー！ どーいう意味ですか。戦車道で、納得、つて……」

記憶が正しければ、戦車道は女の子の競技であるはずだ。正直なところ、あんなものを使わせて女の子にガチンコ対決をやらせるのは理解に苦しむ気持ちが大いぶあるが、それとコレとは話が別だった。

「言葉の通りよ。あなた達にもやってもらうわ、戦車道」

「うえええーッッ チョット待つてよ蝶野さんッ！」

ぼくは女の子じゃあないし、仗助くんや億泰くんはもつと違う！

あんまりにも無理がありませんッ」

「音石明はその無理を通してきた。

だったら、こちらでも無理で対抗するまで。違う？」

康一は、自分の顔色がサーッと青くなつていくのを感じた。顔写真つきで戦車ジャック事件の容疑者として報道された音石明は、今やお茶の間で『サイテーの卑怯者』として、風呂ノゾキの常習犯みたいな扱いをされている。戦車道の戦車となれば、ある意味

で女の子の部屋だ。そこに男が踏み込んでイジリ回すのなら、タンスの中身を引つ掻き回してパンツを盗むみたいなものだ！

以前、救急車代わりに乗り込んだ『38t』は別として、今度は競技として戦車に乗り込めと言うのか？

「そんなゲロ吐きそうな顔することないわよ、広瀬くん……」

自衛隊では男性の隊員も普通に戦車戦の訓練をするわ。

『搭乗員の女の子がみんな死にました。もう戦車は動かさせません。降参です』
なんてことにならないためにね」

「そッ……そうではなくて！

それ以前にですよ？ ぼくらが戦車に乗ってどうするんですかッ

まさか、『チリ・ペツパー』と『戦車道』で

戦うっていうんじゃないでしょうね？」

「イグザクトリィ！ その通りよ」

「あ……ありえないッ！

そんなもの、付き合う義理がないッ！

音石明からしてみれば！」

思わず絶叫までしてあきれ返った康一である。戦車なんかには乗り込んで挑もうもの

なら、前回の優花里よろしく戦車ごと人質だ。この人は話を聞いていたのか？ 電気を操る能力だと言ったのに！

だが蝶野亜美はそんな様子に対してかまいもせず、首だけをみほに向けて聞く。

「一応確認するけど。ウチの子たち……大洗女子学園戦車道の子たちだけだ。」

この一週間で、親族に不幸があつた子が、一人でもいた？」

「いいえ。そんな話はありません。欠席した子だつていません」

みほの即答を得て、周囲を見回し、この場の全員と一人ずつ目を合わせてから、蝶野亜美は話し出す。

「胸クソ悪いこと言うけど、ちょっと我慢して最後まで聞いてね」

いわく。電気を操る能力で、電気のあるところをどこでも攻撃できるといふのなら、盗んだ河嶋桃のケータイを手がかりに、戦車道関係者の実家を次々に襲撃していくのが、単純に考えればもつとも効果的で効率的だ。それだけで連携はガタガタになるし、家に戻りたがる子が確実に出てくる。そうやって離れた子や、疑心暗鬼になった子を一らずつ暗殺して回れば、誰がどんな対策をしようが防ぎようがない。大洗女子学園戦車道は、それで申し訳ない。かくいう蝶野亜美自身も、そんな攻撃をされたらイチコロであらう。防人の端くれとして、家族が狙われても、許可もなく持ち場を離れることはない。が、その場合、家族を見捨てた十字架を否応なく背負うことになるのだ。

「でも、現実として。音石明は、そんな手段を取っていない。

さっきの西住さんの答えがその証明……なぜだと思う?」

「スタンドの回復を待っているから……は、違う!」

ぼく達スタンド使いを相手にするならともかく、

一般人相手だったらそんな必要すらもない。

なのに、手つとり早い手段をとらないのは、

あえてやらないワケがあるから!」

「そう。そしてそのワケは、多分とっても単純。プライドよ」

「プライド?」

オウム返しに聞き返すと、後ろで億泰が反応した。

「アツ、わかった! 蝶野さんが何言いたいのか、わかったぜえ」

「言ってみて」

「音石のヤロオは『大洗女子学園』の『戦車道』に

してやられちまったんだからよ。

チマチマ一人ずつ殺して回ったりしたらよおー、

『勝てないんでズルく殺します』つつつてるようなモンだよなあー

勝つにしてもそれじゃあ満足できねーぜえ、

同じ土俵じゃあねーとよオオオー」

そんな単純なことか、と思ったが、蝶野亜美は満足げに頷いている。どうやら彼女の答えもコレであるらしい。そこへさらに華が続いた。

「音石明は、力を蓄えたら招待状を送ると言っていた。『私達』に。」

そうでしたよね、虹村さん」

「ん、おう。間違いねえーぜえ」

「つまり、音石明にとつては私達も倒すべき敵であり『試練』ッ！

再戦の機会もないままに私達を一人ずつ暗殺すれば、

敗北の屈辱を雪（すす）ぐ機会は永久に無くなるというわけですね。

私達ごときを恐れたという重荷を引きずり続けることになる……

充分に納得できるお話です」

冷静に聞いていると、言っていることは億泰とあまり変わっていない。なのに、思わずウンウンと頷きそうになるのは、彼女の雰囲気のなせる業か。クラスにいたら、学級委員とか引き受けてしまうタイプに思える。しかし、学級委員の発言に、ハミ出し者の優等生……麻子が噛み付いた。

「私はあまり納得できないな。」

そんな殊勝な人間性を、アレにどうやって期待するんだ？」

「あの男のギターにです。素人にもわかるほどの妙技だった」

「……だから?」

「戦車の運転には、まるで思い入れが見られなかったのに。

かき鳴らしたギターは『自分こそが本物だ』と叫んでいた。

私とて、華道の境地を探す身です。上っ面だけの偽者はすぐにわかります。

『本物』の誇りを持つ人間が、『雪辱』を果たさないはずがありません。

だから私は納得します」

揺らぎもしない華の瞳を見て、麻子は、そういうもんか、とだけ残して下がる。今度は康一も納得できた。人間性はともかくとして、音石明のあの演奏。プロフェッショナルだった。康一も素人なので論評など出来ないが、少なくとも自分のテクに欠片ほどの疑いも持っていないなかったし、実際、おそるべきパワーだった。彼だけのライブ会場を幻視させるほどだ。きつと仗助だって同じものを見ている。確かめるように彼の方へ視線をやると、ちょうど話を進めようと促す姿があった。

「話、戻すとよおおー、蝶野さん。」

音石明は、スタンド使い、プラス戦車道で挑んでくる……

そう言いたいってことでいいッスかね?

オレ達と西住達、両方にリベンジするためによオオー」

「ええ。戦車道の方をどこでどう揃えてくるかはわからないけど。

多分、ここ以外の学園艦でしょうね……

乗り手も揃えなきや意味がないから、

かなりロクでもないことをやらかしそうね」

「そつちは承太郎さんにお願いとすとして。オレ達は何をすればいいんすか？

そこをまずはつきりさせてくださいよ」

『承太郎？』とハテナマークを浮かべた蝶野亜美だったが、すぐ気にしないようにしたらしい。思いつきを楽しそうに開陳し始めた。

「あなた達には明日、戦車で模擬戦をしてみらうわ……おつと、心配は無用。

皆まで言うな、よ。言いたいことはよくわかる。

戦車を操縦しろとは言わないわ。

ただ、スタンド使いとして戦車に乗り込んでもらう。それだけよ」

「で、蝶野さんをどう納得させりやあいんすか？」

「ただ全力で戦って欲しいだけ。あなた達の本気が見たいの。

あなた達なら、セコイ戦車ドログときには負けない。そう私に信じさせて」

「アバウトスねえー、勝利条件がわかんねえーぜ」

「そう言わない。あくまで大洗女子学園戦車道同士の模擬戦だから、

勝つのも大洗女子学園、負けるのも大洗女子学園。

「勝った方だけ音石明と戦って、負けた方は補欠なんてワケにもいかないでしょ？」
「そりやそうだよな。」

オレ達が認められるか、認められないか。それだけのことか……」

「……って、やる気なの？ 仗助くんッ！」

トントン拍子で話が進んでいくのに、康一が突っ込むのがやや遅れ気味になった。戦車道が必要なのはわかった。だが、やはり乗らなければいけないのか。仗助は、逆に論ずるように言う。

「考えろよ康一。オレ達は戦車をよく知らねえ……」

どっかで勉強しとかねーとやばいぜ。

音石明が使ってくるつつーんならよおー、身をもって知つとかなきゃあよ」

確かにそうだった。前回、『4号戦車』に乗り込んだ音石明に自分のエコーズは手も足も出なかったのだ。装甲の隙間を見出すこともできず、音石明に音を貼り付ける手段が最後までわからずじまいだった。このままでは、来たる決戦にて、自分ひとりが役立たずに成り下がってしまいかねない。

「グッド。その心構え、なかなかポイント高いわよ」

「で、どういう模擬戦ツスか？」

「まだ細かくは決めてないけど、

西住チームVS東方チームで戦ってもらおうつもりよ」

「そいつは、大洗女子学園のスタンド使いVS杜王町のスタンド使い。

ってコトツスか」

「そう。西住チームは戦車道の経験で勝り、

東方チームはスタンドの経験で勝る。これでイーブンだと思わない？」

「今度はオレ達にも戦車がいる、か。

スタンドと戦車の連携なんて考えたこともねえーが！

面白え、やるツスよ蝶野さん！」

「そう来なくっちゃ。って、アイタタタタタタタッ！」

仗助の快諾に、親指をグツと立てて応えようとした蝶野亜美は、右手から血をボタボ

タ垂らして悶えている。今頃、さつき壁を殴った痛みを認識したらしい。

「あつ、オレも忘れてた。さつきハデにブツ叩いてたツスね……」

せつかくだから経験してってくださいッス。『クレイジー・ダイヤモンド』」

仗助が手を伸ばせば、あとはお馴染みの光景である。壁に染みてほとんど固まってし

まった血は戻らなかったが、今しがた散った血が蝶野亜美の右手の甲に戻っていき、次

いで痛々しい腫れが引き、破れた皮膚も元通りとなる。

「これは……確かに超能力ね。生徒会室をなおしたのもコレというわけね」

「あんまり相手がデカすぎたり、遠くに散らばりすぎたりすると

なおすのに苦労することもあるツスけどね。アテにしてくれていいツスよ」

「頼らせてもらうわ。その分、私も助けを惜しまない。」

困ったら来てね。音石明以外のことでも相談に乗るわよ」

楽しそうに、または興味深そうに自分の右手をグー、パーしていた蝶野亜美は、今日ここまで、とばかりに止められていた歩みを再開する。立ち塞がっていた康一達も、全員どく。左右に割れた八人の人垣の間を通り抜けてから、蝶野亜美がまた立ち止まって振り向いた。

「あ、言い忘れてたけど」

「はい? 何スか?」

「模擬戦で私を納得させられなかったら、

あなた達三人、大洗女子学園に転入ね」

「……………は?」

蝶野亜美以外、全員の声がそろった。今までで一番わけのわからない発言だった。あなただち三人。仗助、億泰、そして康一しか、いやしない。

「神出鬼没の殺人者から、『戦う力のない』子供達を守るためだもの。」

角谷さんもイヤとは言わないでしょう」

フフフ、と不気味な含み笑いを残して蝶野亜美は去っていく。全員、ただ、ただ見送った。何を言われたのか、必死で咀嚼した。反すうした。どう考えても、他の意味で受け取りようがない。康一の顔から、またも血の気が抜けていき、そしてまたも絶叫した。

「何言ってるんだあの女あああー！ー！ー！ー！ 正気の沙汰じゃあないぞッ！」

男たつた三人を女子高に？ いやだ……イヤだああああー！ー！ー！

針のムシロなんてもんじゃあない！ 『生き地獄』だッ！」

「ど、どうしたよ康一。ソコまでビビることかよオ、

むしろモテるチャンスかも知れねーぜえ」

後ろから気づかうように声をかけてきた億泰だったが、全然なくさめになつていない。ヤレヤレと軽く首を左右に振つた仗助が、さらに後ろから億泰の肩を叩いた。

「てめーノータンキだよなあー億泰、オレだつてゴメンこうむるぜッ！」

『クラスの中に男が自分たつたひとりポツン』

の生活を毎日するのはよおおー！。最悪そうなるだろーがよ」

「ん……ウツ！ 言われてみると、そりゃーキツイ！ かしよお仗助」

「つーか、こん中で一番ダメージでけえのはてめーだけ億泰。」

おめー親父さんの面倒どうすんだよ。コッチに連れて来られたとしてもよ、

今みたく『象皮病』でごまかしきれるか考えてみるよ」

仗助のややきつい指摘に、億泰のまん丸の瞳に影が差し、目つきが変わる。

「そーだな……おめーの言う通りだよ。親父が外に出られんのもよー、

ご近所サンの『理解』のおかげだもんなあー

出来ねえーぜ、引越しなんかよおー」

「まー、本気見せりゃいいんだからよ、マジにやるぜ。勝ちに行く」

どうやら腹をくくるしかないらしい。仕方が無い。どのみち音石明との戦いは命がけ。その覚悟を見せろというなら、見せてやろう。なめるんじゃあないぞ、蝶野亜美。康一はグツと拳をにぎった。

「チヨット……突然、すぎますけど。」

皆さんもやるってことですね、戦車道ツ」

場が少し落ち着いたところに声をかけてきたのは、秋山優花里。最初にスタンド使いになっただけあって接点が多く、すでに杜王町スタンド使いのメンバーになじみつつある感がある。

「音石明対策、としてだぜ。秋山よおー。モノホンの戦場ならともかく、

『戦車道』で男が戦車に乗り込むのはやっぱりマズイぜ」

「あ、ソレですよソレ。」

前から気になってたんですけど、どうして名字呼びなんです？

武部どのや五十鈴どの、冷泉どのの名前で呼んでるのに」

「どうしてっつーと、流れってやつかな……深い意味はねえーぜ」

「なら優花里って呼んでください。水クサイですよ〜」

なんとというか、彼女は仗助にやたらとなついて見えるように見える。飼い主に尻尾を振って飛びつく子犬のようなのだ。恋愛感情うんぬんではなく、単純に心を許した相手に100%の愛情を示しているだけなのだろうが、それだけに、なんだか非常に心配だった。悪い奴にダメされたりしないだろうか？

「ンツ？ ゆかりん、一歩リードを試みてる？」

フトコロに入って名前では呼ばせる。これはなかなか……」

こういうのをイの一番に止めるべきであろう女友達はこの有様であるし。などと
思った瞬間、その脇にいた麻子が思い切り心外そうな目をした。

「おい、広瀬。ソコのソレと一緒にするな」

「だったら止めようよ。危なっかしいよ、秋山さん」

「……アイツにとつて、『戦車道』での理解者は私達だ。

だが『スタンド』の理解者にはなりきれない。

そこにピタリとハマったのが東方だったんだろうな。

前回の赤ちゃん騒動でスタンドの制御を身につける

きつかけにもなったようだし……ある意味、『心酔』かもしれん」

「そう思うんだつたらさあー」

「でも、今、どうこうする必要はないな。

みほもスタンドに目覚めたのなら、東方に頼る状況も変わるだろ。

私達も、模擬戦を通してもっと勉強することになるようだしな……」

それ以上、とくに言うことはないようで、麻子は格納庫の入り口に歩いていく。つまり、今のコレは一時的なものだから、何の心配もしていない、ということだろうか。釈然としないが、冷徹な麻子がそう言うのなら正しいのかもしれない。視線を仗助の方に戻すと、億泰が話に割り込んできていた。

「仗助エー。思うによお、

由花子（ゆかこ）のヤツとダブるから名字で呼んでたんじゃあねえーか？」

「そういや、そうだな……由花子に、優花里か。ちよいとややこしいぜ」

「ハイ？ 由花子さん？ どなたですかあ？」

由花子と優花里。漢字で書けばだいぶ違うが、読みでは確かに一文字違いでややこしい。とはいえ、音石明の騒動にあの由花子を関わらせる必要もないし、助けを求める気もさらさらないから、ややこしかりうが無関係。名前呼びにしても、その意味では何も

問題はないだろうな。康一はその程度に思い、次にいよいよ戦車道での戦い方を考えようとして。本日三度目の絶叫を響かせた。

「ぎゃあああああああ——————由花子さんッ！ 由花子さんッ！

女子高に転入！ 冗談じゃあない！

死人が出る！ 死人が出るぞおおお————ッ！」

「ナンだよ康……げええッ！ 由花子！ 由花子がヤベエ！」

今度は学園艦が髪の毛マミレになっちまうぜえッ」

「グッ、グレート！ 何が何でも合格しなきゃあヤバイ！」

マジに人が死ぬぜこいつはア！」

西住、てめーヤツツケてやる！」

平和のために何も言わずオレ達にヤラレろ！」

「え、ええ————ッ？ 何？ 話がサツパリ見えないよお————ッ！」

山岸由花子（やまぎし ゆかこ）！

広瀬康一に想いを寄せる、トツテモ一途な女の子ッ！

彼女の恋路を邪魔するヤツは、戦車だつて粉ミジンになるだろう！

……結局、戦車道の作戦会議は翌日持ち越し。ぶつつけ本番になった。もともと詳しいルールも決まっていなかったのだから、そうなるしかなかったのだが。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

⇒

戦車戦にチャレンジしよう！（4）

「今回の模擬戦は、『矢』の争奪戦を想定したものだ」

東方仗助（ひがしかた じょうすけ）は、大洗女子学園戦車道の女子達に混じって空条承太郎の説明を聞いていた。その脇には、今回の騒動の元凶といえる蝶野亜美がいて、その逆サイドには、生徒会の三人……角谷杏と、小山柚子。河嶋桃が控えている。

「東方チームは『矢』を持ち去る側。西住チームは『矢』を取り戻す側。」

試合開始時に『矢』を持っているのは東方チームだ……

これから説明する勝利条件を、どちらかのチームが全て満たした時点で決着とする。

むろん、満たせない側の敗北だな」

柚子が白板を引つ張り出してきた。それを指差しながら、承太郎は続ける。東方チー

ムの勝利条件は！

『矢を戦闘領域外に持ち去ること』

『西住チームの戦車を一両以上撃破すること』

そして、西住チームは。

『西住チームに属する誰かが矢を持っていること』

『東方チームの戦車を全滅させること』

「……通常の戦車道と異なる部分だが、降車戦闘が全面的に認められる。

自分の戦車が破壊されたとしても、

戦車から降りて何らかの手段で戦ってもいいということだ。

ただし、『自殺』は厳として認めない。

俺と蝶野教官とで、単なる『自殺』だと判断した行動があつた場合、

そいつの所属しているチームを問答無用で敗北とする」

なんのために決められたルールなのかは明らかだつた。戦車から降りて戦車と戦える存在など、スタンド使い以外にはありえない。戦車とスタンド使いを同格とみなしていると言えるだろうか。

「戦車の数は、東方チーム2両、西住チーム3両だ。

ただし、東方チームは『4号戦車』以外の好きな戦車を選んでいい。

選んだ戦車の搭乗員は、そのまま東方チームの所属となる。

選ばれる側にはイキナリすぎる話だろうが、今日だけは協力を頼みたい」

周りの連中が少しキョロキョロし始めた。当然こつちを見ている。西住の話では、『戦車に男が乗り込んでくるかもしれない』件について、昨日の練習で、解散前に話してあるらしいのだが。

「練習場への移動を1時間後に開始する。仗助、それまでに戦車を選べ。

億泰、康一くん。君たちも最善を尽くしてくれ。でなければ」

承太郎が、らしくもない『タメ』を作った。

「俺も賛成せざるをえなくなるぜ。蝶野教官の『提案』にな……」

真後ろにいる康一が、ブルブルブルツと震え上がった。振り返るまでもなくわかるのだ。承太郎が下がったのを見計らって、桃が前に出る。

「東方仗助。欲しい戦車が決まったなら、西住に言え。」

それ以外の者は準備を完全に整えておくように」

それだけ言ってパイと顔をそむけ、格納庫に去っていく。ケータイを盗られた溝は深い。この重大さを考えれば当然の態度ではある。

「……どうするの？ 仗助くん」

康一が脇から手を引いてきた。場はすでに解散となつていているが、ほとんど誰も立ち去らない。やや遠巻きにこつちを見てるのが多数だ。値踏みをするように見てるヤツ、こそこそ話しながら少し怯えの表情を浮かべてるヤツ。バレーか何かのユニフォームを着てるヤツらは、目が合うと、軽く手を振ってきた。

「すでに決まつてるぜ、二台ともよおー。まずは」

大股で歩いて向かう。ここにいるメンツの中では最もチビなヤツのところ。向こ

うも予測済みであったようで、両手の甲を腰に当て、ふんぞり返るように待っていた。

「頼むぜ、会長さん」

「いちおー聞いとこつか。どうして私達かな、東方隊長」

「まず、ひとつは会長さん。あんたが頼れるからツスよ。」

音石明の作戦を見抜いて、トドメまで刺した会長さんを敵にする気はねえーぜ。

軍師つつーか、ブレーションつつーか。そのあたりでぜひ力を借りたいツス」

「ナマケモノだよー私ゃ。戦車の中で干しイモカジッてるだけだもんさあー」

「それは冗談ツスね。少なくとも音石の前じゃあよ」

会長、こと角谷杏の目がスツと細められる。

「フンフン……もうちつとクドいてみてよ、『私達』をさあー」

「まだ人物を語れるほどの付き合ひもねえーツスけど、

小山センパイも河嶋センパイも、

会長さんを心底信頼してるつつーのはわかるツスよ」

「ソコ、オレにちつと嘯ませろよお、仗助」

後ろで億泰が手を挙げて、前に進み出てくる。意外そうに首をかしげる杏。

「おつ、クドくのは虹村くん？ 硬派だと思ってたけど、ドツチかというときあー」

「ほつとけよ。そいつはともかくよお……」

河嶋のヤツがオレの兄貴までマヌケ呼ばわりしやがったのは、ムカツキはするが当然だと思っているよ。

ダチや家族が殺されるかもしれないねえーんだからよ。

原因作つたのはオレだ。逆恨みはしねえ……」

億泰は噛み締めるように、言葉で當時を振り返っていく。心をえぐられるような『怒り』や『悲しみ』を前にすると、もう一方で『正しさ』の箱を開け、それらを並べて比べていくようなところが、こいつにはある。やはりこいつも、音石明を逃してしまったことが相当こたえているのだ。この答え方を見ればわかる。杳も、目をそらすことなく聞いていた。

「んでもって小山さんはよお、河嶋のヤツをイジメたオレを、にらみつけて『帰れ』つつつたよな。

オレ頭悪いからよー、モットモらしー理屈はナンにもねえーけど。信用できるぜ！ あの『怒り』はよおー。

ダチがキズつけられて、黙ってねえヤツらだ」

「オイコラー！ 誰がイジメられた！ 誰が！」

格納庫に入っていたはずの桃が、ダツシユでこちらに突っ込んできた。

少し遅れて、柚子も小走りでやってくる。

「あ？ 誰がって、テメーが、オレにだよ！」

ヒンヒン泣きわめいてたじゃあねえーかッ 悪かったとは思ってるぜえー」

「ヒト聞きの悪いコトをぬかすなッ！」

私が泣かされたのは会長にであってお前にナンかじゃあなあーいッ

第一なんだその態度は！ 私は三年で、お前は一年坊だろーが！」

「ンン？ 兄貴と同一年ってえコトかよ。こりや言われてもわかんねえーなあー」

「オ・ク・ヤ・ス・く・んッ！」

億泰と桃が罵り合いに発展しそうになった直前で、康一が二人の間に割り込む。正直、仗助としても助かった。話が進まない。

「昨日のこともう忘れたの？」

あの後ムチャクチャ説教されたじゃあないか、華さんにッ！」

「ウグッ！」

昨日、蝶野が去った後、億泰は一人、華に呼び出されて格納庫裏に連れ去られていった。例のごとくウヒョルンしながらノコノコついていった億泰が長時間戻らないので皆で見に行ったら、そこには正座で説教されている億泰がいた。

『あなたの振る舞いで軽く見られるのは、東方さんや広瀬さんなんですよ。』

もちろんあなた自身もです。私は、私のお友達が軽く見られるのなんてイヤです。

虹村さんもそのはずです。私はそう信じていますよ』

華が言うには、初対面である蝶野への態度があまりにヒドく目に余ったため、さすがに忠告が必要だと思ったとのこと。怒るのではなく、ただ淡々と、しかしグウの音の出来ないほどに詰められた億泰は、憔悴しながら『スイマセンでしたア〜』と謝るしかなかった。ちなみに後をつけてコツソリ覗いていた全員も怒られた。億泰だけを連れ出したのは、公衆の面前で恥をかかせないためだったらしい。

「翌日に約束破るなんてさあ〜、ぼくだったら軽蔑しちゃうね〜!」

「か、カンベンしてくれよお康〜い〜い〜。わかったよ、男の約束だもんなあ〜。」

「スイマセンでしたあ〜! 態度改めるツス、河嶋センパイツ」

「な、なんだ? 何の話だ気色悪いツ、わけがわからんぞ」

「おい、そりゃねえ〜んじやあね〜のか、お望み通り態度改めたのによお」

話の见えない桃が一人置いてけぼりになったせいで、気色悪がられた億泰がまたイラツとし出す。まさか、いつまでもこんなやり取りを続けるつもりじゃあないだろうな。仗助が実力行使も含めて対応を検討し始めると、杏がブツと吹き出した。

「ドツキリが台無しじゃんか〜河嶋あ〜」

「ハッ! も、申し訳ありません、会長ツ」

「い〜い〜いよ。最後までクドき文句を聞かせてから、

全部聞かれてるよー、ってドツキリだったけど！

コレはコレで面白かったしねえー」

スカートのポケットからケータイを取り出し、通話を切る杏。合わせて、柚子も同様に通話を切っていた。

「でー、ふたりとも、どう思う？」

「ついていっちゃっていいと思う？ 東方くん達にさあー」

そして、杏は二人に決定を委ねてしまう。このためのドツキリであったようだ。振られた桃は、あまり考える様子もなく即答する。

「私は、会長の判断に従います。会長が良いと言うなら否はありません」

柚子の方は、少し黙ってから億泰の方に目をやり、聞く。

「虹村さん。あの時、桃ちゃんに言った言葉にウソはないですか？」

億泰は一瞬だけ目を丸くしたが、すぐに顔が引き締まる。

「ああ、ウソになんかしねえーぜ。」

これ以上、オレのせいで兄貴を笑いモノになんかしねえー」

「わかりました。信じます。」

それが嘘でない限り、あなた達を手伝ってもいいと思います」

柚子も引き締まった顔で応じ、それを見て杏はニツカリ笑ってふんぞり返った。

「棄権2、賛成1。」

よつてカメさんチームは東方隊長のために全力で戦いまあゝつす！

お手並み拝見。存分に使ってくれたまえよ！」

「グレート、きわどいぜ。」

小山センパイがダメだったら断られてたつっわけか」

「んーん、そんなことないよ？ ただし、積極的に協力しなかつたかもね」

「フツーに怖えーぜ、それ。会長さんだとよ……ま、いいや」

「そーそー、気にしたら負けだぜー」

腰のあたりをバシツと思ひ切りひっぱたかれた仗助は思わずのけぞり、その隙に杏は小走りで駆け去っていた。

「あともう一チーム、ガンバツてナンパしてねえ〜」

「ナンパつて、おい……純愛派なんスよ、仗助さんはアー」

ニマツとだけ笑い、すぐに杏は格納庫に姿を消す。桃も足早にそれを追い、柚子だけは振り向いて軽く手を振った。残された仗助達も、今とくに後を追う理由はない。杏の言う通り、残る一チームに声をかけなければならぬのだ。

「で、ドーすんだよ、仗助えー。」

単純に考えりゃあ『2対3』ツ しかもオレ達や戦車のドシロウト！

マトモにやっちゃあ勝ち目ねーのはオレにだってわかるぜえー」

「言つたろーがよ億泰、すでに二台とも決まってるつてよ。

まず会長さんの38t！

こいつはオレ達自身に乗つたから、多少はわかつてる。

西住達を除けば、一番気心も知れてるし、マジに頼れる。

後々高くつくかもしれないねーがよおー」

「スタンドのことも、一番理解してる人だ……」

しかも、38tは、あの戦車の中じゃあ一番早い！

『矢』を持って『逃げ切る』ことだけを考えるなら、

最高の選択かもしれない！」

「調べたのかよ……気合入りまくってるなあ〜康一よおー。

本屋行ったけどスグあきらめちまったもんねオレ」

「命がけだよ！ 必死にだつてなるよお〜ッ」

主にかかっているのは他人の生命だが、どのみち地獄は見たくない。その辺は仗助とてまったく一緒なので、康一と同じようにそれなりの労力をかけてきた。

「ならよ康一。オレの次に考えそうなこと、わかるよなあ〜」

「う、うーん……戦車の扱いじゃあ勝てないのなら、

スタンドの戦いに持ち込むしかない。

なら入り組んだ場所に引つ張り込むしか方法ないから……

『チハ車』かなあ〜」

「そいつも考えた。」

だがよお〜、すでにそれ自体、戦車の扱いを要求されちまつてるぜ！

そして一番致命的なのが、『チハ車』じゃ4号戦車は倒せねえ！

どつから撃つても効きやあしねえ！

ガン無視で『矢』だけ追っかけられたら、ことと次第によつちやあ

『1対3』に持ち込まれちまう」

仗助があさったのは、戦車道関連のムックである。それらを読む限り、後期型であれば4号戦車の装甲を至近距離から抜けなくもないらしいのだが、他に選んでいい戦車は二台もいる。わざわざ低火力を好んで選ぶ理由がない。チハ車に乗っている奴らがどれほどの腕前かもわからない以上、危ない橋以外の何者でもなかった。

「じゃあ、どうするの？」

つまり『無視できない攻撃力がほしい』、そういうこと？」

「そうだな。となると、あの中で一番ヤバイのは」

「そう、私達だ！」

いつの間にか忍び寄り寄られていた。背後には四人の影。さつき、仗助達を値踏みするように見ていた一行だった。

「なっ、何モンだテメーらッ！」

ビビッた億泰が飛び退りながら指をさすと、四人組は待つていたかのように名乗りを上げる。

「カエサル！」

「エルヴィン！」

「おりよう！」

「左衛門佐（さえもんざ）！」

赤マフラー、軍帽、モサモサ髪の猫背、六文銭ハチマキが、テンポよく順番に後を継いでいき、最後にようやく億泰の質問に答えた。が、それも今ひとつ答えになっていなかった。

「四人合わせて、カバさんチームだぜよ」

「か、カバあ？」

カバのように間の抜けたツラをカマした億泰の前に、軍帽の金髪、エルヴィンが苦笑しながら進み出る。

「3号突撃砲を預からせてもらっている。」

君達が欲しいのは、あの長砲身だろう？」

「あ、ああ……間違いいねえーぜ。西住に渡したくねえのはそいつだ。

おめーらが敵にいる限り、オレ達は常に『一撃死』に

おびえるハメになるからよ」

「聞いたか、みんな」

片目の眉だけ上げて、エルヴィンは三人に振り返った。

「そこまで恐れられると、ハンニバルにでもなった気分になるな」

「いやいや、河上彦斎……は、あんまりウレシくないか」

「ここは伊藤一刀斎で。一撃でカメごと真つ二つだ」

「それだな。って、恩人が困っているぞ」

よくわからない密談をしている一行に首をかしげるだけにされた仗助だが、向こうもそれはすぐにわかったようで、全員居住まいを正して向かい合う。どうやら、カエサルと名乗った赤マフラーがリーダーらしい。

「ともかく。よく私達を頼ってくれた。

この上は恩人のために全力を尽くそう」

「恩人って、オオゲサだなあ」。

むしろ、音石明を逃してメーワクかけちゃった側なんだよなあ、ぼくら」

「だったら一蓮托生と言い換えてもいいぞ。

超能力者と共闘するなんて、トロイア戦争でもないとありえない。

だとすれば神々の戦いさ……ワクワクするよ」

「加藤段蔵とか果心居士も『スタンド使い』だったのかな。

こんな現実を見る日が来るなんて」

「あのヒトラーも不可思議な力を捜し求めていたという。

『スタンド使い』を知った以上、与太話じゃあないな！

それこそ究極の生命とか探っていたのかも……

まさか！ ヒトラーが持っていたという『ロンギヌスの槍』。

アレは『矢』では」

「なんだって？」

すると、『ロンギヌスの槍』が最初に貫いたかの人は当然……

いや、かの人を貫いたから『矢』になったのか？

それとも『矢』がかの人を作ったのか？

当然、その『死体』も……」

「もういい、もういいって！ アツすぎるぜオメーら！」

仗助の懸念としては、一般人とは明らかに外れた力を持つスタンド使いに、異物とし

て隔意を抱かれてしまう恐れが拭いきれなかったのだが。この様子を見る限り、むしろまったくの逆。こいつらは楽しみにしかしていない。味方として指名されたかったからこそ、こつそり背後まで忍び寄ってきたのだろうか。しかしこいつら、非常にメンドクサイ気配をヒシヒシと感じる。あの秋山の戦車バカすらしのぐかもしれない。カエサルはヨーロッパの大昔とかその辺。左衛門佐は多分、戦国時代。ハチマキの六文銭からしてアレだし。この様子だと、エルヴィンは第二次世界大戦のあたりか？

モサモサのおりようについては、全然わからないが……語らせると長い、歴史オタクどもの集まりであるようだ。早くも圧倒されつつある。

「このアツさが私達だ。まあ、合わせろとは言わないから。

『また何か言ってる』くらいに思ってくればいいよ」

「わりイがそうするぜ……シツタカぶってヤケドしたくねーしよ。

ただ、『恩人』はやっぱり『ねー』ぜ。

名字でも名前でも好きに呼んでくれよ」

「じゃあ、よろしく。東方、虹村、広瀬」

「頼んだぜ、カエサル、エルヴィン。おりように、左衛門佐よおー」

全員で、入れ替わり立ち替わりで握手していく。億泰がまたダラシない顔になるかと思いつたが、思ったよりも変化はない。ノツケからキャラの濃さを見せ付けられたせ

いだろう。

（味方をそろえることは、できた……おそらくは最高の形だな。

あとは作戦だがよおー、西住のヤツを出し抜かなきゃあならねえーぜ。

生命はかかっちゃあいねーけど、負けちゃあならねー大一番。

仗助くんならやれる！ やってやるぜえ〜〜ツ）

作戦を詰められるのは現地到着後の、たった三十分だった。

To Be Continued ⇒

戦車戦にチャレンジしよう！ (5)

すでに戦いは始まっている。西住みほ（にしずみ みほ）は、いつものようにキューポラから顔を出そうとし、直後にやめた。少なくとも今は、絶対にできない。

（一番マズイのは、虹村くんに『誘拐』されて、そのまま殺されちゃうこと）

先ほどの作戦会議を回想する。東方チームがとると想定される戦法は、38tによる『ガン逃げ』。作戦目標として戦闘領域外への逃走が必須であり、かつ戦車を一両だけ撃破すればいい彼らが戦車全てを投入して攻勢に出てくることは、考えにくい。数の不利に加えて指揮官の練度で大きく水をあけられており、正面から戦つてもどうしようもないはず。それがわからない仗助では、絶対にならないのだ。となれば、必然的にスタンドの使い方で優位を見出す戦いになる。そして、その中でもっとも恐ろしいのは、虹村億泰のザ・ハンドだった。

「顔を出さないで下さい、西住どの」

「うん、わかるんだけど……つい、クセかな」

「しっかし、モノを近くに引き寄せるだけの能力だと思つてたら、

トンデモなかったよねえー」

「空間ごと何もかも削り取る。戦車の装甲すらまったく意味がない、か」

「実演されなければ、『触られただけで即死』は納得いかないところでした」

死亡判定の説明にあたり、ザ・ハンドだけは明確な特別扱いを受けたのだ。すなわち、『右手で触られたなら即死亡』。それは何故かを説明するために、億泰は廃材の装甲板をひとつ、削り取ったのだ。直後に、何事もなかったかのように復元された装甲板は、しかし妙に短かった。削り取られた部分は、決してたどり着くことのできないどこかへ消し去られてしまったという。あの『ガオン』という独特の音が何を引き起こしているのか理解させられたみほ達はゾツとした。能力の詳細を知らずに戦わされたら、初見殺しもいいところではないか。音石明事件の際にザ・ハンドの真価を發揮しなかったのは、人質である優花里ごと削り取ってしまうからだだったのだ!

「だから、虹村くんに貼りつかれたらオシマイ。」

『ガオン!』で私達は全員死んじゃう」

「これほどオソロシイ対戦車攻撃はありませんねえ」

「しかも『空間が閉じて』遠くのを引き寄せられる……」

イカれてるぞ、あのアホめ」

「どう考えても、戦車一両を撃破しなければならぬ東方チームの『切り札』。」

受けて立ちますよ、虹村さん」

全車両、一定の距離を保ちながら開けた場所を走り続ける。東方チームの方角には向かってはいるが、一直線に目指すのではなく、開けた場所のみを選んでいく。先手は進呈してもよい。だが奇襲は決して許さない。そして彼らとて、いずれは仕掛けざるをえないだろう。戦車一両の撃破は勝利条件なのだ。敵に回った3号突撃砲も、今はどこかに潜み、狙撃の機会を伺っているはず。みほとしては、3号突撃砲を取られることは想定済みであり、その判断の上を行かなくてはならない。

「優花里さん、ムーンライダーズの索敵はどうか？」

「定時連絡に変化なし。まだ敵を発見してません」

今回はスタンド使い同士の戦いでもある。スタンドは東方チームの専売特許ではない。空前絶後の射程距離を持つというムーンライダーズは、単独で索敵網を構築できる。最大の課題であった、勝手に動いて制御できないという問題は他ならぬ仗助のおかげで克服しているのだ。であれば、この戦場で彼らを存分に苦しめることこそが恩返し。優花里とも、その点で意見は一致している。

「虹村くんは……開けたところには絶対にやってこない。」

そんなところで襲い掛かっても、

機銃でやられちゃうことなんてわかりきってるはず」

「ですから、来るのは必ず物陰から。そうやって見ると」

「襲撃のポイントはおのずと絞られる。

この林にいない。索敵でわかった。なら」

「次はこの先の橋でありますね。」

「いつか4号戦車がみんなに狙い撃ちされたあの場所です」

「予想が当たったと見るべきかな。」

「優花里さん、ムーンライダーズ全員で偵察に当たらせて」

「了解ッ、コジロー……いえ、ライダーズー! 全員集合の合図です」

『カシコマッター!』

みほは考えた。虹村億泰のザ・ハンドをもって戦力の劣勢を覆すにはどうするか。物陰から直接襲い掛かる方法は、それでも充分に有効だが下策である。戦車一両を倒すという目標を達すればまだいいが、失敗した場合、戦車三両から逃げ延びる可能性が限りなくゼロ。唯一と言える逆転の目を、そんな風に無造作な捨て駒にしてしまえるか?

ザ・ハンドの能力は削り取るだけではなく、遠くのものを引き寄せることもできる。もし、それが戦車ほどの質量であつても可能だというのなら。

ザ・ハンドが戦車を相手に最大の攻撃力を発揮できる地形は、ずばり川だ。仗助は、そこに戦線を引いてくる!

3号突撃砲も、川の向こうから一方的にこちらを撃てることになる!

「いいですか、ライダーズ！」

探すべきは虹村どのだけじゃあないんですよお！

3号突撃砲の観測員をやっている誰かがいるかもしれないかもしれません。

確認次第、即刻報告ですッ」

『アイサーッ！』

『撃タセテクレヨオーツ司令官！』

「ダ・メ・ですッ！ 私達の任務は偵察と4号戦車の直衛！

それ以外は絶対に禁止ですよ！

わかったら、GO！ GO！ GO！

優花里がムーンライダーズに指示を出し終わったのを確認すると、みほも全車一斉に指示を出す。

「全車両、ゆるやかに後退してください。

安全を確認するまで、川には近づきません」

この川は、橋から水面まで5〜6メートルはある上に水深も深い。シュノーケルつきの戦車が自分から入った場合ならともかく、上から真つ逆さまに落ちてしまえば、おそらく一発で撃破判定が出てしまう。

（トラウマえぐってくるなあ、東方くんも……）

彼にそんなつもりはないだろう。そもそも、あの事件自体、彼は知るまい。わかっていても、気分はどんより曇り空になる。だが今は、それにこそ感謝せねばなるまい。ザ・ハンドを使つて戦車を川に引きずり込む。この可能性に気づいたのは、あの経験あつてこそなのだから。そして、考え方を変えてみればいい。逆に考えればいい。自分が、仗助にボコを治させたように。今、あの時を『なおす』機会を仗助がくれているのだと。ならば自分にできることは、さしずめ『塗り替える』こと。たとえ中身は変えられなくとも、彩りを変えることくらいはできるはず。

（ウン、燃えてきたかな。負けないよ）

みほは知らず知らず、拳をグツと握つた。なるほど、巧妙な落とし穴だ。だが、わかつたからには付き合う義理はないし、考えすぎなら、なおラッキーだ。

「優花里さん、定時連絡は？」

「変化ありません。やりますか？」

「もちろん、やるよ。」

全車両停止。通達したポイントに一発撃ちこんでください！

これは当てずっぽうに等しい。想定されうる狙撃ポイントのうちひとつを狙い撃ちにするだけだ。だが、敵がいるならこれで動く。動かないというなら、順繰りで次の狙撃ポイントに撃ちこんで行くのみ。

「動きはないようですね。みほさん」
「なら、次だよね。」

全車両、前進……停止！ 次のポイントを撃ちます！」

別にかまわないのだ。こちらが敵の位置をつかんでいないことがバレようと。想定通り、ここに戦線を引いているならば、狙撃ポイントがある程度限られる以上、いずれは命中することになる。敵側からなんかの形で動きを見せざるを得ない。逆に、ここ以外で待ち構えているならば……願ってもないことだ。つまり、最も恐ろしいザ・ハンドの脅威はガタ落ちということ！

戦車三両の密集陣形をとっているだけで対処できてしまう。戦車一両を引き寄せたところで、残り二両の車載機銃でペイントまみれにしてやるだけである。なお、今回、戦車砲に装填されているのもペイント弾だ。直撃しても人は死なない。むろん、水が満タンに入ったバケツを顔面に全力で叩きつけられる程度の覚悟は必要になるが。

「!! この銃声、定時外連絡ありです！」

敵発見！ 主目標、つまり虹村どの！」

「来たッ……『ホイホイ作戦』、開始です！」

全車両、狙い撃つ目標が変わる。川をはさむガケ付近に次々と着弾するピンクのペイント弾。当然、狙いは億泰だ。岸壁に穴を掘って潜んでいた億泰を、砲撃でいぶり出す。

撃ちながらも全車両、少しずつ後退していく。

東方チームからすれば、億泰だけが狙い撃たれる格好だ。億泰がここで発見された以上、3号突撃砲が橋向こうに潜んでいるのも確定である。さもなければ、戦力を無意味に逐次投入する悪手を仗助がとっていることになる。彼は、そこまでたやすい相手か？
あの音石明を、ザ・ハンドの一手で完全に無力化した彼が？

戦車砲で撃たれること、それ自体を丸ごと攻撃に転用してしまった彼が？

絶対に違う。だから、3号突撃砲は確実にいる！

「ライダーズ3、伝令ですかッ」

『出タゼツ、ターゲットガ耐エカネテ飛び出シタゼ！』

コッチに向カツテイル！』

「でかしましたッ ライダーズ1、全員集合の合図！

4号戦車の上で方陣です。虹村どのを迎撃しますよッ！」

「全車両、微速前進です。ザ・ハンドが来ます。

『引き寄せ』を警戒してください！」

敵の配置はわかった。向こうにザ・ハンドがあるなら、こちらにはムーンライダーズがあるのだ。あとは、トゥルー・カラーズ。『ホイホイ作戦』の成否は、自分のスタンドにこそかかっている。だが、直後。想定外の報告がやってきた。

『司令官ツ、ターゲットヲ見失ツタゾ！』

空間ヲ削ツテカラ、コツゼント消エヤガッタ〜！』

「なツ……空間を削って、虹村どの自身が消えた？」

「やられたな」

慌てる優花里の声を受け、麻子が忌々しげにつぶやく。

「麻子、どういうこと？」

『削った空間が閉じる』……

多分、これを『引き寄せ』とは逆に使ったんだろ」

「逆に……ということは、虹村さんご自身を『飛ばした』？」

「ただのアホだと思ひすぎた。訂正が必要だな。

ブツ飛んだドアホウだアレは」

「そ、それは置いといて！ な、なにそれ？」

つまり、アイツは『レポート』し放題の『アポート』し放題ってこと？

オマケに戦車を『右手』一振りで壊せる？

どどどどうすりゃいいのよオ〜ッ！」

ここ数日、超能力関係の本を買いあさって自分なりに研究していたという沙織だったが、それをもってしてもここまでの事態は想像を超えていたらしい。みほもそうだし、

麻子ですらそのようだ。

「これがスタンド使いの戦い。」

敵に回って、改めてその恐ろしさがわかる気がします」

「まだ砲すら交えてないんですよお〜五十鈴どのッ

スゴさをホメるのは勝ってからにしましょうよ！ イギリスみたいに」

「その通りです、優花里さん。」

今、重要なのは、虹村さんがどこに行ったか、ですわね」

おもむろに頭上のハッチを空け、わずかに顔を出す華。その仕草に、誰も疑問を覚えない。4号戦車には、乗員各々が顔を出せるハッチが存在しているが、まさかこんな形で有利に働くとはみほも思っていなかった。において索敵するなんて、戦車道ではありえない。

「……少なくとも、至近距離にはいませんわね」

「アイツのにおいなんか覚えてんのー？ 華あー」

「覚えていますよ？ 戦車道メンバーのにおいは全員覚ええました。」

ある程度近づけばにおいてわかります」

「ウワアアア、私の友達の間離れが加速していくうーッ」

身悶える沙織に、みほは、ただ苦笑である。スタンド使いになった時点で、自分とて

少なくともタダの人間じゃあないのだ。きりとて、人間をやめた覚えもとくになく、この場の全員、それは同じである。

「でも、おかげで負ける気はしなくなつた！ どうしよつか？」

「もう一度、対岸の狙撃ポイントを狙いに行きます」

「それはいいけど、虹村くんどうすんの？」

「襲ってくるなら『ホイホイ』するだけ。だけど問題は、来なかつた場合」

「来なかつた場合？」

「来なかつたら、川をはさんでにらみ合いになるだけ……」

「みほさん、あなたはこう言っているんです？」

『虹村さんのザ・ハンドも囿』、そう言っているんですか？』

「断言はできないよ。だから『試す』」

全車両、またも前進し、狙撃ポイントの狙い撃ちに入る。だが、今度はそうはいかなかつた。対岸から砲声が響き渡る。一斉に散開したところへ、狙い済ました一撃が着弾した。ぶちまけられるスカイブルーのペイント。

「撃つてきた、撃つてきましたね西住どのツ！ しかもこの正確さ……」

間違いありません、虹村どのが観測員をやっています！

観測員は虹村どのです！」

「ザ・ハンドも囷、って、まさかこのこと？」

本人は『テレポート』でアッチコッチ動きながら、

こつちの場所だけデバガメし続けて3号突撃砲に報告してるとっていうの？

「いッ、イヤラしくしくッ そんなの対処できないじゃない！」

3号突撃砲とザ・ハンドの合わせ技。今、沙織が言っているような使われ方で攻められることも、みほは可能性のひとつとしては考えていた。3号突撃砲の最大射程は6 km。観測員つきでバカスカ撃たれると、こちらとしては手が出ない。しかし、この戦法は決め手を欠く。当然ながら、離れば離れるほど標的への命中は困難になるし、なにより3号突撃砲の保有する弾薬にだつて限りがある。ただの一両で撃ち続けられるわけもなく、弾切れすれば、もはや丸裸である。これだけに頼るのは相当にリスクだ。

「だとすれば、こんなシチメンドクサイ方法。よく虹村が納得したな」

「言われてみれば確かにですなえ冷泉どの。」

『ウダラア、メンドクせえーッ！』って言いそうですよね。

虹村どのだったら」

「プッ！ 似てる、それスツゴイ似てるよゆかりん！」

「笑い事じゃあないけど」

そして、今の麻子と優花里の会話で、みほの心中にあつた懸念は確信に変わった。億

泰は、今この決め手のない状況に、何も疑問を持っていないのだ！

「わかったよ。東方くんの作戦が」

「え……さすが西住どのツ！ で、その全貌とはツ？」

「ザ・ハンドと3号突撃砲、それと川で作った戦線は、単なる『仕込み』！

ただ私達を『ここにいさせる』ことが目的だよ」

「そ、それって、つまり……アッ！」

「……恐ろしいものですね。『まさかやらないでしょう』をあえてやってくる。

気づかなければ一網打尽にされていたかも」

「『矢』を二の次にするのか。だが理にかなっているな」

「ど、どゆこと？ ねえ、サミシインだけど」

優花里は理解した。華と麻子も遅れて理解したようだ。沙織だけは追いついてきて

いないが、すぐにわかることだろう。

「この状況、逆用します。」

『ホイホイ作戦』改め、『もつとホイホイ作戦』です！」

To Be Continued ⇒

戦車戦にチャレンジしよう！（6）

「東方くんの考えはわかったよ。

ウン、よくデキてる、ナカナカデキてる」

東方仗助（ひがしかた じょうすけ）は、チームの皆を集め、地図を見て考えた作戦を語ってみた。この中でもっとも頼りにしている角谷杏は、それを聞いて満足そうに頷くものの、表情と言葉のニュアンスは、決してGOサインではない。確実にこう言っている。『これでは勝てない』と。身を乗り出す仗助。これをこそ期待したのだ。そこに手を挙げて、発言の許可を求めてきたのはエルヴィン。

「つまり、東方の作戦は『水際作戦』ということだな。

川を防御陣地とし、3号突撃砲で支援しながらザ・ハンドで敵主力を拘束。

そこに合流したクレイジー・ダイヤモンドが、

エコーズの支援の下で奇襲を仕掛ける。

そのタイミングで38tが橋を渡り、残存戦力を1両ずつ集中攻撃して殲滅」

説明した内容を地図を指差しながらおさらいしてから、エルヴィンもまた称賛してくる。

「天然の防御陣地は予備とし、その先に主力を置いて戦線を構築。そうやって陣前消耗を強いているところに、

戦車の入れない林の中から奇襲をしかけ、最終的に包囲殲滅。

ここまでの作戦を、この短時間で立てたのは見事だと思う。

ここに来るまでにいくつか戦術をすでに考えてきていたんだろうが」

「ハッキリ言っつていいんだぜ、エルヴィンよお」

むしろオレとしちゃあ、そいつを言っつてもらいたいからよ」

言葉の途中でさえぎられ、口ごもったエルヴィンは、咳払いをひとつしてから気を取り直し、仗助の希望を聞き入れた。

「わかった。はつきり言う。このやり方では勝てない。

西住隊長はおそらく、最初からスタンド使いの迎撃を

最優先にした戦術を取ってくる。

それがわかっているから、君も38tを戦力に組み込んだんだらう?」

「ああ……西住率いる戦車三台と戦うのに、

こつちの戦車を一台『運び屋』に使っちゃったら

ますます勝ち目がねえーつてのが一番大きいかな」

仗助が答えたところで、カエサルが手を挙げ、エルヴィンの後を引き継ぐ。

「距離と装甲を無意味にするザ・ハンドが積極的に攻めてこない時点で、

まず確実に伏兵を疑うな。そしてこの状況、この陣容で

伏兵として機能するのは東方と広瀬だけ。

音を操るエコーズである程度だますにしても、

向こうには七体のミニチュア騎兵……ムーンライダーズがいる。

これに見つかった時点で、万全の態勢で迎撃される。そうなってしまうば」

「ザ・ハンドは単独で敵中に孤立。後は各個撃破、だぜよ」

「さながら長篠の戦い。」

戦力の中核を失って、勝ち目のない消化試合に……ウウツ」

おりようと左衛門佐がオチまで言ってくれたところで、仗助は腕を組んで首を傾けた。

「ザ・ハンドの恐ろしさを知ったからこそ、

ムーンライダーズは防御に集中すると踏んだんだがよお」

「そう、逆だよ！

恐ろしい威力を前面に出してこないからこそ、そのタイミングでバレル。

そして、バレた時点で歩兵の強みは消滅するんだよ。東方」

反論はできない。エルヴィンにも、カエサルにも。戦車の機銃、三台分に同時に襲わ

れて無事でいられると考えるほど楽天的には、仗助とてなれない。苦し紛れに杏にも意見を求めてみると、モツチャモツチャと干し芋を頬張りながらも応じてはくれた。

「会長さんも同意見ツスカ？　様子見てる限りだとよおー」

「ソコまで深く考えてないよ？」

けどさ、どれも西住ちゃんの設定通りに収まっちゃうと思うんだよね。

落ち着いてひとつずつ対処されてさあー、

そのままジリ貧になっちゃうんじゃない？」

「グレート。そこまでのなかよ、隊長としてのアイツは」

近距離パワー型のスタンドに目覚めながら、相手を殴ることに躊躇する西住の顔を思い出す。あの引っ込み思案のお人よしだが、そこまでの圧力を持つて攻めてくるというのが今ひとつ想像できない。などと思つた自分の頬を、両手でパチンとひっぱたいた。

（バカヤロ〜〜〜思い出せよオレ！）

アイツは『やる』と決めたら『やる』ヤツなんだぜ〜

しかも今回は『戦車道』！　誇りを持つてる専門分野！

透明な赤んぼを助けたときの、ある意味、手段を選ばねーやり方が

一切の気兼ねナシに向かつてくるって事だぜ！）

音石明との戦いでも、戦車に戻るなり一瞬で効果的な援護をしてきたのだ。あそこで

キヤタピラを破壊できなければ、戦いが少し長引いていただろう。秋山は、ジョセフの奇跡を持ってしても間に合わず、そのまま帰らぬ人となつていたかもしれない。西住は『死の運命』を変えた。秋山にしても、赤ん坊にしても。そう考えた途端、にわかに関志が沸いてきた。

「ん、どしたの？ スゴ味が出たねえーイキナリ」

「いや、別に。思い出しただけツスよ。」

聞くまでもなく、アイツはすげえつてことをよ……」

不意に、カバさんチームの視線が一斉に集まる。見てくるだけで、何か言ってくるわけではない。仗助も、とくに気にしないことにする。

「だがよ、負ける気はねえーんだぜ。」

想定通りじゃ勝てねーってんならよ、ドギモを抜くまでだぜ」

億泰が手を挙げた。ハイ、ハイと声を出しながら。

「だったらよおー、川の手前で全員ぶつかっちまおうぜ！」

メンドクセーこと全部ヌキで、ココで叩き潰しちまうんだよツ」

「アホかー！ ツー！」

得意げに地図を指差して、指先と指先をぶつけてみせた億泰に、桃がいきり立つて38tの装甲板をバーンと叩く。叩いてからジワジワと涙目になり、手を必死でフーフー

吹いている。

「ンだよてめーッ 文句あんのかよ」

「大アリだ、このドマヌケッ！」

何のために川に陣取ると思ってるんだッ

こんなトコロで襲い掛かれば、単に後がなくなるダケだろーが！」

「おーよ、後なんかネーだろが！」

ツブすか！ ツブされるか！ そんだけでよおおーッ

肝心なのは最初の一撃なんだぜえーッ、そいつでブツ倒しちまえばよお、

後はマウントとってボコす！」

「言うのは簡単だなあ〜〜ッ、やってみろ！ あの西住に対してッ」

ギャンギャンギャンギャン。

いい加減に飽きないのかこいつら。顔を合わせるたび、口を開くたびに罵り合いしやがって。無言のまま、仗助は額に手を当て、杏は何を思ってたかニヒヒと笑う。背後から、康一が億泰を、柚子が桃を羽交い絞めにした。

「ホーラ億泰くん、どうどうどうどう」

「桃ちゃんイイ子、イイ子だから止まって、ね」

「ウマかよオレは！ わかったよ、ダメるぜえー」

「桃ちゃん言うなッ！　ぐぬぬぬぬ……」

羽交い絞めきれながらもにらみ合いはしばらく続き、

「ケッ！」

「フン！」

二人とも、同時にプイと顔を背けて終わった。コイツら、三十分しかない作戦会議のうち、実に六分の一を無駄にしてくれている。残り時間は、あと十分に満たない。そんな中、エルヴィンがまた進み出て、頑張って総括してくれた。

「河嶋先輩の指摘している通り、

指揮官の能力差と場所の拙さから実現不可能ではあるが。

虹村の作戦は、つまり『急襲』だな。

出会い頭にイキナリ防ぎきれない規模と速度の攻撃をぶつけて

敵陣を叩き割るわけだ。

私としては、先の東方案と折衷すればいいと思う」

そこから先は、このエルヴィンの快拳とも言うべき作戦案だった。東方案そのままに川を防御陣地とし、川の手前にてザ・ハンドで敵を拘束。このとき、ザ・ハンドはあえて直接攻撃をせず、観測員となって3号突撃砲の砲撃位置を指示する。この時点で西住チームは、こちらの目的が戦線への拘束であることに気がつくだろう。その間、仗助と

康一の乗った38tはひとつ先の別の橋から迂回し背後に回り、そして合図と同時に。

「『急襲』する!」

「なるほど! 虹村の『床(とこ)』に東方の『鉄(かな)』ッ!

『鉄床(かなとこ) 戦術』ッ! アレキサンダー大王の十八番ッ!」

「ま、待つてよ! 考えてることはわかった!

つまり、仗助くんを装甲で守りながら

敵のド真ん中に突っ込ませるってことだよな?

けど……これじゃ気づかれた瞬間に結局一網打尽だぞッ、

ぼくも、仗助くんも、38tも!」

「あッ、わかったぜエルヴィン! だから康一も乗つけるんだな?」

「そうだ、エコーズで『だます』ッ!」

急襲と同時にエコーズを射程ギリギリに展開、38tの走行音を響かせて突き進ませる。地形的に、林の中から不自然な音が響いてしまう形になるが、それでもなお西住チームは注意せざるをえない。無視した場合、もしそれが本命だったなら、ろくな備えも出来ないまま接近と攻撃を許してしまうからだ。

「そしてこの突入と同時にザ・ハンドも直接攻撃に移る。

西住チームはこれで三つの正面を抱えることになり、

虹村と東方、どちらかを撃ち漏らしても致命傷！

そこに私達、3号突撃砲が橋を渡れば」

「フクロ叩き、つつーわけかよ！ イイじゃあねーかつ、気にいったぜえー

アツタマいいなーオメーよおー！」

「ウ……ウン、認めるにやぶさかでないぞ、私は！

イイ作戦だ……と思う」

手の平に拳をブツケて喜んだ億泰に一步遅れて、桃も『仕方なく認めるんだぞ！』みたいに賛同する。『私も』ではなく『私は』であるところに、またツマラナイ意地を感じないでもないが。このポンコツ先輩にもだいぶ慣れてきた。

「どうだろう、東方。東方隊長！」

「グレートだぜ、エルヴィン。言うことねえーぜ。

『仕切り』もおめーに頼みてえーんだが、いいかよ？」

「……『仕切り』？ 私が『指揮』をしると？」

「殴り合いに出ちまうんだぜ？ オレはよおおー、指揮なんかとれるワケがねえ！

すると、こん中で一番、戦場全体を眺めていられる立場にいんのはよおー、

川向ここの3号突撃砲だよな。

ケータイなんて便利なモンもあるしよ、全ての情報は3号突撃砲に集めるぜ。

そいつを使って指示を出すのは、作戦を組み立てたおめーがいい!

オレはそう思うんだがよ」

「んん……わかった、引き受けよう。」

エルヴィンの名乗りに恥じない采配、やってみせる!」

当初、指揮は杏に振るつもりだったが、杏もまた38tで突っ込むのだ。指揮よりも戦闘の方に忙しくなってしまうだろう。それに、この歴史オタクどもがここまで頼れるとは思わなかった。いや、さすがは歴史オタクと言うべきか。自分と億泰のシロウト作戦を、使える形にまで落とし込んでくれた。3号突撃砲を西住に渡したくないという消極的な理由から選んだコイツらだったが、むしろ3号突撃砲よりもよっぽどの拾い物だったと言える。恐ろしいのは戦車じゃあない。戦車を操る搭乗者だ。スタンドと同じことである。

「そんでよー、このグレートな作戦をより完ペキにするために、

もう一個ばかし小細工を提案するぜ」

だからこそ、これは絶対に必要なだ。

「……つまり、『斬首戦略』か。」

決まれば、西住チームは立て直しも効かなくなる。

そしてこのタイミングなら、機銃で『撃ち落とされる』リスクも限りなく低い」

「アイツによおー、考えるヒマは与えねえ。

ドギモを抜いたら、そのままスタンド使いの土俵に引きずり込む!」

.....

『今、虹村が出た。壁を掘り始めたところだ。38tはどうだ?』

「今、橋を渡ったぜ……敵影なし!」

敵に発見されないように、ここからしばらく速度を落とすぜ」

『了解だ。作戦に変更なし。そのまま進め』

「38t、了解ツスよ」

ピッ。柚子ケータイ(また借りた)の通話を切った仗助は、改めて車内を見回した。あの時のようなギツシリ状態ではない。自分の膝に康一が座ってはいるが、すぐ左にはポンコツ先輩、桃がいて、正面にるのは運転手、もとい操縦手の柚子。『矢』を持つているのは、この柚子だ。『矢』とはいっても、今年の干支『卯』の、単なる破魔矢なのだ。そしてその隣には会長さん、杏。やっぱり干し芋をムシヤムシヤ食ってるだけ! (足投げ出してんじやあねエーツスよおおー、なんつーカッコしてやがる!)

もうちよいと『慎重』ってヤツを知って欲しいよなあー、仗助さんとしては!)

とか思っていると、杏の首がクルッと回ってコッチを見た。ニヤツと笑って一言。

「スケベ」

ガタツ！

音を立てて桃が立つ。ピシツと人差し指を突きつけてきた。

「オイ東方ツ、会長によこしまな視線を投げてるんじやあないぞツ！」

「ウ、ウルセーツスよ！」

「ンなコト言うんならよおー、足下ろせよ会長さんツ」

「アツハハー、ゴメンゴメン！」

「つい、こーいうのにダラシなくなっちゃうんだよねえー、

女所帯だときあー」

「カンベンして下さいツスよオー」

コイツ、確実にからかいに来ている。だが、からかい返しなんかをしようものなら、さらなる地雷原に足を突っ込むのが見えていた。コイツはそれをわかってやっている。なんてイヤラシーヤツだ。いつか鼻ツマンで泣かす！

心の中で密かに決意するが、そこへいきなり脈絡の無い話が飛んできた。

「ザ・ハンドで戦車を川に落とす。えげつないよねえー」

「は？ そりゃあオレだつてそう思うツスよ。」

「だけども、戦車に乗った西住が相手なら、

「接近戦に持ち込むだけでも一苦勞だろうしよー」

「だねえー。西住ちゃんが相手じゃあ、ねえー」

仗助は、これを会心の策だと思っている。これを思いついたからこそ、ザ・ハンド単独で川を防御陣地に見立てることができなのだ。不用意に近づいた戦車がいれば、ガオン、そして、ドボン、だ。だが、杏はおそらく、これを褒め称えているわけではない。表情も口調もとくには変わらない。だが『何かある』。

「東方くんさ、『あのこと』知ってんの？」

『あのこと』？ 何かあったのかよ、西住によおー」

「……知らないなら、イイヤ。むしろ安心したね！」

そして、今の質問は『答え』でしかなかった。『戦車が川に落ちる』、西住はそういう事件だか事故に巻き込まれたことがある！

今ここでそんな戦法を提案した自分に、『それ』を知っているか確かめてくる理由があるとしたら。

「会長さんよおー」

「ンー？ なあに？」

「今までの時間はムダになっちまうがよおー、

今からでも億泰案の『急襲』に作戦変更するつつーのもアリだと思っぜ」

真顔になった杏は、数秒間、目玉をぱちくりさせた。それから、イタズラツ子のように

な……だが、少し穏やかな笑みに戻る。

「フフン、甘いね東方くん。」

西住ちゃんはねえー、あの橋の上で十字砲火くらったんだよー練習試合で！

ギシギシ揺れて4号戦車が落ちそーだったのに、

全然、取り乱したりなんかしなかつたんだよねー

『川ごときを怖がったりはしない』よ、西住ちゃんはさあーっ

だから私達としちゃ、もっと怖がつてもらわないとねー」

「なるほどよ。了解だぜ会長さん。作戦変更、なし！」

ひとつ頷いてから、杏はまた干し芋を袋から引つ張り出す。少ししてケータイが鳴り

出した。エルヴェインからだ。

『東方だな？ 虹村が敵を発見した。』

虹村もムーンライダーズに発見されている！

敵に後退の様子なし』

「ンじゃあよおー、始めんのか？」

『ああ。ミヨルニル作戦、発動だ！』

「38t、ミヨルニル作戦開始、了解したぜ」

『鉄床戦術』で『神話の戦い』だからミヨルニル作戦、らしいが。仗助には何のことやら

サツパリである。歴史オタクどもはウレシそうだったので、それで良しとした。ともかく、作戦は始まっている。あとは西住をぶちのめすだけだ！

38tの機関がうなりを上げ、最大速度に突入したことがイヤでもわかった。

T o B e C o n t i n u e d ⇒

戦車戦にチャレンジしよう！（7）

「全車に通達！ 敵の狙いは挟み撃ちにあります！」

これより、陣形を保ったまま前方の川へ進みます。あえて、です！」

西住みほ（にじずみ みほ）はインカムから通達する。きわどい勝負になるのだ。誤解が少しでもあれば、それで終わり。

「前方の川に陣取るザ・ハンドと3号突撃砲は、

戦線を固定するための『見せ札』ッ

本命は38tと、クレイジー・ダイヤモンド！

38tの装甲で守られたクレイジー・ダイヤモンドが

突っ込んでくるってことです！

私達がまず撃つのは、これです。

全車前進、ザ・ハンドを迎え撃つ……『フリ』をします！」

戦車三両、縦隊隊形（タテ一直線）で前進する。先頭はM3リーのウサギさんチーム。真ん中に自分達4号戦車のあんこうチーム。殿が89式中戦車のアヒルさんチームだ。ザ・ハンドに備えるなら楔（くさび）隊形が望ましいのだが、林に阻まれて戦車二台を

横並びに展開するのは無理。よって、今のままで38tに追いつかれてしまえば、89式中戦車だけが一方的に撃たれまくり、こちらは数の利を生かせない最悪の状態。ここまで来た時点で、もう突き進むしかない。進む先は敵の顎(あぎと)。ザ・ハンドのみを警戒しすぎて、特別狭い道に前後から押し込まれようとしている。

(『だからいい』んだけどね。東方くんの術中にハマった状態、『だからいい』)

おそらく、仗助はさらにもう一工夫重ねてくるだろう。予想が正しければ、それはエコーズ。音を操るエコーズであるはず。スタンド使いを二人まとめて投入してくる以上、直接戦闘に向かないエコーズだけを川向こうに置いたままだとは考えにくいのだ。みほが知っているエコーズは『A c t 2』らしく、『尻尾文字』は生身の人間にしか効果がない。戦車に乗り込んでいる限り、これを恐れる必要はないということ。となれば、使ってくるのは『A c t 1』。音を操る能力というものの、見たこともないし、未経験である。これで何をやってくるのか。だがエコーズの射程は50m。生身の人間を基準とすればかなり長い。戦車戦では至近距離。使えるポイントは相当限られてくる。仕掛けてくるとすれば、川の手前、道が広くなる直前にある、急カーブコース。『いろは坂』状に道が蛇行しているここくらいしかないので。射程50mで意味のある『何か』を仕掛けられるのは。

『38t発見しました! 後ろから全速力で追跡してきます!』

アヒルさんチームから、ついに来た。38tの最高速度は時速42km。こちら側の3両いずれも、振り切ることは不可能。ましてや89式中戦車の最高速度は25kmで、陣形を保つ以上、これ以上の速度は決して出せない。なるほど。攻めあぐねている間にこれが突っ込んできたら、そこで事実上の試合終了だっただろう。38tは撃破した89式中戦車を盾にし、仗助はその支援を受けながらやつてくる。同時に億泰も瞬間移動で飛んでくるという寸法だ。二方向、下手をすれば三方向を相手せざるをえなくなり、その間に二人の近距離パワー型が戦車に取り付いて、おしまい。

「西住どのツ、定時外連絡！ ザ・ハンドが来ますよおツ」

「ムーンライダーズは、4号戦車の直衛4騎を残して、

残り3騎でザ・ハンドを牽制。15秒、足止めしてください。

「ここが勝負の分かれ目です。お願い、優花里さん」

「了解ですツ、まかせてください西住どの」

「アヒルさんチームは、砲を真後ろに向けてください。

撃つ必要はありません。後ろに向けるだけです」

ムーンライダーズの足止めがうまくいかなければ、ザ・ハンドはM3リーをいともたやすく撃破してしまうだろう。そうなった場合は、もはやみほ自身がスタンド使いとして戦うしかない。当初、想定していた『ホイホイ作戦』は、みほ自身の姿を億泰の前に

あえてさらすことで大将首を取れるものと誤認させ、ザ・ハンドで引き寄せられた瞬間、顔面にトゥルー・カラーズのペンキをぶちまけて視界をふさぎ、撃破するものだった。この状況では、もう使えない。億泰を倒したところで、すぐに仗助がやってくることになる。後ろに38tを従えて、だ。『いろは坂』の急カーブを曲がる。エコーズの攻撃があるとするれば、今。

『に、西住隊長……林の中からエンジン音が聞こえますッ、

コツチ来てます！』

ウサギさんチームからの報告は、みほの予想を完全に裏付けるものだった。坂を曲がり、38tの姿が完全に見えなくなるタイミングを狙ってきた。

「無視してください。それはエコーズ。音を操るエコーズのニセモノです」

断言する。絶対に偽者だ。もしこのコースを通ろうとするなら、仗助が車外に出てクレイジー・ダイヤモンドで木を倒さなければならぬ。スタンドは、車内から直接外には出せない。スタンドは壁をすり抜けたりできない。自分で試したからわかる。外など出ているは、38tに乗り込んだ意味もないのである。機銃で撃たれて退場になるだけ。ありえない。そして向こうの企みもハッキリとわかった。38tが追いつく直前で別方向から『音』を近づけ、迎撃の方向を絞らせないことに、エコーズの目的はある。これで3方向に注意が分散。まばらになった迎撃をくぐり抜けて、仗助と億泰は来

なのだ。38tも高確率で健在。さらに言うなら、そうまでなれば3号突撃砲は完全にフリー。大手を振って橋を渡り、戦鬪に参加してくるだろう。恐ろしい作戦だ。これほどまでの難敵だったのか、東方仗助は。戦力に劣った状態から、この『鉄床戦術』じみた挟撃を立案し、実行に移してくるとは。

(……違うよね。東方くんだけとは思えないかな)

彼の作戦にしては、形が手堅く整いすぎているところに違和感があった。向こうには会長さんもいるし、歴史大好きなカバさんチームだっている。彼女達を味方につければ、こんな作戦だって考えてもくるだろう。

(すごいなあ。声かけられるのを待ってただけの私とは違うね……)

でも、勝つのは私)

カードは全て出揃った。クレイジー・ダイヤモンドは装甲に守られて強襲をかけてくる。ザ・ハンドはこちらを釘付けにするための布石であり、かつ総仕上げ。エコーズは、クレイジー・ダイヤモンドの突入支援。のち援護。38tはクレイジー・ダイヤモンドとエコーズを乗せる兵員輸送車で、同時に歩兵支援もやってくる。3号突撃砲は、前半は自走砲。後半は文字通りの突撃砲。よくここまで練り上げた。みほもそう思う。しかし、この作戦は緻密すぎる。緻密な作戦は、一箇所の破綻が全体に波及するものだ。その針の一穴、今、開けてみせよう。固唾を呑んで、数秒後の反撃を待っていると。

「うぐう！」

突然、優花里がうめき声を上げて伏せた。頭から出血している。制服に血がにじんだ。

『ライダーズ7、行動不能と判定。再起不能（リタイア）』

承太郎の無感情なアナウンスが流れ、何が起こったかを理解する。今、他のスタンドから攻撃を受ける状態にあるライダーズは3騎のみ。さつき行かせた3騎のうち、1騎がやられた。当然、ザ・ハンドに。今回ばかりは瞬く間に理解したらしい沙織が、床にこぼれた血を見て憤怒した。

「ゆかりん！ あ、あいつ……よくも！」

ただの練習試合じゃない！ それなのに、こんなひどいキズをツ

オンナのコにツ！」

「グ……私だって、ライダーズに銃を撃たせてるんですよ。武部どのツ

急所は外させてますけど、当たれば当然、痛いです。

虹村どのがやってきたのも、それなんですよ。お互い様なんです」

身体を起こした優花里は、用意していたらしい大きめの頭巾をササツと頭に巻きつけ、ガッツポーズをとってみせ、微笑んだ。

「大丈夫ですよお、こらえてみせますッ

それと、西住どの」

「うん。ありがとう優花里さん。15秒、キッチリ稼いでくれて。

ウサギさんチーム、道が開けたら左折して角で停止。

砲を今出てきた出口に向けてください。

アヒルさんチームはそのまま直進です。砲もそのまま！」

キューポラからそつと顔を出すと、眼前でM3リーが左折を始めるのが見えた。その向こうには億泰。周囲をムーンライダーズ2騎が旋回しながら、間断なく射撃を続けているのがわかる。まっすぐ飛んでいった弾丸は、ザ・ハンドが殴って弾く。ダメージを与えることはできないようだ。

だが充分だ。つまり億泰は防衛行動を必要としている。騎兵銃が命中したらダメージになることを、行動で証明しているのだ。

「優花里さん、もう充分です。ライダーズを下がらせてください」

「や、15秒稼いだら下がれって指示してるんですけどねえ。

集合の合図出しますね」

「麻子さん、右折！ 華さん、38tが顔を出した瞬間、お願いします」

右折し、4号戦車が急停車すると、すぐ背後を89式中戦車が通り過ぎていく音がした。彼我の距離はわかっている。敵は全速力。なら、飛び出してくるタイミングは。

「今ですー！」

全車、同時に砲を放った。現れた38tは、クロスファイヤーポイントに自ら突っ込んだ形となる。三方向から一斉砲火を浴びせられた38tがまんべんなくピンクの塗料まみれとなり、しばらく惰性で走ってから白旗が上がった。

『東方チーム、38t、行動不能！』

『38t、敵弾貫通により乗員殺傷判定。』

角谷杏、即死。小山柚子、即死。広瀬康一、重傷。

以上三名、再起不能（リタイア）』

蝶野教官と承太郎のアナウンスにより、戦果がはつきりする。心中、まったく穏やかではない。補足も何も入らない。アナウンスはこれで終わり。

「さ、さすがです、西住どのッ！」

策にハマッタと見せかけて、敵の分力を逆に包囲ッ

「これが、『もつとホイホイ作戦』……」

「静かに、優花里さん！」

「えっ？」

「再起不能（リタイア）に、東方くんが入ってない！」

38tに乗っていて生き残ったのなら、ここで確実に倒さないと。

華さん、機銃の用意。出てきた瞬間、叩き込みますッ

「……みほさん、警戒するべきは38tなんでしょうか？」

照準器から目を離すことなく、華が静かに聞いてきた。少し頭に血がのぼりかかっていることを自覚したみほは、小さく、深く息を吐く。今の自分が気づいていない可能性を華が掴んだというのなら、聞かない手はない。

「続けて、華さん」

「音石明との戦いで、東方さんは砲弾をなおしました。

なおした砲弾は飛んで戻ってきましたけど……

もし、それに『ぶら下がる』ことが出来たとしたら」

ガン！ ガン！

頭上から鉄板を蹴りつける音が響いたのは、直後だった。経験でわかる。人間の体重が、砲塔に飛び乗ってきたことが。この状況でこんな風に乗って来るのは誰なのか。もう言うまでもないことだ。

「『空も飛べるはず』……か。マズイぞッ……密着された」

「そんな、38tまで叩いたの？」

指揮官が動揺を口に出すのは厳禁である。呆然としたみほは、その禁を破ってしまった。それを恥じつつも、みほの脳は全速力で猛回転している。完全にやられた。おそら

く仗助は、川にかかった橋の部品をあらかじめ持っていたのだ。それをなおして飛んできた。38tに全ての注意が向く、その瞬間を狙って。

「で、でもでも！」

クレイジー・ダイヤモンドのパワーじゃあ4号戦車は壊せなかったよね？」

「武部どの……甘いです。多分、東方どのは勉強してきてます。

車体後部のラジエーターなら、クレイジー・ダイヤモンドで

ラクラク壊せちゃうんですよう」

「そうでなくても、砲に石を詰められたり、履帯をチギられたりしたら終わり。

……ン？ M3リーがこつちを向く？ 東方を機銃で仕留める気か」

我に返ったみほは、インカムに叫ぶ。ウサギさんチームの行動は、自殺行為でしかない！

「ウサギさんチーム、ザ・ハンドに集中してください！ でないと」

「遅かったな。ザ・ハンドがM3リーに取り付いた。

機銃が今、破壊され……だが、89式がフォローに入った。

虹村は飛びのいて逃げたぞ」

ホツと胸をなでおろす。最悪の事態は回避できたようだ。だが、4号戦車の危機は去っていない。砲塔に張り付いた何かが、次第に後ろに向かっている。クレイジー・ダ

イヤモンドの腕力で張り付いているとしたら、速度を上げて振り回したところで無意味だろう。腹を決めねばならない時だ。唾を飲み込み、全車に通達する。

「これより、トゥルー・カラーズ出撃します。」

繰り返します。トゥルー・カラーズ出撃ですッ、

西住みほ、出ます！」

「に、西住どのツ？」

「クレイジー・ダイヤモンドを遠ざけないと、

あんこうチームはこの場で全員退場です。」

今しかありません。ムーンライダーズと連携して、東方くんを倒します！

ウサギさんチームはザ・ハンドの牽制に集中。

アヒルさんチームは、私……西住みほを見て、適宜援護をお願いします。

以降、しばらく指揮は取れません。華さんが代行します。以上です」

インカムを外し、手を伸ばしてきた華に預ける。これも事前に話し合っただけのことだ。みほ自身が指揮を取れなくなる状況に陥る可能性は、スタンド同士の戦闘が繰り返える時点で想定した。

「みほさん、ご武運を」

「ウウウツ、みぼりんがさあ〜、なんでこんな痛いことばかり」

「あはは……勝つてきますー！」

キューポラは使わない。そこから這い出した途端、モグラ叩きよろしくブン殴られるだろうから。沙織のそばまで行き、沙織頭上のハッチから勢いよく身を乗り出す。見えた、仗助だ！

同時にトゥルー・カラースを発現、砲塔に張り付いて背を向けている彼の尻を蹴り飛ばしにかかる。物音がした瞬間に気づいていたのだろう、クレイジー・ダイヤモンドが現れ、即座にブロックされた。

「ケツ狙うのかよ、よりにもよってよおお〜」

「初対面でね、おシリ蹴ッ飛ばされたよね……お返し」

「そう言われると返す言葉もねエ〜ツスけど。」

わかってるよな……出てきたからにはよお〜」

「負けないよ。それだけ」

二人して、戦車の上に仁王立ち。トゥルー・カラースとクレイジー・ダイヤモンドもまた、互いをにらみ合っていた。

To Be Continued ⇒

戦車戦にチャレンジしよう！（8）

「虹村、到着だ。手はず通り頼む」

「お……オウよー」

虹村億泰（にじむら おくやす）は、ようやく車外に開放された。今まで、この3号突撃砲とかいう威力のスゴイらしい戦車に乗り込んで出番を待っていたのだが、これがまた狭い。それをあのよくワカラン話で盛り上がっていたオタク女どもが話し合ったり、ジャンケンしたりした結果、億泰は椅子になる羽目になった。正確に言うと、3号突撃砲の一番後ろの席に億泰が座り、その上にエルヴィンが座った。『オホン。じゃあ、失礼』とか言って億泰のヒザの上に腰掛けたエルヴィンは、たまに居心地悪そうに身によじっていたが、億泰とてそれは同じだ。

「もう一度言うが、何か行動を起こす場合は、まずは必ず電話で連絡してくれ。それをやっていいか悪いかは私が判断する。上から目線で悪いんだが」

「わかってるぜえ、おめーがボスだもんなあー」
「んじゃ、行ってくらあ」

おりようから借りたケータイをポケットに放り込むと、ザ・ハンドで空間をえぐる。

閉じた空間の『引き寄せ』で10メートルくらい先に飛ぶ。それを絶え間なく繰り返して、川にかかった橋まで到達。振り返れば3号突撃砲は見えない。バックして隠れたようだった。億泰はしばし棒立ちになり、そしてハアツ、と息を吐いた。

（や……やわらけエーかったよなあ）

イイ思いたんだらうけどよ、ありやあツラクもあるぜえ。

いいニオイもするしよおー）

虹村億泰。今までオンナの口に接点なんか持ちようのない生活をしてきたが、先週から突如として女運が上がった感がある。その中でも、今日の『コレ』は極めつけと言えたが、知り合ったばかりの女が相手では気まずさと表裏一体になるのは避けられなかった。

（あ〜、アレが華さんだったならよおー）

五十鈴華を大洗女子学園のマドンナと確信して疑わない億泰である。見た目が好みのほぼド真ん中で、しかも楽しそうに話を聞いてくれる華に会うことを、最近は毎日の楽しみにしているのだ。だが、今回は敵同士。全力で戦わなければ、それこそ軽蔑されるだろう。ザ・ハンドで対岸まで瞬時に渡ると、取り出したケータイを、教わった手順のままに動かす。

「えーと、左押しして、『エルヴィン』に合わせて、通話、と」

そこから先は、億泰のよく知る電話だった。2コールほどで、すぐにつながる。

「おう、向こう岸のガケに到着だぜ。今から穴掘って隠れっからよ」

『早いな。わかつてはいるつもりだったが……すぐ、穴を作って隠れてくれ。』

それと、ムーンライダーズの偵察も警戒するんだ。いつ来てもおかしくない』

「了解だぜ、また後でな」

電話を切つてから、穴を掘って隠れるまではすぐだった。だが、隠れて数分もしないうちに砲声が響く。3号突撃砲の方角からではない。何台もの戦車が同時に撃つている感じだ。明らかに敵が撃っている。3号突撃砲の場所がバレってしまったのか？

「オイ、撃たれまくつてねえーか？ エルヴィンよおー」

『めくら撃ちだ。単なる揺さぶりだ。だからこう何度も撃ってくるんだよ。』

少しずつ移動すれば、当たるものじゃあない……落ち着いて指示を待ってくれ』

そう言われはしたものの、西住チームが何かの方法で3号突撃砲の位置をおおまかにも掴んでいたのなら、集中攻撃で先にやってしまうことはありえると思つた。それこそ、億泰が3号突撃砲に攻撃位置を指示する作戦を、逆に向こうが先にやってきたとしたら。思つたことは、そのまま電話の先のエルヴィンにぶつける。

「ムーンライダーズがよ、そつちを先に見つけてんじやあねーのか？」

オレがこれからやろうとしてるみてーによ、

秋山が攻撃場所を指示してるような気がするぜえ」

『秋山さんが4号戦車から降りてまで？ それはない！』

向こうからしてみても一番の脅威は君のザ・ハンドなんだ。

君を放置して私達を探すはずはないと思う』

「そ、そうかよ。すまねえ」

『作戦通りに動こう。私達の役目は西住チームの拘束だ。』

失敗すれば、38tと東方は敵の中に孤立するぞ』

逆に論される形になってしまった。気がする、程度の話でしかなく、エルヴィンを説得できる材料は元よりない。それは結果的に幸運だったのだろう。なぜなら、直後に億泰は発見された。ムーンライダーズにだ。

『ハ、発見ンンンンンンンンンン！ 作戦目標、ザ・ハンド！』

イタゼエエーッ』

「なっ……や、ヤロオ〜」

『どうした、虹村』

「いたぜ、ライダーズがよおー。見つかった！」

『つ……そこをすぐに離れろ。砲弾の雨が降ってくるぞ。』

そのまま撃たれたら多分、君に死亡判定が出る』

「待つダケの時間は終わりつてことだよなあ〜、打つて出るぜ！」

「こうなつちまつたら敵をビビらせるしかねえーだろー！」

『むむ……よし。許可する！ 手はず通り、砲撃位置の指定を頼む。』

安全な場所に出次第、地図を出してくれ』

その後、しばらくは作戦通りにことが進んだ。砲撃位置の指定に手こずりまくつたことを除けば、順調と言つてもよかつた。そして、待ちに待つた瞬間が来る。

『虹村、やるぞ！』

「おつ、やんのかよ?」

『ミヨルニル作戦、発動だ。突つ込んで叩きのめせ！』

「ここから先は勝つか負けるかだ、それしかないッ」

「ナンだよアツいじやあねーかオメーよお。」

ウレシソーにしやがつて！」

『ウレシイともき。一度、こーやってキメてみたかつたんだよ、作戦発動を！』

「あ、わかる！ それはスゲーわかる！」

戦車の上に立つてんだろオメー、今！」

『ふつ、やらいでか！』

と言いたいとこだが、戦闘中はさすがになあ。だから勝利宣言でやるよ』

いことに。兄、形兆のバッド・カンパニーは歩兵が60人もいたから、一体や二体程度ではダメージにならなかったが、秋山は……

『ライダーズ7、行動不能と判定。再起不能（リタイア）』

承太郎の淡々としたアナウンスと共に、たった今の戦果を目視で確認した。バラバラに砕け散ってピクピクしている残骸の甲冑に『7』と確かにある。

（ギヤアアア……ッ！）

単純計算、身体の7分の1が吹っ飛んじまうウ……

生きてんのか？ 秋山はよおおーッ

「オイてめえらッ オヤブンが心配じゃあねえーのかよッ」

『バアカモノメエ……ッ、ココハ戦場ダアア……ッ！』

『敵ヲ前ニ舌ナメズリッ！ 我ラ戦士ヲナメクサリヤガツテエエ……』

ライダーズは億泰の制止など聞かなかつた。旋回しながら間断なく銃を撃ちまくってくる。右に左に、ザ・ハンドを回してはじく。無視はできない。ザ・ハンドのパワーをもってすれば防衛自体はたやすいが、それでも億泰の肉体に直接命中すれば、容易に貫通する威力があるのだ。これもまた、バッド・カンパニーで経験済みのことだった。

「チ、チキシヨオッ！ 反撃するに出来ねえ！

秋山を人質に取りやがって、キタネエーぞコラア！」

ただただ守勢に回る。勝負事ではあるにしても、あの犬コロ女を血ダルマにしたいなどとはまったく思わない。どうにか戦闘不能にする方法はないものか。

「ハッ！ そういやあ！ ザ・ハンドの『右手』……」

今回はコレで触るだけで『即死』つツールだったような……これだぜ！」

珍しく、頭をひねってすぐに光明が見えた。ついさつき説明されたばかりの内容だから覚えていた。そうとなれば話は早い。さっきのように引き寄せた後で、ピトツと触ってやればいいだけ。

「へっへっへっ、来やがれッ！ ニギニギしてやるぜえ〜」

このサエてる億泰さんがよおおー」

時折、物陰に隠れたりしているが、ライダーズの動きは基本的に億泰を中心とした円を描くのみ。なら、タイミングを見計らつての引き寄せはたやすい。そう思っていたのだが。

「ン！ 集合ノ合図ダ！」

『撤収、撤収ウウウー……ッ』

直後、ライダーズは脱兎のごとく逃げ出した。脇の林に分かれて入り、見えないところに一瞬で隠れてしまった。

「つて、ザケンなコラアアア……ッ！」

ドコ行きやがった！　すぐに見つけて……おあアツ!?」
が、追うのは即座に中止する。戦車3台がついに現れたのだ。ということとは、38tもすぐに来る。仗助も当然、『飛んで』来る。なら決まりだ。ライダーズにかまっている時間はない！

億泰も同時に突っ込んで3方向同時攻撃。これで西住は詰む。

(だ、だがよおー、なんだ……あの『形』。)

先頭に1台飛び出して、他の2台が左右に止まってエ。

で、大砲の向きはみんな同じ……)

気づいた瞬間、即座におりようケータイを取り出し、通話ボタンを連打。

『どうした、虹村』

「38t止める！　ワナだ、ぜってーワナ」

億泰のしている前で、ワナはキレイに決まった。林から飛び出てきた38tは、3台からの集中砲火を浴びて真っピンクに染まった。西住は、策にハマったフリをしていたのだ。そして逆に突っ込んでくる38tを撃った！

『東方チーム、38t、行動不能！』

『38t、敵弾貫通により乗員殺傷判定。』

角谷杏、即死。小山柚子、即死。広瀬康一、重傷。

以上三名、再起不能（リタイア）』

「やーらーれーたー！ー！ー」

惰性でしばらく走って止まった38tのキューポラから杓が飛び出し、白旗をバツタバツタと振り回していた。

『……聞こえたよ。罨だつたんだな？』

「どうするよ？ オレはこのまま突っ込む気だがよおー」

『それでいい。カエサルいわく、賽は投げられた！……だな。』

私達も橋を渡って攻撃に参加するよ……それまで持ちこたえてくれ』

「ノンキこいてたらオレらが全部ヤツちまうぜえー」

『頼もしいな。じゃあ後で』

通話を切る。同時に駆け出す。4号戦車は仗助がやるのだ。正確に言えば、西住を車外に引きずり出して釘付けにし、指揮をとらせないのが仗助の目的となる。そして38tを見事ワナにハマた今こそが、西住がもつとも油断する瞬間。仗助は、そこへ来る。ならば億泰は、その混乱に乗じてザ・ハンドで戦車を刈り取るのが役目。眼前で戦車のうち一台……小柄なヤツ。確か、仗助と康一が『チハ』とか呼んでたヤツが急カーブし、それと一緒にこちらへ機銃掃射をかましてくる。これもまた弾くこと自体は造作もないのだが、砲で撃たれるとさすがに自信がない。一旦飛びのく。一緒に、奥にいた砲が

ふたつある戦車も機銃でこつちを狙ってきた。絶え間なく撃って近づけない気だ。いくらスタンド使いとはいへ、策もなく近づけば、確かにこれでやられてしまっただろう。だが、この状況もすぐに崩れる。

「来たッ！ 待ったぜえ〜 仗助よお〜ッ」

あらかじめ、川にかかった橋の破片を確保していた仗助が、それをなおして掴まって、空を飛んでやってくる。軌道上には戦車が3台。当然ながら4号戦車も含まれる。そこに仗助は飛び降りた。38tを撃つために動きを止めてしまっていた4号戦車は、これをおぼろしくかわすこともできない。

「やった、『取り付いた』ッ！」

こうなりやあよお、あとはコツチのモンだぜ！」

今まで億泰を狙っていた戦車の女どもも気がついていたらしい。親玉のクビが今まさに取られようとしていることに。砲ふたつの戦車が、小さい砲の向きを変えて、仗助を撃とうとしている。億泰はこれをおぼろしく待っていた。

「注意がそれだ。難なく取り付くぜ」

ザ・ハンドがえぐり取った空間の閉じるパワーを借りて億泰は飛ぶ。向こうからしてみれば、突然、こちらの姿が消えたように見えただろう。見ていけば、だが。小さい砲に取り付いた億泰は、すぐさまザ・ハンドで砲をチョップ。脇にあつた機銃を一撃で叩

き壊す。そしてそのまま戦車の車体に右手の『手形』をつけてやろうとしたが、背後から聞こえたエンジン音に思わず飛びのく。飛びのいて正解だった。また『チハ』とやらの機銃掃射が来た。この、イヤなタイミングでの妨害は幾度となく続き、やがて砲がふたつある戦車が態勢を立て直してしまった。4号戦車にチラリと視線を投げると、すでに仗助の姿はなく、少し離れた場所でボコスカと攻防を繰り返している様子。どうも仗助も予想外の苦戦を強いられているらしい。4号戦車の砲塔が回って、こつちを見た。

（ゲツ……確かアレ……撃つ、てんのは……『華さん』）

明らかに億泰を撃とうとしている。逃げられないと悟った。理屈ではない本能的な直感でそれを感じ取った億泰は、砲を正面に捉えてザ・ハンドの右手を振り下ろす。轟音が鳴り響く。億泰は無事。ペイントにマミレてはいない。うまいこと砲弾を削り取れたのは、ほとんど運だと言っている。

「あ、危ねえッ、クソ危ねえッ！ オレいっぺん死んだ！ 死んだと思ったー！」

直後、当然のように機銃弾が飛んでくる。ザ・ハンドで全部弾き、林の中に避難。と思いきや、砲ふたつ戦車が、壊れたのとは別な機銃を横合いから撃ってくる。

（ジリ貧じゃあねーか、これじゃあよお〜）

こうなつてはイチかバチかで、どっちかの戦車に取り付くしかないかと思いはじめたところ、砲ふたつ戦車がキュラキュラと猛烈な音を立ててバックし始めた。一瞬遅れて轟

顔をグーでポカポカやられるが、あんまり効かない。殴り慣れていないし、そもそも体重が軽すぎて威力が乗らないと見た。そして、わかった。こんなパワーの足りないヤツが、どうやって蹴り倒してきたのか。

(ザ・ハンドの『引き寄せ』をウマイこと使いやがったのかッ)

『引き寄せ』の勢いそのまま蹴りに乗つけてきやがった!」

仗助と戦ったときにやられた、植木鉢攻撃と同じだ。いつの間にか戦車から降りて、『引き寄せ』と一緒に飛び、自分の身体を弾丸にしてきたのだ。なんてタフなヤツ!

「だが、てめえ一人でどーにかなるもんかよ!

ザ・ハンドで触ってやりやーオシマイよ……ハッ!」

が、そこでさらに気づいた。四方をオンナどもに囲まれている。

「殴ってダメなら、間接キメるしか! 四の字固めッ」

「こうなりやヤケクソおおッ、アームロック!」

「浮いたおテテ、もらっちゃいますよ。腕ひしぎ」

「ホギヤアアアアー……」

イテエ、イテエ、イデデエエ…… はなせッ、はなしテッ、マジでッ」

よつてたかつて絡みつかれ、間接を見事にキメられる。オンナのコとコレほど密着した経験は今までにない。あるわけがないのだが、こんな方向性の接触は望んでいない。

ヤツらはマジだ。間接がビキビキ音を立てつつある。

「テツ、テメエエー! ああー! テツ!」

どっちみちやるコトあ一緒だぜツ、

一人ずつザ・ハンドでニギニギして……」

ザ・ハンドを出し、最初にのしかかかってきたチビを吊るし上げたところで、頭上にさしかかるもうひとつの影に気づく。

「……へ?」

ドコ見てるのかわからないようなトボけた顔の女が、植木鉢を大きく振りかぶっていた。唯一誰も組み付いていない、億泰の頭に向かって。

「や……やべ、それは……シヤレになら」

ゴシヤア!

植木鉢がバラバラになる音と同時に、億泰の意識もトンだ。

『西住チーム、M3リー、行動不能!』

『東方チーム、虹村億泰、重傷。再起不能(リタイア)』

「発泡スチロールの植木鉢……紗希ったら、いつの間にそんなモノ持ち込んで」

「でも、ホントに気絶しちゃったみたい、このヒト……」

「けっこうカワイイかも」

「私はパス。需要はなくてもないだろーけど。」

「てか彼氏いなかった？ 優季……」

「怪人にライダーキックできちやっただー！ ねえ見てた？ 見てた？」

「……………バツタ」

「ズブ濡れ、しかもメガネ割れた。」

「私が残るしかなかったけどね、これはアンマリ……クシユン！」

To Be Continued ⇒

戦車戦にチャレンジしよう！（9）

東方仗助（ひがしかた　じょうすけ）の視界が、青一色に染まった。西住みほの最初の一手は、トウル・カラーズの手の中にはまった、ペンキカプセルの破裂だったのだ。一面にぶちまけられた青のペンキが全身にまんべんなく押し寄せて、防御行動を取るしかなかった。早々に殴って戦車から叩き落すか、死亡判定を出させるかしようとしていた仗助は、のっけから出鼻を挫かれたことになる。

（あ、危ねえッ！）

このペンキ……射程外に出ない限り『絶対に落ちない』からよおー
こいつが一度でも目に入っちゃまったなら、メクラで戦うハメになる。

警戒しといてよかったつとこか。とつさに顔をガードできたぜ！

が、当然それきりで終わりのわけがない。仗助の顔面を守ったクレイジー・ダイヤモンドの腕を下ろして様子を確認しようとする。予想外！　西住自身がカツ飛んできた！

タツクルではなかった。狙いは腰よりもっと下。膝に飛びついてくる気らしい。スタンドでのガードも間に合わず、押し倒される形で4号戦車から転落。頭から落ちて

気絶してはたまらないので、スタンドの腕だけを枕にしてガード。落着くと同時にトゥルー・カラーズの拳が飛んできた。残ったもう片手で辛うじてガードすると、素早く跳び退った西住が見える。ガードした後のクレイジー・ダイヤモンドの腕を見ると、黒のペンキがベツタリと貼り付き、すでに固まっていた。西住が狙ってきたのは、やはり顔面。執拗に目潰しを仕掛けてきている。

(当然の判断だよなあ。パワー負けしてるコト考えりやあよおー)

この戦法は、仗助の想定の内である。西住も当然、そう思っているはず。じつと観察。トゥルー・カラーズのみならず、西住もネコ足立ちのように身構えている。近づけば、また飛びのいて逃げるだろう。一緒にスタンドの拳が一発だけ飛んでくるだろう。クレイジー・ダイヤモンドと比較しても上回っている、スピードと射程距離を最大限活かしたヒットアンドアウェイを主軸に据えてくるはずだ。4号戦車から落とされてしまった以上、仗助も眼前の西住を無視することは、もうできない。顔面に一発でももらえば、視力を封じられたクレイジー・ダイヤモンドではどうにもならなくなるからだ。だが。「オレの目的はよおー、半分達成だな。多分、おめーもわかっているとと思うがよ」「私に指揮をとらせないこと。これだよ。で、もう半分は……」

「言わすんじゃあねえーよ、西住ッ！」

おめーをブツ倒すことだぜーッ

おめーを倒して、4号戦車もブツ壊す！ 中のヤツらも全員ドつく！

止められんのか、おめーによおおーッ

「あはは、煽るね。でも必要ないかな」

西住は、サツと両腕を前方に構えた。同時に、能力を解除したのだろう。先ほどブチ撒けられた青ペンキが剥がれ落ちて消えていく。互いに、元のキレイな姿に戻った。

「スゴイよ、東方くん。戦車の外に引つ張り出されるなんて思わなかった。

作戦を見抜いて上を行ったと思っても、東方くんはさらにその上を来た。

そんな東方くんを相手に、手加減なんかできるワケない」

「よく言うぜ。38トボコボコにしといて、このお方はよおー」

おかげで相当不利になっちまったぜ、オレはッ

本気でまずいのだ。4号戦車に貼りついてさえいれば、王手にリーチがかかった状態と言えた。あのまま、西住を叩き落して車体後部のラジエーターを破壊すれば、4号戦車はすぐに動作不能となり、撃破判定が出ただろう。だが、それももうできない。むしろ至近距離の4号戦車にいつ狙われてもおかしくない状況だ。さらには、ムーンライダーズが付近に潜んでいるのも確定である。億泰の迎撃にすべて回すような無用心を、こいつがするわけがない。実質、仗助は完全に包囲されている。敵のド真ん中に飛び降りて司令官の首を獲りに来たのだから当然と言えば当然なのだ。このピンチを打開

する方法はただひとつ。

「オレがおめーを倒すか」

「私があなを倒すか。今はそれが全て」

「仗助もスタンドを構えた。無言のにらみ合いになる。西住が歩けば、仗助も歩く。一触即発の牽制を、視線で交わしながら。どうやら、4号戦車から離れるように仕向けたいらしく、西住は仗助を中心に円を描くように歩を進めている。仗助としては、4号戦車に再び取り付いて一方的な優位を拾いたいところだが、これは明らかに見た。38tがかかったのと同じ罠が、そこにある。ムーンライダーズが狙ってくるだろう。とはいっても、西住を直接狙いに行っても、多分同じこと。そこに銃弾が飛んできて、最大限に連携されてしまう。こちらの射程は2m。向こうの射程は7m。守勢に回れば負けるが、ガムシヤラに突っ込んで向こうの思うツボ。そう思うと、さつき組み付いていた瞬間が、完封勝利のチャンスだったのだが。

（ここはひとつ、どうにかしてスタンドを捕まえてみるか。

距離をとれば攻撃されないと思ってたんなら、

そこでさらにドギモを抜いてやるぜ）

ポケットから取り出したるはスーパーボール。親指大の小さいヤツだ。クレイジー・ダイヤモンドにソツと手渡し、手首だけでスナップを効かせて投げつける。狙いは右

肩。頭だと脳震盪やら何やらを起こしてエライことになる可能性があった。なお、全力で投げつけた場合、家の壁を普通に貫通する。昨晚試したので加減もしている。何かやっていることに気がついていたらしい西住は、先ほどの仗助のように、とっさにスタンドでガードを固め、飛んできたスーパーボールを弾いた。が、『そらす』防御は出来ない。

「うううっ……」

少し涙目になっている。衝撃がスタンドに吸収されてしまい、その分のダメージが腕に襲い掛かっている最中だろう。指先から二の腕の骨に至るまで、ジンジンしてたまらないと見える。

「油断大敵ツスよねえ、西住サンよお」

「そ、その発想なかったよ！ ちょっと、用意良すぎないかなあ」

「おめー、戦車から頭出してばっかりだからよお。狙撃用に持ってたぜ」

「ああ、それで……確かに油断だよね。」

『普通の』戦車道なら反則だもん。人間を狙って撃つのは「

」スタンド使いならよお、おかまいなしだぜ。こんな風によ！」

仗助はワザトらしく見せ付けた。ポケットから取り出した右手いっぱいのスーパールールを。見せ付けられた西住は、歯を食いしばったまま思いきりタジロいである。

「ひ、ヒドいッ……」

「第二球、第三球、第四球、行くぜ西住よおーッ、ドララララー！」

「イジメツ子おーッ！」

投げて投げて投げまくる。スーパーボールを秒間一発。トゥルー・カラーズは防御し
かできない。おまけに腕が次第にブレてきている。腕の痛みもシビレも積み重なって
いくばかり。そのうち、西住は耐えかねて倒れてしまうだろう。このままであれば。拙
速に殴り掛かってくることを期待しての戦法だったが、そこまで持たない可能性すら
あった。

（このまま、みすみすヤラセツぱなしってのはねえよな……）

すると、ボチボチ来るぜ）

これは試金石でもある。ムーンライダーズがどういう風に使われているか、この反応
でわかるはず。次のスーパーボールを投げる瞬間、果たしてそれは見えた。銃声一発。
その後、コンマ数秒で襲い来る全方位の弾丸、実に五発。

「ドラララアアアッ！」

その場で一回転し、弾丸全てをそらして防ぐ。虹村形兆のバッド・カンパニーとほと
んど同じ手ごたえだ。飛ばされてくる弾丸は破壊エネルギーの具現であり、地面などに
突き刺さるなり消えていく。

(今ので確定だ。秋山のヤツ、コツチを見てるぜ！)

全弾同時！ 統制されている……ヤツらお得意の暴走じゃあない。

そして、口伝えにしちやあ反応が早すぎる。

なら、まずはアイツに退場してもらうぜ。先にスーパーボール叩ツ込む！)

統制した射撃を行うからには、向こうとてその瞬間を見計らっているはず。そこを逆に叩いてやる。38tに対してやられたことを、やり返す。そのためには、もう少し西住をイタブってやるしかないか。が、瞬間を狙っていたのは、西住もまた一緒であったらしい。

(い……いねえ。どこに行きやがった？)

アイツから目を離したのはせいぜい3秒程度。

気づかれずに移動できるわけがない)

この時、仗助はザ・ハンドの可能性をほんの少し疑った。混戦がさらに深くなり、億泰までもがこの付近にやってきたのなら、今の状況をピンチと見て西住だけを引き離しても不思議ではない。そう思って、わずかに注意をヨソにやってしまったのが命取りになるところだった。

(……足音！ 右からしているぜ！)

こいつは最初から走っていたのか？)

気がついて振り向くと、トウルルー・カラースの拳が眼前まで迫っていた。姿勢も何もあつたものではない、形振り構わず出したクレイジー・ダイヤモンドでどうにか弾く。完全に無事とはいかなかった。

「オ……オレの、髪」

トウルルー・カラースの拳はこともあろうにリーゼントを直撃。しかも、腕のシビレが残っていたのか、弾かれるなり拳がほどけていて、指がひつかかり……台無しになった。前髪が落っこちてくる。冗談ではない。

「ゴ……ゴメン。なんかスゴくゴメン」

いつの間にか姿を現し、トウルルー・カラースを引つ込めた西住が平謝りしてくる。別にこいつは悪くない。モノスゴくシヨックを受けてはいるが、そのくらいはわかる。

「……いくんスよべつにつく。すげえムカツ腹立ちやあいるけどよ」

「お、怒ってる？ やつぱり？」

「想像してみなよ、おめーの『ボコ』をバラバラにされた気分とかよお」

「わかつたよ、うん……おキニの服を破いちやつたんだね私。例えるなら」

ついにやられてしまった感がある。バッド・カンパニーにも、レッド・ホット・チリ・ペッパーにもやらせなかったのに。わざわざ髪の毛だけを狙うなんていうバカげたマネをするヤツがいなかったただけの話だが。

「で、でも！ 受けて立つよ。その、怒ってるのも含めてッ」
「いい覚悟じゃあねえーか！」

ペシヤンコにのしてやるぜッ、ギャグマンガみてーによおおくッ」
感情にまかせて突っ込んでいくのは無しだ。髪型をバカにされたなら、そんな判断もフツ飛ばしてブチキレている所だが、こいつ相手にそれをやれば多分、敗北一直線。そして、仮にそれが有効な手段だとわかっていたとしても、西住は決して実行に移さないだろう。そうしなければ誰かが死ぬような状況でもない限り、こいつは絶対にやらない。

（それよりもだ、あいつは一体何をやった？

目を離れたスキに姿を消す『何か』。

ぶっちゃけ、ひとつしか考えらんねーぜ）

ポケットから、またスーパーボールを取り出して投げつける。さっきと同様、西住は防御一辺倒になってしまいが、仗助は気づいた。トウルー・カラーズの動きが違う。

（『受け止める』んじゃあなくて、『そらし』始めてやがる。

防御しながら身体で覚えていたつつーのか……いや、違うッ

オレが実演しちまったんだ！

ムーンライダーズの弾丸を防いだのを見てやがったんだ！）

このやり方はもう続かない。スーパーボールで完封の目はなくなつた。完全に順応される前にケリをつけなければヤバイ。秋山を先に倒そうなどと考えていたが、目の前のこいつを放置したら勝ち目が消える。今のところ、ダメージの無効化までは出来ていない。となれば、そろそろまた来るはずだ。タイミングさえ予測できるなら、大して怖くはない。

「ドラララララ！」

ムーンライダーズの五発、すべて弾いた。そして今度はわかっている。防ぎながらも西住をチラリと見ていた。『森林迷彩』のボディペイント！

トウルル・カラーズの超スピードと精密動作性で、ほんの二秒ほどで自分の髪の毛から足つま先までもを、西住は塗り替えていたのだ。ほとんど忍者の世界である。ジツと見つめていなければ、真面目な話、見失う。その一瞬の隙さえあれば、ヤツにとつては充分だ。目にペンキを塗りつけられるだけで、クレイジー・ダイヤモンドはメクラ打ちしかできないくなるのだ。だから、この瞬間に勝機を見出すしかない。ボディペイントの作業で2秒間も隙を作った、この瞬間に。ムーンライダーズが弾を撃ち、すぐには次を撃てない、この瞬間に。

『西住チーム、M3リー、行動不能！』

『東方チーム、虹村億泰、重傷。再起不能（リタイア）』

(お、億泰ッ、やられやがった!)

挟み撃ちか何かで相打ちになっちまったのか?)

ほぼ同時のタイミングで、背後の4号戦車が動いた。何かと戦闘を始めている。3号突撃砲。それしかない。

(するってーと、3号突撃砲は、4号戦車と……あと、『チハ車』)

この二台を相手にしなきゃあなんねーってことだよな。

やはり、ここで勝負するしかない!

オレか3号突撃砲、どっちかやられた時点で全滅確定だぜ)

全速力で突っ走る。西住を最短距離、最短時間で始末するのだ。バレていることを理解した西住は、ボディペイントをさっさと解除すると、こちらに向けて身構えたが、スタンドを出して攻撃しようが防御に回ろうが無駄だ!

圧倒的に勝るパワーで一方的に叩きのめそうとした仗助に、しかし西住は別の選択をした。スタンドで攻撃するのではなく、西住自身が飛びついてきた。トゥルー・カラーズで地面を蹴って、その勢いで飛んできた。なるほど、さつき戦車から突き落とす時にもこれをやったのか。4 m以上は先からヘッドスライディングのようにやってきた西住に膝を取られ、その場に引き倒された仗助だったが、しかし、むしろこれはチャンスでしかない。二番煎じなど通じるものか。

「マネしてやるぜツ、オレもよおおーoooooooooooooッ！」

背中が地面につくより前に、クレイジー・ダイヤモンドを背中から出し、大地を蹴った。繰り返すが、トゥルー・カラーズとは段違いのパワーである。仗助の身体は、足に引つ付いた西住もろとも宙に跳ね、足元の西住を軸に90度回転。そのまま重力に従った結果、逆に西住が押し倒され、仗助はちょうど真上に落着。腹の上にまたがった形となる。どう見ても『不良が婦女子を暴行』の図だが、これで勝ちだ。攻撃しようとしていたトゥルー・カラーズも、すでにクレイジー・ダイヤモンドで捕まえている。ちよつと頭が冷えた。この体勢で女の子をボコボコに殴るなんて、控えめに言っても死ぬべき野郎だった。それこそ、『髪型』への憧れを自ら侮辱する行為だった。

「さすがに絵的にヤベーツスからよ、サツサと済ますぜ。抵抗すんなよな」

「ケホツ……うん、抵抗しないよ」

トゥルー・カラーズを羽交い絞めにしている以上、西住も身動きは不可能だ。この細っこい首にそつと手を回し、絞め落とすマネゴトをすれば承太郎も死亡判定をくれるだろう。だが、妙だ。西住のものわかりが良すぎる。抵抗自体がそもそも不可能なのだから、白旗を上げるしかないのは確かはずだが、何かやばい。根拠はないが、ハメラれている気が胸いっぱいに広がってきた。

「抵抗しても意味ないもん。東方くんは座つてて、

クレイジー・ダイヤモンドもトゥルー・カラーズにかかりつきりなら、

私が動く必要、全然ないよね」

「……なッ、まさ」

背中に衝撃が殺到した。十数発のペイント弾が直撃し、ピンク一色になるのがわかった。遅れて後ろを振り向くと、そこにいたのは。

『チハ車』……こんな、ドンピシャのタイミングを待ち構えてやがったのか？

いや、こいつは」

視線を少し下にやって気づく。地面に黒く大きな矢印が書いてある。矢印は、仗助の背中の中心をピタリと指し示していた。ほどなく、それは崩れて消えていく。

「グレート……誘い込まれてたつてののか、最初から。」

トゥルー・カラーズでこそ指示を出してたつてののかよ」

「うん、あんまり細かいのは指示できなかつたけど」

仗助はすべてを悟った。さっき出していたトゥルー・カラーズは、攻撃のために出していたのではなかった。『書き終えた』ところをたまたま捕まえた。それだけだったということに。トゥルー・カラーズの色を塗る能力を使って、気づかれない場所とタイミングで文字を書く。そうやって、控えていた『チハ車』を指揮していたのだ。西住本人と交戦状態になることで指揮を封じたつもりが、それ自体を隠れミノに、最初から指揮

をとられていた！

『東方チーム、東方仗助、死亡。再起不能（リタイア）』

承太郎がキツチリ死亡判定をくれた。当然、仗助の。

「……や、やられちゃった。チキシヨ〜〜〜ッ」

「そろそろ、どいてほしいかな。苦しいよ」

「あ、悪い、すまねえッス！」

ソクサとどいた仗助に、また後でね、とばかりに手をふると、西住は『チハ車』に駆け寄り、飛び乗った。

「ナイスアシストです、西住隊長ッ」

「アヒルさんチームこそ、ナイスショットだよ。」

私を巻き込まないで東方くんだけを機銃で撃つなんて、すごい」

「どっから撃つても効きやあしねえ！」

なんて言われたマンマじゃおかないってことです。

猛練習の成果、身体で思い知ってもらいました」

「？ 何の話かなあ」

聞いてたのか、あいつら。背後にこっそり忍び寄っていたのは、カバさんチームだけではなかったらしい。

「思い知りました、ゴメンナサイツス！」

「あ、いいって。コッチは盗み聞きしてたんだし。次は一緒にやろうよ」

『チハ車』が行ってしまつた後は、ただ脇によけて座り込んでいるだけになった。死人だからだ。移動も通信も、試合終了まで許可されない。それも、7、8分程度のことだった。

『東方チーム、3号突撃砲、行動不能！』

『3号突撃砲、敵弾貫通。爆発炎上により死亡判定。』

鈴木貴子、即死。松本里子、即死。杉山清美、即死。野上武子、即死。

以上四名、再起不能（リタイア）』

「誰だよ？ 誰がダレなんだよ？ わかんねえツスよコレ！」

本名くらい言つとけよアイツラ！ イマサラだけど」

最初の頃に撃破されて、生き残りがいたりしたら非常に難儀しただろう。誰に連絡をとつていいかすらわからない。そんな事態にならなかつたのは不幸中の幸いだったのか。それは置いといて、東方チームの戦力は、これで全滅だ。『矢』も38tにある。このまま、秋山のムーンライダーズあたりに発見されてゲームセットだろう。スガスガしいまでの負けっぷりだった。億泰のM3リー撃破だけが、振り返れば唯一の戦果であるという。だが、ここまでやれば充分だ。スタンド使いとのマジな戦闘に劣らない全力

を、この戦いで出し切ってみせたのだから。これで、あの蝶野教官が納得しないというのなら、もう仕方がない。試合終了のアナウンスを待ちながら、仗助は懐からクシを取り出し、破壊されたリーゼントの修繕を試みた。

30分後。

『東方チームの手により、矢の領域離脱を確認』

『勝利条件達成。東方チームの勝利です!』

「……アレツ?」

勝ったぞおおおおおおお……

はるか遠くから、雄たけびというか、かすれかけた絶叫が聞こえた。

To Be Continued ⇒

戦車戦にチャレンジしよう! (10)

秋山優花里（あきやま ゆかり）のムーンライダーズを以てしても、河嶋桃を発見することは叶わなかった。3号突撃砲を撃破した直後に気づきはしたのだ。『矢』は一体どこにあるのか、と。戦闘開始前にどこかに隠すような、勝負の成立を脅かすマネをしなくても誰も得をしない以上、戦場に現れたうちの誰かが必ず持つているはず。だが全員で探し回っても発見できない。38tも、3号突撃砲も、『死体』まで含めて探した。なに無い。

「……河嶋さん」

みほが思い出したようにつぶやいた名前から、全員がすべてを悟った。生徒会長の『死体』はニヤリと笑った。残存戦力を総動員しての搜索が始まるも、手がかりなどあるはずもなく。探し始めてから二十分経過したあたりで、ついにタイムリミットと相成った。学園艦の横幅をフルにカバーして探索できるムーンライダーズでも、たった7騎で方向性すら絞れないではどうしようもない。最初に木や枝が不自然に折れていたり、踏み荒らされた草の後などを探しはしたが、そんな痕跡もついに見つからずじまいだった。今は、試合時に使われる監視塔前に、4号戦車ともども到着している。エンジ

ンを止めて全員が降りたところへ、後ろから誰かが猛ダツシユしてやってきた。振り向くなり、必死の形相で両肩をガシツと掴まれた。億泰だ。

「オオイ！ 秋山アアローツ」

生きてつかア、大丈夫なのかよおローツ」

「アイタツ！ イタタタタツ！」

ユスんないで下さい虹村どの、キズが、キズが開くんですよう」

「仗助エエローツ 早く治してやってくれよおおく、

血イ出てんじやあねーかよおおく」

「傷が開くと言ってるだろ、アホかお前は」

麻子が割って入り、押しつける。

「アツ、すまねえ！ でもよおロー」

「何も考えずライダーズをツブしたな？」

そして、ツブした後で気づいたな、お前」

「ウグツ。お、おうよ。」

兄貴のバッド・カンパニーと同じ感覚でやっちまったアくく」

「お前の兄貴のスタンドか。歩兵60人だったか？」

「おう、兄貴のバッド・カンパニーは一人、二人ツブれても

ダメーじにやあならなかったからよ。だが考えてみりやあ、秋山のムーンライダーズは7人つきやあいねーじゃあねーか。

単純に計算すりやあよ、身体の七分の一がフツ飛んじまうと思つてよおー

ばつが悪そうに、しどろもどろに説明する億泰に、麻子は小さくため息をついた。

「考えた方か。お前にしては」

「どーという意味だよ、コラ」

「気にしないでいい。東方は……ン？」

先ほど億泰が呼びかけた方向を麻子が向く。思い切り怪訝な表情をしたので、つられてそちらを見てみると。クシで髪をイジリながら、半分泣きが入っている男が一人いた。前髪の長い部分がハネ上がって、トサカのようになっている。誰だかわからず、数瞬、目をこらす。あの背丈。ちよつとトボけたタレ目、碧眼。濃い眉……

「あつ、そうだった。東方どのですねコノ人」

「くつそおおー、何をどうやったつて戻りやあしねえ……」

ヤラレちまったんだよ西住にツ！ スーパーハードの粘着がブツ壊れちまった！

クレイジー・ダイヤモンドで直つてくれたらよおおー、ウウウツ

出っぱなしのクレイジー・ダイヤモンドがものすごく困った顔をしている。ここまで、ずつとこの調子で歩いてきたのだろうか。

「何このリーゼント中毒。」

正直、今のアンタの方がカッコイイと思うんだけど。ワタシ的には」

「でもリーゼントあつてこそその東方どのですよおー武部どの。」

エレファントからアハトアハトを取られたら、私だつてカナシーです」

「そーなんだよ秋山アアアアアア、油くれよ油アアアア」

必死の形相で両肩をガシツと掴まれた。またもや。

「せ、戦車用のグリースしかありませんよう」

「それでいいツ よこせ！」

オレをチョットでもアワレに思うならよおおー」

「東方くん、それはやめよう。ハゲたりするかもよ?」

見かねて、みほが割り込んできた。少しでも冷静になれば仗助にだつてわかるはずな

のだ。工業用のオイルを人間に塗り込むとか、ありえない。

「ンなこと言うならよ、オメーどうにかしろよ西住ツ」

「うん、考えがあるんだ。」

まず、クシで整えてから手で押さえて、固めるところを教えて」

「ンツ? お、おう」

「あつ、しゃがんで。 見えないとツライから」

そう言って、みほはおもむろにトゥルー・カラーズを出し、拳を仗助の頭に当てる。アイロンをかけるように拳を前後させ、その後を指先で軽くこすっている。

「こいつは……トゥルー・カラーズのペンキか？」

「うん、透明にしたペンキを塗りこんでみたよ。」

私のスタンドなんだし、身体に悪いとか、そういうのは無いと思うな」

「なるほど、乾けば固まる。速乾性！」

グレート！ ナカナカ具合よしだぜ」

手鏡で元通りのリーゼントに戻ったことを確認し、ご満悦でポーズをとっている仗助。その袖を、麻子が引いた。少しイラついた顔をしている。

「髪が直ったのなら、こいつも治してくれ。頭をケガしている」

「あ。悪かったツスよ、すぐなおすぜ……」

「鏡持つてまでメンテ欠かさないとか、オンナのゴジみてるわねアンタ」

「死にたくなるぜ！ 崩れたリーゼントで外歩くとかよおろ、絶対にできねえ！」

仗助は沙織と雑談しながらも、クレイジー・ダイヤモンドだけはしっかり優花里の方によこしてきたので、近くに寄って治してもらう。痛みが消えていく。傷が水にでも溶けていくような感触に目を細めていると、少し困ったように仗助が言ってくる。

「思うんだがよおー秋山。」

やっぱし直接戦うのは危ねえーぜ、おめーのムーンライダーズ」
「はい、防御力ゼロですからねえ。」

東方どのがいないと、このダメーτζだつてどれだけ引きずるか」
「だがよ、他のスタンド使いと連携して『偵察』だとか『牽制』に
専念されると厄介な能力でもあるな……これからはよ、

その辺メインで訓練してくのもいいんじゃないかと思うのよ。

どうよ、西住？」

「東方くんの言う通りだと思うよ。でも、賛成できない。

こんなこと言いたくないけど、もし！

もし、音石明の気が変わっちゃったら……

もし、一人ずつココソ暗殺する方針に切り替えたなら。

優花里さんは何もできずにやられる。今のままじゃあ、そうなる」

「共闘前提も、それはそれで危険ってわけか。

最低一度は逃げ切れる策を用意しとかねえとな」

自分の身体から、こげくさい臭いが漂ってきた気がした。高圧電流でバチバチ焼かれた記憶が、鼻の奥にフラッシュバックしている。思わず、自身の身体を抱きしめた。スタンド使いになったところで、恐怖が消えるわけではないのだ。両肩に、また手が置か

れた。本日三度目だが、今度は優しかった。

「させないよ、優花里さん」

「西住どの……」

「そんなことには私がさせないし、優花里さんも、そんな風には終わらない。

そのためには、練習だよ。それと、作戦」

「不良の悪知恵で良けりゃあよおー、貸してやるぜ! 秋山」

「ありがとうございますッ! 西住どのッ、東方どのッ」

二人がいてくれるなら、この恐怖とも戦えるだろう。いや、二人どころではない。この場の全員が味方だ。深く頭を下げる優花里に、仗助とみほが顔を見合わせて苦笑したところで、6両目の戦車が背後から姿を現した。90式戦車だ。蝶野教官が空挺降下で持ち込んできた、自衛隊の最新鋭戦車である。最高速度は、4号戦車とは段違い。時速70km。戦車道の戦車とは、最初から比べるべきではない代物だ。優花里たちの真横を通り過ぎてから脇に避け、ピタリと止まると、蝶野教官がキューポラから身を乗り出し、天蓋に直立する。続いて、承太郎がやや窮屈そうに這い出してきて、最後に、河嶋桃が出てきた。これまた、何か変だと思ったら、承太郎がコートを着ていない。代わりに、河嶋桃がそれを羽織っている。よく見ると、汗みどろだった。ヘクシユン! 思いきりクシヤミをした河嶋桃が、それでも見栄を張るように足を踏み鳴らすと、すでに集

合を終えていた一同が、全員整列する。生徒会一同ことカメさんチームは、当然のように前に出て90式戦車の傍に立った。仗助達は、とりあえずカバさんチームに合流したようだ。

「これより、蝶野教官に今回の模擬戦を総括していただく。

一同、謹んで聞くように……ツクシユン！」

しまらない空気に全員が和んだ。それをキツとにらんでから、河嶋桃は後ろに下がって、蝶野教官に最前列をゆずる。数秒間の溜めを作ってから、蝶野教官は満面の笑顔で親指を立てた。

「フアンタステイック！ 素晴らしい戦いだっただわ。

超能力を持ち込んだオカルトバトルだったけど、

それに頼り切ることもなく、持て余すこともなく！

挟撃、各個撃破、奇襲、囮作戦……

目まぐるしい全力の攻防、見せてもらったわよ」

表情からは、お世辞などの雰囲気は感じ取れなかった。もともと、おそらくこの人は本心でしかものを言うまい。90式戦車で学園長のフェラーリを引きつぶしておくきながら『ガハハ』と笑って済ます人なのだ。

「西住さん」

「はい」

「作戦の最重要目標である『矢』の行方に配慮できなかったのは、あなたらしくない失敗だったわね……いえ、訂正しましょうか。そんなことを考えていられないほどに追い詰められた。

大將首を直接狙われたせいで、『矢』の行方をもっとも気にするべきタイミングで、司令部の機能が停止していた。

そしてその失敗は、敵を全滅させても償えなかったというわけね」

「はい。明確な敗因です」

「よろしい。課題が見えたわね」

ウンウンと二度ほど頷き、蝶野教官は別の方向に視線を向ける。

「東方くん」

「……ハイッス」

「あの作戦、あなたが考えたの？」

「違います。いや、ちつとは考えましたッスけど……」

オレは川を盾にして守ることを考えて、億泰のヤツが全戦力でノツケから突撃することを考えたッスよ。

ドツチも穴だらけの作戦だったけどよお、

「そのエルヴィンがまとめ直してくれてスね、今回の作戦になりました」
「ミヨルニル作戦、つつーんだぜえー、カッケーよなあー。」

「イミわかんねーケド」

「カッコイイよねえー」

億泰が入れた茶々に生徒会長が同調してニンマリ笑っている。注目されたエルヴィンは、ポツと顔を赤くしてソツポを向いた。多分、億泰には冷やかす意図はまったくない。普通に褒めているのだろうか。

「なるほど。3号突撃砲が積極的に動かなかった理由がそれね。」

東方くんはスタンドで直接殴り合うから指揮なんか取れない。

だから3号突撃砲を司令部とし、挟撃作戦の指揮に専念させた。

「そういうことね」

「はい。オレ達の『アタマ』は最初から最後までエルヴィンです」

「西住さん」

「はい」

「あなた以外で戦闘指揮の出来る子が、ついに現れたわね。」

「今後の模擬戦にも力が入ってくると思わない？」

「はい。他の人にも機会が欲しいです。時間さえあれば」

そうなのだ。みほ以外が戦闘指揮をするなど、今まで考えたことすらもない。みほを除いた全員が戦車のド素人のため、誰もがそれ以前の問題だったからだ。指揮の通りに動き回れる地盤作りのため、今までを費やしてきたと言ってもいい。だが今回、模擬戦の形でチームを二つに割り、片方を誰かが受け持たざるを得なくなり。そして受け持ったエルヴィンは、最後までやってのけた。あまつさえ、勝った。この意味は大きい。たとえ、それがスタンドなどという異物を混ぜた邪道な戦車戦であろうとも。当のエルヴィンはこわばっている。えらいことになった。そう思っているようだ。

「ま、待つてください。得意になんか、とてもなれない！」

勝てたのは皆が奮闘してくれたからで！ 作戦も皆の折衷案で！

奇跡的に生き残った河嶋先輩がメロスみたいに走ってくれたからなんだ！」

「奮闘できるように指示を出せたってことだよね。」

みんなが作戦通りに動いて、誰も混乱してなかった……

スゴイよ。初めてだとは思えないくらい」

「あ、う」

軍帽を深く被ってうつむいたエルヴィンは、そのまま何も言えなくなる。

「観念するんだな、名将！」

「イヨツ、砂漠の狐！」

「カバさんチームの夜明けだけよ」

カエサル、左衛門佐、おりように代わる代わる冷やかされ、エルヴィンはカタカタ震え、しまいにキレた。

「お前からーッ 人の気も知らないで！」

「ハイハイ、そこまで！」

せつかくだから、空条先生にも一言お願いしたいのよ」

パンパン手を打ち鳴らして騒ぎを沈めた蝶野教官は、今度は承太郎に話をふった。事前の打ち合わせもなかったのだろう。一瞬、面食らった表情をした承太郎は、やれやれだぜ、と小さくつぶやいてから前に出てくる。

「戦車道については門外漢だがな。」

一応の予習として、聖グロリアーナとの練習試合は見させてもらった」

全員に気まずい雰囲気があった。あの時は、無様をさらしたチームがほとんどであったから。敵待ち伏せ時に遊んでいたところも映像に残ってしまっており、そんなものを見られてどういう印象を持たれるか、今となってはわかりきっていることだった。

「ウサギチーム。前回の君たちは『戦車を捨てて逃げた』。」

何ひとつ貢献しない、最低の戦いだったな」

奥歯を噛みしめ、ギリッと鳴らしたのは確か、澤梓（さわ あずさ）と言う子だった

か。1年生チームであるウサギさんチームのリーダーだ。

「だが今回、君たちは『戦車を捨てて戦った』。

敵を討ち取る手段として、あえて戦車を捨てることを選んだ。

砲塔を回すことで億泰の注意を引き付け、密かに戦車を降り、

ザ・ハンドの引き寄せを逆に利用した。

戦いを放棄せず、観察し、敵の強みにすらも弱点を見出す。

その冷静さを忘れるな……それが、君たちを強くするだろう」

悔しそうな顔から、花が咲くように笑顔になっていったのは、確か桂利奈という子。

他の1年生達ともども、澤梓の方を見ては笑っている。驚いた。ザ・ハンドを倒したの

は彼女か。今回の戦い、色々な才能が見出されているようだ。

「次に、アヒルチーム。君たちのアシストは特筆するべきものだと思う。

君たちの立ち回りが無ければ、西住チームは仗助と億泰の挟撃を

防ぎきれなかっただろう。攻撃だけが戦いではない。

君たちは、それを証明し続けるのがいだろうか」

「はいっ、スパイクを打つだけがバレーではありませんッ

チームワークなくして勝利なし、ですよね?」

「……………ああ」

今は亡きバレー部の元主将、磯部典子（いそべ のりこ）なりの会心の返答だったのだろうが、承太郎は『大丈夫かなコイツ』的な微妙な表情をして、気を取り直してから、今度はこつちを見た。正確に言うくと、華の方を見ている。

「五十鈴華。西住みほの代理で指揮を託されたのは君だと見たが、間違いないか」
「はい」

「4号戦車とムーンライダーズで、億泰と仗助を別々に相手取ったのは失策だな。

動きから見て、億泰を狙撃で確実に仕留めるつもりだったのだろうが……

腕前への自負が、結果として敗北につながった。そう見える」

承太郎の言っていることは結果論である。と言ってしまうえばそれまでだが。もし、あの場面で億泰ではなく仗助を狙い、動きをさらに制限していれば、3号突撃砲が混戦に乱入してくる前に仗助を倒せていたかもしれない。倒せてさえいれば、『矢』を追いかけるのも間に合った可能性が高い。生身の人間が走っていただけなのだから。その勝負の分かれ目に、華は居合わせていたのだ。そして、今回は誤った。華自身も重々承知だったようで、落ち込んだ顔こそしているが、不快を感じている雰囲気はない。

「その通りです。自戒いたします」

「人間大の相手を的にしても外さない技量は得難いものだろう。

だが、その『誇り』が時として隙になること、覚えておくといい。

撃つその瞬間、自分自身を決して疑わない。そのためにもな……」

「驕り。のことではありませんね……強い武器を持ったがために、判断を誤ると?」

「そうだ。武器はただ武器でしかない。目的のためにある、ただの手段だ」

「目的を預かっておきながら、知らず知らず手段に固執して、

挽回の機会を失った……

ありがとうございます。正すべき部分が見えました」

ぺこりと頭を下げる華に、承太郎の方も、上から目線ですまなかつた、と謝つて、後

ろに下がる。話はこれで終わりだと、行動で示していた。

「期待以上のお話だったわね。

私の仕事の半分以上が持つていかれた気分になるくらい。

良ければ今後も手伝っていただけませんか、空条先生」

「スタンドに関することなら……」

それはそうと、康一くんがずっとソワソワしているようだが」

さつきから、ずっと何かを言いたそうにしていた康一は、今もやはり不安そうに承太郎と蝶野教官を見ている。由花子というのが何者なのかは結局わからないままだが、よほど恐ろしいらしい。学園艦が髪の毛ミレになる、とか億泰が言っていたから、どうやらスタンド使いではあるらしいのだが。

「あ、そうだったわね。コングラッチュレーション！」

合格よ、文句なしに！」

というか、生徒会長に怒られました。

『勝手に男を突っ込まれちゃあ困る』って」

「どーしてもって言うんならヤブサカじやあないけどねえ。どうよ、康一くん」

「え、エンリヨします。どーぞお氣ツカいなく！」

目をひん？いてワタワタ両手を振り回す康一に、生徒会長はニヤーツとイヤラシイ笑みを浮かべた。

「まー、それとは別に、ちよつとばかりお礼もしたいからさ。

後で服の採寸させてね」

「服ウ？ なんの話ですか一体」

「さあー、何だと思うね？ 康一くウーン

怖がることないよー、天井のシミを数えてる間に終わるからさあー」

「ひいひいッ」

両手をワキワキさせている生徒会長に震え上がる康一。傍から見ると、オモチャとして目をつけられたとしか思えない。

「やかましいッ、解散してからにしろ！」

「アハハー、ゴメンナサイ」

承太郎に怒鳴られた生徒会長だったが、明らかに全然懲りていなかった。戦車格納庫まで引き返してから、改めて解散を言い渡されると、仗助と億泰も生徒会長に呼び止められる。服の採寸うんぬんは、わりとマジメな話であつたらしい。

「ぶつちやけるとねえー、キミたちに死なれちゃ困るんだよねー私ら。」

だから頑丈なインナー用意して、ちよつとでも防御力上げようつて話」

「そういうことなら願つてもねー話だがよ、いいんスカ?」

そんなことしてもよおー。学費とかの横領にならねーの?」

「前の『音石明事件』を受けてさあー、風紀委員に

防刃繊維のインナーを配布する予算はもう通つてるんだよねえー。

材料だけ買つて、作るのはウチの被服科なんだけど……

慣れない材料だろうし、失敗作が出来るつて見積もつてるんだよねー。

3着くらい」

「グレート。オレは何も聞かなかつたぜ」

「ま、できることはさせてよ。仲間だろー?」

(調子のいいこと言ってますよね、このヒト)

生徒会長に対し、わずかにだが腹が立ってくるのを自覚する優花里だった。みほがこ

の人物によつて戦車道の履修を強要されたことは、沙織と華から、すでに聞いて知つてゐる。あの戦車道の名門、黒森峰から転校するに至つた事情を、まず確実に知つていただろう。知りながらそんなマネをした人物に好意を抱くなど、正直なところ無理だし必要も感じない。だが、音石明の襲撃に対応して意図的な停電を起こしたのもこの人だし、風紀委員を通じて仗助達の侵入を手引きし、共闘体制を整えようとしているのもこの人だ。もう少し、人物を見極めるべき。この人を知つたつもりになるのは、まだ早い。そう思つてはいるのだが、やはり隔意が先に立つてしまふ。

「ところでさあー、東方くん……聞いてこないね。西住ちゃんのこと」

「西住の？ ああ、さっきの。聞かねえーツスよ」

「どして?」

「思い出したくもない過去をホジクリ返されてウレシイ奴なんかいねーぜ。」

本人がグチりてえならともかくよおー。そうじゃねえなら、オレは知らねえ」

聞き耳を立てているだけだったが、これには思わず振り向いた。どういふ経緯かは知らないが、仗助は、みほの過去に何か感づいている。どうやら生徒会長がそのきつかけを作つたようだが。

(西住どのを利用して、東方どのを縛りつけようとしている?)

頭をブンブン振つた。いくらなんでも悪意に取りすぎだし、こんなやり方では戦車道

を強要したことがバレた瞬間に全てが失われることになる。だが、仗助があのことを知るといふのは、決して悪くない気がする。むしろ知っていてほしい。あの人の信じた道を、この人ならわかってくれるはず。

（……これこそ、迷惑な発想ですね）

期待に沿わなかった瞬間、みほを戦犯扱いにした自称戦車道マニアのもと、これでは何も変わらない。自分も、頭を冷やすべき時が来ているようだ。勝手な願望を押し付けて、勝手に心酔してはいないか？

それではダメだ。あげく、勝手に裏切られ、勝手に怒りを投げつける奴らの同類に成り下がりはたくはない。足を確かめることを覚えなければ。

「ヘイ、ソコの彼女！　そう、そこでコツチ見てる秋山ちやあーん」

「いいッ？」

「一緒にオトコのコ達の採寸しなーい？　一人じゃ手に余るんだよねー」

思いがけず、生徒会長に呼び止められてしまった。気づかれているとは思わなかったが、考えてみれば好都合。信用できるか灰色の人なのだから、そばで監視した方が安心もできる。

「い、いいでしょう。お供しますよッ」

「アンタも好きねえー、ニヒヒヒヒ」

「オヤジかテメーは！ ノコノコついていいの不安になるぜえ〜」

「音石に備えるってーなら、ありがてえ話だろ。億泰……」

さっさとすませて帰ろうぜ。

もう2時間回ってんじやあねーか、ハラ減ったぜ」

「ウチの学食で食べてくー？ オゴるよ？ イモ煮オススメ」

「ウレシーけどチョット遠慮するツス。視線集めたくねえ」

「視線ねえー、確かにそのリーゼン……ポフツ！」

先導して歩き始めていた生徒会長が、振り向くなり吹き出し、その場にうずくまった。肩をふるわせて、プロレス技をかけられてギブアップするように地面を片手でバンバン叩いている。深刻なダメージを受けているようだ。主に腹筋のあたりに。つられて仗助を見た優花里は、その瞬間に理解した。

「な、どうしたよ会長さん」

「……あ、あー…… 仗助くん、頭、頭が！」

「ああん？ オレの頭が……ン？ アレ？」

「ひつ、東方どの……リーゼントが、ほどけて……そ、その。『スネ夫』に」

手鏡を取り出した仗助もまた、同じように理解した。中途半端に残ったスーパーハドが悪さしかしていない。ほつれてしまったリーゼントの大部分が、まだ固まっている

部分の先端からシダレヤナギと化している。その姿、ヒイキ目に見たとしても、やっぱり『スネ夫』！

「お、思い出したんだけどよオオーーッ

トゥルー・カラーズの『ペンキ』の射程距離ってよお、確か」

「ハイ、20mですなあ。それより遠ざかると」

「え〜と、ポロポロ崩れて勝手に消えていくから……ああ」

仗助は、手鏡をポロンと取り落とした。そして、さっきまでみほがいた場所に向かってダッシュ。

「西住イイイ〜ッ 行くんじゃあねエエーーッ

オレのそばから離れるなあああーーッ

生徒会長は転げまわってケイレンし、ムせてピクピクし続けた。その後、優花里がパシリを引き受けてスーパードを買ってくるまで、みほが少し離れるたび、仗助は『捨てられた子犬』みたいな顔をしたことを銘記しておく。

（……あ。89式を『チハ車』と勘違いしてましたなあ東方どの達。

後でちよつとおセツキヨーしましよーね）

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

⇒

Inter Inter Mission 『メダル・ウォー!』

「ああ、よかった。まだいた」

虹村億泰（にじむら おくやす）が帰路につこうとしたところ、呼び止める誰かがいた。今日さんさん聞いた声なので、さすがに覚えている。エルヴィンだ。

「ン? どうしたよ。」

ワリイけど手短にしてくんねーかなあ、

腹ペコでよお〜」

「すまないな、時間はとらせない。」

ものを手渡すだけだからな」

頭上にハテナが浮かぶと同時に、エルヴィンはサツと右拳を前に突き出した。つられて真下に両手を出すと、開かれた拳からポロツと何か金属が落ちる。

「ハッハッハッ」

「さっき言っただろう。」

勝ったら鉄十字勲章をあげようって」

「アツ、言ってた……」

マジだったのかよ、ノリじゃあなくなってる」

「私も単なる勢いだったけどな。」

黒田節を持ち出されては仕方ない……左衛門佐に」

「ハ？ ナンのこったよ？ 安来節？」

「違うッ ドジョウすくいの何が鉄十字勲章だッ？

と、とにかく！

約束は約束というわけだ。取っておいてくれ」

唇を尖らせたエルヴィンは置いて、億泰は手の中のを眺める。これは勲章だ。勲章とは何か。足りないことを自覚している頭で少し考えても、しつくり来なかった。

「どうしたんだ」

「いや、その、よおー。」

オレが持つべきじゃあないような気がするぜえ、

こいつはよおー」

「気に入らないか？」

「チゲえーよッ！ だが勲章っつーならよお〜ッ

勝利をキメたヤツが持つべきじゃあねーのか？

オレだとは思えねえーぜ」

「戦車二両を撃破した君にそんなことを……

なら、君にまかせる。

それは君がふさわしいと思うところに持っていけ」

それじゃ、と踵を返して足早に立ち去ったエルヴィンに呼び止めるスキは見当たらなかった。どうも勝手にキレているように見えたが、何が何なのか。戦車一台を倒したのはその通りとはいえ、その後がブザマすぎて勝った気にならない。あれよあれよという間に女どもに組み敷かれて固められ、トドメに脳天一撃。ケンカとしては負けもいり所だった。承太郎は華が狙撃に固執したことを戒めていたが、それを言ったら自分もつと能力にアグラをかいていたではないか。思えば今までの敗北はほとんど能力を逆用された結果である。要するに。マヌケを卒業しろ。コレだ。

(同じことは出来ねえ、音石の前じゃあよお)

過ちを繰り返すのなら、今度こそ兄の仇は取れなくなるだろう。そして、あのイケ好かない片メガネの泣きベソ女に、二度目の侮辱を吐かせることになる。自分は責任を取ると言った。この責任すら反故にするなら、キンタマをチョン切るべきだ。

「……………ンツ？」

今考えていたことと、手の平の中にあるものを思わず見比べた。オレにふさわしくないであろうコレは、勝利の立役者にこそ渡すべきもの。今回、勝利を拾ったのは誰だ。最後に勝利を叫んだのは。

(アイツつつーコトかよ……ヤンなるぜえ)

マグレだろうが何だろうが、東方チームが全滅した中、ただ一人生き残って『矢』を領域外に持って行ったのは、あの河嶋桃に他ならなかった。ならば、渡さなければならぬ。この勲章を。

「悪い、待たせちまつ……どうしたよ、億泰」

「何かあったの？ イヤそーな顔してるようだけど」

「仗助、康一もよお。」

ちつとやるコトが出来たからよお。

表で待つてろや。

それと西住。秋山でもいいけどよ」

「えっ?」

「私でも、ですかあ?」

妙な言い回しですなえ虹村どの」

髪型を整え終わって出てきた仗助だったが、今回の用件の役には立たない。同じよう

に、康一に頼ったってどうにもならない。河嶋桃の居場所に詳しいのは、大洗女子学園戦車道の二人の方であることくらいはわかるのだ。

「河嶋のヤツ、探してるんだがよおお」

アイツの居場所、わかるかよ」

「河嶋さん？ たぶんわかるけど、何の用事かな」

「コイツを渡さなきゃあならねえ。

今回の戦争の勲章をよお」

手の平の中身を示してやると、西住は眉をひそめてゴクンと息を飲む。よくわからな
い反応だった。戦車に詳しいコイツなら、これの意味も知っているはず。どうしてそ
んなビビった風な顔をされるのか。だが、それもすぐに引込む。横にいた秋山が声を
上げた。

「鉄十字勲章？」

エルヴィンどののモノじゃあないですかコレ？

私の記憶が正しければ、ですけど。

カバンにくつつけてた気がします」

「……だってよ、億泰くん。

届ける相手が違うんじゃないかなあ」

「落とし物じゃあねえーんだぜ、康一に秋山よお。

もらったんだよ！ 今さっきなあー」

「話が見えないよ？ 最初から聞かせてほしいかな。

順を追ってね」

全員、首をかしげまくっていたため、西住の提案に素直に従う。最初から話す。エルヴィンに呼び止められたところから。そして、河嶋桃に渡すべきだとの考えを口に出すなり。

「ほ、ホンキで言ってるの？ ないッ！ それはない！

バツカじゃあないの？」

康一がどやしつけてきた。

「な、何ッ？ なんで？」

「贈り物を、その日のうちに別の人に横流しだよ？

ケンカ売ってると思えないぞッ」

「でもよお、康一、エルヴィンが言ったんだぜ？

ふさわしいところに持っていけてよお」

ハアッッ。

深いため息をついた康一は、噛んで含めるように説明を始める。

「あのさあ〜〜『たとえ話』をすするよ？」

まず、億泰くんが華さんに贈り物をしました。

何を贈るのか、スツゴク考えるでしょ？

するとしたら！」

「お、おう。

そりやあ〜ダツセエモンは渡せねえよなあ〜」

「す〜くす〜く考えた億泰くんの、

気合の入ったプレゼントでした！

〜〜〜までは想像した？」

「したぜ。気合を入れて渡したぜッ

考えうる最高のモンをよオ〜」

「そして翌日」

なかなか先を続けない。ひたすら溜めを作り続ける康一に、億泰はシビレを切らしそうになるが、他の連中はそうでもない。何を言うのか、すでにわかっているとでもいうのか。

「オイッ何だよ、早く続き言えよッ」

「億泰くんのプレゼントを、

なぜか仗助くんが持つていました」

「おいおいおい、

なんでソコでオレに振るんだよ康一 イイイーツ」

「だつて適任がないでしょ？

ぼくじゃあ説得力ゼロだよね？」

思わず仗助を見た。殺意が沸いた。が、そこはひとつ呑み込んだ。康一を見る。

「どういうことだよ」

「さあね？ 捨てられたのを拾ったのかも知れないし、

貰ったそのまま仗助くんにあげちゃったのかも」

「そつ、そんなこと、するはずがねえ！

んな性悪なマネをするくらいなら、最初から断るぜ！

華さんだつたらよおお〜」

「キミがやろうとしてるのは『それ』だよ、億泰くん。

たとえ『困つたら捨ててもいい』つて前置きしても、

される気分は変わらないと思うけど？」

「あ……ウググ」

グウの音も出なかった。念入りに追われると、いちいちごもつともだった。

「アブないところでしたねえ。」

「一気に関係コジれるところでしたよ」

「もうコジれてるかも知れねえーぜ、秋山。」

あのエルヴィンも今回の戦い、

勝ったとは思ってなかったようだしよ。

せめて手柄立てたヤツにはごホービを持ってつたのに、

『オレにはふさわしくねー』で辞退だもんなあー。

この場合、アイツにしてみれば、

うまく指揮を取れたとは思ってないところが問題だよ。

多分こう思うぜ、『じゃあ私は何なんだ』ってよ……」

秋山が口ごもる。西住も、康一も、気まずい顔で黙りこくってしまふ。なんといいこ

とだ。飾りモノたったひとつの行方がそんなに問題だというのか。

「ん、んなオオゴトにするつもりはよおおーッ」

「そりゃーそうだろうよ。」

だがこれ以上はしくじれねえぜ億泰」

億泰は考える。

(メンドくせえええーッ

ンなコト、グダグダ気にしてんじやあねえーぜツ
女の腐つたみてえによお〜)

これが本音の四割を占めるところだったが、音石明を倒すまでは少なくとも一緒にやっついていく奴らなのだ。放置だけはダメだ。第一、女の腐つたみたいなものも、そもそも女である。億泰にとっては未知の存在。うかつなことはできないと思つた。それに、ここでヒドい対応をすれば、華さんだつて口もきいてくれるまい。

「ど、どうりやあいいつてんだよ……」

「腹案はあるけどよおー、これはダメだぜ。」

おめー自身が考えて動かねーと、

多分もつとイラつかれるぜ」

「なんで？」

「筋が通らなくなるからだよね。」

考え方の筋が、虹村くんと違つちやう」

おずおずと西住が言つたことは、この言い方なら億泰の腑に落ちた。筋が通らないヤツは確かに信用できない。自分の筋を通すためには、自分で決めなければ。グヌヌ又又、とうなりながら頭の中身を必死で回す。今回は、自分が負けたと思つてるエルヴィンが、億泰をホメてくれようとしてるのをムゲにしたからヤバイ。だが、筋を通すとい

うのなら、億泰としては、他に勲章をやるべきヤツがいると思っ
ている。だったら、どうする。

「億泰よお〜」

「じ、仗助え〜」

「あんま深く考えねえでよ、

おめーの筋をただ通すのもいいかも知んねえぜ」

「……」

腹が決まったのを感じた。抱えた頭から手を放し、背をピンと伸ばす。

「秋山よお、ちいと付き合えや」

「は、ハイツ?」

「コイツの出所をよおおー、

てめえなら知っていると見たぜえ〜このオレは」

「あツ、ハイ。知ってます、ねえ」

「なら話は早え。行くぜ」

「……ハイ。了解であります」

コイツは戦車マニアだ。だったら戦車に関する勲章とかだつて知っ
ているだろう。それを手にいれる。ふたつだ。筋を通すためには、これがふたつ必要だ。

「ち、ちよい待て億泰！」

地図とかもらえばいいじゃあねえーかッ

おめーも止めろよ、西住ッ」

「うーん、戦車の片付けが残ってるけど、

事情も事情だし。いいよ」

「なら、園センパイに電話してくんねーか？」

許可がねえ場所に行くだろうしよ」

「あ、そうだね。ちよつと待って……はい」

仗助が後ろで西住のケータイを耳に当ててへこへこするにも構わず、億泰は行く。秋山はオドオドしながら舎弟みたいについてきている。康一はまた溜め息をついていた。そして。

「どうした。何か用か？」

二時間後に再び見たエルヴィンは、やはり不機嫌なままだった。周りのカエサル、おりょう、左衛門佐は、少し目を丸くしたままこつちを見ている。

「まず、だ。コイツは受け取った。

手放すようなことはしねえ」

手の中に、受け取った鉄十字勲章を示す。だから何だ、と言いたげに、エルヴィンの

目が細まる。

「それで?」

「それで、これよ!」

もう片方の手に握っていたもうひとつを目前に差し出す。まったく同じ鉄十時勲章である。

「ん……これは?」

「てめーもひとつ持つべきだからよ。」

言つとくとよおおー、河嶋にもこいつをやったぜ」

受け取れと言うのなら、もらってやる!

ぶつきらぼうに言い捨てて、河嶋桃はそれを分捕っていったのだ。

「オレは頭悪いからよおおく、

心の中に思ったこと、それだけをする!

これで、持つべきヤツはみんな持ったぜ。勲章をよ」

少しぼんやりしたように、手渡された勲章を見ていたエルヴィンは、やがて顔を上げると、フツと顔を和らげた。

「なかなか……『粹』じゃあないか。虹村」

「ちつと怒られちまってよ、考え直したただけだぜ」

「おい、そこは黙っておくべきだろう？ 台無しだぞ」

そうは言われても、そこも含めて筋だと思つた億泰である。エルヴィンも、呆れてはいても咎めた風はなかつた。

「君がどういふ奴なのか、少しわかつた気がするよ。」

ありがとう。鉄十字勲章、確かに受け取つた」

自らの軍服じみたジャケットに、新たな鉄十字勲章を取り付ける彼女の姿。それを見届けてから億泰は踵を返して立ち去つた。内心、胸を撫で下ろしながら。

(カンタンにやあサワれねえーなあ、

オンナつてのはよおおお。

クワバラ、クワバラ……怖ええーッ)

To Be Continued ⇒

虹村億泰 —— 悩んだ結果、もらつた鉄十字勲章は

ひとまず自宅の貴重品用金庫に入れた。

エルヴェイン ― 直後に冷やかされまくり、

鉄十字勲章を取り外した。

結局、カバンに落ち着いたようである。

河嶋桃 ―

ムスツとしながら、

おニユーのケータイに鉄十字勲章を吊るした。

東方仗助 ―

気がつけば五時だった。

メシを食いそびれ、後で億泰をシメた。

スタンド使いは引かれます！（1）

「明日の戦車道全国大会の抽選会だな。俺達も行く」

東方仗助は、承太郎が何気なしに発した言葉の意味が凶れず、まばたきを二、三繰り返した。

「何スツて？ いや、イイツスけど。」

あんまし関係なくないツスカ、オレら」

「抽選会そのものにはな。目的はその後だ」

その後と言われてもピンと来ない仗助だが、自分なりに考えてみる。抽選会に集まってくるのは誰なのか。自分達の今の目的は当然、音石の打倒。それに近づける何かがある。

「どつかのスタンド使いでも来るんスか？」

「聖グロリアーナ女学院のスタンド使いと会合の場を持つ。」

スピードワゴン財団を通してコンタクトを取れたんでな……」

「聖グロ……確か、西住たちが練習試合をやったつう」

「彼女にとっても、音石明の件は他人事ではありえないはずだ。」

戦車道を内から乗っ取るかもしれないんヤツの話だからな。

顔合わせと同時に注意を促す。情報の共有だ」

理解できた。音石明の動きを封じると共に味方を増やす一手を打つわけである。元からスタンド使いがいるのなら、超常現象を信じさせる手間から始める必要もないし、利害も一致する。誰しも、自分の能力をいのように利用され使い捨てられるなど我慢できまい。音石はそれなのだ。

「するつてーと、戦車道チームのエライヤツツスか? ソイツは」

「隊長だ。少なくとも、全ての戦車は彼女に従う」

「なるほど。重要ですね……」

「知らないままだと、ソイツらも破滅かもツスからねえー」

「往復の電車賃は俺が出すし、昼飯くらいはおごつてやる。」

億泰と康一くんにも声をかけてくれ」

「あ、それ助かるツス……最近、財布が軽くつてよお。」

億泰と康一には間違いなく伝えときますぜ」

「頼む。じゃあな。明日は早いぜ」

『電話』が切れる。ここは仗助の自宅。だがこれは自宅の電話ではなかった。ケータイである。少し型落ちだそうだが、仗助は今まで持つてすらいなかったので、不便も何も

ない。むしろ電話以外の何に使えばいいのか、という気分だった。
(なるほど、こいつは必須だぜ。)

おふくろ巻き込みたくねー今は特によおおー)

戦車戦の帰り際、杏が手渡してきたのがこれである。風紀委員の予備機を回してくれたのだという。代金はすべて大洗女子学園持ち。ケータイの料金が数万円ふつとぼすヤツが存在することは知っている。好きに使ってくれていーよー、などとやってはいたが、乱用したらヤバい。あの人に金銭的な借りを作るのだけはマジに勘弁願いたかった。

(つーか、意地でも放さねー気だろうな。)

離れる気もねえけどよ。音石がどうにかなるまではな)

考えてふと思う。仮に音石を倒したとして、それでおさらばで済むのだろうか。間田敏和(はざまだ としかず)は言っていた。スタンド使いは引かれ合う、と。ではあいつらはどうなる。西住は。秋山は。

(西住は……西住はまだいいぜ。)

近距離。パワー型で、多少の防御力は約束されてるし、

あいつも戦いに慣れてきた。

だがよおおおー秋山はダメだ。

戦うたびに身体のどこかがはじけ飛んでいく。

後味悪いことになるぜ〜放っておいたらよお〜)

虹村形兆並みに使いこなせてようやく安全になるスタンド。それがあいつのムーンライダーズ。射程距離を除けば、はつきり言って下位互換だ。現状、クレイジー・ダイヤモンドのいない戦場で戦うこと自体が自殺行為だろう。

(そ〜んと) どうにかしねー限り離れられねーよなあー。

承太郎さんに西住も巻き込んで、一緒に相談していくしかねえーな)

初対面は死体だった。二度とあんなものを見るのはごめんだ。絶望すらもできずに半笑いで震えていた西住の姿も同じこと。ならば、避けるための手は次々に打つべきだ。さしあたり最大の脅威はやはり音石明なので、対抗するための提案を、明日ひとつ持っていく。そして今から祈らずにはいられなかった。明日引かれ合うスタンド使いどもが、みんなマトモな奴らであることを。

.....

翌日、西住たちと同じ新幹線で、第六十三回戦車道全国高校生大会抽選会会場に向かうことになった。実家が学園艦だから新幹線が初めて、だとかで大はしゃぎの秋山をなだめる西住たちとは相当離れた座席で関わる要素がなかったのは良かったのか悪かったのか。億泰と秋山を近くに置いておくと、何かの拍子で盛り上がったときにメ

チャクチャうるさく、麻子が不機嫌になるのだ。ましてや今日の新幹線は七時発。五時前に叩き起こされたアイツはほぼゾンビだった。仙台駅改札前でぶつ倒れグーグー言い出したヤツを全員がかりで新幹線に担ぎ込み、ちよつとした騒ぎになった。席についてからは仗助たちも全員寝た。昨日の戦車戦がかなり堪えている。承太郎は本を読んでいた。そして到着後、会場に入る資格がないのでボンヤリ外で待ち、二時間くらいして、パタパタ手を振る秋山の姿をようやく認めた。

「最初の相手はアンツイオ高校です」

「名前言われてもわかんねーけどよ。強エのソコ？」

「ええ〜強いか弱いかで言うんなら、弱い部類です。」

ですがあなどれませんよ〜虹村どの。

ここの戦車道は爆発力に定評があつてですなえ。

調子に乗られるとモノスゴく手強いです」

全員で戦車喫茶とやらに入り、今はテーブルふたつを占拠している。戦車道関係者が近くに居かねない状況で男女隣接は避けようと思つていたのだが、口を出すヒマもなく億泰が、ソコとソコいいかよ、と席をとり、メニューを広げ始めてしまった。もちろん、脇をこづいた。承太郎もやれやれと首をふつた。億泰は呼び鈴のミニチュア戦車を鳴らしてはしゃいだ。女どもはいつも通りだ。西住は苦笑。秋山はウンチクをタレ、華は

ニコニコ。沙織の視線は生暖かく、麻子はガン無視。康一はメニューを見てただけ。ともあれ、今の話題は一回戦の対戦相手、アンツイオ高校だった。

「特筆すべきはタンケッツテ軍団でしょうかね」

「ン? タンケッツテ? ンだよソイツは」

「小型戦闘車両です。豆タンクとも言いますよおー」

戦車を倒す火力はないですが、軽くて速いんです」

「オイオイオイ、意味あんのかよ。」

「んなモン出しても、敵倒せねーんじゃあよおー」

「虹村どの、ご存知のはずですよ?」

敵の場所を先に知る。それがどれだけの力になるか」

「ンツ? おおツ! 『観測射撃』かよツ」

「かも知れませんが、囿の攪乱かも知れませんねえ。」

「どつちにせよ、使われ方次第でヤツカイですね」

「まるつきしムーンライダーズじゃあねえーか。」

「オメーのよお」

「ソレですツ! ピツタリですよおーツ」

「そーいうフウにたとえるなら、あとの問題は、」

『敵にザ・ハンドはいるか?』って所なんですよ」

「ほへえ〜ツ　一撃で戦車ブツ壊せるスゲエヤツツてことかい」

「はい。去年ならセモベンテが……ほら、三突ですよ、イタリアの」

あ、こいつらの話、終わらない……しかも声がどんどんデカくなっていく。麻子がチラチラ見てくる。止めるってか。どのみち、そろそろ話に首を突っ込んでいくつもりだったからいいのだが。

「ま、どうやらクジ運は良かったようだな……」

倒せそうな相手にぶつかってことでいいんだよな？」

「東方くん。わかっているとと思うけど。」

遅いか早いかの違いではないよ。強豪校にぶつかるの」

気楽めに切り出した仗助に、やや厳しい表情でみほが答え、それにね、と付け足して続ける。

「私たちはどうあがいても戦車の経験二カ月未満。」

これから戦うアンツイオ高校の人たちには練度で水をあけられる。

アンツイオだけじゃあなくて、どこに当たろうがそれは同じ。

タカをくくってかかれる相手なんか、いないよ」

「悲観してるワケじゃあねえよな、西住よ」

「うん」

迷うことのない即答。敵が誰だろうと、こいつの頭脳はフルに回る。それだけ確かなら充分すぎた。

「なら問題ねーぜ。戦車に関しちやあオレらにや及びもつかねーんだしよ。

それよりも問題なのは、音……」

「ふッ、ふふふ副隊長」

大切な話をしようとしたところに割り込んできた聞き覚えのない声に全員で振り向いてみたら、やつぱり見覚えのない銀髪の女がコッチを指さし、一步、二歩とたじろいでいた。釣った目つきがさらに釣り上がっているようだ。

「何、なんなのこいつら……」

あなた一体、どこで、何やって、どーなったの?」

「いきなり出てきて、ごアイサツツスねえー」

って言いてえけど! 知り合いだよな? 西住」

「う、うん……知り合い」

「質問に答えなさいよおおーッ」

ウチから逃げ出した先で、アンタ一体どういう」

「下がってくれ。逸見(いつみ)ッ」

なんか後ろからまた出てきた。知らないヤツだが顔の造形にもものすごく見覚えがあるような。

「みほッ、何も言うまいと思っていた。

黒森峰を去るのもお前の選択だと……

だがこの状況、理由いかんによつては、口を出さざるをえない……ッ!!」

口がへの字の『般若』と化したそいつは床をガツガツと踏みしめて西住に迫ってくる。顔を見比べる。そっくりだ。いや、顔つきはだいたいぶ違うが、面影がほとんど共通している。

「あの、つかぬこと聞くツスけど」

「引っ込んでくれ。あとでいくらでも時間をやるッ」

「もしかして、西住の……『おふくろさん』?」

時間が凍つたのを感じた仗助だった。承太郎はコーヒーをすすり、麻子はケーキをモキユモキユ頬張っていた。他は全てが止まった。

(もしかして、マズツた?)

なんか、ヤベエ〜雰囲気かヒシヒシと)

「……………ふっ」

「ふっ」

「ふ、ふざけるなよ？　そこまでフケては……いくらなんでも」

「東方くん、お姉ちゃんだよ。私のお姉ちゃん」

「えっ、姉ちゃん？　マジに？」

「マジだよ」

よくわかった。自分が何を言ったのか。後は低頭平伏の一手だった。

「スミマセンツしたあああー……」

「あ、いや、いいんだ。顔を上げてくれ……」

「そこまでフケて見えるのか？　私は」

「いえね、おふくろさんが言うみてーなコト言つてたツスから。」

「それでソツチだと思つたツス」

「うーん。まあ、いい」

顔を二、三度振つた西住の姉貴は、気を取り直してこつちを向いた。

「なら、貴方に聞く。貴方は、みほの何だ？」

「ダチですよ。何だと聞かれりやあね……」

こつちからも聞きますぜ。この指、何本立ってるツスか」

西住の姉貴の前に、仗助はグーの手を差し出した。当然、これなら『ゼロ本』になるが、そこに重なる形でクレイジー・ダイヤモンドが人差し指を立てている。聞きたいこ

とは、そこにあつた。

「……まさか。『そう』なのか？」

「これが『I』に見えるでイインスね、お姉さん」

「ああ、見えている。そして、貴方もこれが『I』に見える」

姉貴の方から差し出ししてきた手からも、黒い手が飛び出した。カプトムシの外骨格のような、柔らかい金属。そんな印象を受ける手だった。

「オレのは『クレイジー・ダイヤモンド』って名前ッス」

「名前か……そうだな。『ブラック・パレード』」

とりあえずだが、私はこう呼ぶ。

しかし、流れからして。みほもなんだな？」

「ご明察でスね。先週、なりましたよ」

「聞かせてくれるか。事情を」

否やはない。姉貴だというなら、それだけである程度の説明は不可避だし、そいつがスタンド使いだったのならなおの事。承太郎の方を振り返る。

「承太郎さん。一時からの会合でスけど。」

一人か二人の飛び入りはできますかね？」

「ぜひ来てもらおう。知らないことはそれだけでヤバイからな」

「一時? すまないが、その頃にはへりに乗っていなければ。

私たち黒森峰にも練習があるからな……

午後には復帰する予定なんだ。

今から30分は時間がとれる。それでいいか」

「わかった。ここで説明する」

うなずくと、西住の姉貴はこつちに軽く頭を下げ、不良側の席に詰めて座った。一方、所在なさげにしていた釣り目の銀髪女は、何か言いたそうにしながらキョロキョロしている。

「ええと。逸見つつつたつけ?」

「……気安く呼ばないでくれる?」

第一、なに? そのハンバーグみたいなフザケたアタ」

そこから先の発言は途切れた。口をパクパクさせてはいるが聞こえない。仗助も異変に気づく。銀髪女は目を見開き、もつと口を広げるが、何も言えていない。

「こッ、こいつは……」

「エコーズ・ACT2。」

そこから先を言う前に、チョットぼくの話聞いてください」

どうやら尻尾文字を貼り付けたらしい。おそらく、『シーン』とか、その辺を。こいつ

がそこまでして黙らせようとしたということは。仗助は考えるのをやめた。これ以上は康一の善意を無にしてしまう。そんなことを考えていると、銀髪女が喉を掻きむしりだした。冷や汗ビツショリだ。そして康一を見る目に明らかに危険な光が灯った。

「康一、やべえッ 下がれ！」

『AAAAAAAAALLRIGHTH (アアーライツ) !!』

銀髪女から別人が飛び出した。当然、スタンド！

死神じみたスタンドだ。頭はドクロのカブト。鋭い肋骨の隙間から青い炎がちらつくそれは、まっしぐらに康一へ殴りかかった。どう見ても近距離パワー型。割り込もうにも間に合わない。

「やれやれ、手くせが悪いな」

が、受け止めたのは承太郎。まばたきする間に割り込んでいた。一発で終わるはずもなく、次々に殴ってこようとする銀髪女のスタンドだったが、それを黙って見ている承太郎ではなかった。

「オラアッ！」

スタープラチナが脇腹に一発打ち込むと、ドクロの態勢はガクンと崩れ、銀髪女も同様に崩れてうずくまった。

「うぐ、が、はッ……」

「お前のそれは『過呼吸』だ。息をしろ。浅く、遅くな。30分もすれば回復する」

「い、逸見ッ! 今のは一体?」

「貴方はなんだ? 一瞬のうちにッ」

「さあな。答え合わせはそっちでするといい。それより」

「承太郎は、西住の姉貴に鋭い視線を投げつけた。」

「こいつは、ごく最近『矢』に刺されたな?」

「つまり音石明に……」

To Be Continued ⇒

スタンド使いは引かれ合います！（2）

西住みほ（にしずみ みほ）は、気が気ではなかった。逸見エリカのことはよく知っている。『正しい』と『誤り』。善と悪。白と黒。味方と敵。これらをハッキリさせて常に『正しい善の白』であろうとする気高さは黒森峰時代に見てきた。その『正しい者』に向ける信頼と忠誠は、姉である西住まほに今も変わらず注がれているようだ。そこに来て、みじめな逃亡者である自分には何を注ぐのか。そして今、そんな自分の同行者に対し、とんだ勘違いが降りかかろうとしてはいないか。

「取り急ぎだが、彼女の勘違いのタネを明かす。面倒なことにならねえようにな」

承太郎は簡潔に説明する。エコーズACT2で声を届かなくされたエリカは大声でそれを打ち破ることを試みて失敗。自分の呼吸の音すら聞こえないことから、声が出せない原因を『呼吸が封じられたため』と思い込んでしまった。大声を出して息苦しくなったことが、その憶測だけをひたすら後押しした、と。

「おいおい承太郎さん、さすがにそりゃあねえですぜツ

康一のエコーズは、ただ静かにさせただけなのによおー」

「それを知っているのは俺達だけで、彼女には知るよしもないことを忘れるなよ億泰。

俺も、彼女の能力に少しばかり不覚をとったんでな……」

億泰をたしなめながら、承太郎は袖をまくって腕を見せた。全員、息をのむ。血まみれだ。腕に無数の亀裂が走り、破壊されている。

「じつ、承太郎さんッ こいつは…」

グレート! ほとんどミンチじゃあないでスカ。

何をどうやったらこんなキズになるんだよ」

「拳に触れることそのものがヤバイ能力らしい。」

スマナイが治してくれ仗助。急いで追うべき奴がいた」

「追うべきヤツ? って、ココはどうするンスか」

「お前に任せる。一通りの説明はできるな?」

現時点で彼女らが敵である可能性はゼロだ」

治されるか早いか、承太郎は早足で店を出ていった。残された仗助は目をぱちくりさせている。

「西住、ちつと答え合わせに協力してくんねーかな」

「うん」

前提がズレた状態で話はできない。まほにもそれがわかってか、黙って見ているつものようだ。というよりも、仗助が起こした『奇跡』を目の当たりにして、衝撃を隠せ

ないと言った方が正しいだろうか。なおす能力というのはものすごい。改めてそう思う。

「さつきスタンドで攻撃されたのは、

康一のエコーズを知るわけがねえコイツが

『殺される！』ツて勘違いしたからだ。

そこはわかった」

みほは頷く。皆も頷いた。確認して、仗助は続ける。エリカだけは浅く痛々しい呼吸を繰り返しながら、恨みがましい視線を送ってきたが。どうやら殺意や敵意あつての攻撃でないことはわかってくれたようである。

「だがよ、承太郎さんが言うにはコイツのスタンド……

音石明に『矢』で刺されて目覚めたつてよ。

推測するぜ！ 何かおかしかったら言えよな」

そして仗助は言う。エリカのスタンドはヤバイ。パワーはともかく、スピードではほとんどクレイジー・ダイヤモンドと互角で、今見た限り、殴った相手の防御力をほぼ無視できる能力を持つ。正体まではわからないが、仗助自身も正面切つて戦いたくはない相手。

「だつてのに、エコーズに声を止められた時のあの反応。

『スタンドで攻撃されてる』ツつーより、

『ワケわかんねー』ってツラしてたぜ。

敵本体を探す素振りもなかった……

スタンドの概念自体をつかんでねえな。

ルールを知らねえ世界に放り込まれてるぜ!」

「それって、こーいうコトですかあ?」

例えるなら、この方は『ティーガーに乗った新兵』!

いくら戦車がスゴくても、戦車のイロハも知らないんじやあツ」

「もつとひでえぜ秋山。乗ったのはオレだぜ。

オレが乗せられたみてーなもんだぜツ

オレと億泰と康一がイキナリ戦車乗つけられたらどうなるよ?

動かさせただけでも拍手だぜツ フツーに考えてよおー」

言わんとすることは言いつつも、エリカのことをそれとなく持ち上げている仗助に気づくみほだった。自分のいた頃と変わらないのであれば、ティーガーに乗っているのは他でもない、エリカだ。それだけにだいぶ助かる気遣いである。優花里も仗助も、そんなことは知るよしもないのだが。エリカの顔にはこう書いてある。『あんたらごときと一緒にしないでくれる?』と。

「つまり、スタンドに目覚めたのは明らかに昨日今日。

承太郎さんの言った通りってことだよな。東方くん」

「ああ。このタイミングでスタンド使いになる原因なんか、ひとつつきやねえぜ。

そして、コイツの周りにスタンドを教えられるヤツはいねえってことの証明でもある。

西住、おめーの姉貴も目覚めたばかりだな」

話の本筋に移りたかったが、このままではしばらく後に復活したエリカが、少し言い過ぎるかもしれない。ここは仗助にならって、自分からもひとつ持ち上げておくことにしよう。

「私だって、死ぬ直前でようやく目覚めた力なんでもんね。

それまで、表に出すことさえ出来なかった。そう思うと、エリカさんはスゴイのかな」
エリカの顔にはこう書いてある。「見えたオベツカ使ってんじやあないわよ」と。とはいえ、噛みつくような怒気は薄れた。今はこれでいいだろう。そう思ったが甘かった。エリカは確かにそれでよかった。だが別の爆弾に火が入った。突然、襟首をつかまれて、みほは自分のうかつさを呪った。

「『死ぬ直前』だと？

どういうことだ、みほ。何があつたッ」

「ちよつ、お姉ちゃん。苦し」

「言え! 事と次第によつてはこいつらをゆるさん……言えツ!」

首をガクガク振り回されては、言えるものも言えたものではない。それでも言わなければ収まらない。頑張つて、必死に、言った。誤解がないように、事実のみを端的に。

「あ、赤ちゃんを取り戻そうとして、ヤクザに銃で撃たれてツ

それから、手首を切つてガケから飛び降りたの!」

「……は?」

「それでそれで、えつと。海が真つ赤になったから、透明な赤ちゃんがわかつてね。

それが私のスタンド能力だよ」

「お前が何を言っているのかさっぱりわからない!」

「私はおかしくなつてしまったのか?」

眼球と目蓋を全開にこわばらせた姉は、『ヤクザ? 赤ちゃん? 手首?』と、うわごとのようにキーワードを繰り返し口に出している。安心とは程遠い表情で、赤くなつたり青くなつたりしている。

「心底同情する。こんな電波を聞かされる立場にな」

「全部事実だけドツツコミ所しかない。どうフォロースりやいいんだか」

最後のケーキを平らげる麻子の隣で、沙織が机にヒジをつき額に手を当てうなだれて

いた。無言の華はなんともいえぬ表情で薄ら笑いを浮かべていたが、やがてキリリと顔を引き締め、進み出てきた。

「みほさんのお姉さま。今の話のを要約してお伝えします」

「た、頼む。頭が割れそうだ」

「みほさんは、無関係の赤ちゃんを助けるために海に飛び込みました。

赤ちゃんを助けたい一心で目覚めた力が、みほさんのスタンド。トゥルー・カラーズです」

「……その。ヤクザとかは？」

「たまたま出くわしたならず者どもです。赤ちゃんを海に放り込んだ犯人ですね。

銃で『口封じ』しようとしたらしいですが、みほさんに返り討ちにされて、全員刑務所です」

姉の顔色が次第に戻っていく。眉はまだ引きつったままだが、さすがは華だ。マイナスの印象から入られても、その礼儀と物腰で、ひとまずは話を聞く気にさせてしまうのだから。沙織とはまた違った強みである。気を取り直した姉は咳払いをして、厳しい目つきを作る。

「無礼を承知で聞く。あなた方は、そんな窮地に陥った妹を、放っておいたの？」

「NOだぜ、絶対（ぜってー）にNOだ」

糾弾じみた問いを、今度は仗助が真正面から切つて捨てた。

「同じタイムミングでオレ達は、交通事故に遭つたダチを助けなきやならなかつた。

西住は一人で赤んぼを追わざるを得なくなつて、オレ達もすぐ全力で追つたぜ!

そして、オレと、その秋山がギリギリで間に合つた。

結局、死ぬような目には遭わせちまつたツスけどよおおく」

明らかにムツとして、重ねて何かを言おうとした姉は、一度口を開きかけて、やめた。視線を落として逡巡し、しばらくして諦めたように首を横に振つた。

「正直、怒りがこみ上げる。が……」

私にはあなた方を非難する資格がない」

なぜだろう。みほは姉に、そんなことを言わないでほしかった。今そこにある温度が、その実、遠い場所にあることを思い知つてしまう。

「ある、と思うぜ。姉妹なんだしよ」

「あなた方は『間に合つた』。それだけで沢山だな」

「姉上どの……」

川に落ちた時の溝が、そこにはあつた。深くて這い上がれない溝が。

「この話はやめだ。聞かせてくれるんだらう? 事情をな。」

その音石明という男、私達もおそらく知つている。

もちろん、テレビのニュースではなく、だ」

席に座り直して、姉は催促する。説明を求める相手を仗助に定めたらしい。思えば、最初からその流れだった。仗助も、手元のカプチャーノを軽くすすつてから、承太郎に託された役目を果たしにかかった。

「まずは、『矢』について、から話すツスよ」

わかりきった説明については、あえて繰り返すまい。ただ、仗助の説明を聞きながらみほは思う。いつから自分の人生はこんな方向に狂ったんだろう？

もつとも、そうでなければ今ここにいるみんなとは無縁のままだっただろうから、イヤだとは思いたくないところだ。黒森峰での居場所も、決して失いたくはなかったが。

「……ふむ。わかった。音石明は戦車道の敵だということがな。」

西住流の末席として、この話、確かに受け取った」

姉のこの返事が意味するところは、私は西住流としてこの件に対応する。音石明を西住流に弓引く者とみなす。そういうことだ。もちろん、西住の名前を使うまでのことはしないだろうが、姉個人としては無条件かつ最大限の協力を約束してきた。

「西住流ツつうのは知らねえツスけど。」

協力してくれるんならありがたいツス」

「知らない？ そうか。ならそれがいいんだろうな」

隊長としての無感情な目を一瞬だけこちらに向けて、姉は、今度は姉自身の持つ情報を開陳する。

「結論から言う。そちらの推測はすべて正しい。

逸見の『力』……スタンドは、三日前、音石明の

レッド・ホット・チリ・ペッパーによってもたらされたものだ」

「お姉さんのは違うってことスか?」

「私のは五日前だ。熱を出して寝込んだら、いつの間にかこうなった」

「同じだ……オレと。西住に引きずられてスタンド使いになったんだ」

「思わず仗助の方を見る。初めて聞く情報だったからだ。

「オレは、四歳のときにこうなりました。

オレの父親……親父とか、承太郎さんに影響されたいらしいんす」

「となると、あの方も『矢』で?」

「違うツス。その、よくは知らねえでスけど。

『DIO』つつう、遠くで血がつかつてた

ド悪党がなったのに引きずられたらしいんですよ」

『DIO』という悪党か。覚えてはおこう」

「多分、必要ねえですよ。10年前に死んでますぜ、そいつ」

「……まあ、いいだろう」

脱線しかかった話を打ち切った姉は、三日前を詳細に語り始めた。

三日前、戦車道の練習終了後、一人遅れて更衣室に入ったエリカが突如として何かに刺されたのだという。言うまでもない、『矢』にだ。犯人は音石明のスタンド、レッド・ホット・チリ・ペツパー。『矢』に刺された直後から、『電気を帯びたパキケファロサルス』の存在を認識したエリカは、『ブザマな西住みほ』の悪評に付け込んで、その姉である西住まほを追い落とす提案をささやかれたという。エリカは間髪入れず断固拒否。痛めつけて言うことを聞かせることにしたチリ・ペツパーの攻撃を、目覚めたばかりの能力で辛うじて防御していたところに、偶然、まほが間に合った。二人がかりで叩かれたチリ・ペツパーは撤退し、そこから先の行方は不明。

「これが私たちが遭遇した、今のところの全てだな」

「つ、強ええーツスね、お姉さん達。」

あのチリ・ペツパーを二人で追い返しちまうなんてよ」

「私たち自身が『能力』を知らなかったおかげで、

それがかえって奇襲になった。次、ああはいかないだろう」

「能力だけバレて逃げられたってわけか。」

本腰入れて殺しにかかられたらやばいですね」

そして仗助が語るのは、蝶野教官が懸念した最悪の可能性。それぞれの家族が次々襲撃されること。おそらくほとんど全てのスタンドが、何をどうあがいても対処できない恐怖の攻撃。深刻に受け止めた姉は、存外あっさり伝家の宝刀に手をかけた。

「西住の名を使うしかない……母に持ち掛けます。」

戦車道どころじゃあない。家族が殺されては」

「ま、『そうなる』としたら、オレ達がやられちまった後ツスね。」

ヤツはオレ達を戦車道で倒すつもりらしいツスから。あくまで意地の問題だよ」

「……なら決戦に私を呼べ。と言ってしまいが。ダメだろうな」

「ダメでしょうね。『戦車道でオレ達と勝負』の土俵を投げ捨てちまったら、

音石明も意地を捨てちまう。家族襲撃をやらねえ意味もなくなるってことだぜ」

「はがゆいな。力を得ても蚊帳の外とは」

情報交換はそこで終わった。ようやく話せるまでに回復したエリカが30分の経過を知らせたのだ。康一をにらみつけた彼女は、吐き捨てるように言った。

「この屈辱、忘れないわよ」

「はあ……そんなこと言われても。」

「だいいち、ケンカ売るようなこと言わなきゃいいじゃあないか。自業自得だよ!」
グググと言葉に詰まったエリカの隣で、姉は席を立つ。

「さて、私はあなた方の能力を一方的に知ってしまった。

話の上で避けて通れなかっただけに、このままでは私達の貰いすぎだ」

「ツ、隊長、こいつらにそんな必要は」

「私のスタンド、ブラック・パレードについてだが。

まだ全てがわかったわけではない。

『触った物体の時間を止める』それだけがわかっている」

エリカが止める間もなく、姉は一息に言い切っていた。能力を知られることは弱点を知られること。これがわからない二人ではない。

「隊長、なんてことを」

「彼らは同盟者よ。戦車道の敵に対する、ね。

信義には信義で応じたい。おかしいかしら」

唇を噛んだエリカは、姉を押しつけるように前に出る。

「……ガンマ・レイ。私のスタンドよ。

殴ったものをガラス状に変える能力らしいわね。

隊長、行きましょう。時間がありません」

言うだけ言って、ふてくされたようにエリカは去った。姉もそれに続く素振りを見せたが、足を踏み出すよりも前に、みほにそっと手招きをした。

「大洗女子学園の戦車道に身を置いているお前は、

黒森峰、そして西住流に対する背信行為を働いている。

この件については母の耳に入れさせてもらう。当然、覚悟の上だな？」

「うん……決めたのは、私」

「ならばいい。ただ……どうしようもなくなったとき。

助けを求めるしかなかったとき、私への連絡をためらわないで。

私は、あなたの姉よ」

耳元へのささやきを残して、今度こそ姉は去る。残された体温を感じたみほは、思わず耳元に手を当てていた。

「ステキな姉上だったのでした。テレビで見たよりも、ずーっと」

「優花里さん。その、『知っている』……んだよね。私のことも」

「ハイ、『知っています』」

なんだか現実味がない。優花里に対して、そうなんだ、としか返せず、微妙な沈黙が訪れた。幸い、優花里以外は店を出る用意に入っていて、今の会話は聞き取られていない。

「あ、あぁー……」

「なんかおかしいと思っただらっ!」

いきなり康一が叫んだのにビクリとした。今の話が話だっただけに。まさか彼も『知っていた』のか。そんな恐れを向けてみれば。

「あの人、お金払ってない！」

「払わずに帰っちゃってるぞ」

「な、なあにイ〜ッ」

セコイ！ セコイぜ姉貴！

オレは出さねえーぜえー」

同時に、店の扉が開いた。

「……お勘定、お願いします。」

すみません、忘れてました」

微妙な沈黙は、店全体に及んだ。顔から火が出そうな姉は、そそくさと支払いを済ませて出て行った。

To Be Continued ⇒

スタンド使いは引かれ合います! (3)

「警察を呼びますよ」

空条承太郎（くうじょう じょうたろう）は、ごもつともな反応を返されていた。

（やることは何も変わらないがな）

戦車喫茶『ルクレール』にて、店内に入ってくるなり引き返した奴がいた。アツシユブロンドの長髪をツータールにまとめたそいつは、アンツイ才高校戦車道の隊長。現在集まった情報を確認する限り、もつとも音石明が乗っ取りを画策しやすい戦車道チーム。その代表者が、『スタンドを目で追った』。一刻の猶予もない緊急事態というべきだ。だから承太郎は追った。そして追いつくなり名前呼びかけ、率直に語った。

『安斎千代美（あんざい ちよみ）だな。』

話がある。君の生命に関わる話だ』

結果、彼女はふるえだして立ちすくんでしまった。不穏な言葉を聞かされたから、では断じてなからう。この反応は間違いない。スタンドについて、何か知っている。詳しいことを聞き出そうと距離を詰めると、警戒心をあらわにした金髪の女学生が大股で立ち塞がった。そして今に至る。

「やんのかテメ〜ッ 受けて立つかんな」

遅れて、黒い短髪の少年じみた奴……当然と言うべきか、女学生だ……も、隊長をかばって前に出た。右拳を左掌で打ち鳴らす。

「やつ、やめろ！ 危ないことはやめろよ！

逃げるぞ、関わるな！」

立ち直ったかの隊長は、前に立つ二人の腕を引く。そちらに振り向いた二人は互いを見つめて頷き、走り出そうとしていた。こうなることも想定している。承太郎は早々にカードを切った。

『角谷杏』。知っているな、彼女を」

走り始めた隊長がビクリと止まった。恐怖に満ちた目が向けられる。

「な、何だよお。アイツがどうか、したのか？」

「どうもしない。まずは話を聞いてもらいたい」

「アイツに何をしたんだよおッ」

「どうもしないし、何もしてねえ。」

とにかく一旦黙れ。俺は最初からすべて話すつもりだ」

打って変わり、食ってかかる彼女をやや強い調子でなだめる承太郎は思った。10年前だったらキレて怒鳴りつけていたのではなからうか、と。観念したようにへなへなと

しおれた彼女を、まずは安心させねばならない。

「まず、角谷杏には許可をもらったただけだ。

名前を出す許可をな。疑わしければ電話しろ」

「……そうします。で、あなたの名前を聞きたいんですが」

「空条承太郎」

隅によって電話を取り出し、たどたどしい手つきでボタンを押す彼女に代わり、ムスツとした顔で突っかかってきたのは黒髪だった。

「何なんスカアンタ。

姐さんキズつけたりしたらさあー、許さねえーツスよ」

「むしろキズをつけないために来たんだがな。

君たちもその中に含んでいる」

確認はすぐに終わったらしく、電話をしまった隊長、こと安齋千代美が戻ってくる。恐怖は多少薄れたようだが、うさんくさげな顔でこちらを見ている。

「あのオオー、ついていけばわかるよ、とか言われたんですけど……」

音石明、つてアレですよ？ 変質者の戦車ドロ」

「その通りだ。だが、それが全てではない。

そして、奴の目的のために、君たちアンツイオ高校戦車道が狙われる可能性がかなり

高い。

初戦の相手が大洗女子学園になって、さらに危険になった」

スタンドを目で追い、しかもこちらを見た途端に逃げたことから、もう遅い可能性すらあると判断した承太郎は、だからこうして追ってきたのだが、それは今言うべきことではない。それにこの反応を見るに、音石明とは現在まったく接触がないのは明らか。ということとは、そこまで焦る状況ではなくなつた。知らずスタンド使いにされていたとしても、守ることは可能。

「わかりました。お話を伺います」

「ドゥーチエ、それは」

「行くしかないだろ。知らないことで、みんなが危険になるのなら」

さほど考え込むこともなく、ほぼ即答した彼女だが、警戒は保っているようだ。角谷杏が悪党の手に落ちている可能性を、一応想定していると見える。彼女からしてみれば、この空条承太郎こそが音石明の手先である、ということすらありえるだろう。賢明だ。

「英国式喫茶『チャレンジャー』。話はそこでする」

「アンツイオ生つかまえてイギリス式とはイイ度胸ツスねえーアンタ」

「主賓がそこを指名してきた。俺達が決めたんじゃあない」

挑みかかるように睨めつける黒髪の手前は面倒くさかったが、信用を得るには好都合でもある。案の定、ピンと来たらしい安斎千代美は聞いてきた。

「主賓が英国？ グロリアーナですか」

「ああ。大洗女子と聖グロリアーナの戦車道、隊長周辺の数名が来る。

そこに俺達、音石明を追う四人が参加する」

「俺達四人。当然、私たちじゃあないから……あなたの関係者があと三人か」
「理解が早くて助かるな。さっそく来てもらおう」

うなずいて、安斎千代美はついてくる。うさんくさげな眼つきがだいぶ薄れた。
「いいんですか姐さん、こんなガチのマフィオーゾみたいなヤツに。

ゴッドファーザーのテーママキコエてキソーツスよー」

「多分、この人はウソを言っていないぞ、ペパロニ。」

今、ここで私がさらに聖グロに連絡をとれば、ウソが破たんするだろ？

そんなマヌケをやる人ではないみたいだからな」

「そして、聖グロのダーズリンまで屈服させるような悪党だったら、

こんな風に回りくどく声をかけてくる意味がない。ですよね、ドウーチエ」

「杏のヤツもダーズリンも口八丁でたぶらかされたって線も残るけどな。

だとしたらそんなヤツ、私には勝てん！ まな板の上のコイだな、ステに」

人をヤクザ呼ばわりしているのは置いておくとして、頭の回転を見るに、黙って騙されるような奴らではないようだ。結構である。それだけ守りやすい。

「大洗女子……男、先生、風格……」

金髪が、こちらを見ながら何か呟きだした。何事かと思っているのは他の二人も同じらしい。やがて黒髪の方が声をかけようとしたところで、金髪はポンと手を叩いた。

「あなた、もしかして。大洗女子の戦車道で最近審判をやったっていう」

「確かに、模擬戦を一度手伝ったがな。なぜ知っている。昨日の今日だが」

「向こうに、知り合いがいます」

「そうか」

「どうやら、知っていた情報が今、現実と一致したらしい。金髪の表情から疑いが消えた。」

「男で、戦車道の審判？」

「自衛隊の関係者ですか、もしかして」

「いいや。俺はただの海洋生物研究家だな。」

「手伝ったのには少し訳がある」

「それも、音石明の関係で？」

「安斎千代美にうなずき返して少しして、横断歩道の向こう側にリーゼントが見えた。」

その後ろには、大洗女子の制服の一団。無事に合流できた。黒森峰の二人と揉めたような様子もない。

「あッ、承太郎さん！」

あとチツとで電話するところだったツスよ」

「すまなかつたな、仗助。こっちの用も済んだ」

「承太郎さんが、あんなに急ぐ用事って……」

「ンツ? その制服はツ、そして、その髪はツ」

仗助の後ろにいた秋山が、まずアンツイオの三人に気づいた。戦車道オタクだけに、他校の情報が頭に定着しきっている。

「アンツイオ高校戦車道のリーダーがいてな。」

「追いつけて一安心というところだ」

後ろの連中が横断歩道を渡る。分かれていた人数が一塊になると、仗助の正面に安齋千代美が立つ形になった。別に凶ったわけではなく、たまたまだろうが。互いが互いの前で、ピタリと止まって数秒間。

「スゴイ頭……」

声キレイに重なった。そして仗助の目が座った。

「おい、今、オレの頭のことなんつった?」

「お、怒るのかソコで？ オマエもスゴイ呼ばわりしたる！ 私の頭」
「う、ウグツ……てめえ」

見つめ合う二人の間に、目に見えない火花が散った。アッシュブロンドのツーテールと言えば単純だが、ツーテールの先端部分はそれぞれ縦ロール。いわば古典的な少女マンガの具現化であり、ある意味、仗助以上に時代錯誤な髪型の安齋千代美だった。髪型の悪口を言われた仗助だが、自分も相手の髪型に難癖つけた手前、キレるにキレられないと見える。結果、無言のにらみ合いだけが続いた。

「おおつ、姐さんがリーゼントの不良とメンチの切り合いに」

「この場合はなんとかキレないですむのか……」

で、でも仗助くん、下がる気配が全然ないなあ〜」

「目と目が合うなりガンのツケ合いとか。」

ボーイミーツガールだったらモットやりようあるでしょーに」

「アホらしい」

しかし仗助もギリギリでこらえているだけ。一触即発なので手も出しにくい。時間を止める用意だけして見守ると、先に安齋千代美が折れた。

「ごめんなさい」

「ん、だと？」

「髪型を悪く言つてごめんなさい。こだわりがあるんだよな、多分」

「お……ウン、まあな」

「奇遇だな、私もなんだ」

自分の縦ロールを指先で巻き取りながら、なにやらふんぞり返る安斎。意図をつかみかねていた仗助は、少し遅れてハツとなり、直立して腰を90度折った。

「オレの方こそゴメンナサイツしたア!」

「うん。お互い次は無しにしような。」

私はアンチヨビ。アンツイオ戦車道の隊長をやつてる。

お前は空条さんの関係者だよな」

「アンチヨ、ビ……? あ、いや。」

東方仗助ツス。承太郎さんとは一応、親戚ですな」

「あの、西住みほですつ、大洗女子学園戦車道の隊長です」

「うえッ、西住? なんで西住?」

……そつか、転校してたか。思わぬ伏兵もあつたもんだな」

西住に続くように皆集まり、往來の真ん中で自己紹介の流れが出来つつあつたので、それとなく腕でさえぎり、阻止する。あとで時間はいくらでもあるのだ。

「集合場所は、このあたりのはずだが」

「お店の名前をお聞きしても？」

「英国式喫茶『チャレンジャー』。半地下の店らしいな。

コーヒーではなく紅茶の店だな……

軽食もあるが、パスタの類は出していない。主にサンドイッチだ」

五十鈴は、ただちに地下への階段を発見した。十字路を右折し、次の細道をさらに右折した先にあつたものを、だ。今の彼女であれば、他人の生活臭の詳細すら嗅ぎ分けてしまうだろう。ヘタなスタンドより強力な技能といえた。

「かーッ パスタなしかよお」

腹持ち悪そうだよなあー、サ店のサンドイッチとかよおー

なんかガッツリ食つとくんだつたぜえ」

「ほほーお、だけど、そりゃアンツイオじゃ間違いだ。

四百円ありや大満足で腹いっぱい」

「ンならよおー、そいつをすぐココに持ってこい！

今！ 腹すいてんのオレはッ」

「わ、わりい……いつものノリで売り子やつちまった。

もつと売りたいくてさあー鉄板ナポリタン。

タマゴも肉もオリーブオイルもケケケチしてないかなー

ジユウジユウ焼けてえー、アツ、ンまつ!

「腹すく話すんじゃねえっつーの!

イヤがらせかコラア!

でもレシピは気になる」

「なんだいニーチャン。あたしらのヒミツをカギまわろーってかあ?

アンタ長生きできないねえー」

「メシがマズかつたらよおお、それこそ明日がねエーだろがツ」

アホ同士が騒がしくなる前に入店することにした。別に悪くは思っていないが、うつとうしい。『貸切』の看板を押しつけて中に入る。こじんまりとした店だが、奥行きが以外なほどあった。そして薄暗い。電気がついておらず、外から採光しているだけ。店主とおぼしき女が進み出てくる。

「いらっしやいませ。どのような知らせをお持ちですか」

「大失敗が大成功に変わる知らせだ」

「かしこまりました。こちらです」

女の後続き、奥の部屋へと向かう。ワクワクした顔で秋山が聞いてきた。

「承太郎さん、今のつていわゆる……符牒ですかあ?」

「そうだ。念を入れているようだな」

「いや、あいつのことだから。

メンドクさいコダワリをやってみたかっただけだと思うぞおー多分」

「お知り合いなんですかー、アンチョビどの」

「何回かお茶したただけけどな」

最奥にあつた扉を開くと、嘘のように明るい室内が現れた。電気は使わず、構造に工夫をこらして光量を確保している。調度品はほどよく高級。下品にならないよう配慮されていた。そんな中に、彼女はいた。

「ようこそ、おいでくださいました。」

さ、かけて下さいませ。上下（かみしも）はありませんわ」

なるほど、いかにも面倒くさそうなことが好きそうなツラだった。写真などでは高貴な金髪少女でしかない。こいつの発する妙な雰囲気は実物を見るまでわからなかった。奥にあと二人、同じ制服を着た奴がいる。片方はオレンジがかつた金髪のこじんまりした奴。もう片方は、紅茶のような赤毛をした、得意げな顔の奴。

「あら、アンチョビさん。あなたもいらしたのね。」

飛び入りも歓迎ですよ」

「よくわからんが、ヤバそうだったんで来た。」

そういう話をするんだよな、これから」

「ええ。飾らず言えば、ドロボー注意!

の、話ですわね……聞くところによると、

ドロボーの狙いは『戦車道チーム丸ごと』

ごくりと息を呑んだ安齋、自称アンチヨビ。後ろの二人にも緊張が走る。それに構わず、彼女はポットに手をかけた。

「こんな格言を知っている?

『一杯のお茶を飲めれば、世界なんて破滅したつていい』

だとしても、皆で飲むお茶でありたいものね」

唐突に始まるドストエフスキーの引用に対し、承太郎の脳内はただの一文で埋め尽くされた。

(メンドクせえ)

「お茶を注がせていただきますわ。

申し遅れました。私はダーズリン……

聖グロリアーナ女学院の戦車道、隊長を務めております。

初めてお会いした方は、以後お見知りおきを」

手に取られたポットから、プシュンプシュンと湯気が吹いていた。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
⇒

スタンド使いは引かれ合います! (4)

冷泉麻子(れいぜい まこ)は、今回、自分は置物だと思っていた。

「空条さん、仕切りはお任せしても?」

「わかった。ではまず、『これ』が見える奴は手を上げてくれ」

スタンドなんか当然見えない。この状況で、それが『幸い』なのか『不幸』なのかはわからないが、核心に居合わせる人間でないのは確かだ。見たところ、聖グロのオレンジ髪……確か、オレンジペコと言ったか……が、ちょうど自分と同じ立場であるようだ。見えないことを知っている。空条承太郎の不可解な質問にとくに反応を見せず、ああそうだろうな、みたいに流している。逆にアンツイオの連中は反応が明確に分かれた。隊長のツーテール縦ロール、アンチヨビは少し泣きそうな顔になり、他の二人はいぶかしげにキョロキョロしている。こいつらは『知らない』動きだ。ほどなく手が上がらされた。杜王町三人組はすでに手を上げていて、優花里が続いてエツヘンと誇らしげに手を上げた。それを見たみほも笑って続く。応えるようにダージリンが拳手。脇にいた赤毛も、なにやらウキウキした顔で拳手。最後に、心底気が進まなそうにアンチヨビが拳手。スタンド使いは、全部で9人。

「まずは手短かに用件だけを言う。」

音石明という男が、戦車道チームの乗っ取りを企てている可能性が高い。

各校連携して、これを阻止したい」

「わかるように補足しますけれど。」

音石明は『見える』男だそうですね。

そして電気を操り、電線さえ通ればどこにでも現れる」

「わからねー、なにひとつとつわからねーっ」

アンツイオの黒髪が突っ込んだ。金髪も同感のようだ。当然だと麻子も思う。

「まず、話がまるで見えません。」

わかるようお願いします」

「だろっな……」

仗助。悪いが能力を見せてくれ。

お前以外のはかなりわかりにくい」

「了解ッスよ。あんましジマンげにやるモンじゃあねーッスけど」

能力を明かせというのは弱点を明かせに等しい。それだけに信頼を示すにも使えるのだろうが、それを自分でやらないのはどうなのだろうか。アレにソックリだとかスージーQに言われてこっち、なんか反感を持ってしまふ麻子であった。面倒くさいので表

子に隠れて目元は見えない。

「す、すいませんッした……続けませぬぜ」

「じよ、承太郎さん。悪かったぜえ。ナニも机ゲンコしなくてもよお」

気を取り直した仗助は、今度は千円札の切れ端を高く掲げて注目を集め、能力を発動。いつものごとくビデオの逆再生が起った。今回はケガ人もいないのだから、誰も痛い思いをしていない。何よりだ。散り散りの破片がひとりでに舞い戻っていくのを目の当たりにしたアンツィオの黒髪は口をアングリ空けて呆け、そして拍手ではしやぎだした。

「す、スゲエエエ〜〜ッ なあ、どういう手品よ?」

見ても全然わかんねーし! コツソリでいいから教えろよ。なあ」

「だから、あのな? タネもシカケもねえんスよ、コレ」

「やっぱりかあー、メシのタネはカンタンに明かせねエーよなあーっ」

「グレート、話進まねえ。」

9人のユカイな手品師になっちまうぞ、このままじゃ……」

「ヘソが茶を沸かしましてよ」

眉が八の字になった仗助に、ノンキなフウにかまえたダーズリンが激しく湯気を吹くポットを見せつけた。キョトンとした仗助は、直後にズリズリと床にくずおれた。

「くっ、くだらねエ〜〜」

アンタね、まさかズツと待ってたんじゃあないでしょうね？

そのネタおヒロメする時を、今日まで、ズ〜ツと!」

「『お仲間』のお客様ですもの。」

とっておきのおもてなしなら、ずっと考えていますわ」

「その『やってやったぜ』みてーなツラ引つ込めてから言えー!」

麻子も見ていた。くだらない。死ぬほどくだらないマネをしているが、そこにさらりと『お仲間』へのアピールを含んでいるあたり、底が知れない。

「当意即妙、ですね」

そうつぶやいた華は、かえってその表情を引き締めていた。ここに火元はない。コンセントから伸びたコードもだ。あるのは磁器のポットだけ。

「まあ、いいや。アンタが収拾して下さいッスよ、ダーズリン先輩。」

「承太郎さんがキレル前に」

「よろしいの?」

「オレに負けず劣らず、わかりやすい能力みたいだからよ」

ポットをオレンジペコに渡したダーズリンは、室内中央に進み出ると、アンチヨビに確認する。

「水筒はお持ちでして?」

「あ……ああ。レモネード持ってきた。」

「冷たいヤツな。手作りだ。ジュース買うとかもつたいない」

「一杯、いただけませんか?」

「あ、姐さん。あたしにも一杯ちようだいッス。」

甘いモノが欲しくつてさあ〜

頭使ったからかな……」

要領を得ない顔で、用意されていたグラスにレモネードを注いだアンチヨビにひとつ微笑むと、ダージリンは利き酒でもするような仕草でそれを振ってみせる。全員が目が集まったところで、彼女は『何か』した。そうとわかるのは、グラスから湯気が上がっているからだ。レモンの爽やかな香りが温かい霧となつて漂い始めた。

「ンなッ!……」

「あ、アレ? 姐さんのレモネードはよく冷えててッ

んで、あれはガラスのコップで……アレ?」

「私のだけではありませんのよ。ペパロニさん」

アンツイオの黒髪が、恐る恐る手元を見た。ついでにもらつたレモネードから湯気が出ている。

「あ……アチい

いつのまにかホツト、に」

『ティー・フォー・トゥー（あなたとお茶を）』

この能力を、私はそう呼ぶ。

手品でないこと、納得いただけましたか？」

目を丸くしたまままでしばらく沈黙した黒髪……ペパロニは、だがすぐに喜色満面と化した。

「スゲエよコレは……アンチョビの姐さんもだつて？

さつき手エ上げてたもんなあーっ

ビッグに！ ビッグになれるぞおーアタシらッ！」

「ちよつとアナタ、どーする気？」

「どーするつてお前！ ええーつと」

「沙織ね。 武部沙織」

嫌な予感しかなかったのだろう沙織に、やれテレビだ何だ、ミスターマリツクでユリ・ゲラーで、戦車道にお金がジャブジャブ注げるだの何だのとまくし立て始めたこの幸せ頭は、しかしすぐに当のアンチョビに怒鳴られた。

「これはッ！ バレたら表を歩けない『力』だぞ！」

「そういうことだったのか……うううッ」

「え、なんで？」

「マンガでもよく出てくると思うんですけど、ペパロニどの。

超能力者が迫害されたり、仲間外れにされたり。

最悪、変な集団につかまって実験台にされたり」

「ああ？　んなヤツ、アタシが許さねーッ」

「姐さんにんなことさせねえーッ」

「なら、そうなるようなことをするお前は何だ」

「ついに、麻子自らが突っ込んでしまった。その甲斐あって、わかつてはくれたらしい。

宙をにらんだペパロニは、ほどなく意気消沈した。

「俺の古い知り合いの話だな」

「承太郎が珍しく。本当に珍しく、語って聴かせる。

「生まれつきスタンド……超能力を持ったそいつは、

家族にすらそれを理解されなかった。

そいつは友人も仲間も作ることができず、

ある日、そいつを利用しに近づいた悪党に耳を貸した」

「それが、何なんスカ」

「さあな。何を感じるかはお前の勝手だ。

ただ、お前が今言ったようなことをそいつがされたとして、

そいつの未来がマシになると思うのか」

「……思わない。」

むしろ『利用しに近づいた悪党』のやることじゃあねーかよ」

どれだけ浅はかな発言だったのか、完全に腑に落ちたのだろう。気まずい顔になったペパロニは、その場で頭を下げた。

「姐さん、ごめん。みんなもごめんなー」

「お気になさらないで。」

そういうことを考えたことがないと言えば

ウソになりますもの、私もね」

ホカホカのレモネードを、ダージリンはすすった。役目は果たしたと思ったのだろう。席に戻っていく。その隣に座っている知らないヤツ……赤毛のヤツが、興味津々な顔で、承太郎に質問を投げってきた。

「その方、どうなりましたの？」

「ん？」

「私も、生まれつきですの。」

家族にもスタンド使いはいませんわ。

だから、気になりますの。その方がどうなったのか」

そういう悲愴感とはまるつきり無縁そうなヤツだが、ウソとも無縁そうなヤツだ。紅茶を飲みながら顔を覗き込んでくるそいつに、承太郎は帽子を少し深く被り直してから答える。

「その悪党と戦って、死んだ」

「う……悪党は、どうなりましたの？」

「そのすぐ後に殺された。」

四人がかりで戦っていたからな」

「ひとりぼっちではなかったんですのね。」

生きていてほしかったですわ」

「……ああ」

承太郎はティーカップの紅い水面に視線を落としていた。

『DIO』、か？』

「誰に聞いた」

麻子としては、仗助からたまたま聞いていた、遠くで血がながった悪党とやらの名前を思い出して、もしかしたら、と思っただけだった。だが承太郎の顔色の変わりよう

たるや、笑い事ではなかった。

「お、オレツス。承太郎さん。」

オレのクレイジー・ダイヤモンドが発現した経緯話した時にちよつと

「そうか。だがその名前はみだりに口に出すな。」

今なおヤツの『信者』が生き残っている。

音石明どころではない不幸を、呼び込みたくなければな……」

「軽率でした。スンマセン」

今日、アヤマッてばかりいない？ オレ」

これ以上は、進んで突っ込まない方が良さそうだ。脇に目をやると、優花里がおびえた雰囲気を漂わせていた。みほが心配そうに見ている。

「ちようどいいかも知れせんわね」

出し抜けに口を挟んだのはダージリン。

「時間が押しているわけでもありませんし……」

自己紹介も兼ねて、スタンドが発現した経緯について話すのはいかがが？

もちろん、話したい範囲で」

「いいだろう。どのみち、西住と秋山の二人のそれは、

音石明が大洗女子学園でやらかした事件そのものだからな」

「なら、私から」

席を立ったみほは説明を始める。先週のあの日の事件。麻子が見ていた部分から、見えない部分に至るまで。優花里についても本人に断り、時系列順に全てを並べた。全員の表情が引き締まる。電線を伝って、どこにでも現れる悪党の姿は、絵空事ではなく伝わったようだ。三日前、黒森峰にも現れたことまで話して締める。今この瞬間も、奴は手駒を増やすべく動き回っているのだ。

「質問」

話が終わってすぐに挙手したのは、以外にもアンチヨビだった。

「音石明が悪いヤツなのはわかった。

だけど、音石の両親はどうなんだ？」

「質問の意図がわからない……そこから聞かせてくれ」

「その、な。ド悪党って言ってもさ。

お父さんお母さんを簡単に裏切れるヤツって

結構少ないと思うんだよ」

まだ、話が見えない。質問に質問で返した承太郎に不快感を見せることもなく、アンチヨビは続ける。

「音石明の悪名は今や全国区だろ？」

「へたしたらそのダーズリンよりも有名だぞ」

紅茶をすすする、その得意げなツラにハリセン一発浴びせたい。そんなことはどうでもよかつた。ダーズリンから視線を外す。

「お父さんにお母さんがカタギだったなら……」

今、どんな思いついて会社に行ってるんだ？

どんな思いついてスーパで買い物してるんだ？

これを放っておくのがまずい」

そこで言葉が途切れた。途切れさせられた。ティーカップの割れた音がした。叩き割られた音ではない。そいつは握りつぶして血の混じった紅茶をしたたらせていた。虹村億泰だ。

「お優しいこと言ってくれてるようだがよおー」

アンチョビがたじろいだ。ついさつき、コントじみたやりとりをしていた奴が、人を殺しそうな目で見ているのだ。豹変の落差に叩きのめされているようだった。

「オレの兄貴の仇によ、眠てえことぬかしてんじやあねえぞ」

「か、カタキ？ 殺され……待ってくれ、そんなつもりじゃあないんだッ」

ビクついたその態度を見て、奴の視線はさらにぎらついた。その怒りには納得しやう。だが、アホか。ペパロニが音を鳴らして席を立つ。名前のわからない金髪もだ。騒

然となりつつあった場に、割り込んだのは東方仗助。

「億泰、おめーよ」

「ンだよ」

「まず落ち着け。んで、おめーが今やってることを

ハタから見て考えろ。どう思う？」

暴力をちらつかせて黙らせようとしているだけだ。この場の事実だけを持ち出せばそうなる。

「第一よ、おめーの兄貴の話がカケラも出てねー状態で

突然キレられて、あいつどうすりゃいいんだよ。カワイソーによ」

そう。みほが話したのは、あくまでみほの経験に沿つての話。『矢』の出所うんぬんについては触れていない。億泰の兄が持っていたということ以外、ろくすつば知らないので話しようもない。知りもしないものを愚弄できるはずもない。怒つてどうする。

「……悪い。ちつとばかしよお」

そのへんで頭冷やしてくるぜ」

気が付いたところで後の祭り。こいつ自身がよくわかっているのだろう。いたたまれなくなつてその場を出て行ったのが誰の目にも伝わった。

「すまねえ。お騒がせしたツス」

「こんな格言をぞ存じ？」

『水の価値は、井戸が枯れるまでわからない』

「……。何スツて？」

「なんでもありませんわ。お話を続けましょう」

呼吸するように当たり前の仕草でティーカップを直す仗助。室外から、イテテテ、とか聞こえて砂みたいな破片がやってくる。何事もなかったように元通りになったティーカップに、ダージリンは茶を注がなかった。

「お、お言葉なんですけどねえっ」

ちよつと無理にしかめっ面をした優花里が、腕を組んでふんぞり返った。

「電気で焼かれたりしてさんざんな目に遭ったのに

他人事みたいな物言いされて、

だいぶイラツとしてますよー私だって！ プンプンツ」

「ううつ、すまなかつた。私も言い方が悪かつたんだよな」

「……まだ『水』はたくさんあるようですわね。

それとも、あの方の『井戸』が深いのか」

オレンジペコが、次のポットを持ってきていた。その辟易した顔を麻子は見逃さなかつた。さぞかし面倒くさいだろう。こんなのと毎日。

「お話、続けてください。」

まだ、先がありますよね？」

「おっ、そうだよ。」

何も私だって場違いなヒューマニズム、いきなりウタツたりはしないぞ。

要はだなあーっ　今この状況がスデに音石明の良心で成り立ってるのがミソでな」

みほに促されて先を続けたアンチヨビの提案は、なるほど確かに聞く価値のあるものだった。ある意味で『人質』として機能する。だが部屋から去ったあいつには説明が必ず要だ。誤解のない説明が。

(もしも……もし、音石明に殺されたのが、おばあだったなら)

自分の腕力では、どう頑張ってもティーカップは潰せないようだった。だが、この仮定が事実だったならどうか。この細腕が狂人じみた力を発揮することになるのか……麻子には、わからなかった。

To Be Continued ⇒

スタンド使いは引かれ合います! (5)

虹村億泰（にじむら おくやす）は、玄関前に座り込んでいた。喫茶店の前に座る不良など営業妨害気味ではあったが、そんなことまで考えてはいられなかった。

（わ、わかってるぜえ。オレが悪かったんだよ、完全に!）

自分のやらかしたことにため息をつく。カツとなつて止まらなかつた、というのほむしろ逆。こみ上げたのは冷たく、どうしようもないほどに硬く巨大な憎しみだった。自分自身ですら見たくもないこんなものを、あのお人好しげなネーチャンに叩きつけてしまった。そのおびえた目つきを見たら、軽々しく兄貴の死を侮辱されたように感じて、感じてしまったらもうダメで。仗助がいなかつたらどうなつていたか。多分、華あたりが割り込んだだろう。そして自分はもつと逆上しただろう。考えただけでも恐ろしかった。

（……ハアッツ しっかし、どのツラ下げて戻るよ?）

実際よお〜）

そんなに時間もかけられないが、今のさつきで非常に戻りにくかつた。だが、それこそ無責任。頭を冷やしてくると言ったのだ。冷えたのなら戻らなければ。しぶしぶ腰

を上げると、カランカランと音が鳴る。ドアから仗助が出てくる音だった。

「よつ。落ち着いたみてえだな」

「ン、まあ、よ。すまねえ」

「なら、戻る前に話しとくぜ。アンチヨビ先輩の言おうとしてたことだがよ」

「仗助よ、そいつはいらねえぜ」

言いかけたのを押し留めて、億泰は言う。

「直接聞く！ 今度はキレたりしねえでよ」

「グレート。なら何も言わねーぜ」

連れられて戻る。きつかけをくれたのはありがたかった。ドアを上げれば金髪のエラソーな先輩、ダージリンが、とくに視線を向けてくることもなく紅茶をすすっていた。その前まで進み出て、腰を深く折って億泰は謝罪した。

「まず、すまねえ。」

お茶会でカップ割ったりしてよお〜」

「なにを謝っているんですの？ あなたは。」

何について謝っているんですの？」

「ここは先輩イチオシの店でよ、お茶会も先輩が用意したんだよな。」

多分、茶葉を選んだのも先輩で、そいつをオレらに淹れてくれた。

オレはそいつをブチ割った! クチもつけねえでよお

こりやあ侮辱だぜ……」

ティーカップを置く音だけがする。顔は上げない。自分は今、詫びを入れているのだ。

「バイク野郎の自慢の愛車をわざと蹴っ飛ばしたみてーなもんだらうがよ。

だから詫びる。すまねえ、この通りだ」

席を立つ音がした。それ以外は静まり返ったまま。顔は上げない。聞き耳だけを立っている、カチャリと磁器同士が軽くぶつかるのが聞こえ、少しして水の注がれる音に変わる。そして、床だけを見ている視界の端に、女物の革靴が映り込んだ。

「お顔を上げてくださる?」

言葉に従って顔だけ上げると、差し出されたティーカップがあった。淹れたての湯気をたどっていくと、ダーズリンその人が目前にいた。

「感想をお聞きしたいわ。よく味わった感想をね」

「お、おう。イタダキマス」

ソーサーに乗ったティーカップをつまんで口に運ぶと、『馴れた』芳香が鼻腔に広がった気がした。

「ンツ? このニオイ……『知ってる』ぜ。

そこまで特別な二オイじやあねえー」

わかるようにわからない。水面に口をつけ、すする。

「こりやあ紅茶だ……『普通』の紅茶。

だがよおっツ 渋みが少ねえし、

なんつーかアレよ。奥ゆかしいんだよなあ〜」

三口、四口と飲みながら、思ったことをタレ流す。言葉に気をつかう必要は最初から感じない。明らかなのは、ただ、これのみ。

「んめえーツ サツパリするぜえー」

「そう。何よりですわ」

素で忘れかかっていた。少し慌てて視線を向けると、ダージリンは柔らかく微笑んでいた。

「ハッキリと言葉にしますわ。

私は、あなたを許しました。この話はオシマイにしましょう」
「そう言ってくれるとよ、ありがてえぜ」

さて、このまま席に戻ってはいけない。まだ詫びは終わっていない。続けてアンチョビの前まで歩いていく。だがいきなり、先に頭を下げられた。

「? ええツ? なんで?」

「すまなかつた。知らなかつたとは言つてもな……」

そつちのみんな、音石明にヒドイ目に遭わされているのに、まるきり他人事な口を聞いた。ゴメンなツ

「お、オイオイ！ 勝手にキレて脅かし始めたのはオレだぜッ

オメーが頭下げんな！ 悪かつたのはオレだよ、許してくれよ、なあ」

ペコペコとお辞儀合戦。マヌケな空気が漂つたが、やがて向こうから止まつた。

「うん、私は許した。そつちはどうなんだ？」

「どうなんだ、つつわれても……ああ、もちろん許すぜ！」

「ありがとうな」

「おう。アリガトよ……」

安心した顔をしているツーテールの先輩に、なんだか釈然としない気分ではあるものの。許すと言つてくれたのなら、ここはこれで終わりだろう。ギクシヤクしながら席に引き上げる。が、すぐに来た道に戻つた！

「チゲエ〜ゼツ 聞くことがあんだつた！」

「ななつなんだよお」

「おめーが言いかけてたコトだよ！

さつき途中でキレちまつたけどよおー

今度は最後まで聞くぜ」

「ん、そ、そーか」

アンチヨビの提案に今度はしつかり耳を傾けた億泰は、それでもやはり思ったことだけを言った。

「悪かねーな。ヤロオの意地に脅しをかけるつてのなら悪かねえぜ」

アンチヨビの提案とは、これだ。他ならぬ音石明のせいで今や冷や飯を食わされているだろう音石の両親を、こちら側で何らかの形で庇護する。大洗女子学園に受け入れてしまえば最高だ。被害者自らが『あなたに罪はありません』とアピールする形になる。音石明は今、戦車道で大洗女子を倒す意地のために、蝶野亜実の懸念したような、家族への襲撃を思い留まっている。そこへさらに、両親を保護されてしまったならどうか？「ますます、やりにくくなるよな。」

これでやったら、『戦車道から逃げた』に加えて、『恩を仇で返す』になる。

意地を通す奴だからこそ、これは効くと思つたんだ」

「だがよお、音石がそいつを見透かしたら、

逆に意地を捨てちまうキツカケにならねーか？

ナメやがつて！ つてよお」

「うぐつ。かもな……」

「ありえるな。億泰」

承太郎がティーカップを置いた。

「奴は言っていた。受験だ何だはまっぴらだと。」

そして奴は十九歳。思春期に毛が生えた年頃でしかない……

両親に反発してああなったのなら、そうなるのは、ありえる」

「そうだったら、私達はみじめだよね」

西住が、その後にく。

「音石明の家族を守っている横で、みんなの家族が殺される。」

試されるのは私達だよ。みんな、恨まずにいられるのかな」

とてつもなく、おどろおどろしい想像だった。全員が鼻白んで、室温が3度くらい下がった。顔面蒼白なのはアンチヨビだった。全員が鼻白んで、室温が3度くらい下

「す……すまない。マジにすまない。」

浅はかだった。この話は取り下げるよ……」

「いや、採用する」

「え？ いや、だから。なんで？」

矛盾しているような承太郎の断言に、またアンチヨビの顔色が急転する。表情豊かすぎで、なんだか気の毒になってきた。

「このまま奴に生殺与奪を一方的に握られ続けるよりマシだ。

こちらが操作できる材料を確保したい」

「承太郎さん、お言葉ですけど……」

「ただし。音石の両親がカタギで、

今まさに不幸になっている場合のみだ。

平穩をひつかき回すことだけはしない。

それをやれば、俺達も奴の同類に成り下がるからな」

何か言いかけた秋山は、ホッコリした顔で黙った。あいつもたいがいお人好しである。脳天まで焼かれたのはテメエだというのに。

「音石については、方針は決まったようですわね」

ダージリンがまとめに入った。

「まず、大洗女子は音石明の挑戦を受ける。

受けることで、関係者の身内が攻撃されることを防ぐ。

ただし、保険として音石明の両親の手柄を手元に置くことも検討。

部外者である私達は、戦車道に乗っ取られないように警戒し、

可能であれば彼の情報を拾う……こんなところかしら」

「ああ。もっとも、聖グロリアーナが乗っ取りを受ける可能性は低いかな」

「根拠を伺っても?」

「乗っ取ったところでチームがロクに動かせない」

ダージリンの脇にいる赤毛女と、オレンジ髪のチビ女が眉をピクリとさせて止まった。億泰の耳にも、これではバカにしているようにしか聞こえないが。

「聖グロリアーナの戦車道はOB会の支援に寄って立つ部分が多いと聞く。

それも、かなり声大きいらしいな……

使う戦車ひとつにも口を出してくるというが、嘘はないか」

紅茶を一口して小さくうなづくダージリンを見て、承太郎は続ける。

「OB会、学園側、OB会に影響を受けたチームの子女。

そこに、音石明が君を屈服させ、君を通して頭ごなしに命令を聞かせたでしょう。

「まともに動くと思うか」

「……動くでしょうね。ただし、一度だけ。

根回しもなく独断専行した私は、ひいき目に見ても二度目で席を追われるでしょう」

「次に奴は考える。なら、この口やかましいOB会を皆殺しにしたらどうかとな」

「愚かね。戦車を動かすお金はどこから出ているのかしら」

「そうだ。つまり結局、君にオンブにダッコで戦うしかなくなる。

音石明のプライドは逆にズタズタだな。ここまでをおそらく奴は推測する」

「狡猾。ですのね」

「待ってください……」

話には、アンチョビが割り込んだ。ガタツと音を立てて立ち上がってきた。

「わかりかけてきた。空条さん、あなたが私を走つてまで追ってきた、そのわけが」

「アンチョビさん。その心は？」

「『逆』だ……私達アンツイオ戦車道はッ

聖グロリアーナ戦車道の、ほぼ全部『逆』ッ！」

「どーいうことツスカ、姐さん」

聞こうとしたペパロニを制して、まだ名前を知らない金髪が答えを言った。

「アンツイオ戦車道は、総統（ドゥーチエ）一人で持っている。

そういうことですよね」

「そこまで傲慢にはなれないけどな……」

でも、外から口を出してくるヤツはほとんどいない。

見方を変えれば、私一人の王国なんだ」

「つまりよおー、アンチョビ先輩。」

聖グロに比べて、アンツイオの方がよっぽど押しやすい。

アンタ一人を押しさえれば、みんな言いなりつてことツスカ」

「それなんだよ、おそろしいのはッ」

アンチョビは震えている。腕を組んで縮こまりながら。

「脅されて言うことを聞かされたとして！」

カルパッチョは絶対に気づく！ ペパロニもだ！

それで二人が真相にたどり着いたらどうなる？

それがおそろしいッ！」

金髪女はカルパッチョと言うらしい。ウマそうな名前がズラリと並んでいるが、そんなことはさすがにどうでもいい。しゃがみ込んだアンチョビに、億泰はズカズカと歩み寄った。

「でー オメーのスタンドは何なんだよ？」

「ん……エツ？」

「エツ？ じゃあねえーよ！」

オメーのスタンドは何なのかって聞いてんの！

何かしら戦いようあるだろ、スタンド使いならよおー」

「わ、わからない。」

スタンドって言葉自体、初めて知ったのが今日なんだよ。

出せ、とか、動かせ、とか言われても、どうしようもないんだぞ」

あつ、そうだっけ。悪い。

と引き返しそうになったが、そうもいかない。こいつの生命がヤバイままだ。

「ウ〜ン、こういうときどうしたかな？ 兄貴だったならよ〜」

相当必死になって考え込んで、結局兄貴頼りに落っこちていく頭脳。袖を引いてきた康一が、恨みがましい三白眼でこちらをじっと見つめた。

「首元をナイフで刺しまくったよ」

「……ハア？」

「億泰くんのお兄さん！」

スタンドの動かし方がわからないっていうぼくに、

『きっかけを与えてやる』って言いながら、ナイフでブスブス刺しまくったの！

「何やってんだよ兄貴イイ〜、って言いてえけど。」

片棒担いでたオレが言うこっちやあねえよなあ〜」

「何サイコな会話してるんだよお前ら！」

振り返ってみると、ますます震え上がったアンチヨビがドン引きしていた。康一は少し罪悪感を持ったみたいな顔をしたが、首をひとつ振ってアツサリ振り払っている。

「ま、ぼくが言いたいのはね。」

やり方に問題はあったけど、方法としてはけっこう確かだと思うんだ。

とくにこういう、急いでる時は……」

「お、おいッ、巻き込むなよ? そんなサイコ野郎の世界に私を巻き込むなよお?」

「観念しなよ! もう巻き込まれてるんだから。」

それに遅いよ……ぼくのエコーズは、すでに仕事を終えている」

「えっ?」

言われて見てみると、アンチョビの真後ろにエコーズが飛んでいた。そして、アンチョビの顔一面に音の文字が貼りついていた。

『インベンベンベンベンベンベンベドウドウドウ』

目で追って読んでみてもなんのことやら。直後、なんかヤバイ電子的な音楽が鳴った。

「うひゃあああああッ!」

劇的にビビったアンチョビが仰向けにひっくり返った。カエルみたいに。カルパツチヨも紅茶をこぼした。ダーズリンもビクンと肩を震わせた。紅茶はこぼしていないが。

「グレート! いきなり冒険の書を消しやがった!」

「オホン。抜かりはなくてよ。いつも3つフルに写していますもの」

「一番怖いのは無音ですよね。どうしようもない絶望だけが……」

「オレはそれで投げたぜ！」

結局ゲームつつつてもよおし、『合う』と『合わねえ』があるよなあー」

ちよつと大きめの地震に居合わせたみたいになゴヤカに話し込んでる連中によると、どうもゲームの音らしい。そういえば仗助は電話かけるとしよつちゆうゲーム中だった。

「あつ。ああー、わかりましたっ」

「何なのですか優花里さん。あの怖い音楽……」

「『ドラクエ』ですよお。『ドラゴンクエスト』です。」

ゲームのデータが消えるとあの音が鳴るんだとか」

「ゲームのデータが消える？ ゲームが壊れちゃうってこと？」

「そこからですかあー西住どのッ」

そうですねえー、少し前に『たまごっち』って流行りましたけど、わかります？

アレは電子データのヒヨコを育ててるんですよえ。それがある日突然消えたら」

「やれやれだぜ」

承太郎がガヤガヤをブツタ斬る。わざとらしく声を上げているあたり、かなりイラついているようだ。おっかない！

「くだらねー話は後にしろ。それより、アンチヨビ隊長の手元をしてみるんだな」

「ううつ、消えてない! 全員が転職3回してるんだ、消えてたまるか……って、え?」
 モガキながらヨタヨタ起き上がったアンチョビの、右手の下には確かに何かがあった。翠色に輝く何か。アンチョビ自身も気が付いて、手に取り掲げてみると、それは剣だった。人間の腕くらい長さがある、フアンタジーな長剣である。

「なんだこれ。ロトの剣でも出てきちゃったのか?」

「? 一人で何やってんスカ姐さん。手に何かあるんスカ?」

「決まりだな。アホらしいが……それが君のスタンドだろう」

微妙な顔で手中のものを見下ろすアンチョビに、康一がホツとした顔で言う。

「よかったあ、オドカして何の成果もなかったら単なるイジメっ子だもんなあ、ぼく
 !」

「なんでそーゆーアツカイを受けるんだろーな、私は!」

キミと私、初対面だよなあ? 何か気にサワツたか?」

「まさかホントにナイフでツツ突くわけにもいかないからね。

ぼくの知る限り、一番『死ぬほどビックリする音』を鳴らしてみました。

ドラクエ知らなかったら多分無意味だけど」

「うぐぐ、納得はしたけど感謝したくないッ……」

「でも、なんか不思議だな」

「どうしたよ、西住」

西住のぼやきを捕まえた仗助がその先を促す。康一も思うところがあるようで、西住に顔を向けている。

「その、ね？ 私のトゥルー・カリーズはしばらく形が決まらなかったんだよ？」

よくわからないエネルギーだけが、東方くん達には見えていたんだよね？」

「ぼくもそれはチョット思った。ぼくなんかしばらくは身動きもできない『タマゴ』だったし」

「俺のスター・プラチナもだな。俺の制御に収まるまでは、姿形が安定しなかった」

「ンン？ それがつまり何だよ？」

「アンチヨビさんのスタンドは、すでに明確な形を持つている」

何が問題なのか、よくわからない億泰に答えてくれたのは華だった。

「本人が気づいた気づかなかったは別として、

スタンドそのものは身についてからかなり時間が経っている。

聞く限り、そのように感じられます。私、見えないので……」

「な、なるほどよ。だが、するとよおー、身についたつてのはいつよ？」

音石は関係ねえーんだろ？ 知らなかったんだからよおー」

「私のライダーズみたいに、最初から形を持つてるケースもありますけど。」

この場合はどうなんでしょうね。虹村どの」

視線がアンチヨビに集まる。黙って見つめられた彼女は、気まずそうに、はたまた悩むように地面へ視線をさまよわせると、席に戻って自分のスタンド、長剣を床に横たえた。赤い絨毯に寝そべったそれは翠色の刀身と相まって、やたら高級に見えた。

「心当たりは……あるんだ。というよりも、ある意味『知っていた』」。

ちよつと整理する。しばらく待つてくれ」

「姐さん。もしかしなくても、去年の夏休みにコッソリ行つてた」

「ペパロニ。悪い。私自身が言う。黙つててくれ」

「うっ……うん」

心配そうに見ているペパロニとカルパッチョに、黙考に入つたアンチヨビ。こうなつてはしばらくしゃべらないだろう。本人がそう言っているように。待つしかないのは億泰にもわかる。ダーズリンが席を立ち、進み出た。

「そうですね。なら、それまでは私が。」

スタンド使いになつた時のことを話していきませわ」

だが、そこからこそが。億泰にとっては、唐突に始まつた試練だつた。

「私がスタンド使いになつたのは一昨年の12月、冬休み。

天元台高原スキー場でのことですわ」

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

⇒

スタンド使いは引かれ合います! (6)

虹村億泰（にじむら おくやす）は、さして身構えていなかった。今まで学園艦なるものに縁もなかったからだ。無礼にはならないように、ダージリンの話に耳を傾ける。

「あれは、先代の隊長……」

「アールグレイ様ですけれど……が誘ってくださいました」

慰労会でしたわね。当時、マチルダの一隊を預かった

直後の私も、皆さんとスキーに行ったのよ」

「マチルダ？」

「イギリスの歩兵戦車ですよ」

わからずオウム返しした単語に、即座に答えてくれる秋山。歩兵なのか戦車なのかよくわからないが、それはまあ後で聞こう。

「麓のホテルに泊まって二日目。」

夕方まで滑っていた帰りに、その『男』と出会った」

「『男』？」

「調子に乗りすぎて体調を悪くした私は、」

一足先にロープウェイを下ってホテルに戻ろうとしていたわ。そして、そこを狙われたの」

ダージリンはすでに、ティーカップから手を離していた。

「『弓と矢』を持った男よ。気がつけば彼は、

私に向かつて『弓』をキリキリと引いていた」

「『弓と』……『矢』……だとオ？」

億泰だけでなく、仗助も息を呑んでいた。心当たりはひとつしかない。

「当然、逃げたわ。」

道路じゃああつという間に狙い撃たれるから、雪の中に向かつてね。

でも、遅すぎた。背中から撃ち貫かれた私は雪に倒れ込んで血を吐いた。

そんな私に、後ろから来た男はこう言ったわ」

『あ〜〜ダメだなこりゃあ。死ぬな……』

ま、期待をしたオレがバカだったってとこかな……

高いオモチャで遊んでるような奴らにな……』

「そのまま私は放っておかれた。あの男は『矢』だけを引っこ抜いていった。

雪が『始末』をつけてくれると思ったのでしょね……

事実、雪の中に倒れたまま、翌日の昼過ぎまで発見されなかったわね」

「壮絶な話だ。そして誰の仕業なのか、ほとんど明らかではないか。だが信じたくない気持ち働くまま、億泰は聞いた。」

「ど、どーやって!」

「どうやって生きてたんだよ、先輩よおー」

「私のスタンド、ティー・フォー・トゥーは水を温めるスタンド。」

「ギリギリで目覚めた能力のおかげで、」

「即席の『温泉』を作ることが出来ましたわ」

「そう、億泰も見ていた。品のいい磁器の花瓶が組み合わさったような人型のスタンドは、触ったレモネードを一瞬でホットにした。」

「そんなこんなで、慰労会は解散。」

「せっかくの温泉も、ほとんど入らずじまいでしたわ」

「ダーズリン先輩よおー」

「そこに仗助が、トドメの質問をした。」

「その温泉ってよおー、なんて名前だよ」

「『白布温泉』ですけれど」

「……グレート」

「確定だった。時期も状況も、全て揃ってしまった。」

「億泰。おめーが白布温泉に行ったのは『何年前』 つつたよなあー」
「……『二年前』だぜ。行ったのは『二年前』だぜ！」

先輩！ あんたを貫いたのは間違いねえ。

『虹村形兆』オレの兄貴だぜえ〜ッ」

億泰は完璧に観念してしまった。言い逃れもクソもない状況で、しかも自分の性格で誤魔化しきれぬなどは露ほども思えなかった。ダージリンの目が、スツと細まる。

「そう。それは困ったわね」

その口調に、許すような響きはまったくくない。紅茶を飲む仕草は変わらず、彼女を包む体温だけが雪に包まれたように下がっていた。他ならぬ億泰が、それを敏感に感じ取っていた。

「本当に困ったわ。とんだところで出てきたものね。」

私を殺した犯人の身内だなんて」

「返す言葉もよお……ねえぜ」

「……」までの協力関係、ご破算にするには充分な理由ね」

ダージリンは目を閉じている。そこからは何も言わない。億泰はどうすればいいのか。この答えを他人に求めた日には、救いようがない。かといって何ひとつ考えつかない億泰がとった手段は。

「何の真似ですの?」

「オレのことは、許さなくてもいいよ」

膝をつき、床に額を擦りつけた土下座。誰かはわからない。席を立ちかける音がした。

「オレは兄貴の片棒をかついでいた男だ。

あんたから見りやあ同罪の男なんだよ……

だから許さなくていい。

どんな扱いをされても、オレは文句を言わねえ」

「なら。『それ』は一体何ですか?」

『だから俺は謝らない』そう聞こえましてよ」

「だが、話のご破算だけは待ってくれ!」

ここにいて、どいつもこいつも! オレや兄貴とは無関係……

それどころじゃあねえッ あんたと同じ被害者だ!

そのの仗助は、じいさんを目の前で」

「それ以上ぬかしてみろ、てめーの顔を整形するぜ」

土下座していた顔を掴まれ引つ張り上げられると、そこにいたのは仗助だった。激怒しているようには見えないが、その口調が有無を言わせない。

「ダージリン先輩よおー、許せねえっつーんならしょうがねえ。

許してやる義理なんか、そりゃあねえーよな。だがよ」

「仗助エエ〜ッ」

だが億泰は、掴んだ手を振り払って遮った。

「もう、おめーとか他のヤツらは引き合いに出さねーよ。

だから黙っててくれよ。ここはオレじゃなきゃあならねえ」

「……。いいのかよ?」

「『いつか来る日が今日だった』それだけだろうがよ」

ここで他人に守られたなら、兄貴が去つてなお、一人で戦えない男に成り下がる。いくら頭が悪くても、男を捨てるほど終わつてはいないつもりだった。とはいっても、それはあくまで億泰の都合。仗助はそこを直ちにツツコンできた。

「それはいいんだけどよ。ダメだった時のこと考えてんのかよ、おめー」

「ウグッ……」

「ダメなら口を出す。さっさと続けろ」

返事に詰まった億泰の背中を押してきたのは、意外にも麻子。コイツがタレるのは大体イヤミなのだが、今回は正直、助かった。他人に守られていることに変わりない気もするが、これ以上ややこしくなるのはゴメンだ。オホンと咳払いをして、ダージリンの

方を向く。口を開いたのは、向こうからだった。

「それで。落とし前はどうかつけて下さいませの?」

「オレはよおおく……さつき、こいつらは無関係って言ったよな……そのスジをよ。通すぜ」

「具体的には?」

「まず、音石のヤロオをブツ潰すまでは何もしねえ。このままだ。

だがその後は、ここにいる全員と……関わらねえ」

「アホか」

噛み殺すように吐き出していた言葉は、真横から麻子に一刀両断された。つまり『ダメ』と即行で断じられたことになる。それと、隣の仗助がまったく同じタイミングで舌打ちをしたのも億泰によく聞こえた。

「逆を考えろ。そうなったら私たちは『都合が悪くなった仲間を切り捨てたクズ』だ。

信用できるか。そんな奴ら」

「ううっ……、……!」

臓物がガオンとえぐられた気分だ。スジを通すどころか、その実こいつらを貶めるだけだったとは。麻子の一撃はド真ん中を直撃して反対側まで撃ち抜いていた。

「よく聞こえませんでしたわ。失礼……もう一度、言つてくださる?」

ダージリンは聞こえないフリをしている。億泰にもわかるアカラサマさでだ。次の間違いは許されぬ。とはいっても、こいつらは無関係だから、というやり方はもうダメ。姿を消すことで責任なんか取れないと、たつた今突きつけられたばかり。ではどうする。生命ひとつ分の責任を、どう取る。

「生命、ひとつ分……」

「何ですか？」

「そうだ！ 『生命ひとつ分』 だぜ！

あんたの生命ひとつ分の働きをする！」

「……ですから、具体的に」

「兄貴があんたの生命をとつたつてんなら、オレはその『逆』をやる！」

あんたが生命を落としたときは、オレが拾うッ

それ以前によおおーッ 死んじまうような目に遭うつーなら、

オレが守りやあいいつてコトだなあー」

思い付きで言つたようになってしまったが、通せるスジはこれしかない。ダージリンはパチクリと瞬きを数度する。何か変なことを言つたか？

考えろ。さつき仗助は言つていた。自分のやつていることを傍から見ろと。

今、自分が言つたのはこれだ。『オレがあんたの生命を守ります』……ヘンな冷や汗がド

バツと出た。

「な、ナシ! 今のナシ!

歯が浮くナンパ文句じゃあねえーか!

申し訳ねえ、ちつと言ひ方考えさせてくれツ」

ダージリンが吹いた。胸元を押さえてクククと肩を震わせている。それが収まらな
いまま、彼女は言ってきた。

「この格言なら、あなたもご存じね?

『男に二言なし』」

「ンだとおツ」

「私の生命ひとつ分。安くはないわ。

覚悟しておくことね」

「……なんかよおおー、取り返しつかねーコトになった気がするぜえ」

振り向いた億泰は、仗助に向かって言ったつもりだった。が、いない。そこはすでに
ただの空間!

気がつけば仗助は、席で肘をつきながら紅茶をズビズビすすっていた。

「オイ、仗助え?」

「……。オレ? おめーオレに言ってるの?」

「てめー以外に誰がいんだよっ」

目だけ上げてこちらを見た仗助は、しかしすぐに無視するようにティーカップをあおった。

「知らねーぜ……ダーズリン先輩に聞いてもらえば？」

「ハア？」

「カンケーねえんだろ、オレはよ。」

面白くねーの。せっかくカバツてやろーとしてもこれじゃあよー

むなししいよなあー、『空回り』ってのはよ……」

頭上にいくつかハテナを浮かべて、億泰はハツとなる。そして、またも赤い絨毯の上に五体投地気味な土下座を晒した。

「悪かった！ 悪かったぜえ〜ッ」

「オレだけ？ 頭下げんのはオレにだけえ？」

そつかあ〜 カンケーねえーもんなあ〜」

「オレが悪うございしましたアアア〜ッ！」

康一と女どもに向かつて再々土下座。これまた侮辱だったのだ。仕方がない。

「もう〜バカだなあー億泰くんは！」

ひとりで勝手に突っ走らないでよね！

「ぼくらがついてるからいいようなものの……」

「もういいから席に戻れ。うつつとうしい」

「私も許しました。次は無しですよ、虹村さん?」

「ま、アレよね。私、アンタのこと捨てるツモリないからね? オトモダチとしては」

「東方どのスネちやいましたねえ、仲直りしてくださいよ。チャンと」

「ありがてえんだか、なにげにヒデエんだか……好き勝手言うよな、おめーら」

「思いついこのことを言う奴らに少し遅れて、西住も首を少し傾けて微笑みかけてきた。

「虹村くん」

「おう?」

「よかったね。それだけ」

「ン? お、おうよ」

「たったの5文字が、異様に意味深だった。オレが許されたから喜んで……そうだが少し違う。どちらかというところ、みんなが許したから喜んでる。そんな気がするのだ。」

「やれやれツスねえ〜」

「西住にそう言われちゃあ仕方ねえ……許すぜ、オレもよ」

「ワリい、仗助」

「許す、つつつてんだらうがよ。

戻ろうぜ。話がつつかえてるぜ」

「それなのだけれど」

紅茶をすすりながら今の騒ぎを傍観していたダーズリンが、待つていたように声をかけてる。

「スタンド使いになつたきつかけ。次は、あなたに話して欲しいわね」

「別にいいけどよ。なんで？」

「被害者としては『納得』がしたい。いけないかしら」

こいつが何を言っているのかわかった。虹村形兆の話をしると、こいつはそう言っている。当然の欲求だ。自分が同じ立場なら、ワケがわからないままなのはゴメンだ。

「わかつたぜ……だがよおおく、ここの奴らに聞かせたくねえ話がある。

チイと表に出てくれねーかな」

「ここの皆も被害者。そう言つていたのはどなた？」

「又ググ……」

「そして、話したい範囲で、と言つたのは私でしたわね。

洗いざらい話せとは言いませんわ。話せる範囲で構いませんのよ」

迷つた。考えた。ダセえマネはしたくない。億泰なりに頭をひねり、ようやく絞り出

した説明は、やはり輪郭がぼやけまくっていた。

「不死身のバケモノをよおー、殺せるスタンドを探してたんだ。兄貴は……」

『矢』を見つけて、最初に刺したのが兄貴自身だよ。

数日後にオレもスタンド使いになった」

「不死身のバケモノ。それもスタンド?」

「違うぜ。吸血鬼の手下……だな。」

悪いがこれ以上は話さねえ」

話をどう受け止めていいか悩んでいるらしい。ダージリンの目が宙を泳いでいる。

「……困ったわね。謎がさらに謎を呼んでいるわ。」

吸血鬼というのは例え? それとも……」

「本物だぜ。会ったことはねえけどよ。」

もう、いいかよ」

「最後に、ひとつだけ」

目の前に、一本立てた人差し指が差し出される。

「あなたのお兄様が去り際に言っていたこと。」

私はあれに、戦車道への『嫌悪』と『憎しみ』を感じたわ……

弟のあなたに、心当たりはありました?」

「わからねえ。少なくとも兄貴に戦車道は無関係だぜ」

「では、お母様はどうかしら」

「……わからねえ。おふくろはよおー、オレが4歳の頃に死んじまったからよ。病気でな。」

ほとんどわかんねえーぜ。なんか思い出そうにもよおー」

周りがざわついた。億泰も、顔をしかめて首をすくめる。ダーズリンも真顔になっていたが、こちらの目を覗き込むような視線を少しくれた後、何事もなかったように続けた。

「お母様のお名前は？」

『虹村万千代（にじむら まちよ）』だぜ。

関係ありそうかよ？ 戦車道によ」

「わかりませんわね……でも、お名前は預かりましたもの。」

こちらでも少し調べてみますわ。漢字を書いて下さる？」

隣のチビ女からペンを受け取ったダーズリンが、それを差し出す。とはいっても、必要がない。億泰の経験からして、しゃべる方がよっぽど早くてゴミも出ない。今回もそれにならう。

「書くまでもねーぜ。簡単なんだ。」

親父の名前が『垓(がい)』だよ。

そのまんま垓形兆億万千でよ、万と千だぜ。

んで、先祖代々の代つて書いて『代(よ)』だぜえー」

「あら、素敵なお名前。なるほど、覚えましたわ」

しかし、ダージリンの方がしつかりメモをとっていた。これなら書いた方がよかつたかもしれない。メモをしまい込んだダージリンは、今度は入れ替わりにケータイを取り出した。

「ケータイはお持ちかしら」

「持つてるぜ。作ってもらったぜ、会長サンに」

「連絡先をいただくわ。『私の生命ひとつ分』いづれ取り立てますものね」

「わ、わかってるぜえ。チキショー」

オンナのコとの番号交換が、こんなにも気が進まないモノだとは思わなかった。ポケットの中にあつたケータイをイジクツて、番号を読み上げようとすると、向こうから何やらケータイを向けられた。

「赤外線通信。こちらの方が間違いありませんのよ」

「チヨイ、チヨイ待ちッ」

ンなコト言われてもよお、ワカンねーぜえ。

昨日今日持ったばっかだよお〜」

「ラチあかないわね。ほら貸した貸した」

四苦八苦していたのを、沙織がスツと奪い取った。二、三、何か操作してからダーズリンに相対し、さして時間も経たずにケータイを返される。『電話帳』が開いていて、そこに『ダーズリン』の名があつた。ここから番号を呼び出す操作なら、おりよりのケータイで覚えている。

「ついで、ではないですけれど。」

他の皆さんとも番号を交換しましょう。帰り際にでも」

助けを求める可能性もあれば、求められる可能性もあるだろう。ダーズリンはそう言つて、手の平のケータイを示した。そして席につき、ティーカップを手に取る。

「次は……そろそろ、準備が出来たようね。アンチヨビさん」

「ああ。今のを見ててハラも決まったしな」

いつの間にか、足元に置いていた自分のスタンドを拾っていたらしい。柄を手で少し弄ぶと、机の上に横たえて、席を引いて立ち上がった。

「じゃあ、話すぞ。あれは去年の夏。」

イタリアのネアポリスでのことだな。

私はもう、イタリアには近寄れない。

ペパロニやカルパッチョも近づけたくない。
今から話すのは、その『わけ』だ……」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
⇒

スタンド使いは引かれ合います！（7）

安齋千代美（あんざい ちよみ）は、普通の女学生だった。少なくとも今日まではそう思い込もうとしていた。だが、それもここまでらしい。目を背けているべき状況は過ぎ去った。『仲間』になってくれそうな奴らがここにはいる。なら、話そう。ただの人間をやめさせられた、おそらくはきつかけの話を。

「去年の全国大会が終わった後しばらくして、

私は旅行に行ったんだ。アンツイオ代表として

イタリアの土は踏みたかったし、他のみんなも連れて行きたい。

下見のつもりで、ひとりでコツソリ気軽に行った」

「数日見なかったと思ったら、いきなりお岩サンになってたツスもんね。

スゲービビったツスよ姐さん」

ペパロニのぼやきで、いきなり話が最後まですつ飛んだ。横目でいらんでも、コイツはハテナを浮かべるだけ。あたしの顔になんかツイてるツスか。声までが勝手に脳内で再生される。

「まず、最後まで話させてくれな。ペパロニ……」

「ン。わかったツスよ」

最初に改めて注意しとくんだった。

「ネアポリス空港に降り立った私は……いきなり荷物を盗まれた！

全部だ！ ポケットの中のサイフも消えてなくなつた！」

全員、目玉がまん丸になった。そうだろう。私なんかムンクになった。思い出すと千代美はにわかに腹が立ってきかた。

「あのポツチャン刈りめツ、耳の穴に耳ツメ込むなんて

一発芸で油断させやがって……ッ

次会つたら両耳ツメてポンド流し込んでやるぞ！」

怒りにまかせるままに吐き出した言葉は、当然ながら皆をドン引きさせるだけの結果に終わった。

「……オホン。まあ、そんなこんなでだな。

途方に暮れた私は、パスポートの再発行手続きに行こうとしてな。

途中で、『奇妙な男の子』を見つけたんだ」

「奇妙ねえ。どんなオトコのコ？」

「どんな、って……」

質問を飛ばしてきたのは、確か、武部沙織とか名乗つてたトランジスタ・グラマー。な

んか顔がゆるんでるのが微妙に気持ち悪い。オトコに飢えてるとか、そーゆーのじゃあないだろうな。結構失礼なことを考えつつ、千代美は一応答えてやることにした。

「この場だと、そのこのペパロニが一番似てるな。」

それと、そのの……秋山だったか？

二人を足して二で割った感じだな。雰囲気は幼いぞ」

「私ですかあー？ 自分が持ち出されると、

今ひとつ想像できませんねえ」

「ま、置いとけ。続けるぞ」

話はまだ始まったばかりだし、本題はここからだ。できれば腰を折って欲しくないところだが。

「その男の子は泣いてたんだ。絶望しきったみたいな顔で、

うずくまって手元を見ていた。」

よくもまあ私も近寄ったもんだ……ダメされたばかりなのにな！」

なんで自分はこのなのか。たまにイヤになることはあっても、結局反省のない女が自分だ。そう認識する千代美は、自身への呆れをそのまま吐き捨ててしまった。

「聞いてみたらだな。」

なんでも『丸一日、ライターの火を消さない約束』をしたんだとき。

で、そのライターがすぐに消えてしまったらしい。

『あの人のところで働けなくなる』ってのも言ってたから、

私は『バイト先をクビにされかかってる』って受け取ったな。

『信頼』のテストだったそうだから……」

「ライターの火を丸一日。簡単なようで難しいテストですよ」

「そうだよな……でもな、私とそのライターを受け取って確かめたらなあ。

耳を寄せてみるとガスが出てるんだよ。シューツ、て。

『マヌケだなー』とか思った私は、その場で再点火した。

それで、火のついたライターを男の子に手渡した。

次は消すなよー、って言ってたな」

「確かに奇妙よね、それ。

自分で火をつけられたらテストの意味ないじゃないの」

「その次の瞬間、私は後ろから『何か』に首根っこをつかまれた」

始まった。そう思ったのだろう皆の視線が凝視に変わる。語る千代美の意識も、当時

の時間へと引き戻されていく。

「そして、とがった『何か』が首の下に差し込まれた。

『鎖骨』のあたりだ。私は通り魔にやられたと思った……

よくわからない無念の中で、私は意識を失った」

.....

「お目覚めらしいね。お嬢さん」

目覚めた千代美は、薄暗い部屋にいることに気がついた。立ち上がろうとして、手足が思うように動かないことにも気づく。目をやると、両足同士が『枷』でつながれている。ただの『枷』ではない。レンガだ。よくわからないが、レンガで両足首が縛られている。両手も同じであるようだ。後ろ手になっているが、硬い感触が手首にある。地べたに転がったまま、イモムシのようにしか動けない理由はこれだ。どうなっている？

「おっと。親切で伝えておこう。」

無視はためにならない……

這いつくばったまま、こつちを見るといい」

再び聞こえた男の声に、慌ててオットセイのように背筋で踏ん張り顔を向ける。当然、長続きせずには身体を横に転がすことになったが。男がいた。怖気をふるう美男が、酷薄な笑みを浮かべて座椅子にふんぞり返っている。オールバックにサングラスと、いかにもな姿をしているが、纏う『気品』は隠せていない。

「『何だ？』と言いたそうな顔をしているな」

「……………ッ、!? ……………!？」

口を開いたはずが動かない。まるで縫い合わされたようにだ。男は、近くの机から手鏡を手に取り、千代美に見せる。

「~~~~~ッ!?!」

驚愕だった。見慣れた自分の顔がおかしい。口に『チャック』がついている。比喻ではなく、本当に。『チャック』で閉じられた唇が、開かない。喉だけで言葉にならない悲鳴を上げた千代美を見て、男はわずかに目を細めた。

「『それ』なら気にしなくてもいい。」

すぐに元に戻るか、すぐに二度と用がなくなるか。

どちらかが君の行く道だろうからな」

「~~~~ッ、~~~~ッ」

「これから君のやるべきことは簡単だ。」

オレの質問に、首をふって答えるだけだ。

三歳児にも出来る、ラクな仕事だな……」

席を立った男が近寄る。近寄って、身体を無理やり起こされた。抵抗なんか出来るわけもない。デリケートな部分は避けて触られたが、それが逆に危機感をもよおした。これから私は『売り物』にされるんじゃないか?!

地中海近辺では、人身売買がまかり通る国もあるという。膝足立ちにされた千代美

は、もはやガタガタと震えるだけだった。

「それでは質問するよ。」

お前は『スパイ』か？」

「……!？」

「どこの、だとか、誰に、だとかは聞かない。」

オレ達、『組織』のことを嗅ぎ回りに来たのか？」

それだけを聞いている」

なんのことかわからない。だが、はつきりしたこともある。こいつは犯罪組織の一員だ。マフィアか、カモツラか、ンドランゲタか。どれであっても大差はない。関わってはいけないものに関わってしまったらしい。

「答えないのかい？」

なら、こちらで勝手に『肯定』とみなすが……」

全力で首を左右に振った。このジェスチャーは大体どこでも通じるはずだ。全力の『No』が伝わって欲しいとこれほどに感じたのは、人生空前絶後だろう。冷や汗びっしりで、ゼンマイ仕掛けのオモチャみたいに首を振りまくる千代美の首筋を、男の指がツツツとなぞった。この瞬間、おそらく自分の目玉はひっくり返っていただろう。仮に悲鳴を上げることが出来たところで、そんなものでは到底足りなかった。

「俺ね、相手の『嘘』がわかるんだ。

相手の『汗』のかき方とかからね……そして」

男は、指の先端を伝う雫をペロリと舐め取った。

「味を見ればもつと確実にわかる」

全身、鳥肌が総立ち。恐怖だの羞恥だの、『女としての危機』を覚える感覚だのが素肌の上をムカデみたいに走り回った。

「この味は……嘘はついていないね。

『身に覚えがない』そんな味だ」

いけしやあしやあと抜かす男は、背を向けて、千代美のそばからゆっくりと離れていく。

「どうやら『拷問』をする必要はないらしい。

何よりだな……趣味じゃあない。

その見目麗しい肌をセンチ単位ではぎ取っていくようなマネはな」

トイレが近くなってよかった。近かったら、それはもう悲惨なことになっていただろう。その割に涙は出なかった。枯れ果てているようにすら感じる。度が過ぎた恐怖は、かえって感情を枯渇させるものらしい。

「とはいえ！

うろんな者をうろつかせておくのは、

『街』の顔役としては面白くないな。

君を明日、帰国させる。

二度とこの国の土を踏まないことを強く勧めよう」

その言葉に安堵する一方で残念だった。アンツイ才生としてやってきたイタリアの思い出は、これが最初、そしてオシマイ。ひどすぎる。いろいろな礼拝堂にもお参りしてくるつもりだったのに、これでは苦情を言う神様すらもいやしない。

「それと。君は今後、『不思議なもの』に出会うかもしれない。

『幽霊』だとか『悪魔』のような、形を持った超常現象にな……

全て『見て見ぬふり』をすることだ。君が長生きを願うのならな」

今の時点で、充分すぎるほど遭っている。『口にチャック』が超常現象でなくて、なんだというのだ。言われなくてもこんなもの、もう二度と関わりたくなんかない。憎しみすら込めて頷くと、男も頷き返した。賢明だ、とても言いたげに。

.....

「……ということだ。だから私は逃げようとした。

戦車喫茶で『幽霊』が暴れているのを見て、な」

話を終えると同時に、リーゼントの東方仗助が席を蹴るようにして立った。

「承太郎さん、確実に『矢』だぜッ

一本じゃあなかつたってことツスよね、こいつは」

「それも、犯罪組織が意図的にスタンド使いを増やしている……な。

とんでもねえ事を聞いちまつたらしいな」

聞くまでもない。鎖骨に刺さった、とがった何かが『矢』なのだろう。あれが自分の『何か』を変えた。そして今また、自分を『何か』に巻き込もうとしているのか。

「ライターの『火』……玉美さんと同じかも！」

条件を満たすと同時に攻撃が始まるタイプのスタンド！」

「するつてえーとよおー、ライター持って泣いてたガキが一番怪しいぜえーッ」

「状況証拠ではそうなりますよねえ。

でも、そこまでして狙われるアンチヨビどのは何なんでしょかねえーっ」

ざわつく中、西住みほがそっと手を上げる。静まったのを見てから、彼女は推測を口に出した。

「勝手な想像なんですけど。

アンチヨビさんは、多分、偶然巻き込まただけだと思います」

「ナゼですか？ こんなトントン拍子に次々と！

不幸が行列になってやってくる！

「仕組まれていたとしか思えませんわー」

「偶然です」

言い切られるとショックだ。その赤毛……ローズヒップにしても、西住みほにして
も。どっちが正しかろうと自分のクジ運は最悪だ。

「意図的だとしたら、そのつ『帳尻』が合いません。」

アンチヨビさんを無事、日本に返してしまったことが

何もかもおかしいんです」

「その通りだな、西住……」

『組織』とやらが何も得をしない。

『組織』の意志と無関係のところ、

ノコノコと巻き込まれに行ってしまったと考える方が自然だ」

承太郎の言いようにはさらにヘコむ。まるきりアホ呼ばわりではないか。いや、自分
でもそう思うが。その承太郎に、重ねて問われる。

「帰ってくる時は、どうだった？」

「銀髪の男を監視につけられました。」

深夜、そいつに飛行機に押し込まれて、後はそのまま日本まで。

男は、気づいたらいなくなっていましたね」

「何か、言っていたか」

「いえ、めぼしいことは……いくらか罵倒されただけです」

「どういう罵倒だ」

『平和ボケした田舎に帰れ』

『お前みたいな世間知らずの善人気取りが一番ムカつく』

『次、そのツラを見せてみる。』

女に生まれたことを心底後悔するぜ』

「だいたいこんな感じでした」

「……警告だな。単純な。」

それが全てなら、単に巻き込まれただけの可能性が高いな」

確かにまあ、『二度と来るんじゃないやあねえ』の一言に収束される内容ではあるのだが。単純な、とか言われると、ちよつとムツときてしまうのは仕方ないことだろう。怖い思いをしたのだし、気くらい使ってくれてもいいのに。この人、奥さんとか子どもにもこんな感じなのかな。もしかしたら、未婚かも……いらぬことを考える千代美であった。

「だが『身代金誘拐』の可能性も捨てきれん」

「捨てきれん、つつーか。」

そつちの方が納得いくツスねえ、アタシは」

「アンツイオ戦車道を復活させた実績持ちなら、学校の方が金を積むのもありえる」

そんな背景まであらかじめ調べていたのか。『実績持ち』とはうれしいことを言ってくれる。ペパロニが鼻高々で胸を張っているが、千代美も多少ニヤけた。これでも新聞に乗ったことがあるのだ。静岡の地方版だが。栃木もある。

「仗助、西住」

「えっ、何スカ承太郎さん？」

「はい」

「俺は明日から、しばらくアンツイオに行く。」

大洗女子のことは任せるぜ」

「……調べるんスね。『組織』について」

「『身代金誘拐』だとしたら、アンツイオから追える可能性が出てくる。」

だが、それは差し迫った目的じゃあない」

「『護衛』ですよ。戦えるスタンド使いが誰もいないから」

無言で頷く空条承太郎。ちょっと待て、護衛とか……などと思っただが、考えてみれば『チリ・ペッパー』がいる。今日の集まりは、そのためのものだった。今の自分達では、得体の知れない超能力相手にとっても戦えなかった。

「空条さん」

名を呼ぶと、視線だけ向けられた。

「みんなを守ってください。お願いします」

やはり、無言で頷かれただけだった。コミュニケーションが難儀かもしれない、このヒト。先が思いやられるような顔で、カルパッチョも見ている。

「そーいえば、だけど」

話がキレイにまとまったところで、また武部沙織が聞いてきた。

「イタリアから帰ってきたら『お岩サン』って言ってたけど。

どうしてそーなったの？」

「……さっきの話が終わった後で、殴られて気絶させられた。

見られて困るものがあつたんだと思う」

「ムム、そつかあー」

「ちなみに、あの男はなあ……怒るなよ、西住？」

西住の姉さんにスゴく似ていた。『雰囲気』がなッ

顔は似ても似つかないぞ？ でも、人を率いる者の顔をしていた。

厳しく見守る『父親』みたいな顔だったな……

時間が経ったからこんなことも言えるんだろうけどな」

余談も交えて答えたが、武部沙織は少し首をかしげて、こっちの目をのぞき込んでいる。周りに少し視線を回すと、東方仗助と、五十鈴華もまた似たような顔をしている。今度は、帰りについてきた銀髪の男について、黒森峰の副将……逸見エリカとかいう……あたりを引き合いに出して説明しようとしたが、それには及ばなかった。パン、パン、パン、と手のひらを打ち鳴らしたダーズリンが注目を集めたからだ。

「私も興味はありますけれど、今はここまでにしませんこと？」

このローズヒップも、そろそろ話したくて待ちきれないようですもの。

……ローズヒップ。よろしくてよ」

「ハイですわお姉さま、コンな話を堂々できる人たちなんてソーソーいませんですわーっ」

『生まれつき』ってのはさっき話しましたけれど、私にスタンドを教えて、

しかも名前をくださった方がいらっしやいますですよーっ ぜび聞いてほしいですわっ」

手綱が放たれるなり、おあずけ食らった犬がエサに飛びついていくようにキャンキャン声を上げるコイツは、どうして聖グロリアーナに来たんだろう。この気質はどちらかというと我がアンツィオ向きだろうに。とはいえ、ウチにいたところで似たモノだらけ、埋没するだけだったかも知れない。などと思いつつ、千代美は内心ホッと息をつ

いていた。殴られた瞬間のことを、頭の片隅で思い出す……

……………

「さて……君の身は潔白。」

そうと決まったのなら、けじめをつけなければならぬのはオレ達の方だな」

忠告を終えた男はそう言って、何かをした。一瞬だけ何かが見えた。人型の何かが腕を『伸ばして』室内灯の電源を叩いたらしい。2メートル近くは伸びていただろうか。薄暗い室内に蛍光灯が灯ると、自分と反対の片隅にいた、もう一人の姿がわかった。今までそんなものを気にする余裕もなかったから気づかなかった。

「ン、ングツ、ンンン~~~~ツ」

『男の子』だ。自分が相談に乗ってやった男の子がここにいる。椅子に座らされた状態で、自分と同じように後ろ手と両足をレンガで固定されている。『チャック』で閉じられて、だ。彼もまたスパイとして疑われているのか。男を見ると、あっさり答えてきた。

「こいつはオレ達の『仲間』だ。この意味、わかるな？」

そして、『仲間』だからこそ『罰』が必要だ」

ゆらり、ゆらりと『男の子』に歩み寄っていった男は、次第に腕を振り上げていく。そして正面で立ち止まった男のやることは、やはり想像通りだった。

「お前は『カタギ』を巻き込んだ。報いを受けてもらうぞ」

『男の子』の顔面に拳がめり込む。鈍器がめり込んだような音だった。「もしオレが判断を誤ったなら、彼女はおぞましい目に遭って死んだ。」

この程度の痛みでは、千回味わっても足りないな」

裏拳が飛ぶ。左目あたりに当たって、首がきしんだ。もう一撃で、鼻血が顎を伝った。意識が飛びかけた頭を、男はつかまえて、頬を思い切り三回張った。無理やり目を合わせる。

「こつちを見ろ。お前のいる世界は『ここ』だ。」

『ここ』から逃げるときは、お前が死ぬ時。それだけだ。」

お前はそれを覚悟して来た。そうだな？」

手を放し、また殴る。サンドバッグのようだった。サンドバッグと違うのは、詰まっているのは砂ではなくて血だということ。つまりは血袋。噴出した血が、一撃ごとに飛び散って、そこら辺を不規則に汚していく。一度は目を背けた。だが、背けている横でしてくる音が結局、同じ痛みを連れてくる。見ても何もできないのに、見ないことはもつと残酷だった。

「報いを受ける。罪を知れ」

男の手も、すでに血にまみれていた。一撃、音が響くごとに、千代美の脳も揺さぶられた。意識が遠くなる。頭がおかしくなる。後悔と怒りと理不尽が頭中を駆け巡る。

あまりにも耐え難くなった千代美の中で、やがて決定的な何か弾けた。気が付けば、千代美は『走って跳んでいた』『腕を広げて』男の正面に割り込んでいた。

「なっ！」

男の振り下ろした拳が右正面にあつて、そのまま目の中に突っ込んできた。首がねじれて、全身が転げていくのがわかった。テレビの電源が落ちるように、視界が激しく光るのを感じた。吐き気とも痛みともわからない感覚と一緒に、全てが闇に落つこちていく。聞きなれた機銃の音が一瞬間こえた。その後、誰かの嗚咽が。最後に、男の声が聞こえたとき、意識はそこで途切れた。

「これがッ！ お前がやり、オレがやったことだ……」

彼女はオレ達と……べきではない。二度と……

わかっ……な。……ンチャ」

To Be Continued ⇒

スタンド使いは引かれ合います！（8）

東方仗助（ひがしかた　じょうすけ）は、連続で発覚する驚愕の新事実にだいぶ打ちのめされ気味だった。どうかこれ以上ムチャクチャなことはわかってくれるな。そういう気分ではあったが、今は耳を傾ける。どうやらあの聖グロの赤毛は、ローズヒップというらしい。

「私の能力は、モノスゴクカンタンに言うと『空を飛べる』能力ですわ。

せつかくだし、ここでチョッピリ」

「ローズヒップ。おやめなさい。

天井に頭をぶつけたくないのなら」

「……ハイ」

ほら見る。いきなり人類の夢が飛び出した。とはいえ、それだけに、今まで現れなかったのが不思議な能力ではあった。やりとりから察するに、精密動作性は低いのか。まだ話は途中だ。

「オッホン。それでですわね。

生まれつきこの力を持った私は、家族をとつても困らせましたわ。

3歳になった頃には『飛べて当然』って感覚がオカシイことは理解しましたが、わかったらわかったで、私は『私は空の王様だ!』

『私一人が特別なんだ!』そう思い込み始めましたのよ。

完ツペキ調子コイてたつてヤツですわね」

仗助は自分に置き換えて考える。なんでもなおす能力がある日突然持ちはしたが、それを鼻にかけることはとくになかった。というより、妙なマネをすれば母と祖父にこつびどく叱られたものだ。それにより教えられた。この力は、そこら中に触れ回っていいものではないと。そこに来てこいつの能力は『空を飛ぶ』。家族はさぞかし持て余しただろう。ひとたび飛んでしまえば止められるものはない。

「そーやって私がズルくなり始めた頃、あのお方がやってきましたわ。

『占い師』のオジさまが」

紅茶を飲んでいた承太郎の動きがピタリと止まった。

「都合が悪くなれば逃げ回る臆病者。

そう言われた私はケンカ売られたと思って、

空から石を投げまくりましたわッ

『このバカヤローに違いをわからせてやる』

それしか考えてませんでしたわ」

こいつが空を飛ぶスピードはわからない。だが、それによつては、単純だがかなり効果的な戦法だ。空からノロイ標的を一方的に狙い撃つのと、高速で飛び回る敵に石を投げ返す。どちらが難しいのかは明らかだ。承太郎のスタープラチナならいざ知らず。

「そして、その石は全部『蒸発した』。」

オジさまは『炎』を操るスタンド使いでしたのよ」

『魔術師の赤』（マジシャンズ・レッド）……」

承太郎が、今度は完全に視線を上げた。彼が思わずつぶやく姿など、モノスゴイレアだった。それを聞いたローズヒップの反応は劇的だった。席を蹴倒す勢いで承太郎に迫る。

「知ってますのーリーツ？」

「ああ。昔、少しな……まずは話を続けてくれ」

「アツ、それもそうですわね。シツツレイしましたわー」

ヒヨイヒヨイと席に戻る後ろ姿はウキウキしまくっていた。

「で、『そんなバカな！』って思ってたら、

今度はオジさまは竜巻を起こしましたわ。

気圧の違いがどうのこうので、炎でそれができるらしいんですの。

『ほとんど狙えない』ともオツシャツてましたけど」

話を聞くだけでも、そいつのすごさは伝わる。そいつは炎を通して物理現象を操っている。自分の能力を1から100まで理解していなければ出来ない芸当だ。

「竜巻にからめ取られてコントロールを失った私は

頭から真つ逆さまに落つこちましたけれど、

脇で見てたお父さん……お父様とお母様が受け止めてくれましたの……網で。

私はそこで『負けた!』ってハッキリわかりましたのよ」

しかも着地点に網を広げさせて待たせていたらしい。スタンド使いでもない一般人の両親を。それでもって受け止めたとなると、もう敬服するしかない。負けを認識するわけだ。

「シユンとなった私を、オジさまは叱りましたわ。

『その力で、君はどこに行きたい?』って。

『君はどこに行こうというのかな?』

君を受け止めてくれる人達を置いて、

君はいったいどこに行こうというのだ?』

静かに、それだけ言っただけですのよ。

それから、スタンドで家族を困らせるのはやめましたの」

仗助の過去でいうところの、リーゼントのあの人。それがこいつの『オジさま』なの

か。そこまでいかないにしても大切な思い出というやつらしい。出会えたことを、こいつはスゴク誇っている。

「それでですわねー、そのとき、スタンドに名前ももらいましたのよ？」

名前は形と意志になる、とかオツシヤツて。

こーやつてカードを引いてえ、『魔術師か、困ったな』とかボヤいてですわね。

『レッドローズ・スピード・ウェイ』この名前がつきましたの」

言いながら、ローズヒップはスタンドを身体からわずかに浮かせた。人型だ。億泰のザ・ハンドのように口ポットじみているが、こいつはまたジャンルが違う。Fカーのような流線形を帯びている。無数に折り重なった真つ赤な『矢印』で全身が装甲されているのだ。実際のところはわからないが、近距離パワー型であるように感じる。これ以上を知りたければ、一度殴り合っておく必要があるだろう。そこまでするかは別として。

「私の話はココまでですわ。ねえ空条様！」

オジさまのこと、ご存知なんですよねえ？

教えていただきたいですわあーっ お礼が言いたいですのツ」

突風だとかツムジ風みたいな女だ。話を締めくくった瞬間、承太郎の目前に迫るまでほとんど一瞬。身構えてしまった承太郎がうつとうしそうに顔を歪めたが、ほどなくし

てわずかに視線を落とした。これまたレアな表情だ。気まずそうなのである。

「……そうだな。だが、今すぐとはいかない……」

全国大会が終わってからだ。必ず教える」

「?」 よくわかりませんが、ゴツゴーがワルウごぎいますのね?

わかりましたわー、楽しみにしてますわーっ」

承太郎の歯切れが悪い。そんなことはとくに気にせず、ローズヒップは戻っていった。なんとなく、向こう側のダージリンの顔を見るが、音もなく紅茶をすすっているだけだった。

「次は俺が話そう。丁度いいようだからな」

承太郎の話は、仗助もすでに知っている話ばかりであった。親族に影響を受けて発現したスタープラチナを、当初は悪霊だと勘違いしたことまで話しているのは、スタンドを恐れていたアンチョビへの配慮だろうか。

「……ということだな。『オジさま』の名はモハメド・アヴドウル。

ある意味で、俺の師とも呼べる男だ」

留置場に籠もった承太郎に一杯喰わせ、自ら檻の外に踏み出すように仕向けた話は、ローズヒップへのサービスかもしれない。だが、それ以上は話さない。話すならば、それはすなわちDIOとの戦いの話になるからだ。仗助にはわかった。ちょうど十年前

の話となれば、それ以外にはありえなかった。

(だがよお、聞いてもいねーことをしゃべるつてのは気になるよな……)

『話のタネ』承太郎さんにこいつほど似合わねー言葉はねえぜ)

先ほどのアンチョビの態度に重なるものがある。承太郎が進んで話したくない何か
がその先にはあつて、その代償を提供しているように仗助は感じた。

「俺からは、ここまでのだ。ガラにもなく話しすぎたな。」

康一くん、頼む」

「えっ、ぼく？」

いいですけど緊張するなあ……」

『シメ』はオレだぜっ

まだマシな方だろうがよ、康一」

「うん。」

えー、他のみんなに比べたら、

ツマラナイお話になっちゃうんですけど」

その後、順を追ってトツトツと話していった康一の物語は、わりと好評だった。『矢』
で貫かれた経緯やその前後については意図的にぼかしまくっており、億泰にイヤな目つ
きが向かうこともついになかった。その分、玉美……『錠前(ザ・ロック)』の小林玉美

が悪者にされてしまったが、そこは仕方のないところか。ウソはハナツからゼロだ。

「えっ、オツサン？ それもチビのオツサン……？」

オンナのコだと思ってたのに。浮いたオハナシ期待しちやっただけどワタシ」

「そんなこと言われても。なんかゴメンナサイ……」

玉美の玉は『肝っ玉』の玉なんだって」

そういやコイツ、『玉美』の名前だけはチラッと聞いていた。沙織の中ではそれ以降、オンナのコの名前としてイメージが固定され、さらに康一の『オンナのコに関する経験』を匂わせる発言を後から聞いて、頭の中で勝手な化学反応を起こしていたらしい。

「うわあっ予想外……」

テツキリ、玉美ちゃんと由花子ちゃんが恋のサヤ当てを繰り返してるモノかと」

「ゲエエ〜〜〜ッ

何おぞましいこと口走ってるんだよおーッ

人をダシにして勝手なこと言わないでエエーッ！」

「ゴメンゴメン。でも、そーいう話題に飢えちやってさー」

「自分で経験しなよ、そんなコト言うくらいなら！」

引く手あまたでしよ！」

自然な流れすぎて『バカ』と止めるヒマもなかった。ヤバい。この流れはヤバい。よ

りにもよつて『恋愛』方面で触り返した。この武部沙織に。よりにもよつて康一が。「……そう思う？ ホントに？」

「ウソは言わないよ。だからホモ扱いはヤメテ！」

沙織の口元がゆるむ。ホンノリ頬にさした朱は、しかしダイナマイトへの導火線だった。

（せめて……あと、一ヶ月早かつたらよお〜）

ここ一週間の付き合いで、こいつのこともある程度見えている。心の機微に敏感で、場がマズくなったり、誰かが傷つけられそうになったとき、おどけて引つかき回しに入る奴だ。場合によつては正面切つて戦いにも行く。いいヤツだとは思ふ。ただし、『恋愛』に結びつけられそうな何かがあると、そつちに引つ張られまくるのはどうかと思うのだ。

（オセツカイなオバチャンじゃあねえーんだからよおー）

勝手にヒトを三角関係にしてるんじゃないやあねーぜ！

つてのは置いとくとしてもよおー）

こいつをそんな風に暴走させるのは、多分だが恋愛そのものに対する憧れだろう。本人が言っている通り、現物に飢えているらしい。まあ、それはいいのだ。そこから始まる縁だつて否定はしない。あと一か月早かつたなら、別に何も気にしなかつたし、『うま

くいく』なら大喜びで冷やかしただろう。思うに、康一にとってもコイツ自体は決して悪い選択じゃあない。外見だって、これ以上を望むヤツは高望みしすぎのアホと言つていい。だが、山岸由花子。康一に恋い焦がれるあのイカレポンチの存在がとにかくヤバイ。一歩間違えれば、結果はブツ切りの死体と4号戦車の空席になりかねない。

(ま、すぐに全国大会だしよ……)

なんかアクション起こすにしてもヒマがねえ。

そこんとこ心配する必要はねーかもしれねーけど。

警戒しとかねえとやべえかもな)

とりあえずだが、事情を西住の耳に入れておくことは決定だ。華に言おうかとも考えたが、緊急時に強く相手を止められるのは西住だ。だが、言い方は考えなければ。自分の辛気くさい過去の暴露をさえぎった手前、康一の恋愛事情を勝手に開陳するのは気が引ける。これは明日までの課題……そんなことを考えている間に、自分の番が来た。康一に言った通り、自分がシメだ。

「さて……と。最後はオレツスね。

オレがスタンド使いになったのは承太郎さんと同じ頃だぜ。

身近な血に影響を受けたってことだよな……」

別に聞かれてもいないことは話さなかった。スタンドを身につけた経緯だけを聞い

ているのだから、それ以外は何もいらぬ。熱を出して病院に行ったことだけを話した。承太郎は黙っている。康一も何も言わない。西住はじつとこつちを見ている。話を終えたあたりで、秋山が少しガツカリしていた。何かドラマでも期待していたのだろうが、こちらから見世物でもないのだ。それはこいつもわかっているはず。が、拍子抜けしたローズヒップは、それを隠すこともなかった。

「それだけ……ですの？」

何か変わった事件とか、ありませんの？」

「ローズヒップ」

即刻、諫めに入るダージリンを見て、考え直したのはむしろ仗助である。どうもこいつは、根っこがとにかく素直にできているらしい。康一が脇から袖を引いてきた。

「話した方がいいよ、仗助くん。髪型について」

「だよな。危ねえぜ、こいつはよ」

何の悪意もなくリーゼントをバカにされかねない。そして、そんなことになれば仗助一人のせいで協力関係が終わる。億泰の土下座がまるつきり無駄になるのだった。

「……それで、ツスねえ〜」

病気になったとき、おふくろが車出したんすけど、大雪の中で立ち往生しちまってツスね。

ンな中、自分の学ラン、タイヤの下に敷いて、車押ししてくれた人がいたんすよ。その人の髪型がよ、これだぜ！」

一息に言い切つて、自分の頭を指さす。大切な、かけがえのない記憶ではあるが、自慢げに話すのは何か違う。本当だったら口になんか出さず、そつと心に秘めておきたい。

「だから、オレをバカにするときは、オレだけをバカにしろ。

髪型には絶対(ぜつてえ)に触れるな。

中学の頃、何度か傷害事件を起こしちまつてる。

どうにもならなくなる。真面目にやべえんだ」

「ホ、ホントですよ。これは本当です！」

コンビニ強盗の現場を野次馬してた時!

たまたま犯人に髪型をバカにされちやつた仗助くんは、

ぶちキレて犯人を叩きのめしちやつたんだ!」

少し顔がゆがんでしまう。思い返すに、あれが巡り巡つて祖父を殺したのだ。悔いたところでもはや何も始まらないし、どのみちスタンド使いは引かれ合う。アンジェロとは結局どこかで会つて、誰か殺されていたのかもしれないが。母と自分、二人しかない家は、未だ異様に広いままなのだった。ともあれ、強く警戒を呼び掛ける康一に感謝

はすれど、文句など出ようはずもない。

「東方さん」

「はい」

「ご存知でしょうけれど、貴方の髪型。

その語源は、イギリスはロンドンの『リーゼント・ストリート』にありますわ。

貴方の背負う看板に恥じない振る舞い、期待しましてよ」

「わかりました……裏切りませんよ」

「そうある限り、我が聖グロリアーナは貴方の友人よ」

ティーカップを置いて微笑んでいるダージリンに、仗助は思わず下唇を噛んだ。悪い

奴ではない。嫌な奴でもない。それでもだ。

(グレート。うかつにハイハイ言つてられねー)

気づかないうちに取り込まれる。善悪と関係ないところで、こいつはヤバイ。現状もつとも危機から遠いこいつが、気づけばほとんど司会進行をやっているのもそれだ。善意も悪意もなく、当然のように。単純に、誰もやろうとしなかった役を拾っただけとも言えるのだろうか。西住が負けてしまった訳の片鱗が見えた気がする。

「他に話しておきたい事は？」

「……あつ、もうないッス。スミマセン」

「そう。では、アンチヨビさん」

「えっ」

話の終わりを確認したダージリン。彼女に唐突に呼ばれたアンチヨビは、自分のスタンドに足を引つ掛けて蹴り飛ばしてしまった。足元に置いたままだったらしい。

「貴方をこのまま帰せませんわ。」

スタンドの使い方も、能力もわかっていない貴方をね。

ちやうど、傷を治せる東方さんもいらつしやいますし……

「試しませんこと? 色々と。色々と」

なぜ、二度言った。アンチヨビはたじろいだ。

「そうだな。今しか出来ない。」

少しつらくとも生き残るためだ。耐えてもらう」

「未知の能力を試す。」

……これは、ワクワクしますねえッ

新型戦車のおヒロメに立ち会う気分ですよおーっ

立ち会ったコトないケド!」

「ワクワクって、他人事だと思ってるよなあ〜お前ら!

く、来るなよ。こっち来るなああーッ!」

その後、アンチヨビは本当に色々されることになる。色々。正確に言うとなンチヨビのスタンドに、だが。スタープラチナに刀身をつままれ、全力で折り曲げようとされ、最終的には膝を枕にオラオラされまくった。店の床が陥没し、ローズヒップがズツコケた。

「どうツスカ、承太郎さん」

「ダメだな。硬くも柔らかくもない……」

剣の形をした『空間』とでも言うべきだな。

これは破壊することも、されることも決してないらしい」

「実体がないスタンドで、さらに実体がない？」

なら、これならどうですか？」

西住がトウルー・カラーズで素早く丹念に色を塗る。刀身と柄の色とが微妙に変わった。剣の周りにスタンドの塗料を塗りつけて、それによって実体を与えようということか。やりたいことを一瞬で理解した仗助だったが、直後にはしやぎ出したペパロニの反応は完全に理解の外だった。

「あツ、何それツ いきなり剣が……それが姐さんの？」

マジ勇者みてえーッツ」

「え、見え……あ、ああツ なるほど！」

康一の『なるほど』でようやく思い当たった。

「えっ……何？　なんで？」

どうして見えてんだよ、こいつによおくッ」

「虹村どの。『見える』スタンドです。」

西住どののトゥルー・カラーズは色を塗るスタンド！

もしスタンド使いにしか色が見えない能力だったら、

あまりに哀しすぎますよおっ」

「……あぁーっ　なるほど！

わかった！　おめーの言ってることわかったぜ、秋山！

つまりよ、スタンドに色を塗りやあよおくッ」

「ハイ、『見える』んです。」

この場にいる、どなたにでもご覧になれますよおーっ」

「グ、グレート……言われてみりやあ当然のことだぜッ」

思わず西住を見ると、表情に困惑が張り付いている。なんでこんなに驚かれるのか。まさかみんな、その発想はなかったのか。顔にそう書いてあるようだった。続いて承太郎を見る。やれやれだぜ。顔にはそうとしか書いていなかった。

「と、とりあえず試してみるッスよ。承太郎さん」

「わかった。斬ってこい仗助。音石にかかるつもりで全力で来い」

「あ、ハ、ハイツス」

投げ渡された剣をクレイジー・ダイヤモンドで受け取ってみるものの、剣の使い方なんかわからない。結局剣道をマネた動きでドラララと斬りかかりまくったが、わかったことはたったひとつ。

「塗られたペンキ分の威力しかねえーツスよ、これ」

「だろうな。重さもない。それでも無理に攻撃すれば剣の方からそれていく……」

これを戦いに使うのは不可能だ。盾にすら使えない」

「んじゃあよくどうすんだよ承太郎さんよお、ないない尽くしじゃあねえーか！」

「アプローチを変えてみるのはいかが？」

ダージリンが指を鳴らすと、付き人っぽいオレンジ髪が水を張った大鍋を台車に積んで持ってきた。そして、それが一瞬で煮立つ。

「熱だつたらどうなるか。もしかしたら水の方が変質するかも」

無言の承太郎は、ためらいなく剣を鍋に差し込んだ。衆人環視の中、数分間、鍋で煮込まれるファンタジーな剣。アンチョビは口をパクパクさせていた。イイ店て出される魚の活け造りみたい。注意深く聞いてみると、何かブツブツ言っている。

「ア、アレは私で、それが叩かれて、鍋でグツグツされて……え？」

を泳がせている。わからないらしい。康一も同じ状態で、億泰は早々に聞き流しを決め込んでいた。承太郎は……おもむろにフワリと手を浮かせていた。直後、机をドン！「エネルギーの干渉を受け付けられないスタンドだということにはわかった。

問題は、これが『能力』によるものなのか、または単なる『性質』かということだな」全員黙って静まり返った中を、静かに話す承太郎。女が騒ぐとムカつく人が、よくぞここまでガンバツた。仗助は心の中でそつと拍手。

「康一くんじゃあないが、何かきつかけがあれば能力もつかめるだろう。人を巻き込まないところで、色々と試してみればいい。

俺が護衛につく以上、その程度の自由は確保する」

「ハ……ハイ。ありがとうゴザイ、マス。スミマセンホントに」

話は、ここで終わりだった。後は、全員でケータイの番号を交換しあっただけ。ハバツたアンチヨビは、フラフラしながらペパロニとカルパツチョに肩を貸されて出て行った。思えば、今日のこれで一番疲れたのはアイツだっただろう。

「あはは。疲れた顔してるね、東方くん」

「そりゃあよ……あつ」

「？」

新幹線の待ち時間中。西住に声をかけられ、自分自身もだいぶくたびれているのに気

が付いた。それと同時に、この瞬間まで忘れていたことがひとつあったのにも気づく。別に電話でもいいのだろうが、早い方がいい。

「ちつと提案があるんだがよ。西住。」

判断はそつちに任せるぜ。オレらはほぼ無関係だからよ」

「無関係……学園のこと?」

「拠点を絞つて戦力を集中する提案だぜ。」

「戦線を減らす、つつー言い換えもできるぜ」

「つまり、チリ・ペツパー対策だよ。詳しく聞かせて」

「実際の方法に落とし込むのはおめーになつちまうんだがよ。」

「つまりは、こうだぜ……」

To Be Continued ⇒

I n t e r I n t e r M i s s i o n 『戦鬪潮流、

伝え聞きます！』

秋山優花里（あきやま ゆかり）は病院にいた。6時過ぎにようやく学園艦に戻ってきてから慌ただしいが、承太郎が長期留守の報告をしていくというので、頭を下げて連れてきてもらった。目的地も当然、承太郎と同じ。ジョセフ・ジョースターの病室だ。

「アレツ？ 先客がいらっしやるようですねえ」

面会者の一覧表を見て気づく。ジョセフを訪ねた面会者が少し前にいる。しかもまだ帰っていない。退室時刻のタイムスタンプがなかった。名前の方をよく見ると。

「かどたに、あんず……生徒会長？ が、何を」

「さあな。オレはオレの用を済ませるだけだ」

受付から離れる承太郎に慌てて従う。歩幅が違うからついていくのも大変だ。しばらくごとにいちいち立ち止まらせるのも忍びないので頑張っているが。無言でエレベーターに乗り込み、上向きの慣性を身に浴びる。脇の巨漢を少し見上げて、十数秒無言。

（ウーン ワカラナイ話にアイツチ打つのもツライんですけどっ

この方の場合は沈黙が怖いですなえー)

でも、それが醸し出す風格はどうだ。歴戦の勇士とは、きつとこんな人にこそふさわしい言葉なのだ。もしこの人が戦車に乗ったなら。かの大戦で、戦車に乗り込む一人だったなら。どんな戦車がふさわしいだろう？

ムズカシイところだ。この人なら、ティーガーの不機嫌な足回りも知り尽くして乗りこなすのではないか。それとも、クルセイダーならどうか。その快速を扱い尽くし、敵の攻撃が当たらないポジジョンを延々取り続けるのでは。KV2の破壊的な主砲を、この人ならどう使うのか。残念ながら戦車同士の殴り合いには無理があつたチハ車も、この人にかかれば……ワクワクが尽きなくってマズイ。

(直接、戦うところとかは見えてないんですけど……)

色々勝手な期待が止まりませんねえー

東方どのが、二言めには『最強』っていう方ですか)

チラリと聞いた『時間を止める』能力。たとえ2秒以下の間でも、スタープラチナにとっては最強無敵の2秒以下。少なくとも優花里の手札では到底勝ち筋が見えない。黒森峰のスタンド使い、エリカが康一に殴り掛かったとき、彼は間違いなく時間を止めた。どれほど恐ろしい力なのか、肌に沁みるように思い知ったものだ。そして何よりも恐るべきは、その能力を隙なく万全に振るう静かなる判断力だという。どんな戦いに養

われて強くなってきたんだろう？

(そーいえば、ホリイさんに見せてもらった写真。

たぶん、あの中の中東系の方が『モハメド・アヴドウル』さん)

写真に写った五人と一匹を思い出す。あれが青春時代の仲間だというなら。

(エエーと、承太郎さんは車長です。決定。

んで、ジョースターさんは、そうですねえ……通信手でしょうか。

アヴドウルさんは、話からして操縦手。

あとのお二方は……あのピアニストみたいなヒトが砲手！

イカにもレーサーそーですし。で、ホーキ頭さんは装填手)

「おい、着いたと言っているんだが？」

ボンヤリしてるようなら置いていくぜ」

「……………ハッ!？」

久々にやらかしてしまった。赤面しながら頭を下げて、後に続く。病室に足を踏み入れると、最近になって見慣れた三人がいた。見慣れてはいるが隔意ある、生徒会の三人組。

「おぼんでーす」

「いんばんわ」

「ムムツ。こんばんわ、です」

「こちらに思いい思いの挨拶をしてから、会長一人が承太郎に近寄った。

「役に立ったみたいですね。私の名前」

「ああ。出来ればもうひとつ役に立ってほしい。

オレは明日からアンツイオに行くんでな。

手をつけられない案件ひとつを任せたいんだが」

「へえ? ま、詳しくは後で聞きますよ。

ゴハンおごりますから。その優花里ちゃんも一緒に」

「わかった。そこで話そう。

秋山の都合は知らんがな……」

「へい、かしこまり。どーよ、優花里ちゃん」

「は、ハイツ?」

当然のように巻き込まれる自分。承太郎の言う案件というのは、音石明の両親問題だろう。であれば、自分がいても大して意味はないが。

「わ、わ、わかりましたっ

不肖、秋山優花里。ご一緒にします!」

「シヤチホコばらなくつてもいーよ。

カワイイねえー ニヒヒ」

人なつこいというか、イヤラシーというか、なんとも言えない顔で背中をポンと叩く生徒会長。優花里としては、どちらかというところとイラツとしてしまう。それを察してかしないでか、彼女は続いて声を発した承太郎に向き直る。

「ジジイに何の用で来たのか、聞いても？」

「ン。SPW財団の技術開発の実験に一枚噛ませてもらうから。」

事後になつちやうけど、その報告ね」

「レクテナか。以前、言っていたな」

「そ、レクテナの受信実験ね。人工衛星から学園艦に向かって」

優花里には、なんのことかサツパリわからない。戦車に関係あるのだろうか。受信、と言うからには電波なのだろうか。

「あの出力が実現すれば、海の真ん中で機関が故障しても

近くの港に寄港するまでダメシダメシ行ける。

そーいうオイシイ話にはツバつけときたいモンねえー」

「オイシイ話で破滅する奴はごまんといるぜ。

生命をなくす奴もな。気をつけるんだな」

「モチのロン、です。」

そのお説教、オジイちゃんにも貰ったし」

「そのく、オジイちゃん、じゃが。」

そろそろ話を戻してもいいかのオ？」

脇から若干、かすれ気味の声。初めて聞く、二人目の恩人の声だった。終わった自分の生命をつなぎ、同時に『不思議な力』をもたらした人。ベッド上の彼は、大して小さく見えない。元がかなりの巨漢であるようだった。

「わしが知りたいのはじゃな。」

「その……ええと……」

「なんじゃつけ、クダモノなんじゃよ」

「桃だ！ 川嶋桃！」

「おおうそうそう、モモチちゃんのヒイじいさんの苗字じゃ」

「桃ちゃん言うな！」

「何の話だ。ジジイ」

「もしかしたら、もしかするかもしれないのじゃよ承太郎。」

彼女のじいさんはドイツ人のおー、

んで、じいさんの父親は陸軍将校で、

スターリンググラードで戦死したらしいんじゃよ。

そのヒイじいさん、わしの知り合いかもしれないのじゃ」
「言つとく。ドイツ人は事実らしいが、

陸軍将校うんぬんは多分フカシだ。

なにかと世界一、世界一ウルサイおじいちゃ……

もとい、祖父だったからなあー」

スターリンググラード！

聞き捨てならない単語が出た。独ソ戦の分水嶺ではないか！

耳がビクーンと反応した優花里の身体は、考えるよりも反射でそちらに飛び込んでいた。

「なななんだキサマツ いきなり」

「ジョースターさんツ 詳しく！」

そのお話、詳しく……」

ここで優花里、冷静になる。戦死したと言っていたではないか。一気に曇った瞳はそのままうつむいて床を見た。

「すつ、スミマセン。忘れてください。

亡くなった方にあんまりな態度でした……」

オチヨボ口で静観していたジョセフ・ジョースターは、三秒ほど間をおいてプツと吹

く。

「なあに、かまわんよ。

きみのことはスージーから聞いたるよユカナちゃん」

「優花里ですよ」

「スマンスマン。顔は覚えとるんじやが名前が結びつかんでのおー

それより……知りたいんじやな? わしの戦友について」

「戦友? アメリカ……と、ドイツ……で?」

「どういふことなのだ。連合国と枢軸国ではないか。だがそれだけに、なおさら興味が燃え上がる。」

「あ、ハイッ 知りたいですモノスゴク!」

「そうかそうか、あいつも喜ぶじやろ。」

それに、この話……どのみち知っておいて損はないの。

『波紋』が身についてしまったならな」

目的の半分に唐突に踏み込まれた優花里は息を呑む。ボケてるフリでもしてるんだろうか、このオジイチャン。

「まず、あいつの名前じやが。」

ルドル・フォン・シュトロハイム。

フォン付きじゃが貴族かどーかは知らんのお

わしはモノホンの貴族じゃけど」

「き、貴族ツ？ ジョースターさん、貴族ですかあ？」

「リバプールに先祖代々の土地があるよ。」

今は公園になつとるけど」

ありえない話ではない。ジョースター不動産は全米屈指の大企業なのだ。起業の元手を考えると、裸一貫よりもむしろずっと説得力がある。金額的にも、信用的にも。

「リバプール……イギリスですよねえ？」

「そうじゃよ。血統書つきつてエヤツじゃ。」

ま、そいつは置いとくかのオク

まず聞いてほしいのは、『波紋』の力、その意味じゃな」

ほんのりぼかして語られるそれは、スタンド能力をすでに知った優花里をもつてしても荒唐無稽な与太話だった。今までの蓄積がなければ、知らないマンガの話扱いで切り捨ててしまったのは確実だった。

「闇の一族と戦うための力……なんて言われても。」

さすがにナナメ上すぎます。人類の天敵とか」

「そりゃそうじゃろ。わしだってキミの立場なら『アホか』で済ますわい。」

「じゃが事実じゃよ。ナチスは奴らと戦う手段を求め、研究した」

「それが、接点だつていうんですか？」

「ドイツ軍人と、イギリス人の？」

「おおよそ、その通りじゃな。」

「そこでわしは共闘し、あいつの捨て身の自爆もあつて、

なんとか奴らの一人を倒した」

自爆。そこまでしなければ倒せない何者か。それは闇の一族であるという。優花里の脳内でつながりを見せた単語がひとつある。億泰が、実在すると言っていたではないか。『吸血鬼』という存在が本当にいて、下僕を作っているのだと。そして、一般的なイメージからすると、彼らは日光に弱い。闇の一族という呼称と符合する。正しいと思つてよいものか？

そんな考えごとを断ち切るように、河島桃が口をはさんでくる。

「おい、なんだそのB級ゾンビ映画は。」

「そんなのが私の身内だとも？」

「まーまー、最後まで聞こうよ」

「というか自爆つて死んでるだろーがッ

ストーリーングレードはドコ行った！」

生徒会長の制止で若干大人しくなりつつも、ガマンならんといった風体である。短慮で短気なこの人だが、言いたいことは、まあ、わかる。曾祖父がゾンビ映画の主役だと言われてウレシイかというところ……微妙だ。

「わしも死んだと思つとつたよ。

身体のひとつを機械にして復活するなんて、

誰が予想するって話じゃ」

「なんじゃあそりやああゝゝゝッ」

対するジョセフの返答は、そんな気分をすらさらに粉みじんに吹っ飛ばした。川嶋桃の目玉は今にもひっくり返つて360度一周しそうだった。

「んなのと一緒になッ！」

「わ、わかつたよ。話は最後まで聞いとくれね」

ツバを飛ばしまくられてベッドから2センチほどズリ落ちたジョセフは、体制を立て直すこともしない。

「まあ、そんなこんなでじゃの。

死んだと思つてる間に一度出し抜かれたりはしたが、

ほとんど最後まで助けられてばかりじゃったな。

……調子ノリすぎて最ツ悪のタイミングで誤射しやがったのだけは忘れんがな」

三人ほどが、自然と視線を一点に集めた。自分もその中の一人だ。集まった先にいた片眼鏡は少しうろたえたが持ち直す。

「な……何だ、どうした。みんなして。」

「カンケーないだろ」

「もつとも、ンなこと言っても仕方ないがおく」

あと一時間早く駆けつけてくれば、とかと同じでの。

戦車戦に間に合つとれば、あるいは奇襲で勝ち目もあったかも……ないか」

「戦車戦ッ!」

優花里は、特定の単語を聞き取った瞬間、思考をはるかに超えた速度で飛び込み顔を突っ込んだ。

「ンなつ 何じゃッ」

「戦車戦? 表に出ない戦いで戦車戦ですつてえ?」

トンデモないこと聞いちゃいましたよおッ これは!

ドコですかあ? いったいドコで?」

「ドコでつ、て……スイスじゃよ。」

それ以上は言わんからね。キケンじゃし」

優花里の頭脳が猛烈な音を立てて駆動する。スイスといえば山と谷ばかりなイメー

ジのある国だが、平野や高原もちゃんとあつて活躍の場はあるし、現に国産のPz68が配備されている。レオパルド2だつて輸入もしてる。第二次大戦時でいえば豆戦車のカーデンロイドが配備されてははずだし、38tもチエコから輸入していた。だとすれば、何だ。スイス軍まで出張つてきたということか。闇の一族とやらの戦いにはドイツのみならず、ドイツが事実上敵以外の何物でもないスイスまでも、国内にドイツ軍を引き込んででも戦つた。そういうことなのか？

私は今、世界史のおそるべき秘密を見ている！

「ど、どんな戦いが……」

「一騎討ちじゃつたの。」

わしの戦車はブツ壊れて、ヤツにも戦車を捨てさせて、

結局生身の戦いになつちまつたのお。

ヤツは強かつた……わが友の仇でもあるが。

尊敬するべき偉大な戦士で、戦鬪の天才そのものじゃつた。

発想のスケールじゃあ、いまだヤツに勝てる気がしないの。

武器を奪つてイイ気になつたところに石の柱丸ごと叩きつけてきたりなあ」

ここまでくると、優花里は自分の目玉がランランと怪しい光を発しているのを自覚していた。だが止める気なんか毛頭ない。こんなもの、もっと聞かずにいられるものか。

しかも、こんなカオスな話の主役は、どうやら眼前のイギリス貴族の青年時代。なんてことだ!

「それでッ アナタの乗った戦車は」

「それもいいが、まず用件を済ませるんだな」

だが承太郎の静かなツツコミで、さすがに止まった。この寡黙なヒトが口に出して注意してくる時点で、かなりキテいることは今日学習した。ただでさえ今日のお茶会、ずつとイライラしていたこの人だ。低くなっている沸点をさらに火であぶるようなマネは嫌である。

「あう……スミマセン」

「オホン。ともかくじゃな。」

シウトロハイムの野郎、スターリンググラードで

部下を逃がすために一人でシンガリ張って!

そのまま帰ってこなかったって事じゃッ

生粋のナチ野郎だったヤツの家族は戦後に四分五裂して、

わしでさえも追跡できなかつた……

その忘れ形見が生き延びて、戦友の血を残してくれとつたのなら、

こんなにうれしいことはない……ないんじゃよ」

「ジョースターさん……」

「ま、ジジイの感傷ってことじゃな。」

辛気くさくしちまったの」

「その。辛気クサイついで、なんですけど」

優花里は、こわばりながらも遮るように背をピンと伸ばした。前回言いそびれたこと。心の奥底に突き刺さっている最後の破片が、これで除ける。

「ふむ……次のセリフはこうじゃな。」

『自殺なんかしてごめんなさい』

『あなたの生命を使わせてごめんなさい』じゃ」

「自殺なんかして、ごめんなさい。」

あなたの生命を使わせて、ごめんなさい。

……えッ？ ええッ？」

言う前にセリフをキレイになぞられた。彼のスタンド能力か。いや違う。自分の顔にそう書いてあるだけだ。それを多分この人は読んで、『私』の言葉に翻訳したのだ。

「チガवाई、それを言うなら『ありがとう』じゃッ

こちとら好きでやったんでな、勝手に罪悪感持たれちゃあタマらんのよお嬢ちゃん」

そして今、確信した。この人は東方仗助の父親だ。言ってることがおんなじだ。心の

底に流れるものが、おんなじだ。浮気で子をこさえた上に、最近まで存在を放置し続けたことについては擁護できないし、父を名乗る資格はないのかもしれない。でも、同じだった。

「コツチこそ、ありがとうよ。」

助かってくれてありがとう、じゃ。

生命を賭けたカイがあつたわい。

そして、すまんかった。わしのせいで巻き込まれたな」

「……はいッ、ありがとうございます。」

それと、ジョースターさんが謝ることなんか、ないですよ」

わだかまりが去っていく。チクチクしたものが今、煙になって消えたのだ。後に残ったものは感謝だけだ。来て良かった。本当に。少し、しんみりした空気に身を任せていると、やがて生徒会長がニンマリ笑った。

「それにしてもだけどきー。」

カツコイイねえーオジイチャン」

「ン? なんじゃ、今頃気づいたのか。」

生涯現役のイケメンじゃよ、わし」

「次のセリフはこうじゃ、つての。」

それ、イタダキ」

「ほほう、わしの専売特許をのおく」

言つとくがの、そいつをパクれたのは

わしが見てきた中じや一人しかおらんぞ」

「職人の技術が絶えるつてカナシーじやん」

「カンタンにやあゆずれんよ。」

せいぜいガンバツてみるんじやな」

ジョセフもまた不敵に笑う。老人が生命のありつたけを譲渡した後だとはイマイチ思えない元氣さだ。とくに隠すことでもないので、優花里は率直に聞いてみた。

「けつこう元氣ですねえジョースターさん」

「そりやあの。若いコがたくさん来てくれとるんじや。」

シヨボくれてなんかいられんよ」

「ジジイ。わかっているとは思うが」

帽子を深く被つて目元を隠した承太郎が言葉をはさむ。

「次、おばあちゃんを悲しませたなら。」

おばあちゃんが来るより先に、俺がためーを墓に沈める」

「わわ、わかつとるよ承太郎。おつかないのオ」

「英雄色を好む、つてヤツ?」

「やかましいッ お前さんもかなりのクソガキじやな」

「ニヒヒ、光栄ですウ」

「イイ性格しとるのお。ま、いいわい」

仕切り直しに咳払いをしたジョセフは、生徒会三人を解散させにかかる。

「ウオツホン! ここから先は門外不出じや。」

わしの『波紋』を自分のものにしたこの子だけに話すことがある。

今日はここまで……また来てくれよ」

「次はなんか差し入れ持つてくるねー。」

承太郎さん、ロビーで待つてるかんねー」

素直に受け入れて、ゆるりと去っていく三人だった。そういえば、三人の中の一人の小山柚子。ついに一言もしゃべらないままだったが……元から自己主張の強くない人のようなだし、相槌を打ってばかりになるのも仕方ないか。それ以上はとくに考えず、残った承太郎とジョセフとを交互に見る。長い話になるのだろうか。自分もあまり時間はない。帰りの新幹線の中で、みほから聞いたのだ。仗助が提案した、レッド・ホット・チリ・ペッパーの暗殺を可能な限り防衛する策。それに向けて、今日から明日一日までかけて準備しなければならない。あんこうチームにおいてその拠点となるのは、他

でもない、優花里の自宅なのである。

「……気になるの、あの生徒会長サン」

「どうした」

「必死すぎるんじゃないよ。」

スピードワゴン財団のコネを得た途端に、技術開発の協力を取り付ける……

普通、半年とか一年かけてやることを、音石明にかこつけて、あの子はたったの一週間じゃ。

とんでもねーわい。わしの若い頃でもできたかどうか。

でもなあ、何を生き急いどるんじゃない？ あの子は。

そして、どうも『点数稼ぎ』をしようのように見えてならんなあ。

どこの誰に向かつてかはわからんが」

「俺達には関係ない。」

敵対したり、便利使いされない限りはな。

そこについては信用していい奴だ」

「じゃが、なあーんか危ういんじゃないやよなあー。」

全力疾走はコケた時のダメージがデカイぞ承太郎」

この話題も気にはなる。あの生徒会長をつかまえて、必死すぎると来たものだ。飄々

としている裏に、この老人は何を見た。承太郎も何か感づいているようだ。しかし『点数稼ぎ』か。だとすると、戦車道もそうなのか。だから、みほを無理やり引き込んだとでもいうのか。これでは許せなくなる。なんのための『点数稼ぎ』だ？

「ユカリちゃん」

「え、はいッ？」

「気にしてやつちやあくれんかの。」

キミはどうもあの子をよく思つたらんようじゃが。

悪い子じゃあない……わしの見立てではの」

「……私の尊敬する人で、今は私の大切な人に。」

イヤがつてることを強要した方なんです。

キズに塩を擦り込んだ方なんです」

「そいつはひどいな。どうして、そんなことをするんじやろうな？」

「わかりませんよう」

「モットわからんよ、わしには。」

隣で戦う戦友として、チョロツと気にかけてみてくれよ。

そういうモンなんじやろ戦車道つて。知らんけど」

そこで戦車道を出してくるとは。戦車に乗っていた老人を前にそう言われて、断れる

はずもない。仲間を気遣わない戦車道などを見せつけければ、結局、傷つくのは西住みほだ。

「わ、わかりました。気にかけてみますッ」

「おおッ 肩ヒジ張った敬礼ありがとうよ。」

さて、早速じゃが。きみには『波紋』の使い方を見せていくぞ」

陸軍式の敬礼をしたまま、優花里の顔も引き締まる。波紋の目的を教えられ、その上で使い方も教えるということは。

「あ、カン違いしとるよーじゃがな。」

別に『闇の一族』と戦え、なんて言わんからね。

第一、もう全滅しとるよヤツら」

「え？　ですか？　それは、とても安心ですけど」

「知つとること、きみ自身が助かるかもしれん。」

知つとることで、周りの誰かが助かるかもしれん。

それだけじゃ。後悔のタネをつぶす力にしてほしいんじやよ。

ただし、さつきも行ったが門外不出で頼むぞ。

『波紋』を管理しとる組織があつてなあ。

きみはいわば『モグリ』じゃからの」

「……キ、キモに命じます」

つまりはこういうことだろう。来るべき音石明との戦いに、ひとつでも多く、戦いの手段を持つて行け、と。願ってもないことだ。ムーンライダーズに不満は……チヨコツとしかないが、本体が接近戦にもつれ込んでしまうと、これほど無力な能力もないのだ。それを補う手段に、『波紋』はなリエるのか。加えて、『波紋』は癒しの力でもあるはずだ。自身の生命がその証明。だとすれば、知っていることで助けられる誰かは、必ずいる。

「なら、まずは基本から。呼吸の仕方からいくぞ。

最初は2分から行くか……2分吸い続けて、その後2分吐き続けるんじや。

わしが今からやるやり方だな。でないと酸欠で終了じやよ」

「2分……ううツ 地味にキツイですなえ」

「そいつをずっと続けてもらう。寝ても覚めてもじや。

波紋は継続なんじや。ウソをつけば土壇場で裏切られるのはキミじやからね。

今日は『くつつく波紋』と『はじく波紋』まで教える。

メチャクチャ駆け足じやが、きみはまず知っていた方がいい!」

その後、優花里は酸欠でブツ倒れ、承太郎に二回ほど介抱された。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
⇒